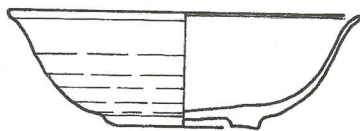


伊丹市埋蔵文化財調査報告書

震災復旧・復興事業に伴う発掘調査

—有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第192次調査—

—有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第209次調査—



2004年3月

伊丹市教育委員会

序

猪名川を望む伊丹台地の東端に有岡城が築かれたのは鎌倉時代末頃のことです。猪名川の水運と京と西国を結ぶ東山道(西国街道)に面したこの地域は早くから拓け、有岡城は西摂津の中心として発展してまいりました。天正年間に廃城となった後も伊丹郷町は摂津の主要な在郷町の役割を果たしていました。少なくとも江戸初期には酒造りが始まり、近郷の“清酒発祥の地”鴻池村や西国街道に程近い大鹿村、また、武庫川沿いの山田村などとともに、江戸積み酒の銘醸地として天下にその名を轟かせていました。

江戸の発展に伴い、江戸積み醸造地伊丹は元禄時代に最盛期を迎えますが、その頃の伊丹酒について、文豪井原西鶴は著書『織留』の中で「池田、伊丹の売り酒、水より改め、米の吟味、こうじを惜しまず」とし、伊丹酒の質の高さを褒め称えています。江戸後期の文化年間には毎年20万樽をこえる伊丹酒が江戸に送られ、85軒もの酒蔵が本町通り(現在の産業道路)を中心に所狭しと建ち並んでいました。伊丹郷町に今も残る「重要文化財旧岡田家住宅・酒蔵」は、年代のわかる酒蔵として日本最古といわれ、当時の町の面影を伝えています。

本書は、震災復興事業に伴って実施した有岡城跡・伊丹郷町遺跡の発掘調査報告書であります。この調査では、中世有岡城の遺跡とともに江戸時代の酒蔵跡の酒造用竈や酒搾りの遺構が発見されています。こうした発掘調査の成果は、伊丹酒の歴史を技術的に解明する貴重な資料になることでしょう。

本書所収の発掘調査は、震災復興と埋蔵文化財保護を目的に全国の都道府県から派遣された専門職員の方と兵庫県教育委員会職員により行われたものであります。第192次調査には埼玉県・三重県・兵庫県の各教育委員会、第209次調査では兵庫県教育委員会にご協力を頂きました。最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまでの間ご協力いただきました派遣職員の方々、兵庫県教育委員会の震災復興班の方々に感謝申し上げます。巻頭の挨拶といたします。

平成16年3月

伊丹市教育委員会
教育長 脇本芳夫

例 言

1. 本書は、平成7年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」の震災復旧・復興事業に伴う緊急調査をして実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 本書に収めた調査成果及び調査期間は下記のとおりである。

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第192次調査 平成9年6月26日～9月25日

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第209次調査 平成10年4月30日～6月30日

3. 発掘調査及び整理作業は伊丹市教育委員会生涯学習部が行った。組織は次のとおりである。

整理作業（平成15年度）

生涯学習部長 石割 信雄

次長 田中 孝志

副主幹 福井 収

副主幹 小長谷正治

主査 大路 和彦

事務吏員 佐藤 友治

” 中畔明日香

嘱託 細川 佳子

4. 有岡城跡・伊丹郷町遺跡192次、209次調査については「阪神・淡路大震災に関わる埋蔵文化財の支援に関する協定」に基づき、兵庫県教育委員会より埋蔵文化財職員の派遣を得て実施した。

・有岡城跡・伊丹郷町遺跡第192次調査 中山浩彦（兵庫県教育委員会・埼玉県派遣）

船越重伸（兵庫県教育委員会・三重県派遣）

渡辺 昇（兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所）

・有岡城跡・伊丹郷町遺跡第209次調査 山上雅弘（兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所）

岡本一秀（兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所）

5. 整理作業は、発掘担当者の下、伊丹市埋蔵文化財臨時職員が遺物の実測・トレースなどを行った。ただし、遺物実測は瀬川眞美子、三輪隆子、高須賀由美、中村明日香、吉川敬子、岩田朱美、遺物・遺構のトレースは丸岡タカミ、出土遺物観察表は岩田朱美、写真図版の作成は小長谷正治、吉川敬子が行った。

6. 報告書の執筆は各々の発掘担当者が分担して行った。（第192次調査の遺構は中山、遺物は岩田、まとめは船越・中山が、第209次調査の遺構・遺物・まとめを山上が担当した。）

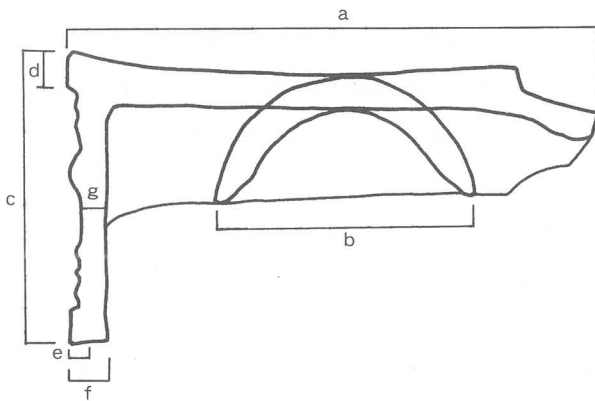
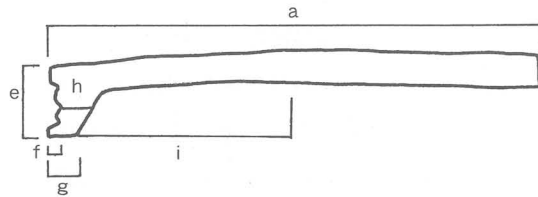
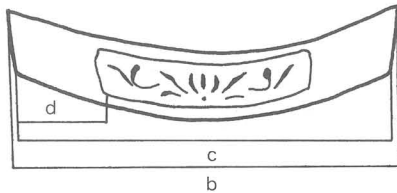
7. 本書の編集は小長谷正治が行った。

8. 出土遺物及び発掘調査資料は伊丹市教育委員会にて保管している。広く利用されたい。

9. 第192次調査の鑄造関係遺物については、京都橘女子大学 五十川伸矢教授にご教示いただいた。記して感謝の意を表します。

凡 例

1. 遺構実測には、国土座標第V系を使用した。水準高は、東京湾平均海水値 (T.P.) を用いている。
2. 現地の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帳」を準拠した。
3. 遺物の挿図番号は、写真の図版番号と一致させている。
4. 土器実測において、中心線を一点破線で示しているものは、反転復元していることを表す。
5. 遺物観察表において、法量がカッコ付きのものは、復元した数値であることを表す。
6. 表紙掲載の図は、第192次調査SD2001出土「青花皿」(第21-152) である。
7. 瓦の計測箇所は次のとおりである。



軒平瓦

- a. 長さ
- b. 上弦幅
- c. 下弦幅
- d. 脇区幅
- e. 瓦当幅
- f. 外縁高
- g. 瓦当側面厚
- h. 瓦当厚
- i. 顎深

軒丸瓦

- a. 長さ
- b. 幅
- c. 瓦当径
- d. 外縁幅
- e. 外縁高
- f. 瓦当側面厚
- g. 瓦当厚

参考文献

- 赤松和佳・渡邊晴香 「伊丹郷町遺跡における実年代資料—元禄年間と享保14年の火災焼土処理土壌—」（第12回関西近世考古学研究会大会発表要旨『近世の実年代資料』） 関西近世考古学研究会 2000
- 有田町教育委員会 『幸平遺跡』 2003
- 伊丹郷町研究会 『伊丹郷町遺跡の陶磁器の様相』（第1回伊丹郷町研究会大会発表要旨集） 2003
- 伊丹市 『伊丹市史』第1巻 他 1971
- 伊丹市教育委員会 『重要文化財 旧岡田家住宅保存修理工事報告書（災害復旧）』 1999
- 伊丹市博物館 「天保15年伊丹郷町分間絵図」他 『伊丹古絵図集成』（伊丹資料叢書6）
- 上田秀夫 「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- 江戸遺跡研究会編 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房 2001
- (財)大阪市文化財協会 『広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅰ』 2003
- ” 『住友銅吹所跡発掘調査報告』 1998
- ” 『大坂城跡Ⅶ』 2003
- (財)大阪府文化財センター 『大坂城跡発掘調査報告Ⅰ』 2002
- 大橋康二 『肥前陶磁』（考古学ライブラリー55）ニューサイエンス社 1993
- 大橋康二他 『別冊太陽 実物大そば猪口事典』 平凡社 2002
- 小長谷正治・細川佳子・岡野理奈 「伊丹郷町遺跡元禄大火の層出土遺物」（第12回関西近世考古学研究会大会発表要旨『近世の実年代資料』） 関西近世考古学研究会 2000
- 大平茂 「近世丹波焼播鉢の型式分類とその編年」『下相野窯址』 兵庫県教育委員会 1992
- 小野正敏 「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- 川口宏海 「兵庫県伊丹郷町遺跡出土の煙管について」『大手前大学社会文化部論集』第1号 大手前大学 2001
- 九州近世陶磁学会 『九州陶磁の編年』 2000
- 新宿区内藤町遺跡研究会 『内藤町遺跡』 1992
- 瀬戸市歴史民俗資料館 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』 1986
- 瀬戸市歴史民俗資料館 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』 1987
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』（シンポジウム・講演会『瀬戸大窯とその時代』資料集） 2001
- 坪井利弘 『図鑑瓦屋根』 理工学社 1977
- 東京都埋蔵文化財センター 『汐留遺跡Ⅰ』 1997
- 土岐市教育委員会他 『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』 2002
- 中島由美 『古伊万里 蕎麦猪口・酒器1000』 講談社 2001
- 難波洋三 「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究 第九』(財)大阪市文化財協会 1992
- 日本貨幣商協同組合 『日本貨幣カタログ 1996年版』 1995
- 長谷川眞 「近世丹波焼播鉢の変遷とその系譜関係」『関西近世考古学研究会Ⅷ』 2000
- 備前市教育委員会 『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ』 2003
- 兵庫県教育委員会 『平成11年度 年報』 2000
- 枚方市教育委員会他 『枚方の鋳物師（一）』 1990
- 臨川書店 『攝津名所圖會』巻6 1979

目 次

序文	
例言	
凡例	
参考文献	

第1章 調査の概要	1
第1節 遺跡の概要	1
第2節 調査の概要	3
第2章 発掘調査の成果	5
第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡192次調査	5
第2節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡209次調査	99
第3章 結語	147

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1	第19図 SD2001出土遺物(2)	23
第2図 調査箇所位置図	3	第20図 SD2001出土遺物(3)	24
有岡城跡・伊丹郷町遺跡第192次調査			
第3図 調査区位置図	5	第21図 SD2001出土遺物(4)	25
第4図 調査区設定図	6	第22図 SD2001出土遺物(5)	26
第5図 東壁・北壁土層図	7	第23図 SD2001出土遺物(6)、 SD2003出土遺物	27
第6図 第1遺構面全体図	8	第24図 SX3006・3007平面・断面図	28
第7図 SX1001平面・断面図	9	第25図 SX3006出土遺物	29
第8図 SX1001出土遺物(1)	11	第26図 SK2023・SP2021平面・断面図	30
第9図 SX1001出土遺物(2)	12	第27図 SK2023・SP2021出土遺物	31
第10図 SX1001出土遺物(3)	13	第28図 SE3001平面・断面図、 SE3001出土遺物(1)	32
第11図 SX1001出土遺物(4)	14	第29図 SE3001出土遺物(2)	33
第12図 SX1001出土遺物(5)	15	第30図 SK2011平面図、出土遺物	34
第13図 SX1001出土遺物(6)	16	第31図 SK3007平面図・断面図	35
第14図 SD1001・1002・2001・2003平面図、 SD1001・1002断面図	17	第32図 SK3007出土遺物	35
第15図 SD1001出土遺物(1)	19	第33図 礎石列1・礎石列2・石列平面・ 断面図	36
第16図 SD1001出土遺物(2)	20	第34図 SK1005出土遺物	37
第17図 SD1001出土遺物(3)	21	第35図 SK2005出土遺物	38
第18図 SD1001出土遺物(4)、SD1002・ SD2001出土遺物(1)	22		

第36図	SK2006・2007出土遺物	39	第68図	第4遺構面全体図	68
第37図	SK5060出土遺物	40	第69図	SD5002平面図、出土遺物	69
第38図	SK5053・5061・SP2017・ 第1遺構面掘削時出土遺物	40	第70図	SK5001・SK5008出土遺物	70
第39図	第2遺構面全体図	41	第71図	第5遺構面・拡張区全体図	71
第40図	焼土土坑平面図、 SX2001・SX2002断面図	42	有岡城跡・伊丹郷町遺跡第209次調査		
第41図	SX2001出土遺物(1)	44	第72図	調査区位置図	99
第42図	SX2001出土遺物(2)、 SX2003出土遺物(1)	45	第73図	調査区設定図	100
第43図	SX2003出土遺物(2)	46	第74図	『大正4年伊丹町地籍図謄本』(左)・ 『明治19年酒造場絵図面届書写』(右)	101
第44図	SX2003出土遺物(3)、 SX2001・2003接合資料(1)	47	第75図	東壁土層図	102
第45図	SX2001・2003接合資料(2)	48	第76図	第1面全体図	104
第46図	SX2001・2003接合資料(3)	49	第77図	竈1平面・断面図	105
第47図	SX2002・2005出土遺物	50	第78図	竈1出土遺物	106
第48図	SX2006・2007出土遺物	51	第79図	竈3平面・断面図	108
第49図	SK2021平面・断面図	52	第80図	竈3西壁・北壁断面図	109
第50図	SK2021出土遺物	52	第81図	竈3出土遺物	109
第51図	SK2024平面・断面図	53	第82図	SK4・5平面・断面図	110
第52図	SB2001・SK2016平面・断面図	54	第83図	SK7出土遺物	110
第53図	SK2016出土遺物	54	第84図	第2面上層全体図	112
第54図	SD2004平面・断面図	55	第85図	竈2平面・断面図	114
第55図	SX2009出土遺物	56	第86図	竈4平面・断面図	115
第56図	SK5009出土遺物(1)	57	第87図	竈5平面・断面図	116
第57図	SK5009出土遺物(2)	58	第88図	竈5出土遺物	117
第58図	SK5009出土遺物(3)	59	第89図	男柱1～3・垂壺1～3平面・ 断面図	118
第59図	SK5012・5021・5032出土遺物	60	第90図	男柱1・2・垂壺1・2断面図、 男柱1・男柱2出土遺物	119
第60図	第2遺構面掘削時・第2遺構面出 土遺物	61	第91図	男柱5・垂壺4平面・断面図、 男柱5出土遺物	121
第61図	第3遺構面全体図	62	第92図	男柱6・垂壺5平面・断面図	122
第62図	SX3001・3002・3003平面図、 SX3001・SX3002断面図	64	第93図	SK3平面・断面図、出土遺物	123
第63図	SX3003出土遺物	64	第94図	SK24出土遺物	124
第64図	SX7001・7002平面図	65	第95図	第2面下層全体図	125
第65図	SK3016平面図	65	第96図	竈6・SK45平面・断面図、出土 遺物	126
第66図	SX3005・SK3009・SP3001 出土遺物	66	第97図	男柱4平面・断面図	127
第67図	第3遺構面掘削時・第3遺構面出 土遺物	67	第98図	男柱7・8・垂壺6・7平面図、 男柱7・8・垂壺6断面図	128
			第99図	男柱7出土遺物	130

第100図	SK35平面・断面図	131
第101図	SK 6 平面・断面図、出土遺物	131
第102図	SK12・13・21平面・断面図	133
第103図	SK12出土遺物	133
第104図	SK16・17・18・19・20・25・27 平面図、SK16・17・18・19・20 ・25断面図	134
第105図	SK18・19・20・25出土遺物	135
第106図	第3面全体図	137

第107図	SK42平面・断面図、出土遺物	138
第108図	土器溜り平面図、出土遺物	138
第109図	P 1～9・13・14・17・18・23 ・24断面図	139
第110図	『天保15年伊丹郷町分間絵図』 解説図	148
第111図	『攝津名所圖會』卷6(抜粋)	149
第112図	男柱遺構復元図	150

図版目次

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第192次調査

図版 1-1	第1遺構面全景	図版 8-3	SK2016
図版 1-2	SX1001	図版 8-4	SK5032
図版 1-3	SE3001	図版 9-1	SD2004
図版 2-1	SD1001	図版 9-2	SB2001
図版 2-2	SD2001	図版10-1	第3遺構面全景
図版 2-3	SD2003	図版10-2	SX7001・7002
図版 3-1	SX3006・3007	図版11-1	SX3001~3003
図版 3-2	SX3006	図版11-2	SX3001・3002
図版 3-3	SX3007	図版11-3	SX3003
図版 4-1	SK2023	図版12-1	SK3016
図版 4-2	SP2021遺物出土状況	図版12-2	SX3005
図版 4-3	SK2011遺物出土状況	図版12-3	SP3001
図版 4-4	SK3007	図版13-1	第4遺構面全景
図版 5-1	SK1005	図版13-2	第5遺構面全景
図版 5-2	SK1005遺物出土状況	図版14	出土遺物(1)
図版 5-3	SK2005・2006	図版15	出土遺物(2)
図版 5-4	SP2017・2018・2019	図版16	出土遺物(3)
図版 6-1	第2遺構面全景	図版17	出土遺物(4)
図版 6-2	SX2001~2008(焼土土坑群)全景	図版18	出土遺物(5)
図版 7-1	SX2001・2002	図版19	出土遺物(6)
図版 7-2	SX2003・2004	図版20	出土遺物(7)
図版 7-3	SX2005~2007	図版21	出土遺物(8)
図版 7-4	SX2009平瓦検出状況	図版22	出土遺物(9)
図版 8-1	SK2021	図版23	出土遺物(10)
図版 8-2	SK2024	図版24	出土遺物(11)
		図版25	出土遺物(12)

図版26	出土遺物 (13)	図版49-3	竈 5
図版27	出土遺物 (14)	図版50-1	男柱 1~3 全景
図版28	出土遺物 (15)	図版50-2	垂壺 1
図版29	出土遺物 (16)	図版50-3	垂壺 2
図版30	出土遺物 (17)	図版50-4	垂壺 3
図版31	出土遺物 (18)	図版51-1	男柱 5
図版32	出土遺物 (19)	図版51-2	男柱 6
図版33	出土遺物 (20)	図版51-3	男柱 4
図版34	出土遺物 (21)	図版52-1	男柱 7・8
図版35	出土遺物 (22)	図版52-2	男柱 7
図版36	出土遺物 (23)	図版52-3	垂壺 6
図版37	出土遺物 (24)	図版53-1	竈 6 へっつい1 断面
図版38	出土遺物 (25)	図版53-2	竈 6 へっつい2 断面
図版39	出土遺物 (26)	図版53-3	SK45
図版40	出土遺物 (27)	図版54-1	SK35
図版41	出土遺物 (28)	図版54-2	SK 6 断面
図版42	出土遺物 (29)	図版54-3	SK12・13断面
図版43	出土遺物 (30)	図版55-1	SK16断面
有岡城跡・伊丹郷町遺跡第209次調査			
図版44-1	第1・2面全景	図版55-2	SK17断面
図版44-2	第1・2面南側	図版55-3	SK18
図版45-1	竈 1 全景	図版56-1	SK19断面
図版45-2	竈 1 へっつい 3	図版56-2	SK20断面
図版45-3	竈 1 へっつい 3 解体時	図版56-3	SK25断面
図版46-1	竈 1 へっつい 1・2 解体時	図版57-1	第3面全景
図版46-2	竈 1 煙道	図版57-2	第3面南側
図版46-3	竈 1 煙道細部	図版58-1	土器溜り
図版46-4	竈 1 煙道細部	図版58-2	P 1 断面
図版47-1	竈 3	図版58-3	P 4 断面
図版47-2	竈 3 細部	図版59-1	P 5 断面
図版47-3	竈 3 煙道部灰層堆積状況	図版59-2	P 6 断面
図版48-1	SK 4・5	図版59-3	P18断面
図版48-2	竈 2 全景	図版60	出土遺物 (1)
図版48-3	竈 2 へっつい 1	図版61	出土遺物 (2)
図版49-1	竈 3・4 全景	図版62	出土遺物 (3)
図版49-2	竈 4	図版63	出土遺物 (4)
		図版64	出土遺物 (5)

表 目 次

第1表	第192次調査遺物観察表(1) …	73	第16表	第192次調査遺物観察表(16) …	88
第2表	” 遺物観察表(2) …	74	第17表	” 遺物観察表(17) …	89
第3表	” 遺物観察表(3) …	75	第18表	” 遺物観察表(18) …	90
第4表	” 遺物観察表(4) …	76	第19表	” 遺物観察表(19) …	91
第5表	” 遺物観察表(5) …	77	第20表	” 遺物観察表(20) …	92
第6表	” 遺物観察表(6) …	78	第21表	” 遺物観察表(21) …	93
第7表	” 遺物観察表(7) …	79	第22表	” 遺物観察表(22) …	94
第8表	” 遺物観察表(8) …	80	第23表	” 遺物観察表(23) …	95
第9表	” 遺物観察表(9) …	81	第24表	” 遺物観察表(24) …	96
第10表	” 遺物観察表(10) …	82	第25表	” 遺物観察表(25) …	97
第11表	” 遺物観察表(11) …	83	第26表	第209次調査遺物観察表(1) …	142
第12表	” 遺物観察表(12) …	84	第27表	” 遺物観察表(2) …	143
第13表	” 遺物観察表(13) …	85	第28表	” 遺物観察表(3) …	144
第14表	” 遺物観察表(14) …	86	第29表	” 遺物観察表(4) …	145
第15表	” 遺物観察表(15) …	87	第30表	” 遺物観察表(5) …	146

第1章 調査の概要

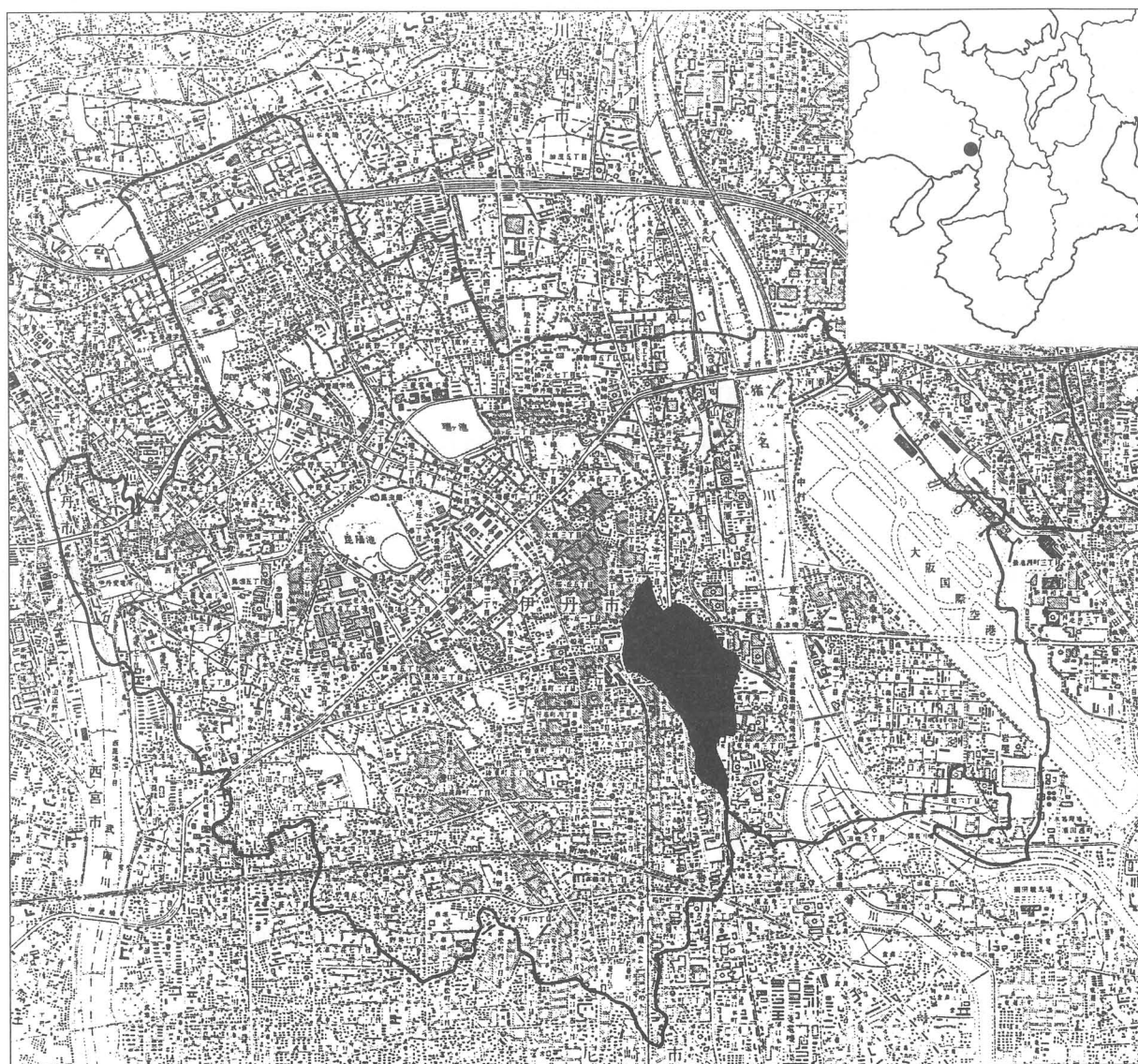
第1節 遺跡の概要

伊丹市は、大阪府豊中市、池田市と接する兵庫県の東部にあり、市域の北側は川西市、宝塚市、西側は武庫川を挟んで西宮市、南側は尼崎市に囲まれている。市の大半は、伊丹台地と呼ぶ北摂山地に端を発する低平な洪積台地が続き、東部にある猪名川流域に形成された沖積地の一部が含まれている。

有岡城跡・伊丹郷町遺跡

有岡城は、その伊丹台地東縁に発達した高台を中心に築かれた平城である。しかし、平城といっても、東側から眺めると、城は沖積地と5～10mの比高差をもつ急な崖の上に築かれ、地形を巧みに利用していることが判る。

有岡城の規模は南北1.7km、東西0.8km。伊丹台地の地形をそのまま取り込んで築城されたため、南北



第1図 遺跡位置図 (1/50,000「大阪北西部」) 平成14年

に長い不整形を呈している。内部の構造は、城域の最も東、伊丹台地が東側の沖積地に張り出した場所に主郭（本丸）が置かれ、その西側に侍町、城域のほぼ中央部を南北に通る大溝（堀）を境に、西側に町屋が広がっていた。町場の中心には、大阪・尼崎から宝塚（小浜）を經由し丹波に抜ける伊丹街道（丹波道）が取り込まれていた。

有岡城は、鎌倉幕府の御家人であった伊丹氏により築城されたもので、伊丹城と呼ばれていた。伊丹城の名は、南北朝期の文和2年(1353)に初見（『森本基長軍忠状』『北河原森本文書』）される。その後、伊丹氏及び伊丹城の動向を伝える資料は少ないが、細川両家の内紛に巻き込まれた応仁の乱後は、度々合戦の舞台となっている。

天正2年(1574)、織田信長の命を受けた池田城主荒木村重は、伊丹城の伊丹親興を攻め、代わって城主となる。城主となった村重は、城名を有岡城と改めるとともに、城の改造に着手している。その結果、町ぐるみを堀と土塁などの防御施設で圍繞する惣構えを取り入れ、要所には、北から「岸の砦」、「上臈塚砦」、「鶴塚砦」を置いたほか、侍町と町場の境に「大溝」（堀）を設けている。このように惣構えを取り入れた堅固な城も、天正6年(1578)、村重は信長に対して謀反の疑いをかけられ、結果、毛利氏を頼って籠城することになる。有岡城をめぐる攻防は翌年まで続き、村重が毛利氏の援軍を頼って、城を抜け出したことがきっかけとなり降伏開城となった。

その後入城した池田之助が天正11年(1583)に美濃岐阜城に転封のち廃城となるが、後は豊臣家の直轄領を経て、慶長5年(1600)以降は徳川幕府の直轄領に替わる。

江戸時代からの伊丹の町は、寛文元年(1661)に町の大半が近衛家の所領となり、酒造業を中心産業とする在郷町として発展していく。町は、有岡城の旧町場側から発展していき、それに加えて、広い空閑地のままであった旧侍町の範囲にも、江戸中期以降、酒蔵や町屋が次第に建造されるようになり、町が拡大されていった。

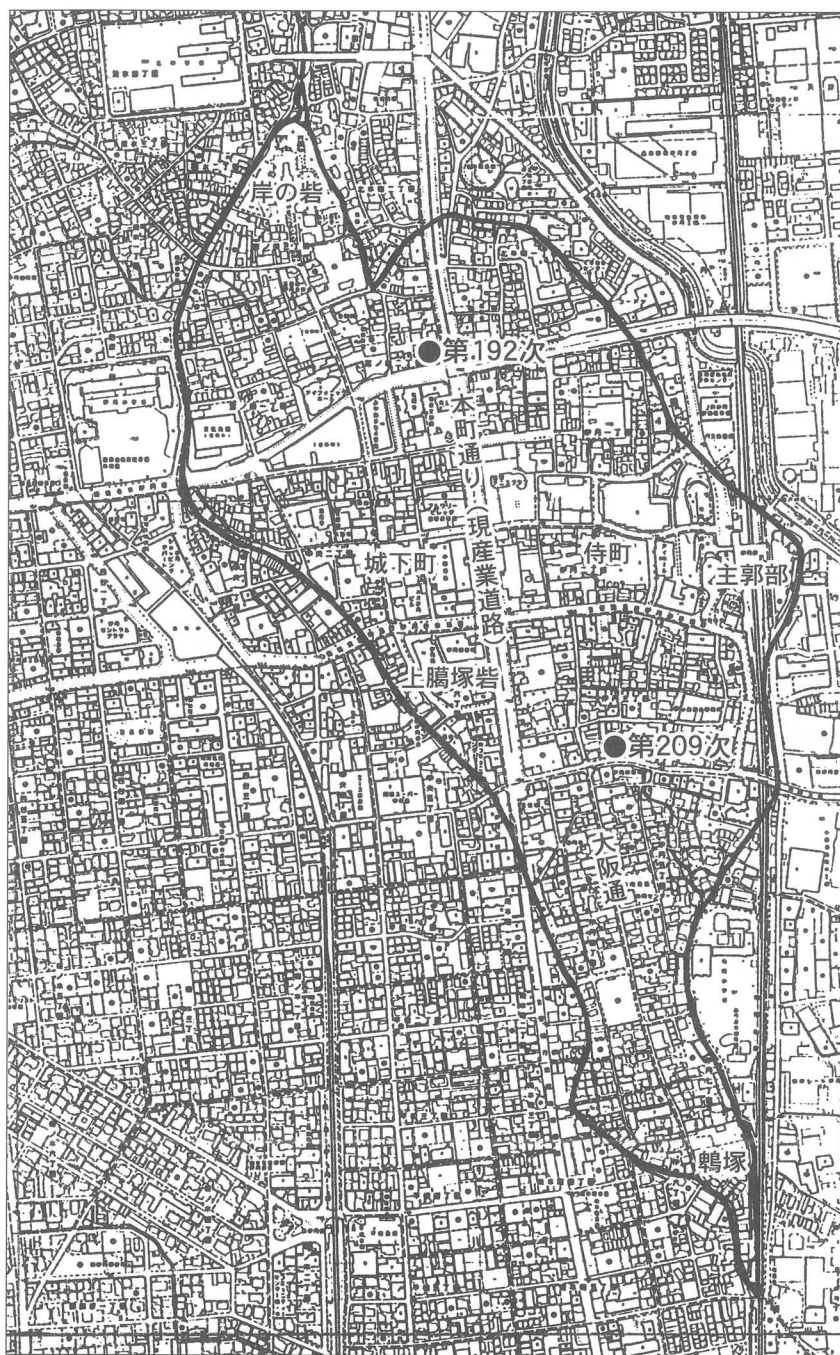
第192次調査地点

有岡城期は惣構北側に位置し、町場にあたる。江戸時代の伊丹郷町期になると、郷町内の南北の主要幹線である通り（本町通り）に面する。その通り沿いには江戸初期から町屋が建ち並ぶ様子が絵図に描かれており、この地点についても、町屋が早い段階から建っていたことが窺える。この地点は、『文禄伊丹之図』(1592-1595)は「藁屋町」、『寛文9年伊丹郷町絵図』(1669)は「藁屋丁（町）」、『寛政8年伊丹郷町絵図』(1796)は「ハタヤ丁（町）」、『天保15年伊丹郷町分間絵図』(1844)は「綿屋町」と町名を変えている。天保15年の絵図を見ると、当敷地は広く大きな一筆の敷地の南端1 / 3であることがわかる。伊丹郷町では大区画の敷地は酒蔵である場合が多く、調査地点もこの時期、酒蔵であったことが考えられる。

第209次調査地点

江戸時代に描かれた『文禄伊丹之図』・『寛文9年伊丹郷町絵図』を見ると、本地点は大溝（堀）・土塁の内側であることから、有岡城期は侍町の最南端にあたる。この2つの絵図では空閑地で町名は書かれていない。『寛政8年伊丹郷町絵図』では「堺町」、『天保15年伊丹郷町分間絵図』では「境町」と町名が書かれている。

現在当地は、南側に市道が通ったことにより、南に開口しているが、江戸時代以来、敷地の西側と南側は大溝と接しており、江戸時代の敷地のオモテは、敷地北側の通り側である。『大正4年伊丹町地籍図謄本』では大区画の一筆の敷地であり、『明治19年酒造場絵図面届出書写』(630番地 久納豊蔵)を



第2図 調査箇所位置図（1/10,000）平成10年
（太線で囲った部分が「有岡城跡・伊丹郷町遺跡」）

に関わる埋蔵文化財発掘調査の支援に関する協定書）に基づき、第192次調査が平成9年度に、第209次調査が平成10年度に、県教育委員会の支援職員により実施された。

出土遺物の水洗い・注記・復元・実測などの整理作業については、発掘調査終了後、口酒井整理事務所にて始めたため、整理作業に調査担当者の参加はほとんど得られず、また、他府県からの支援職員派遣期間中には完了できず、伊丹市教育委員会が中心となって行うこととなった。そこで、今回この報告書作成にあたって、整理作業を分担した。出土遺物の整理及び報告書用の図版の作成・遺物写真撮影等は伊丹市教育委員会が担当し、報告書の原稿は、第192次調査は遺構について、第209次調査は遺構・遺物について調査担当者をお願いした。

見ても明らかなように、当地は酒蔵の東側一部にあたる。

尚、現在も大溝の名残をとどめた石組みの溝がここから南側には残っている。ここから北側の大溝については、江戸時代の絵図には描かれているが、はやい時期に埋められたようで、それがどこなのか明確ではなかった。1999年に兵庫県教育委員会が実施した第238次調査（県道伊丹停車場線道路上）で初めて発見された（兵庫県教育委員会『平成11年度 年報』）。また、この調査地より北側で今年度伊丹市が調査した第276次調査地点（伊丹1丁目）でもほぼ絵図と同様の場所で発見されている。

第2節 調査の概要

本書に掲載した2件の発掘調査は、共同住宅建設に伴うもので、阪神・淡路大震災の震災復旧・復興事業として、国庫補助事業により実施したものである。また、発掘調査を迅速に実施することを目的に、兵庫県教育委員会及び他都府県・政令指定都市の埋蔵文化財担当職員で構成された支援制度（「阪神・淡路大震災

2件の調査にいたる経過について説明をしておきたい。

第192次調査地点

平成9年3月3日付で提出された届出によると、鉄筋コンクリート9階建ての共同住宅の計画であったため、協議を行い、現在建っている木造住宅解体後、確認調査を行うこととなった。平成9年6月23日付で県教委に上記「協定書」に基づく支援依頼を行い、復興調査第1班・中山浩彦氏（埼玉県）と第2班・船越重伸氏（三重県）により6月26日より確認調査が行われた。結果、遺構面が検出されたため、そのまま続行して本発掘調査が行われ、9月25日に終了した。途中より復興調査第2班・渡辺昇氏（兵庫県）が調査に参加された。

第209次調査地点

平成10年2月2日付で提出された届出によると、鉄筋コンクリート10階建ての共同住宅の計画であったため、協議を行い、確認調査を行うこととなった。平成10年3月10日から3日間、市教委にて確認調査を行った結果、酒造遺構を含む多くの遺構が検出されたため、本発掘調査が必要であると判断された。本発掘調査は県教委に支援依頼を行い、復興調査班・山上雅弘氏、岡本一秀氏（兵庫県）により、4月30日～6月30日までの期間行われた。

(中略)

第2章 発掘調査の成果

第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第192次調査

所在地 伊丹市宮ノ前2丁目210-3、4、9

調査面積 265㎡

調査期間 平成9年6月26日～平成9年9月25日

調査担当 渡辺昇・船越重伸・中山浩彦

1. 遺跡の概要

遺跡は、武庫川と猪名川に挟まれた伊丹台地上に位置し、範囲が南北1.7km、東西0.8kmに及ぶ。鎌倉時代以降、代々伊丹氏の居城となった伊丹城(有岡城)に関連する遺構と天正7(1574)年の廃城後に酒造業で栄えた伊丹郷町を主体とした中世末から近世の複合遺跡である。江戸時代の伊丹郷町では数多くの商工業で繁栄していたことが近世絵図・文書などから窺われ、従来の調査成果からも多数の酒造用竈などが検出されている。また、最下層の地山面からは後世の攪乱を免れた縄文時代や弥生時代の土坑、古墳時代中期の古墳跡、平安時代の掘立柱建物跡などの遺構が僅かではあるが検出されており、古代から当地域の開発が進んでいたことが判明している。

調査地点周辺は、遺跡の北端部分に当たり、『天保15年伊丹郷町分間絵図』によると、今回の調査区は、綿屋町の一部であることが絵図から読み取れる。当区は、伊丹を南北に貫く江戸時代の主要幹線道路である本町通りに面している。通りには酒蔵を始めとする商工業者が軒を並べていたことから、商家の屋敷地であった可能性が考えられた。

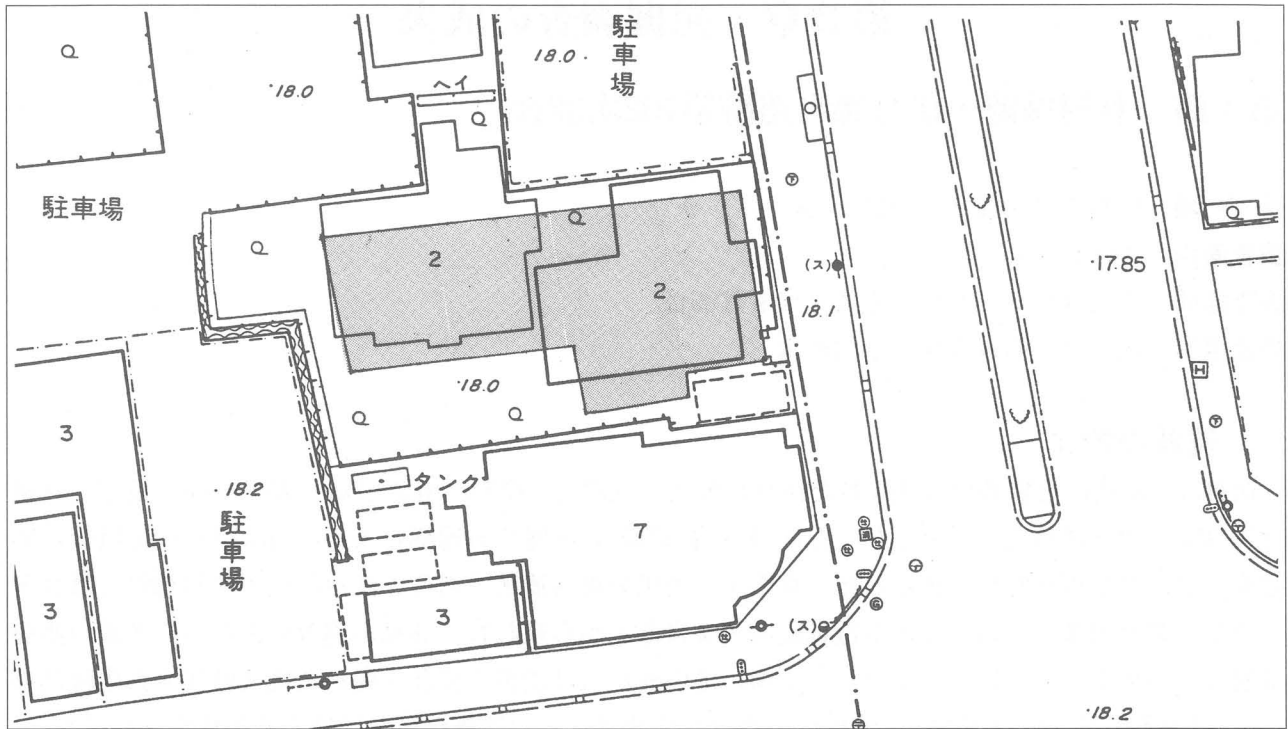
2. 調査の概要

当該地において阪神・淡路大震災の復興に伴う共同住宅建設事業が計画された。本地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内に当たっていた。また、隣接地においてこれまでに数次の発掘調査が行われており、弥生時代の遺構や近世の酒造関係の遺構・遺物が検出されていたことから、江戸時代の郷町関係の遺構や遺物が存在することが予測された。伊丹市教育委員会の支援依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の派遣職員が確認調査を行った結果、江戸時代の火災面2面を含めた複数の遺構面と陶磁器片を確認したため、建設予定範囲内の全面調査を実施することとなった。

調査の結果、江戸時代の遺構面を3

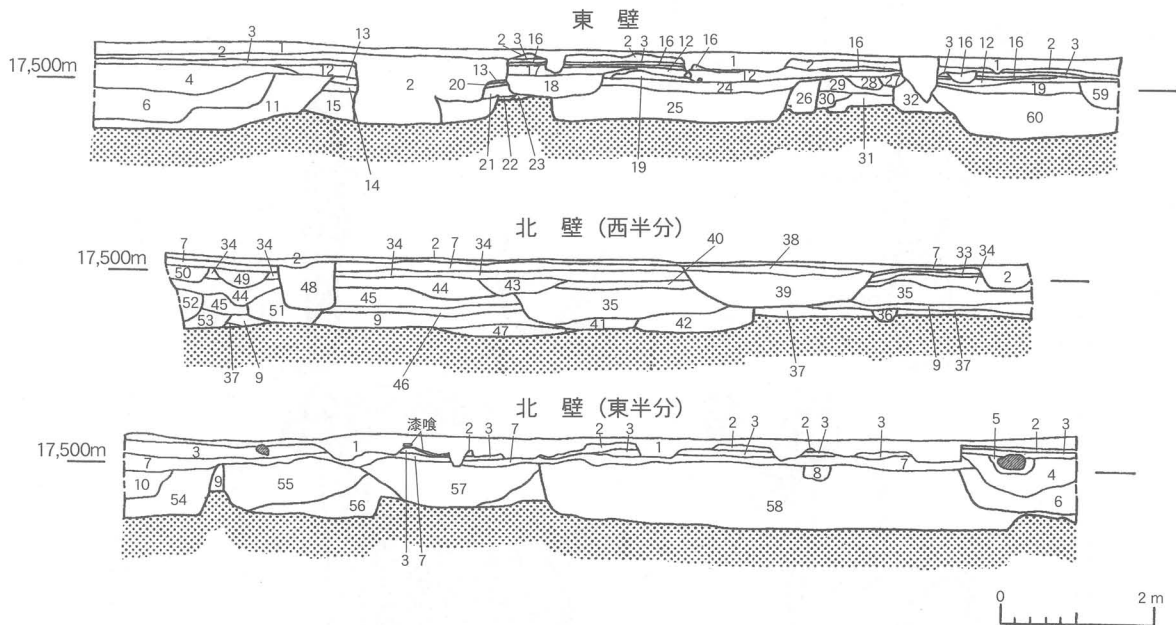


第3図 調査区位置図 平成10年測量 (1/2500)



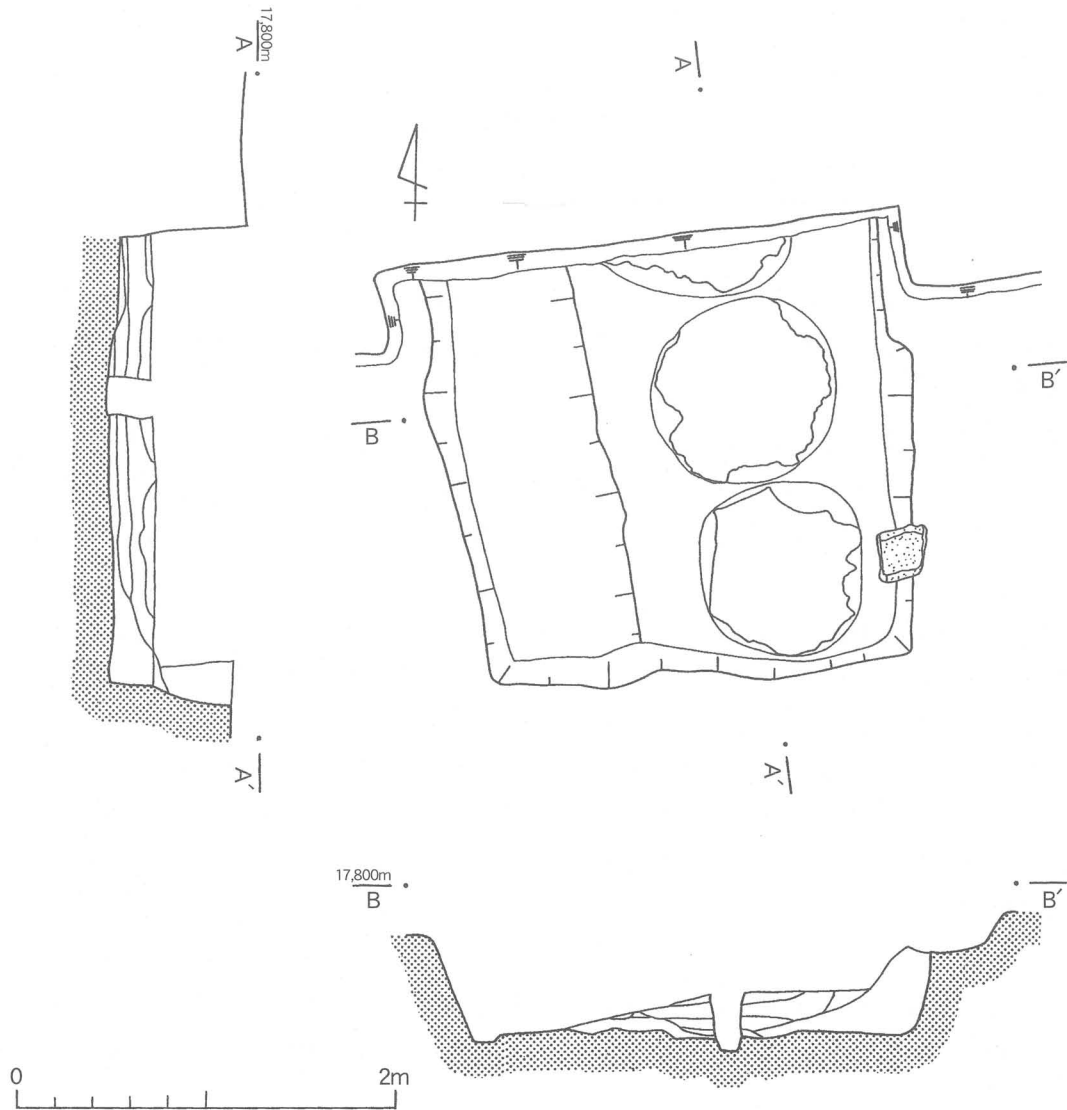
第4図 調査区設定図 昭和60年測図 (1/500)

面と中世以前の遺構面1面と計4面の遺構確認面を検出した。江戸時代の遺構面からは、鑄造に関連する土坑、酒造用竈、家庭用の竈、井戸跡などの生業に関する遺構や元禄に起こった火災の跡を検出した。中世以前の遺構面では、土坑、ピットを検出したが、出土遺物が無かったことから、各遺構の所属時期を明確にすることはできなかった。



- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1. 盛土 | 30. 10YR5/6黄褐色粘質土 |
| 2. 2.5Y5/2灰褐色粘質土 | 31. 2.5Y5/4黄褐色砂質土 |
| 3. 10YR3/3暗褐色粘質土 | 32. 2.5Y5/4黄褐色砂質土 |
| 4. 10YR4/2灰黄褐色粘質土 | 33. 10YR3/3暗褐色砂質土 |
| 5. 7.5YR4/2灰褐色砂質土…SK2004 | 34. 2.5Y5/4黄褐色砂質土 |
| 6. 5YR3/4黒褐色砂質土 | 35. 7.5YR3/1黒褐色砂質土 |
| 7. 7.5YR4/1褐色粘質土 | 36. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 |
| 8. 2.5Y5/3黄褐色砂質土 | 37. 10YR5/8黄褐色粘質土 |
| 9. 5Y5/1灰色砂質土 | 38. 2.5Y4/1黄灰色砂質土 |
| 10. 2.5Y5/4黄褐色粘質土 | 39. 5YR3/1黒褐色砂質土…SD1001 |
| 11. 2.5YR3/4暗赤褐色砂質土…SX2008 | 40. 10YR6/8明黄褐色粘質土 |
| 12. 10YR3/4暗褐色粘質土 | 41. 7.5YR3/1黒褐色砂質土 |
| 13. 10YR4/4褐色砂質土 | 42. 10YR3/1黒褐色砂質土…SK5026 |
| 14. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 | 43. 7.5YR4/3褐色砂質土 |
| 15. 2.5YR3/3暗赤褐色砂質土…SX3003 | 44. 10YR2/1褐色粘質土…SK2001 |
| 16. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 | 45. 2.5Y4/1黄灰色砂質土 |
| 17. 7.5GY6/1緑灰色粘土 | 46. 7.5YR3/4暗褐色砂質土 |
| 18. 10YR3/3暗褐色砂質土 | 47. 10YR3/3暗褐色粘質土 |
| 19. 7.5YR3/3暗褐色砂質土 | 48. 7.5YR3/1黒褐色砂質土…SD1002 |
| 20. 5Y7/3浅黄色砂質土 | 49. 10YR4/1褐色砂質土 |
| 21. 10YR5/6黄褐色砂質土 | 50. 10YR7/1灰白色粗砂 |
| 22. 2.5Y4/1黄灰色砂質土 | 51. 10YR3/3暗褐色砂質土…SX5003 |
| 23. 10YR6/8明黄褐色粘質土 | 52. 10YR2/3暗褐色砂質土 |
| 24. 10YR3/2黒褐色砂質土 | 53. 2.5Y3/1暗褐色粘質土…SK5001 |
| 25. SX3001 | 54. 7.5YR2/1黒色砂質土…SX2007 |
| 26. 2.5Y6/6明黄褐色粘質土…SK3001 | 55. 10YR3/1黒褐色粘質土…SX2006 |
| 27. 10YR4/1褐色粘質土 | 56. 7.5YR3/1黒色粘質土 |
| 28. 10YR3/4暗褐色砂質土 | 57. 5YR2/2黒褐色砂質土…SX2005 |
| 29. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土 | 58. 2.5YR4/6赤褐色砂質土…SX2003 |

第5図 東壁・北壁土層図 (1/100)



第7図 SX1001平面・断面図（1/40）

3. 調査成果

第1遺構面（18世紀後半以降）（第6図、図版1）

現地地表下40cmの高さで検出した。住宅の基礎などにより全体に攪乱が著しく、遺構の残りがあまり良くなかった。調査区東端では硬化した土間面を検出した。

鑄造関連遺構

SX1001（第7～13図、図版1・14～17）

調査区北側中央の壁際で検出された土坑である。北側が調査区外に延びていたため、一部拡張して調査を行ったが、全体を検出することはできなかった。規模は、南北2.2m以上、東西2.36m、深さが0.42～0.56mで、平面形態は長方形をしているものと思われる。底面東側には直径約1mの円形の粘土が固く還元した面を3基検出した。硬化面は、底面より一段高く構築されており、周囲は同心円状に赤く酸化していた。土坑の底面は、粘土面がある東側が高く、西側に向け緩やかに傾斜していた。壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。埋土からは大量の鑄型、鋳滓、羽口などが出土した。土層断面か

らは上部構造を伺わせるものは認められなかったが、鑄造に関連する土坑である可能性が高い。

出土遺物は、第8図から第13図の1から48である。

出土遺物のなかには、鑄造に関連すると思われる遺物が多く出土している。そのなかでも、用途が明確な遺物は、犁先真土型上型（4・6・9・11・13）、犁先真土型下型（1・2・5・7・8・10）、鍋の内型であるジョウ（17・19）、羽口（23～29）、鑄型を焼くための道具である円錐ピン（31）があげられる。

ほかには、鑄造製品は不明であるが、何らかの鑄型と推測されるもの（12・14～16・18・20～22・32・33）、内面体部下半が羽口同様に煤けているため、鑄造関係で転用し、使用したのではないかと推測される焼塩壺（34）も出土している。

この遺構で出土した鑄造関連遺物のなかには、「天保……卯口……」の銘をもつもの（1）、銘の一文字が「丑」と考えられるもの（3）、「八」の銘があるもの（12）、「……巳年八月……細工」の銘文をもつもの（14）のほかに、判読は出来ないが、銘と考えられる文字を有するもの（2・4・5・13）がある。

今回、出土した鑄造に関連すると思われる遺物のなかには、それを使用して鑄造される製品が分からず、不明としたものが多くある。そのなかでも、この遺構から出土したもので、特に出土量が多かったものなどや注目したものを、次に取り上げたいと思う。

12は使用痕がないため、未使用品と考えられる。「八」という数字が型番なのか、何を示す数字なのかも不明である。出土した鑄型のなかには、12と同じように数字が刻まれたものはなく、対になるものや、類似品と思われるものも出土していないため、この遺物が鑄型かという点も不明である。また、使用方法は不明である。

15と16は上下で1つのセット関係にある鑄型と考えられる。15が上型で、16が下型である。鑄造製品は不明であるが、鑄型から推測すると、円錐状の製品が製造されていたようである。図示はできなかったが（図版16-476～479）、15・16と同型で径の大きさが異なる鑄型が、この遺構から多数出土している。

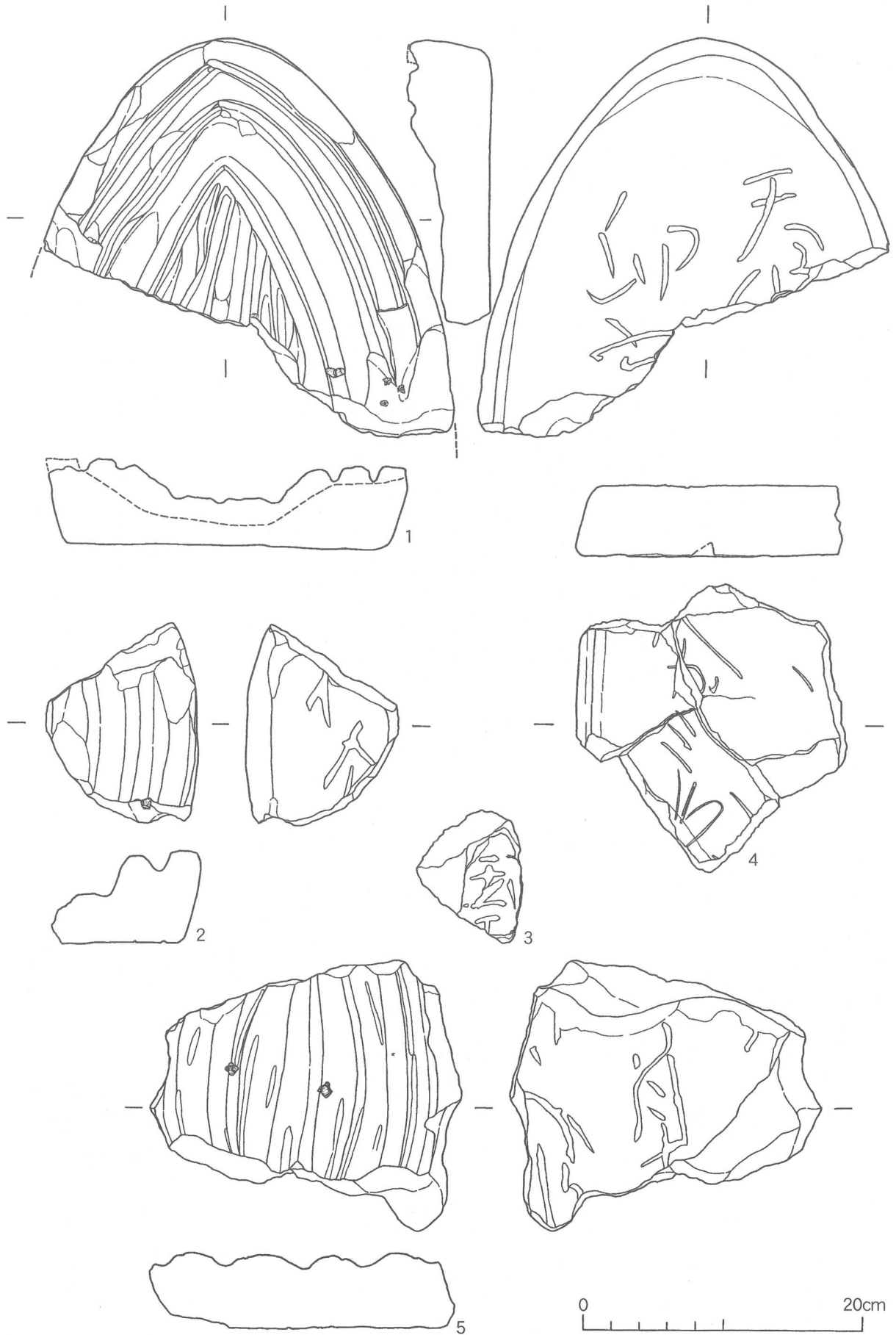
17・19のように“ジョウ”と判断できるものもあるが、“ジョウ”に酷似しているが、18・20～22のように、“ジョウ”よりも幅も厚みも狭く、径も小さい鑄型（図版16-480～484）も、この遺構から大量に出土している。鑄造製品は不明であるが、この型の鑄型は、焼成を重ねたために粗雑になったのか、粗雑な作りのものや、丁寧な作りのものがあり、幅・厚みも多様である。

羽口も多く出土したが、30は今回出土した羽口と異なる様相をもつため、羽口とはせず、不明とした。30は、内面の端部分を幅広に面取りし、先端を作り、その先端部分に三角形の切り込みを入れている。全体的に丁寧な作りである。内径面のみ、焼成のためか黒く煤けている。用途は不明であるが、鑄造に関連する何らかの後端部分ではないかと考える。

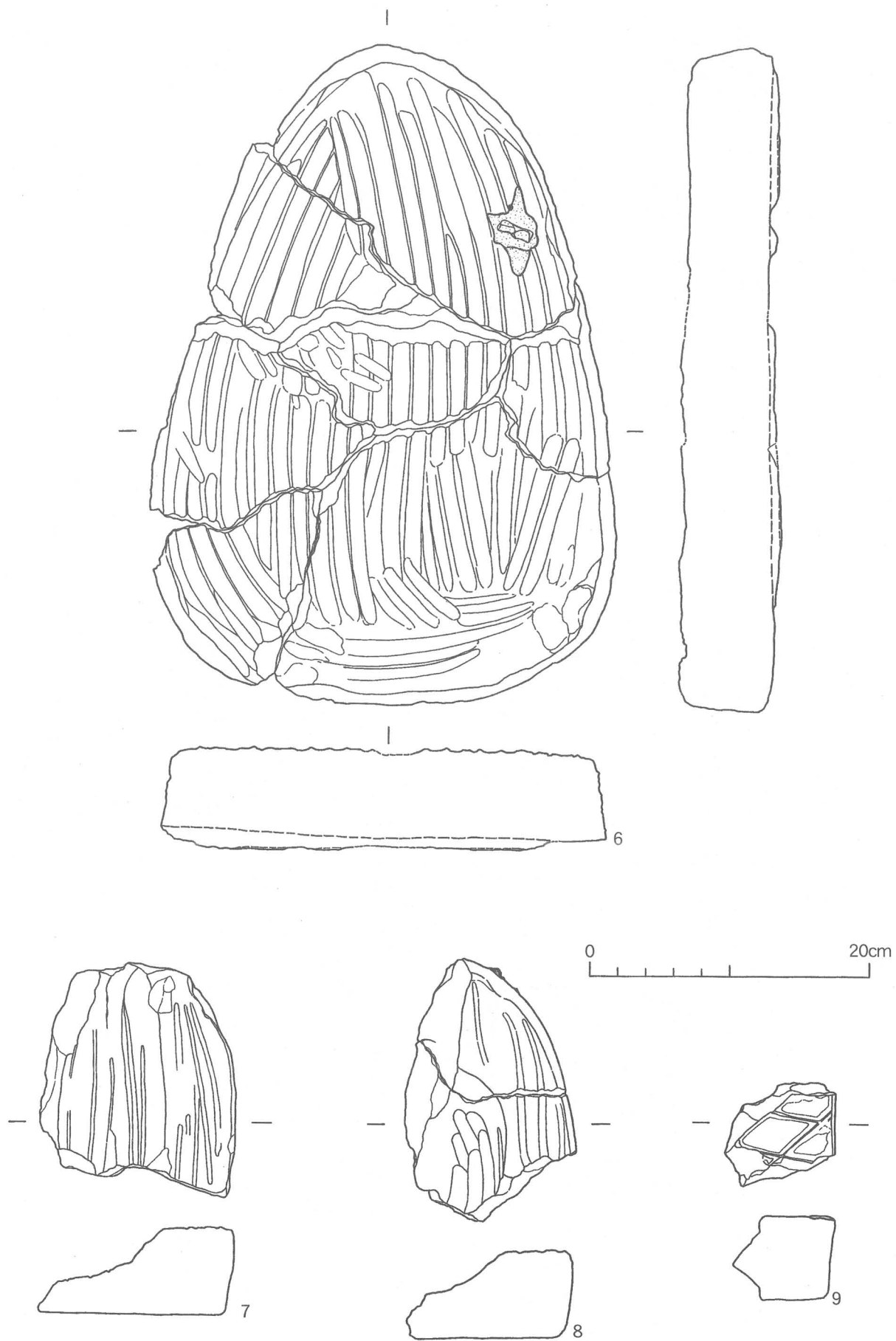
32と33も上下で1つのセット関係にある鑄型と考えられるものである。33が上型で、32が下型の関係になるが、鑄造製品は不明である。鑄型から推測すると、何らかの先端部分が鑄造されていたと考えられる。

他にも、図示されていないが、炉壁と思われるもの（図版16-473～475・485・486）や、鉄滓や送風管なども出土している。

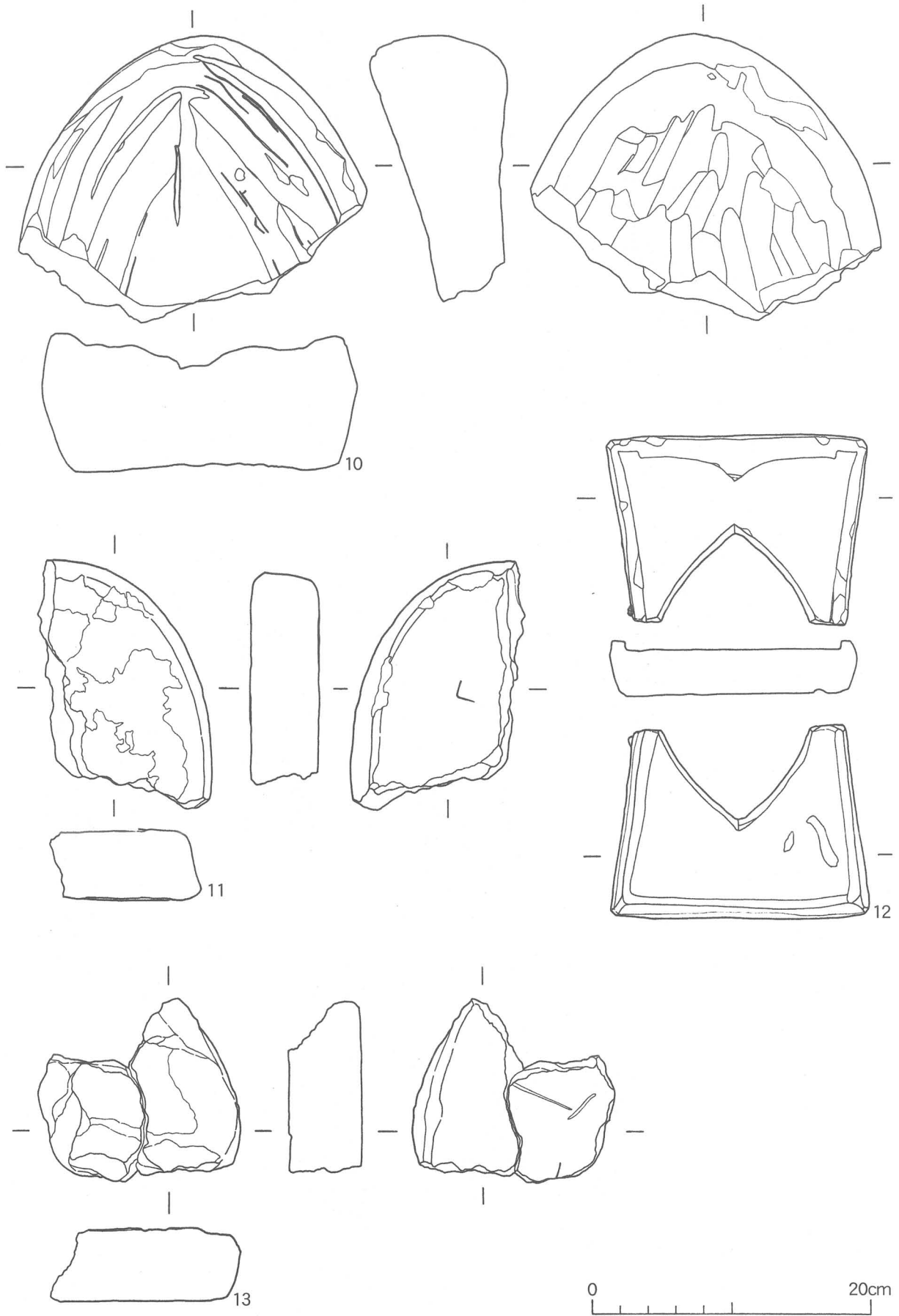
今回、この遺構から出土した鑄造に関連する遺物を見てみると、犁先は上型と下型が出土しているので、犁先の鑄造は明白だが、鍋に関しては、外型の鑄型が全く出土せず、内型の鑄型のみしか出土していない点で、鍋の鑄造に関する判断は難しいと思われる。



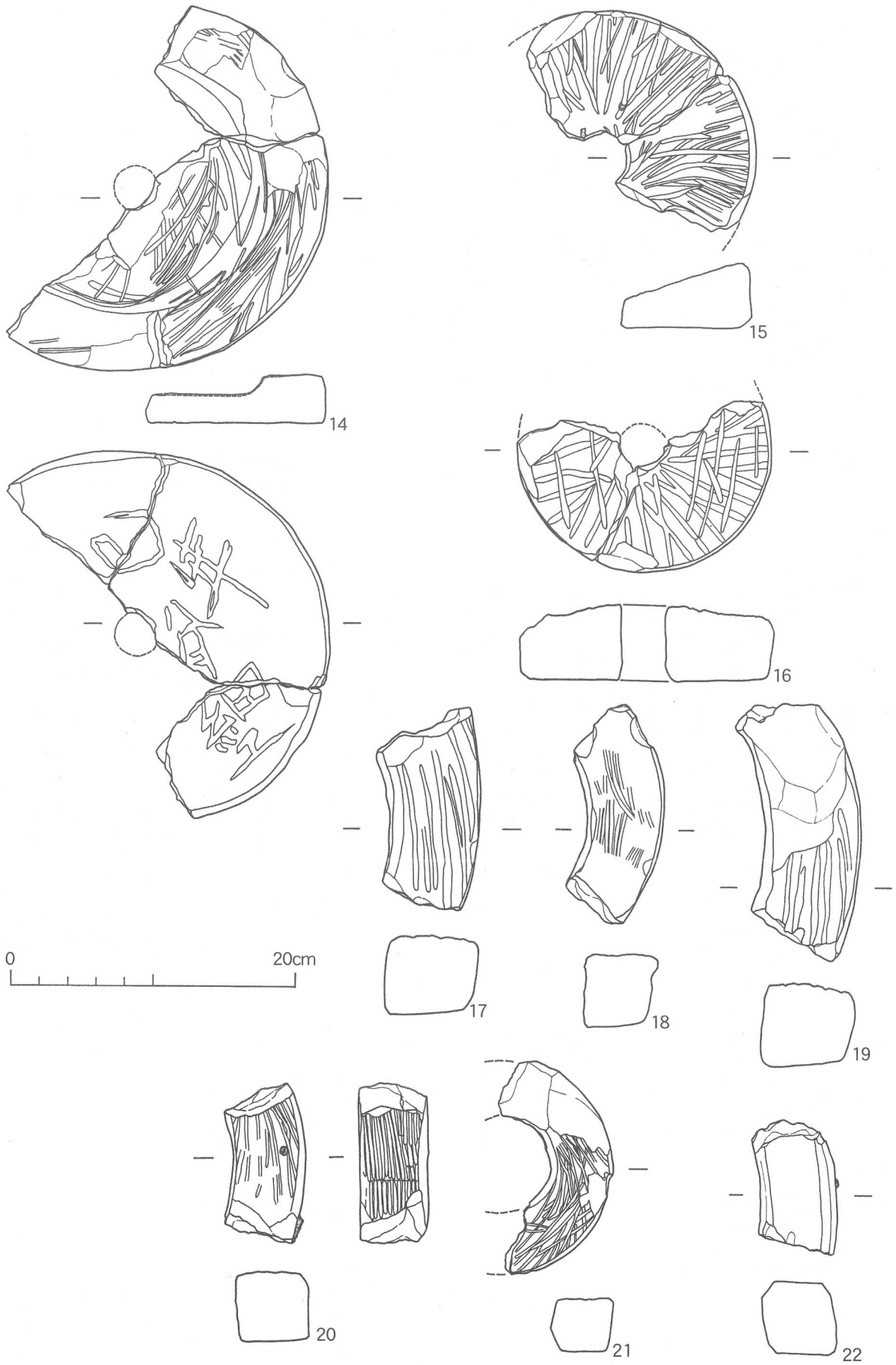
第8図 SX1001出土遺物(1)(1/4)



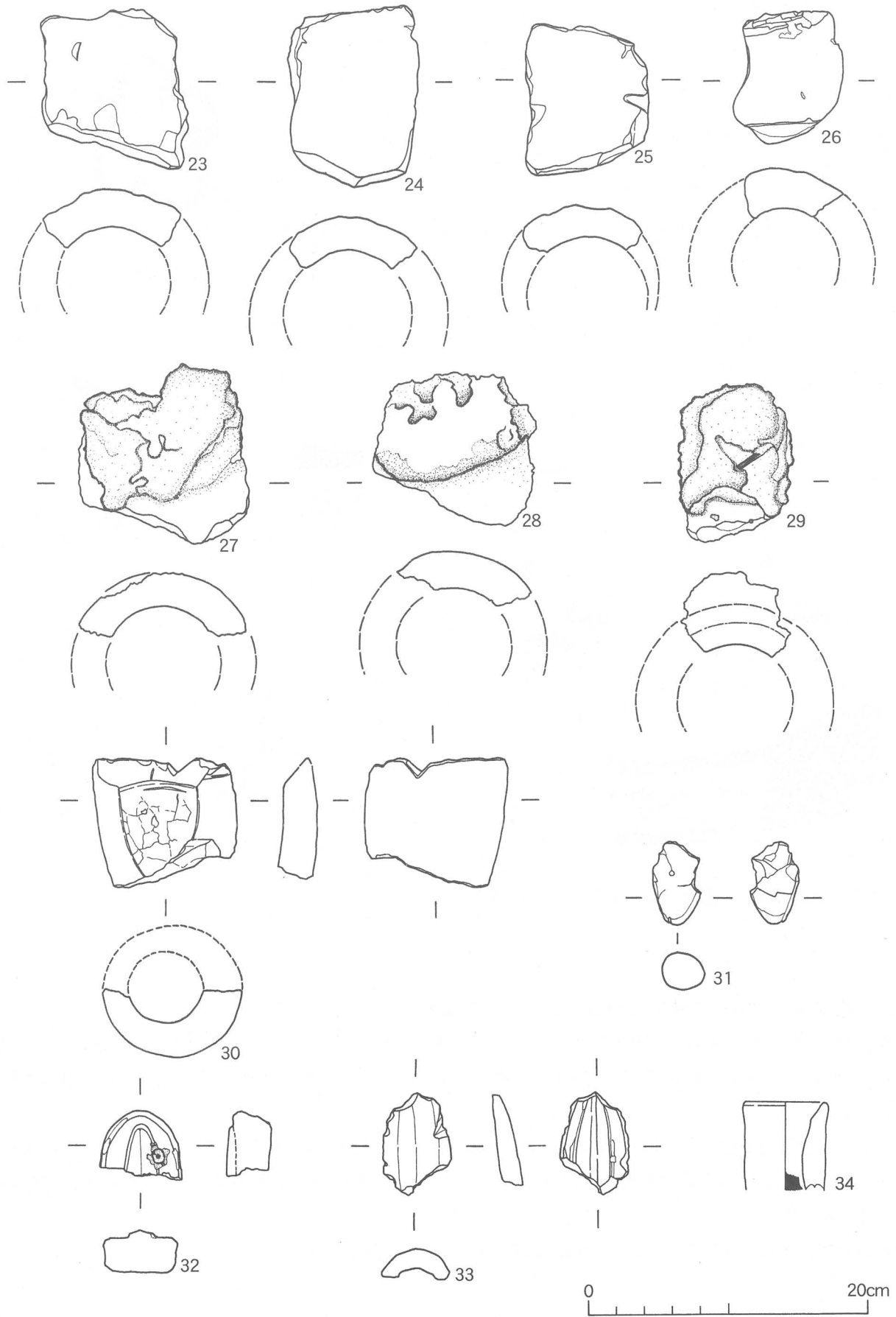
第9圖 SX1001出土遺物(2)(1/4)



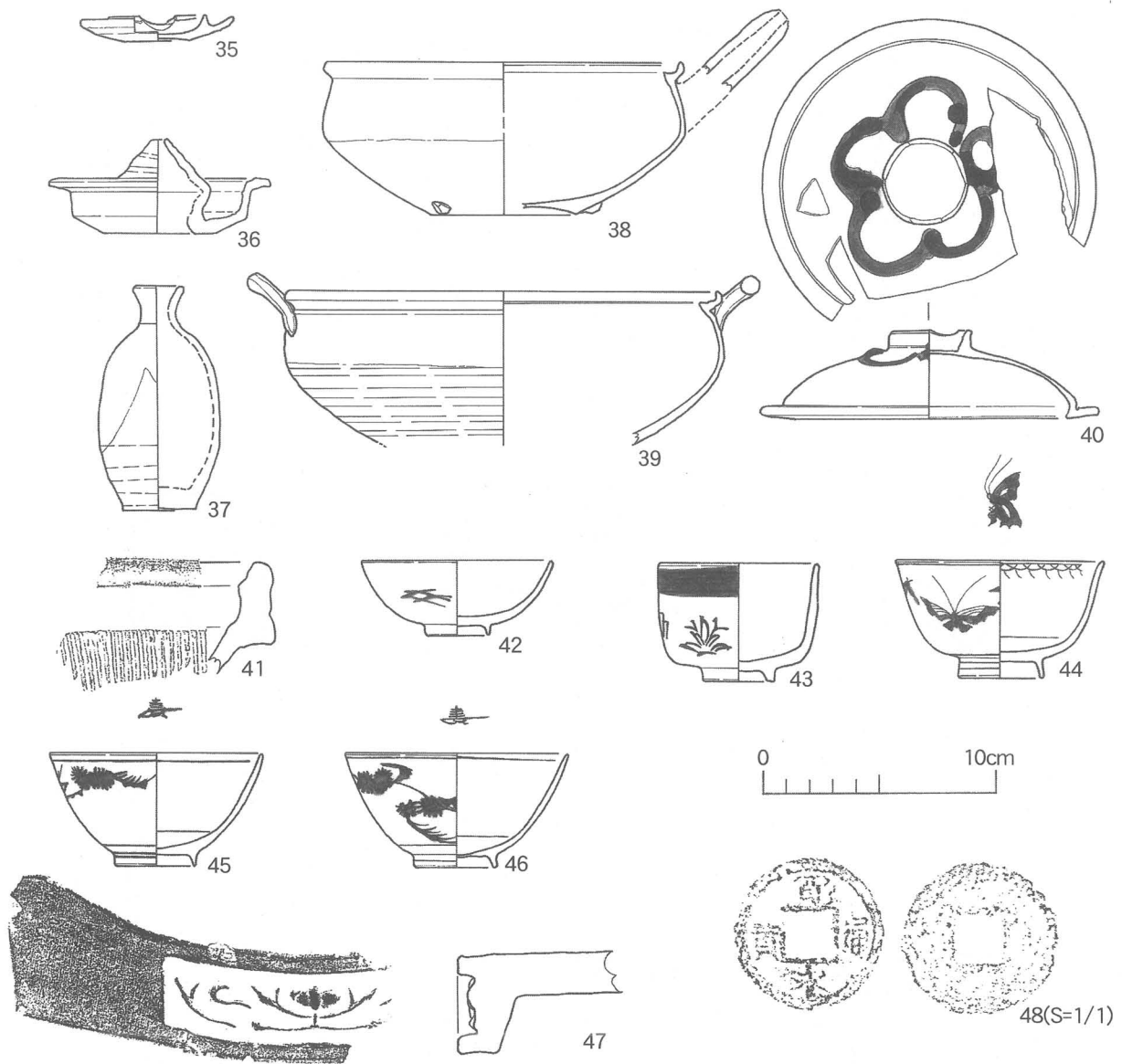
第10図 SX1001出土遺物 (3) (1/4)



第11図 SX1001出土遺物(4)(1/4)



第12図 SX1001出土遺物 (5) (1/4)



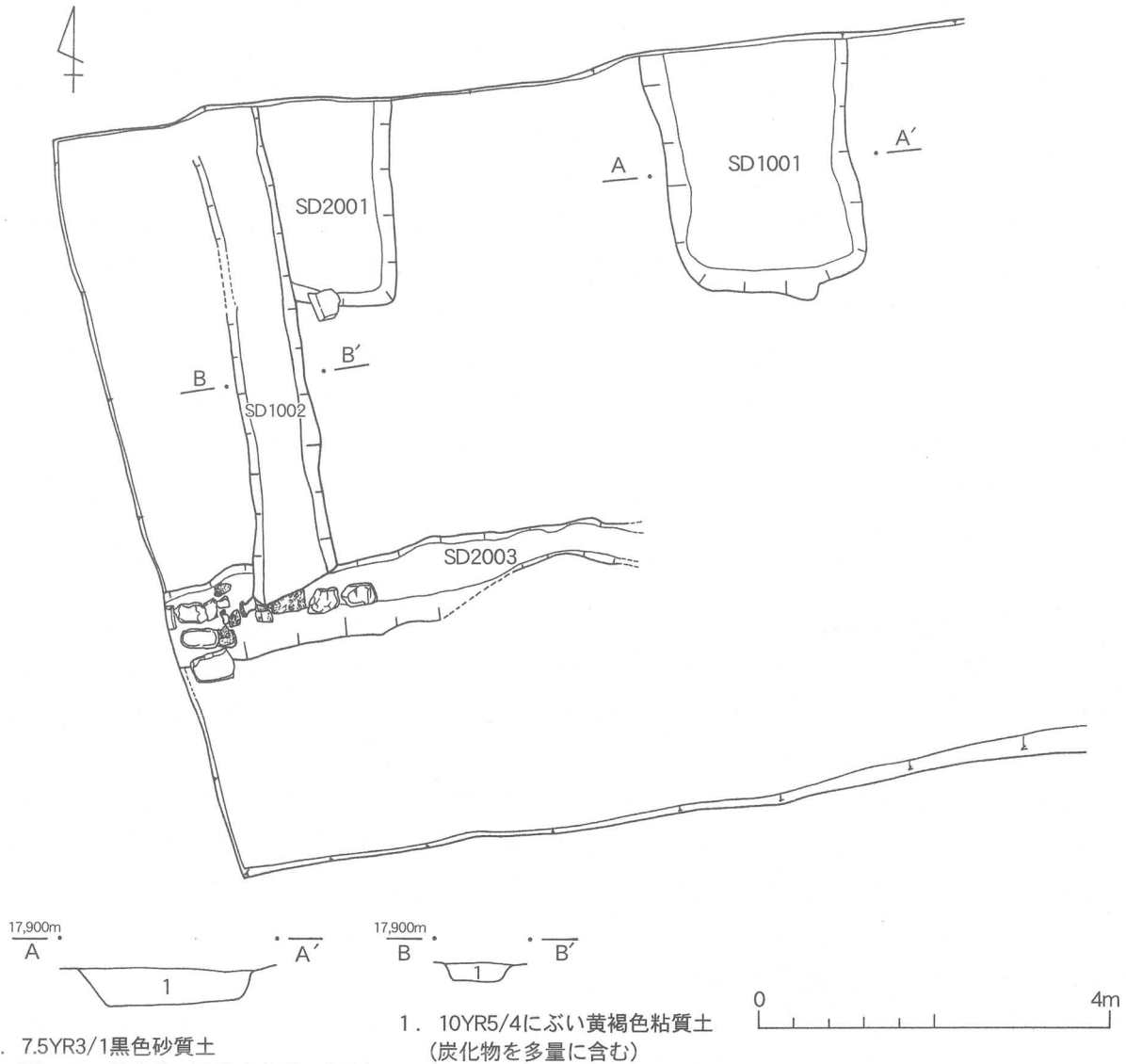
第13図 SX1001出土遺物 (6) (1/1・1/3)

この遺構は、鑄造に関連する遺物のほかにも陶磁器も出土している。

陶器は、伊賀・信楽焼灯明受皿 (35)・把手付き行平鍋 (38)、伊賀・信楽焼系花器 (37)・土鍋 (39)・鉄釉とイッチン掛けで花文を施した鍋蓋 (40)、堺・明石焼系挿鉢 (41)、産地不明陶器土瓶蓋 (36) などである。

42から46は肥前磁器で、井桁文の白磁染付小碗 (42)・草花文と源氏香文を交互に配する白磁染付腰丸碗 (43)・蝶文の白磁染付端反碗 (44)・葉文とコンニャク印判菊文を併用している同柄の白磁染付碗 (45・46) である。

陶磁器以外では、軒平瓦 (47)、寛永通寶 (48) などが出土している。



第14図 SD1001・1002・2001・2003平面図、SD1001・1002断面図（1/80）

溝

SD1001（第14～18図、図版2・19～21）

調査区西側の北壁際で検出された溝である。調査区外に延びていたため全体を調査できなかったことから、大型の長方形を呈する土坑の可能性も考えられる。幅2.1m、深さが0.43mで、南北方向に走行していた。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていた。覆土は、黒色砂質土の単層で、径3～30mmの礫、炭化物粒子を大量に含んでいた。遺物は、コンテナ約3箱に及ぶ大量の陶磁器片が廃棄されていた。

出土遺物は第15図から第18図の49から103である。

素焼きの製品は、焙烙（49・50）、手捏ね成形で、口径10cm前後の大型の土師皿（51～54）で口縁部に煤の付着があることから灯明皿として使用されていたと考える。ミニチュア製品の猿の人形（55）・独楽（56）、十能（57）などである。

陶器は、瀬戸・美濃焼鉄絵鉢（58）、伊賀・信楽焼灯明皿（59）、信楽焼壺（60）、京焼系小鉢（61）、ミニチュア製品の伊賀・信楽焼鉄釉土鍋（62）、備前焼人形徳利（63）、丹波焼壺（64）、丹波焼鉢

(65)、丹波焼播鉢 (66・67)、明石焼播鉢 (68)、口縁部肩口部に扇形の刻印をもつ堺焼播鉢 (69) などである。

磁器は、72から87、89から103が肥前製品である。手描きとコンニャク印判を併用して丸文を描く白磁染付碗 (72・73)・草花文の白磁染付碗 (74・84)・白磁染付二重網目文碗 (75)・青磁染付碗 (76)・霊芝花文の白磁染付碗 (77)・白磁染付一重網目文碗 (78)・蝶連子格子文の白磁染付碗 (79)・草花文の白磁染付広東碗 (80)・白磁染付広東碗 (81)・松文の白磁染付碗 (82・83)・青磁染付筒形碗 (85・86)・コンニャク印判で文様が施された白磁染付筒形碗 (87)・口縁端反りで人物文の白磁染付小杯 (89)・口縁端反りの白磁染付小杯 (90)・型押し成形の白磁紅皿 (91)・笹文の白磁染付紅猪口 (92)・氷裂菊花文の白磁染付紅猪口 (93)・白磁染付皿 (94・97)・唐草文の白磁染付皿 (98)・白磁皿 (95・96)・口紅が施され折れ松葉文の白磁赤絵皿 (99)・青磁染付皿 (100)、松葉文の白磁染付仏飯具 (101)、白磁鉄釉仏飯具 (102)、白磁染付水滴 (103) など、器種も様々なものが出土している。

肥前製品以外にも口縁端反りで山水文の瀬戸白磁染付碗 (88) などが出土しており、陶磁器以外には軒丸瓦 (70・71) なども出土している。

SD1002 (第14・18図、図版21)

調査区の西端で検出された南北方向に走る溝である。南北の両端ともに攪乱で壊されており、SD2001・2003と切り合っていた。規模は、幅0.8m、深さが0.23mであった。覆土は、にぶい黄褐色粘質土が堆積し、炭化物粒子を多量に含んでいた。

出土遺物は、第18図104から109である。ロクロ成形無釉の土師皿 (104)・受皿 (105)、手捏ね成形の口径10cmを越える大型の土師皿 (106)、ミニチュア製品の芥子面子 (107)、肥前白磁染付碗 (108)、鉄製の柄付き皿 (109) などが出土している。

SD2001 (第14・18～23図、図版2・21～25)

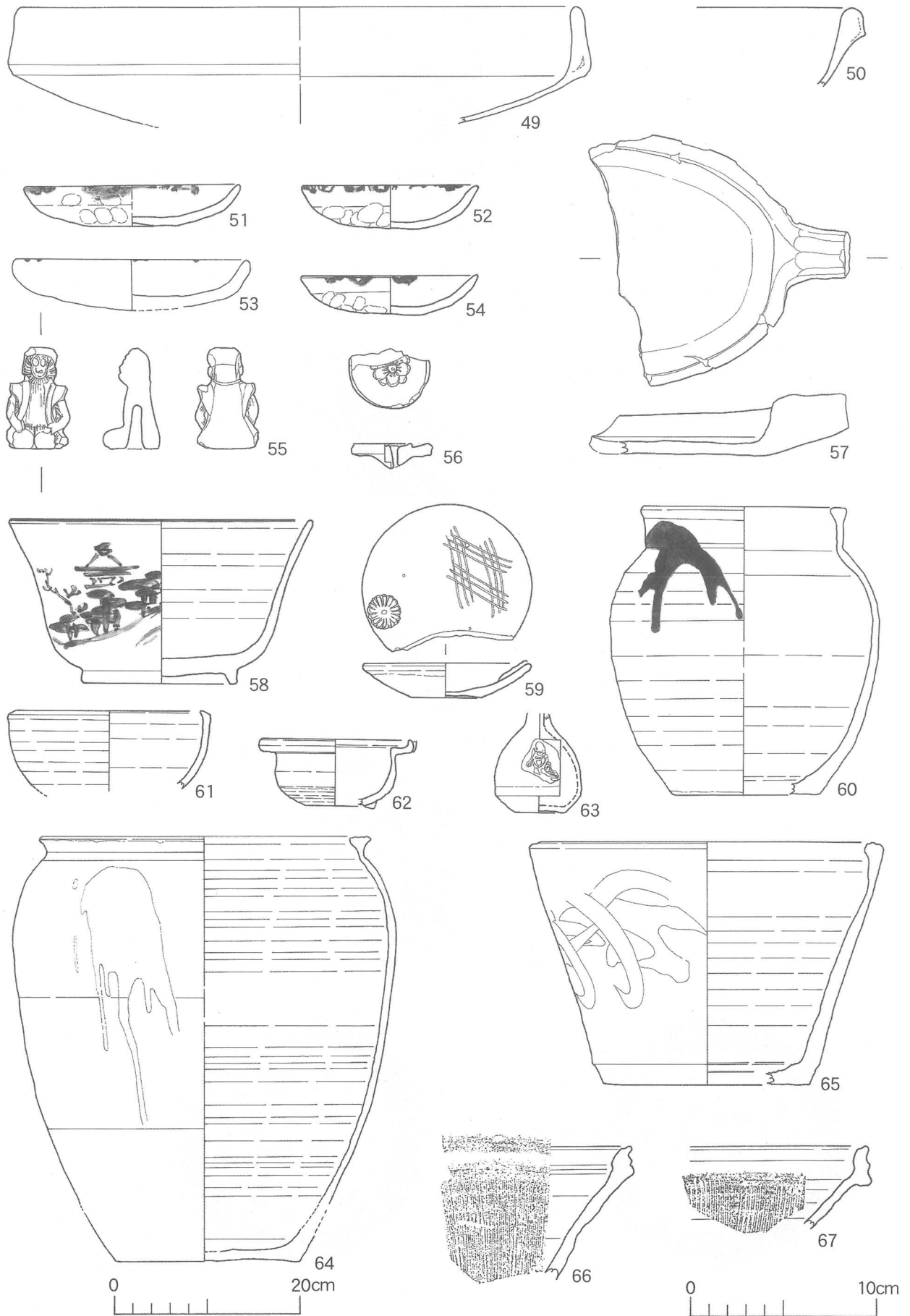
調査区西側の北壁際で検出された南北方向に走る溝である。調査区外に延びており全体が調査できなかったことから、長方形の土坑である可能性も考えられる。規模は、幅1.42m、深さが0.64mであった。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていた。遺物は、陶磁器片や芥子面子など大量に出土した。

出土遺物は、第18図から第23図の110から171である。

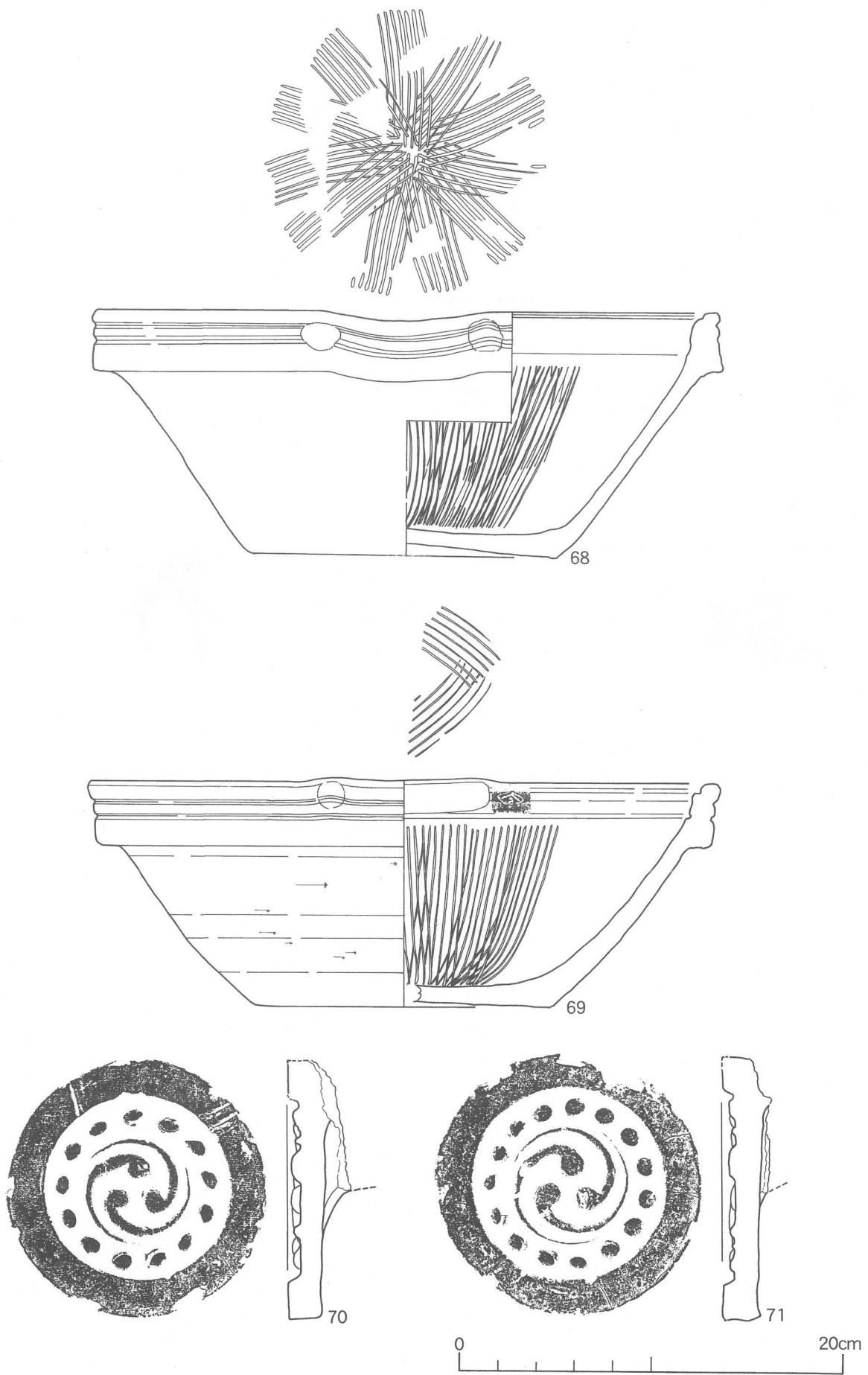
素焼き製品は、手捏ね成形の土師皿 (110～114)。110・114は口径10cmを超える大型の土師皿。115から120はミニチュア製品で、独楽 (115)・天神像 (116)・内面に柿釉の施された灯火器 (117)・人面の芥子面子 (118～120)、焙烙 (121～123) などである。

陶器は、瀬戸・美濃焼灰釉皿 (124) や、125から129は伊賀・信楽焼製品で、灰釉合子 (125)・鉄釉花器 (126)・灰釉片口鉢 (127)・鉄釉土鍋 (129)・ミニチュア製品の鉄釉土鍋 (128)。唐津焼三島手鉢 (130)、堺焼播鉢 (131～133) などである。

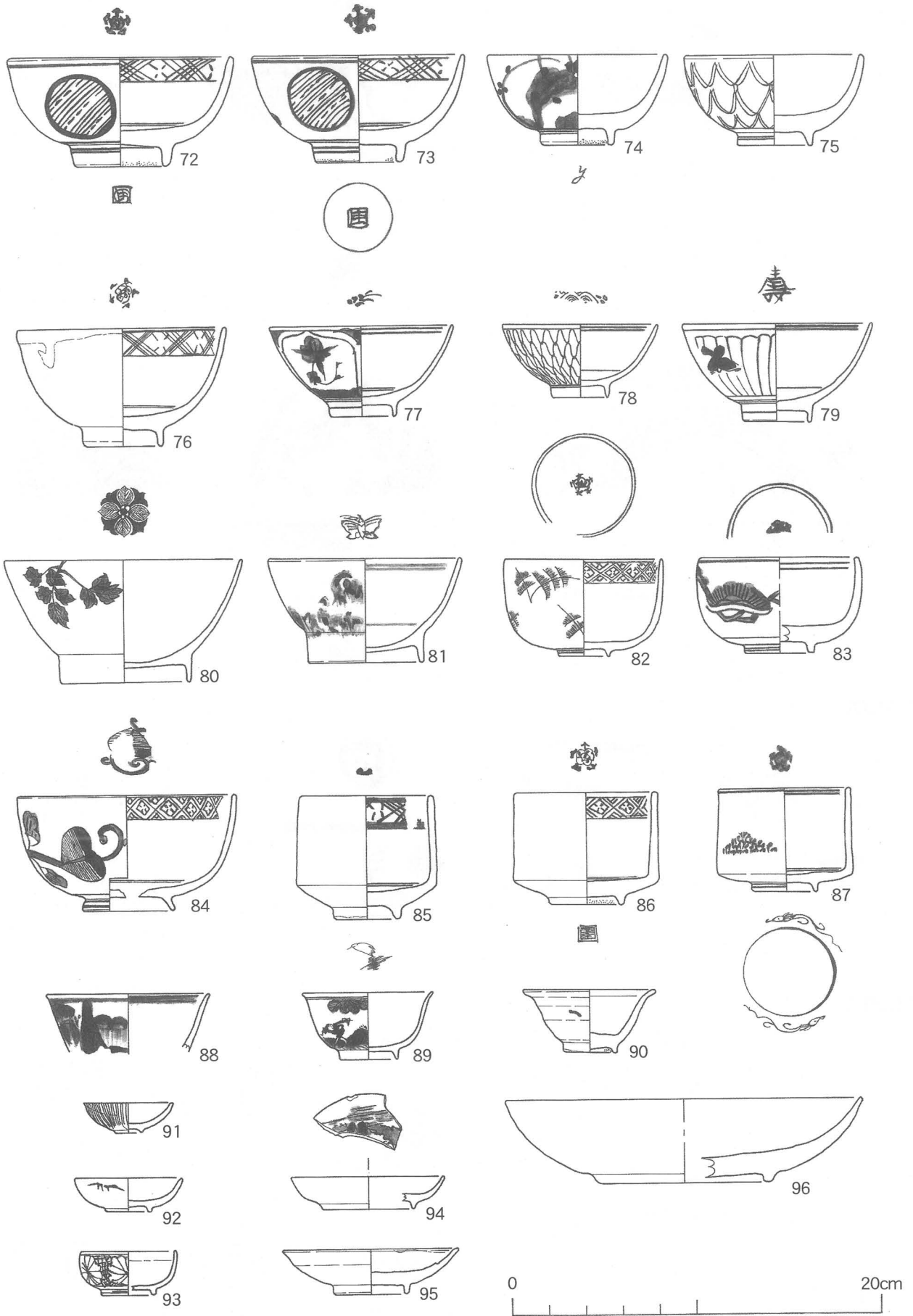
磁器は、134から151、153から163は肥前製品で、笹文の白磁染付紅猪口 (134)・丸文の白磁染付碗 (135)・雪輪草花文の白磁染付碗 (136)・桜文の白磁染付碗 (137)・白磁染付碗 (138)・七宝文の白磁染付碗 (139)・竹文の白磁染付碗 (140)・横縞文の白磁染付碗 (141)・松文の白磁染付碗 (142)・花文の白磁染付碗 (143)・扇面文の白磁染付広東碗 (144)・蛸唐草文の白磁染付碗 (145)・青磁染付筒形碗 (146)・暦文の白磁染付筒形碗 (147)・白磁染付筒形碗 (148)・瓔珞文の白磁染付筒形鉢 (149)・草花文の白磁染付蓋物蓋 (150)・寿字文の白磁染付碗蓋 (151)・草花文の白磁染付皿 (153)・



第15図 SD1001出土遺物 (1) (1/3・1/6)

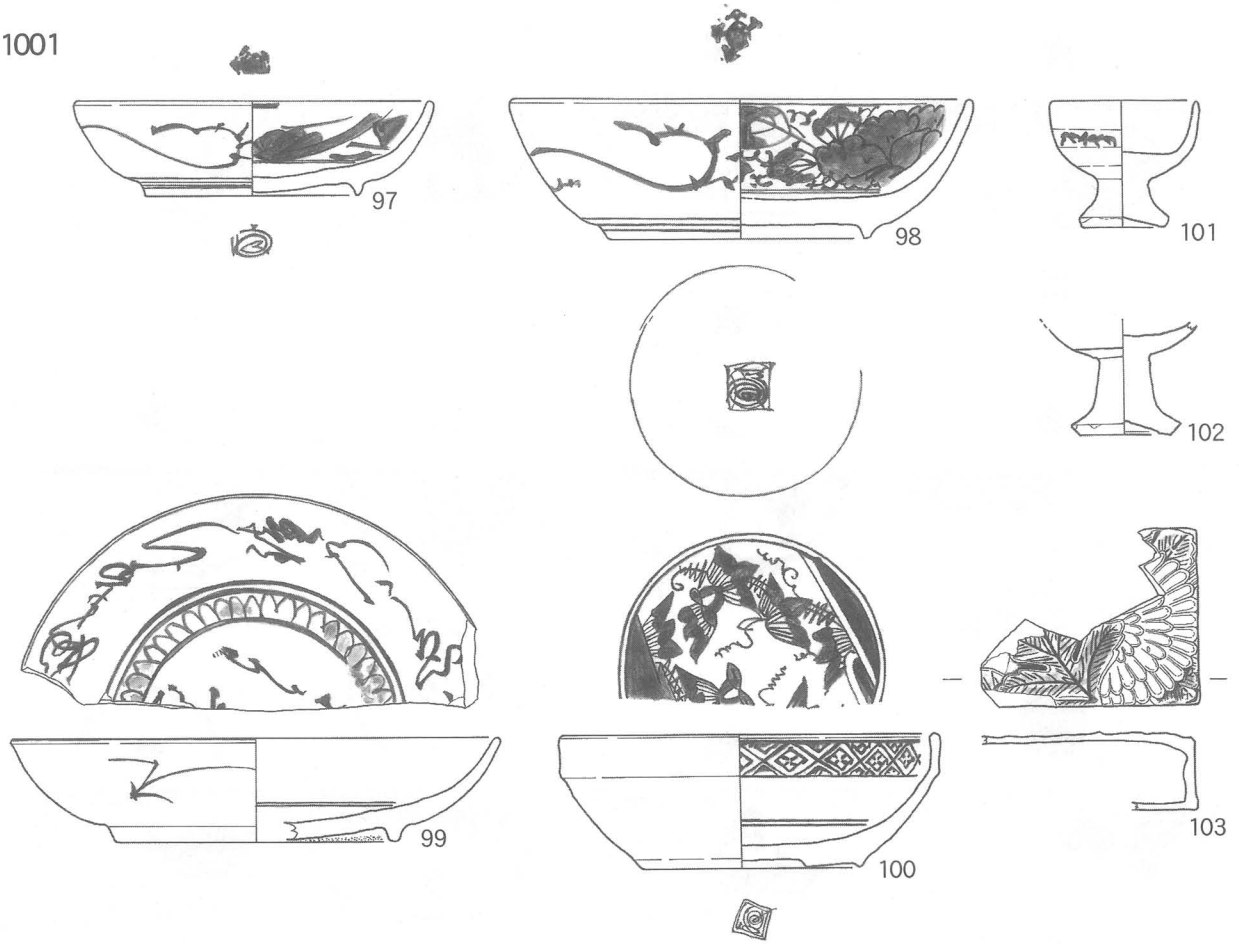


第16図 SD1001出土遺物 (2) (1/3)

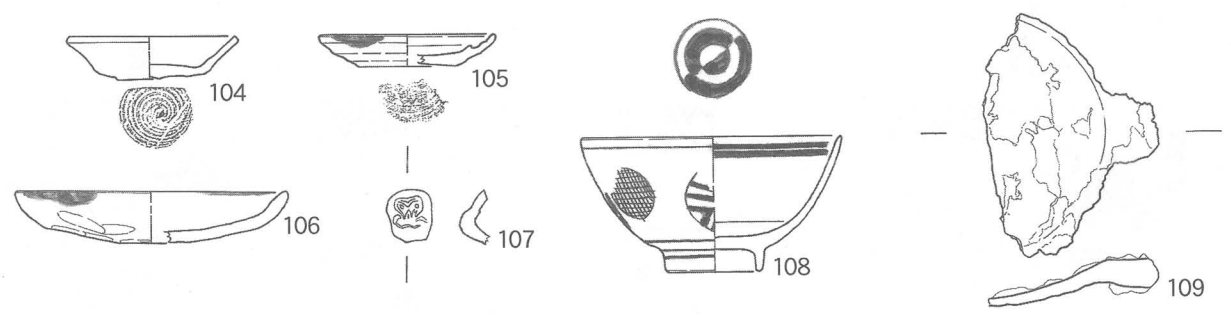


第17図 SD1001出土遺物 (3) (1/3)

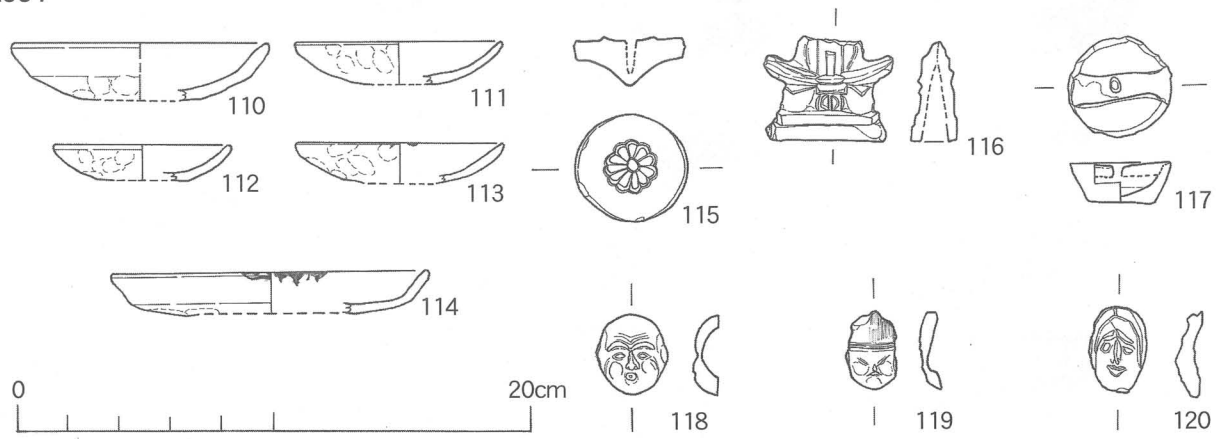
SD1001



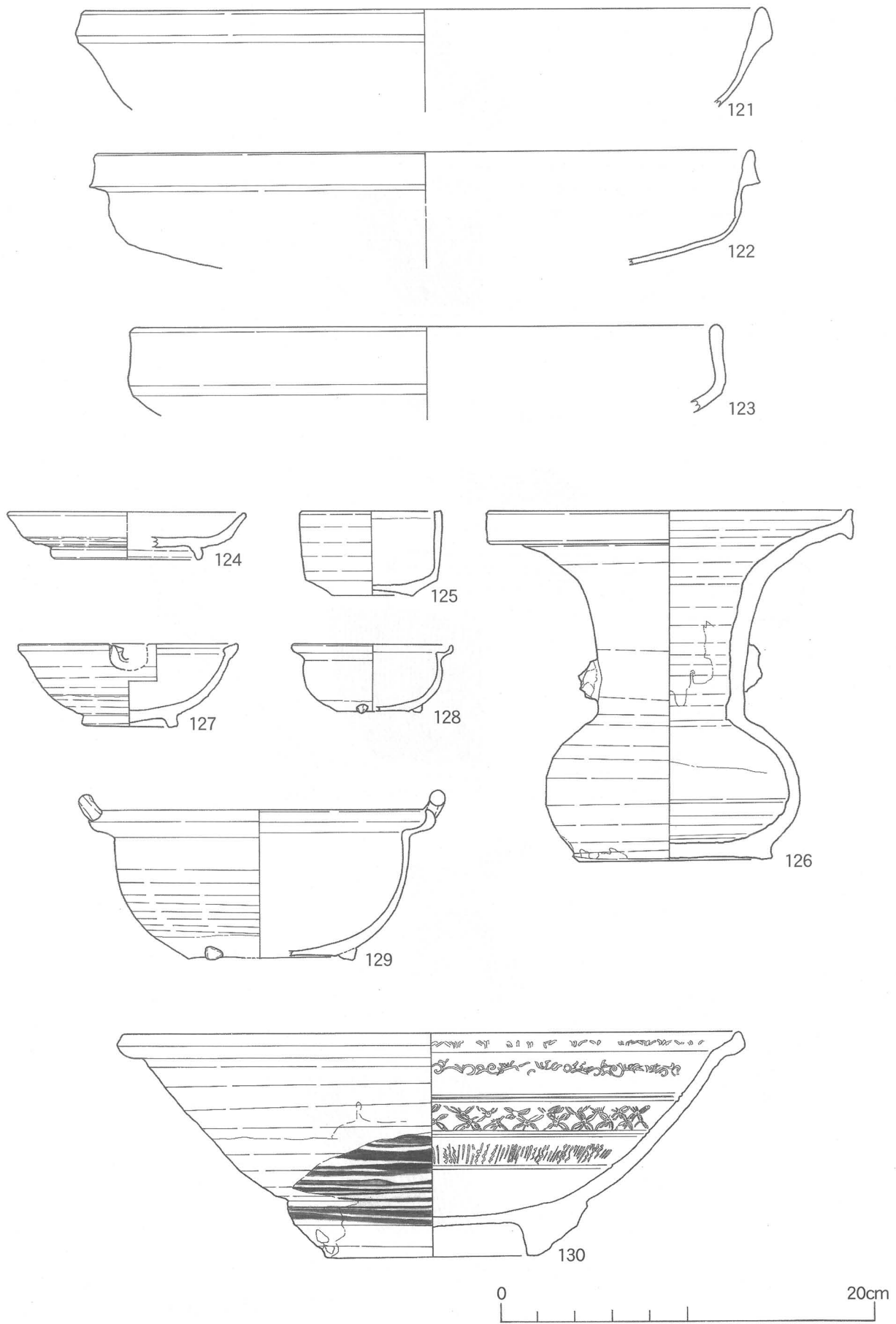
SD1002



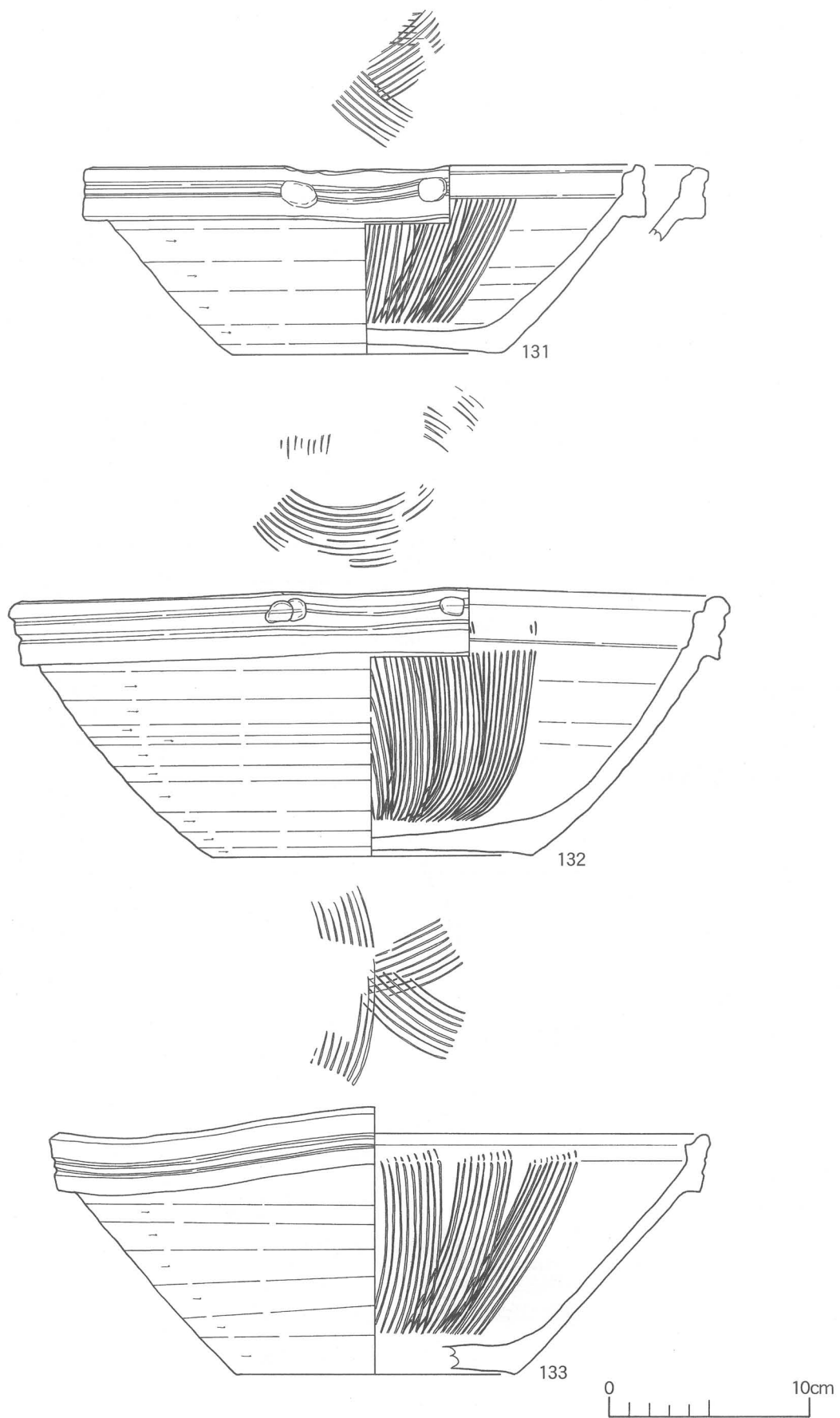
SD2001



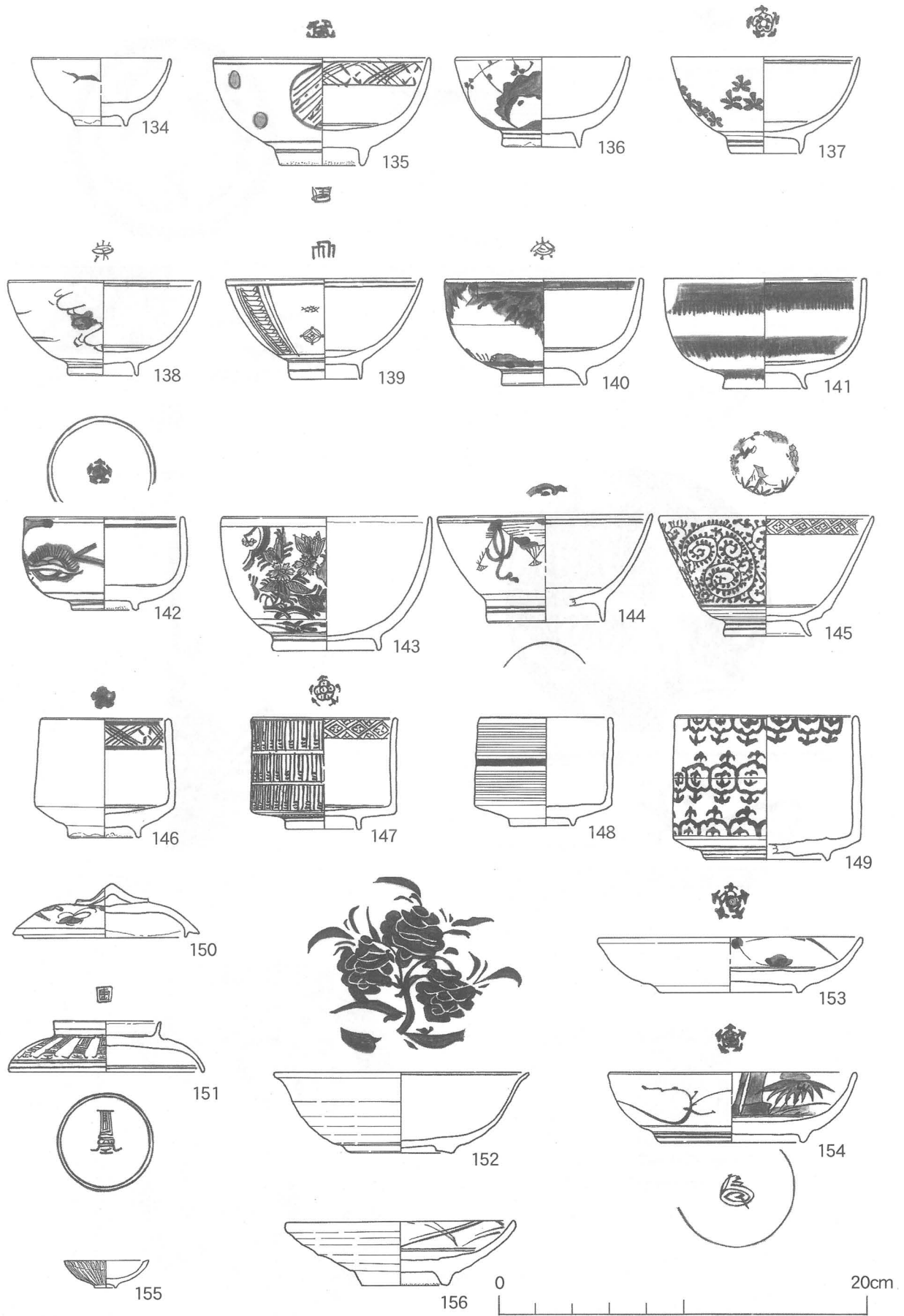
第18圖 SD1001出土遺物（4）、SD1002出土遺物、SD2001出土遺物（1）（1/3）



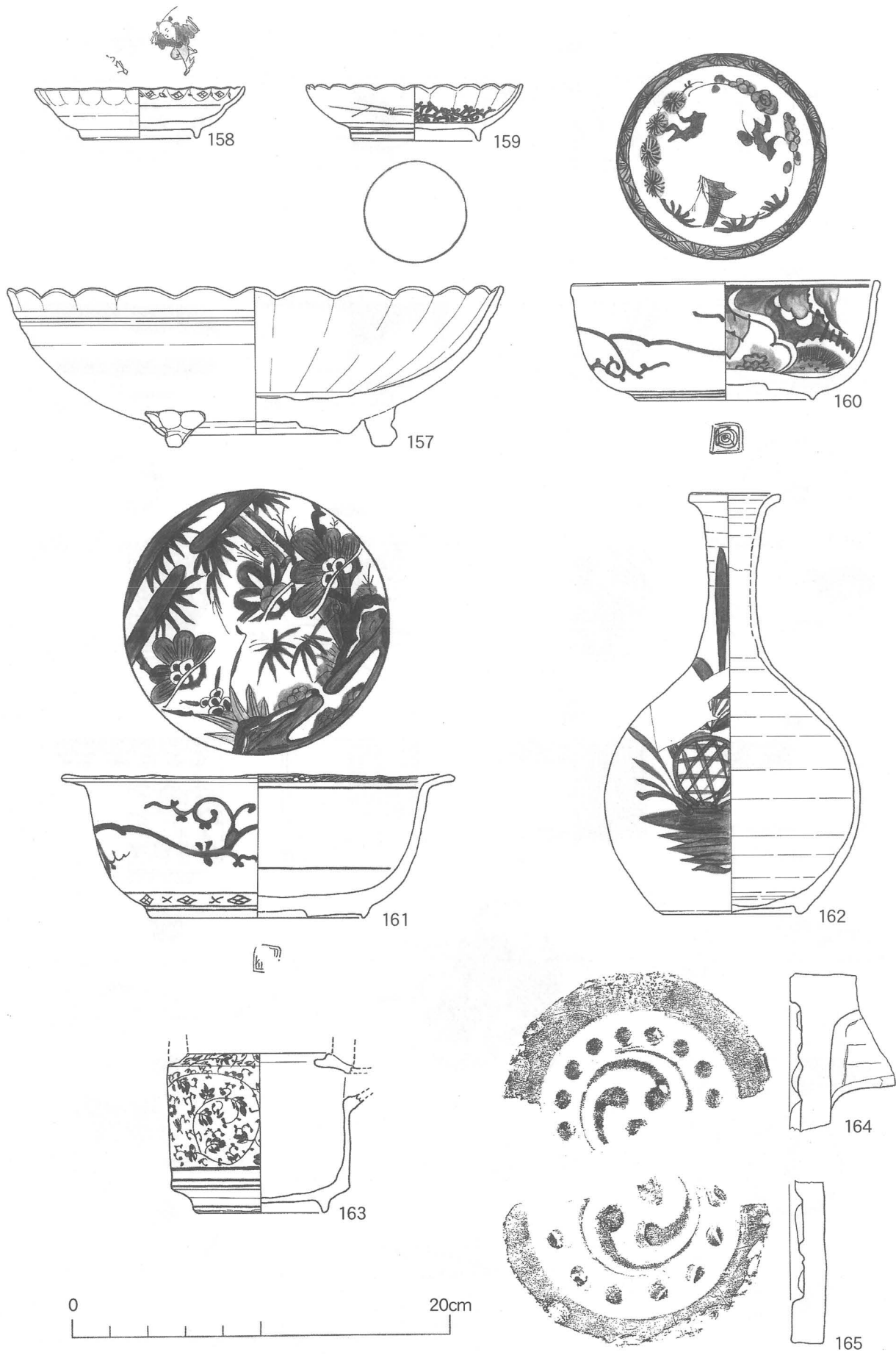
第19図 SD2001出土遺物 (2) (1/3)



第20図 SD2001出土遺物 (3) (1/3)

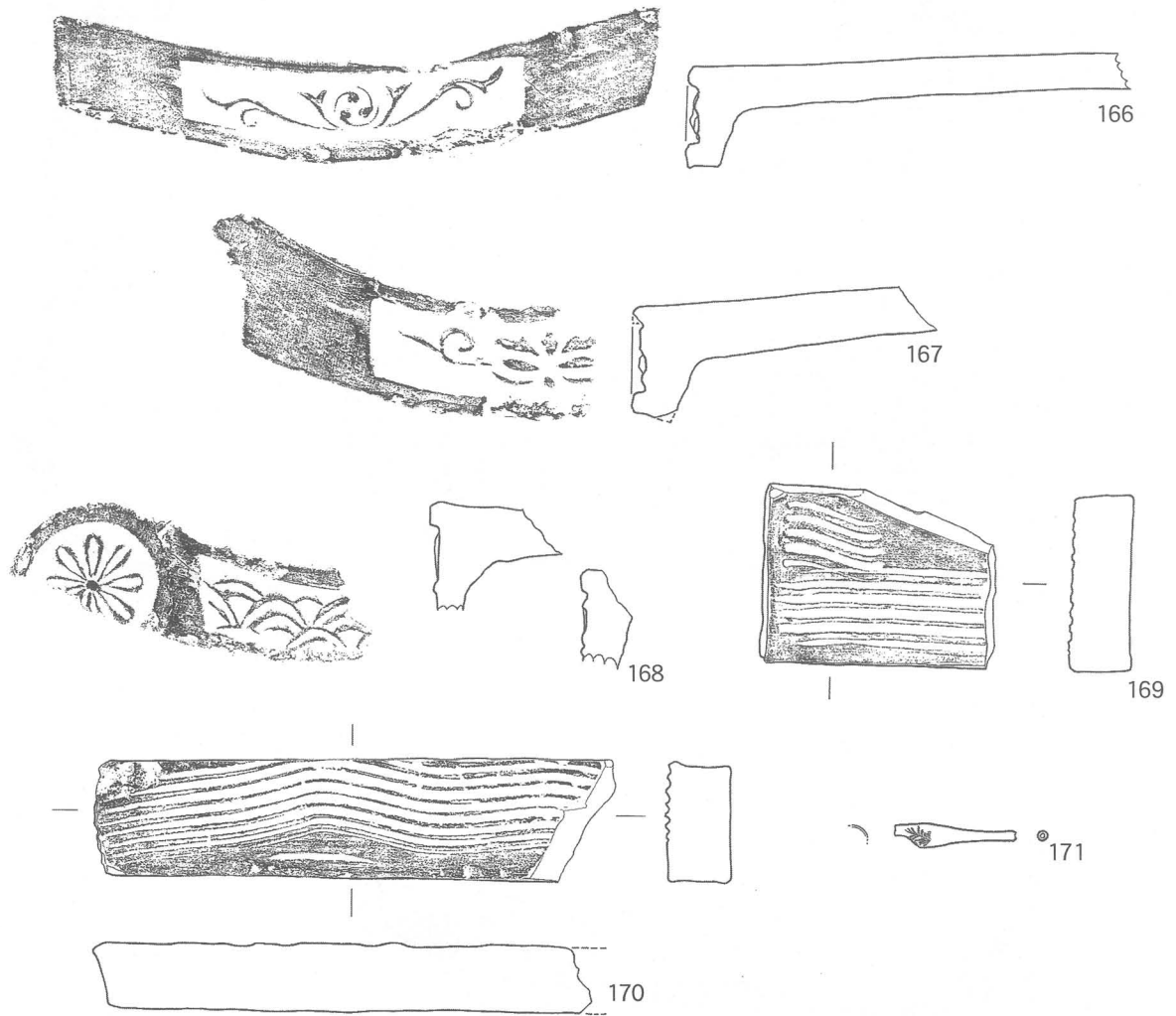


第21図 SD2001出土遺物(4)(1/3)

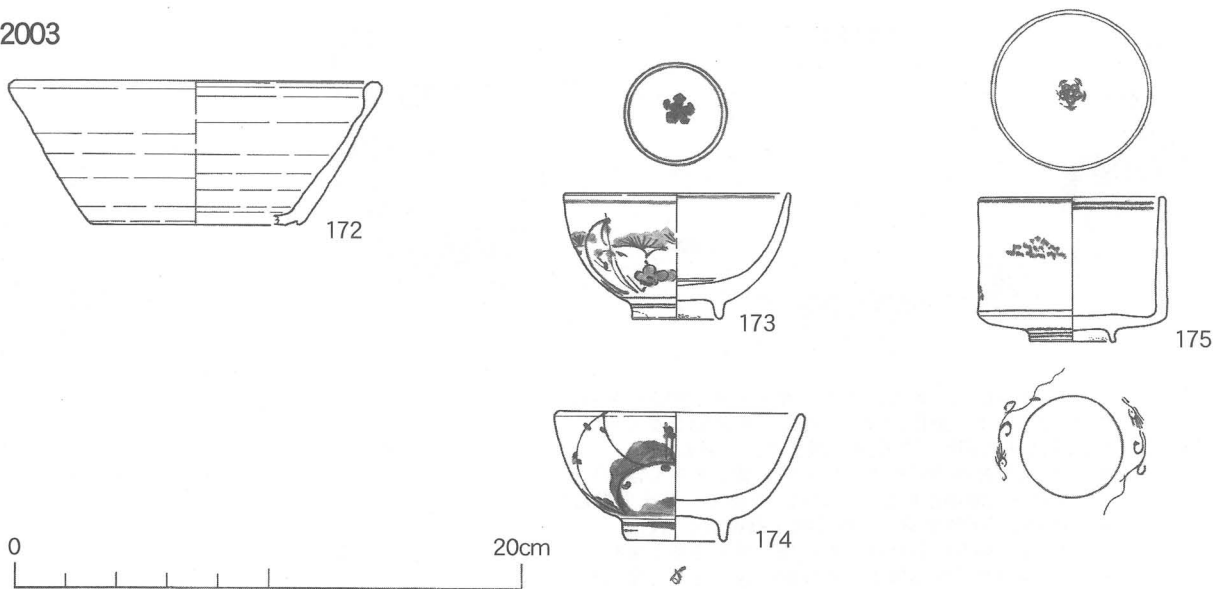


第22図 SD2001出土遺物(5)(1/3)

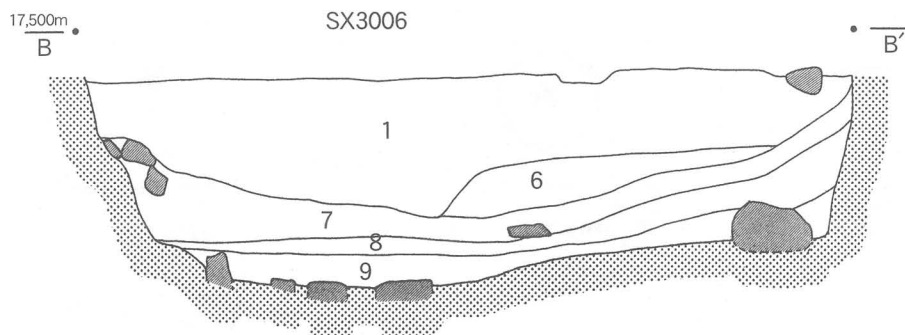
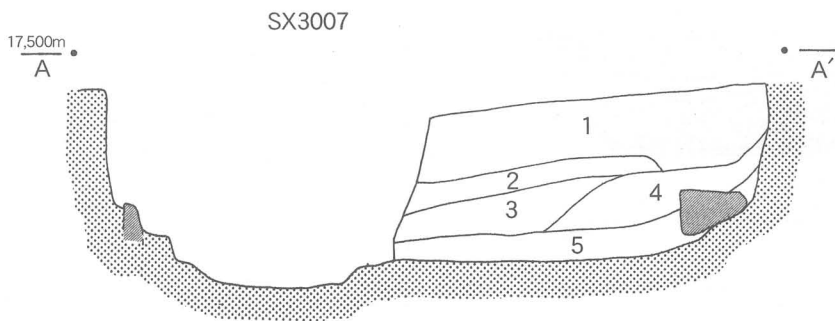
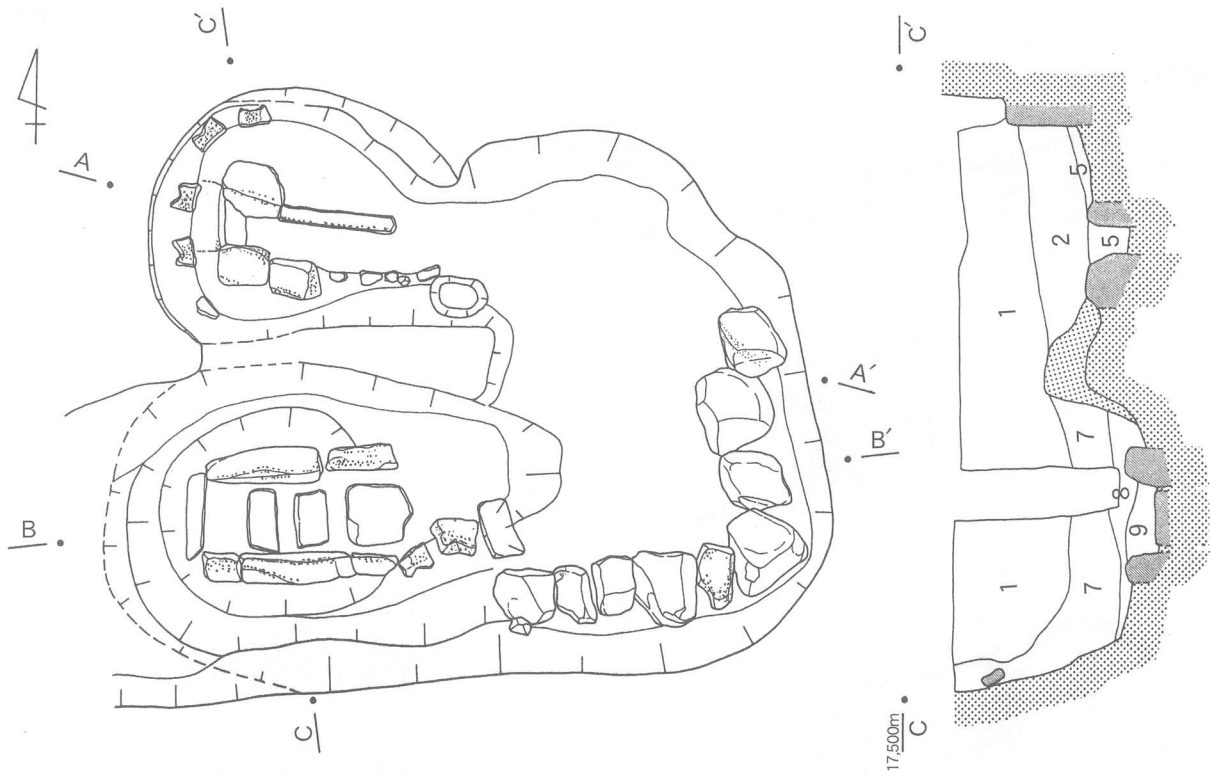
SD2001



SD2003



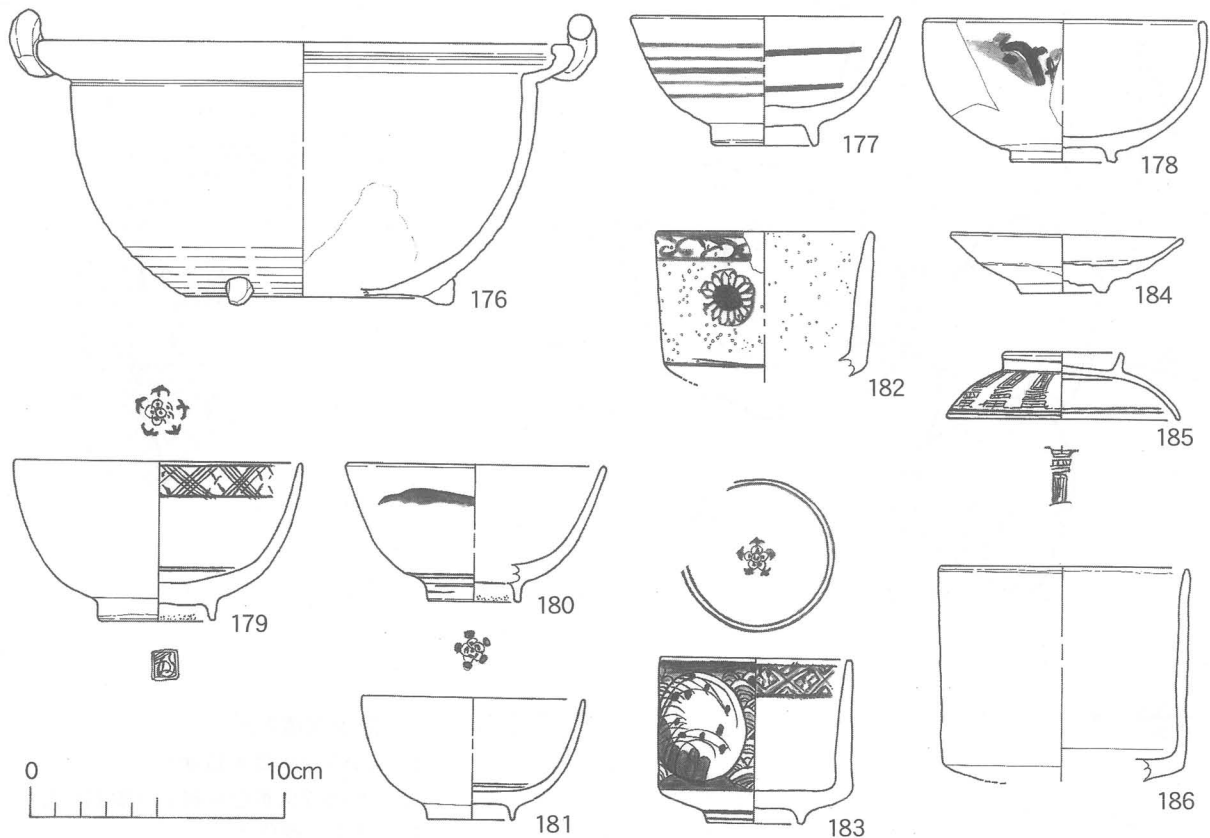
第23図 SD2001出土遺物（6）、SD2003出土遺物（1/3）



1. 2.5Y6/4にぶい黄色粘質土 (焼土・炭化物少し含む)
2. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土 (焼土・炭化物を多く含む)
3. N4/0灰色細砂 (炭化物・焼土を少し含む)
4. 2.5Y4/1黄灰色粘質土 (炭化物・焼土を多く含む)
5. 10YR3/1黒褐色粘質土 (炭化物を多く、瓦を少量含む)
6. 10YR4/1灰色粘質土 (炭化物・礫を多く含む)
7. 2.5Y7/6明黄褐色粘土 (炭化物・焼土を多く含む)
8. 2.5Y4/1黄灰色粘質土 (炭化物・焼土を多く含む)
9. 灰層



第24図 SX3006・SX3007平面・断面図 (1/40)



第25図 SX3006出土遺物（1/3）

唐草文の白磁染付皿（154）・二重斜格子文の白磁染付皿（156）・型打ち成形で口縁輪花の白磁染付皿（158・159）・型押し成形の白磁紅皿（155）・口縁輪花で三足の脚をもつ青磁大皿（157）・口縁折れ縁で輪花の白磁染付鉢（160）・見込みに環状松竹梅文をもつ白磁染付鉢（161）・蛇籠文の白磁染付瓶（162）・花唐草文の白磁染付水注（163）である。肥前磁器のほかにも、中国製景德鎮窯の青花皿（152）が出土している。

陶磁器のほかには、軒丸瓦（164・165）、軒平瓦（166・167）、軒棧瓦（168）、道具瓦（169・170）、銅製の煙管の吸口（171）などが出土している。

SD2003（第14・23図、図版2・25）

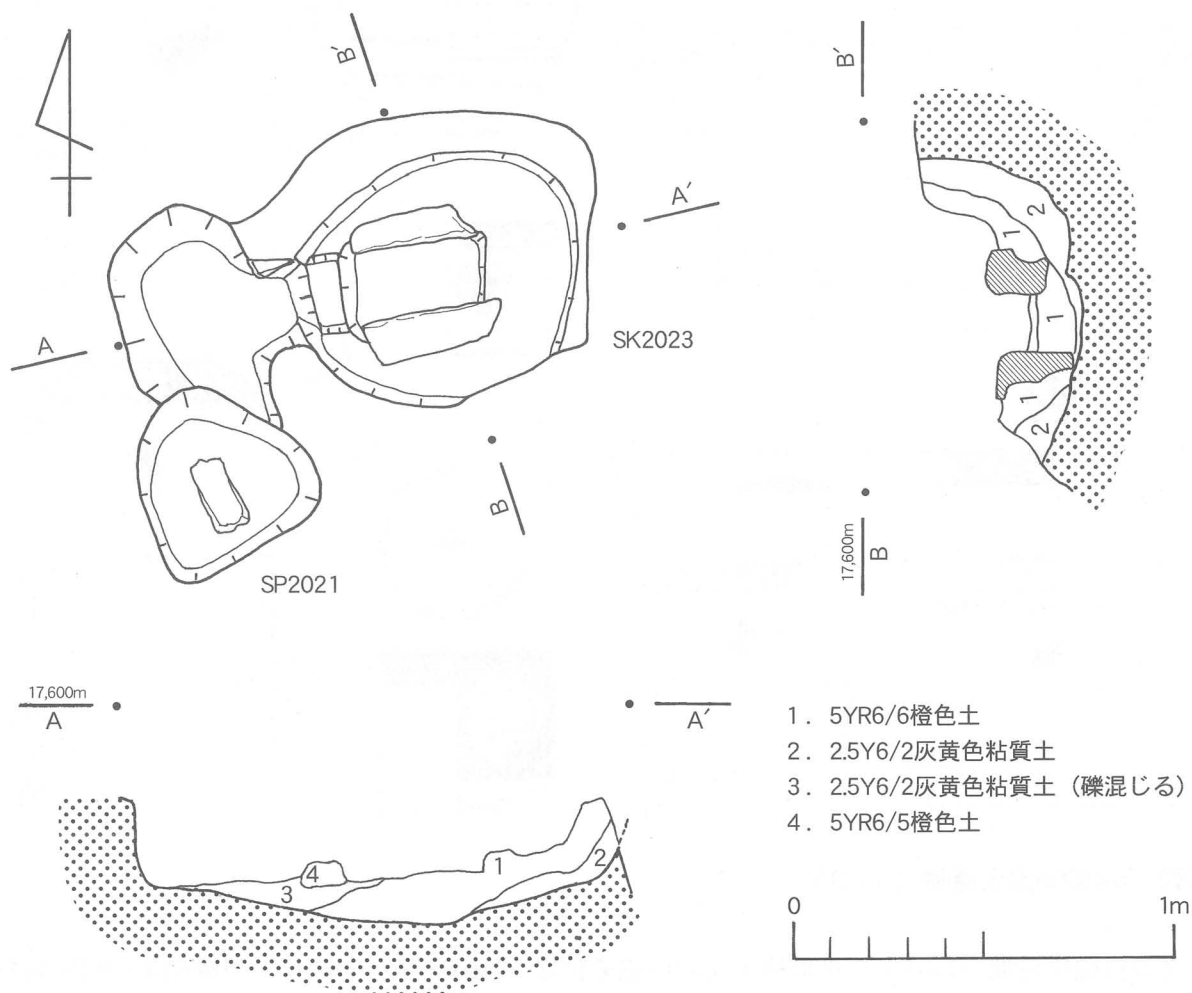
調査区の西端で検出された東西方向に走る溝である。攪乱で壊されていたため、南壁の立ち上がりが明瞭ではなかった。溝の西側底面には板状の石が敷き並べられており、東側で幅が狭くなっていた。

出土遺物は、第23図172から175である。丹波焼鉢（172）、肥前白磁染付碗（173・174）、肥前白磁染付筒形碗（175）などが出土している。

竈跡

SX3006・3007（第24・25図、図版3・25）

調査区の南側で検出された酒造用竈である。2基の燃焼室を設ける半地下式の竈であった。南側の竈（SX3007）の燃焼室は、調査区外に一部延びていたため全体を調査することができなかった。焚き口を東に向けており、北側の竈が南側の竈に比べやや小さかった。燃焼室の規模は、SX3006が直径



第26図 SK2023・SP2021平面・断面図 (1/20)

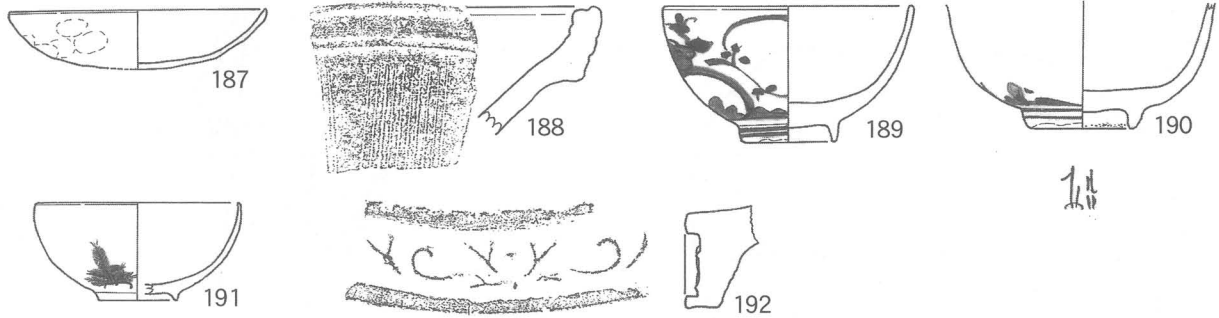
1.1m、深さが0.8mで、SX3007が直径1.1m、深さが1mであった。平面形態は、何れも楕円形をしていた。燃烧室の壁は黄褐色粘土で構築され、SX3006には壁を補強するため長方形の凝灰岩切石が間隔を空けて並べられていた。底面にはそれぞれ凹形に組んだ長方形の石囲いの灰掻き出し部があり、SX3007の方には厚さ20cmの灰が堆積していた。焚き口部南東角には30~40cm大の石が9個据え置かれていた。

SX3006の出土遺物は、第25図176から186である。柿釉土鍋 (176)、唐津焼刷毛目碗 (177)、伊賀・信楽焼鉄絵半球碗 (178)。179から186は肥前製品で、青磁染付碗 (179)・白磁染付碗 (180)・青磁染付小碗 (181)・白磁染付筒形碗 (182・183)・白磁皿 (184)・白磁染付碗蓋 (185)・青磁蓋付鉢 (186)などが出土している。

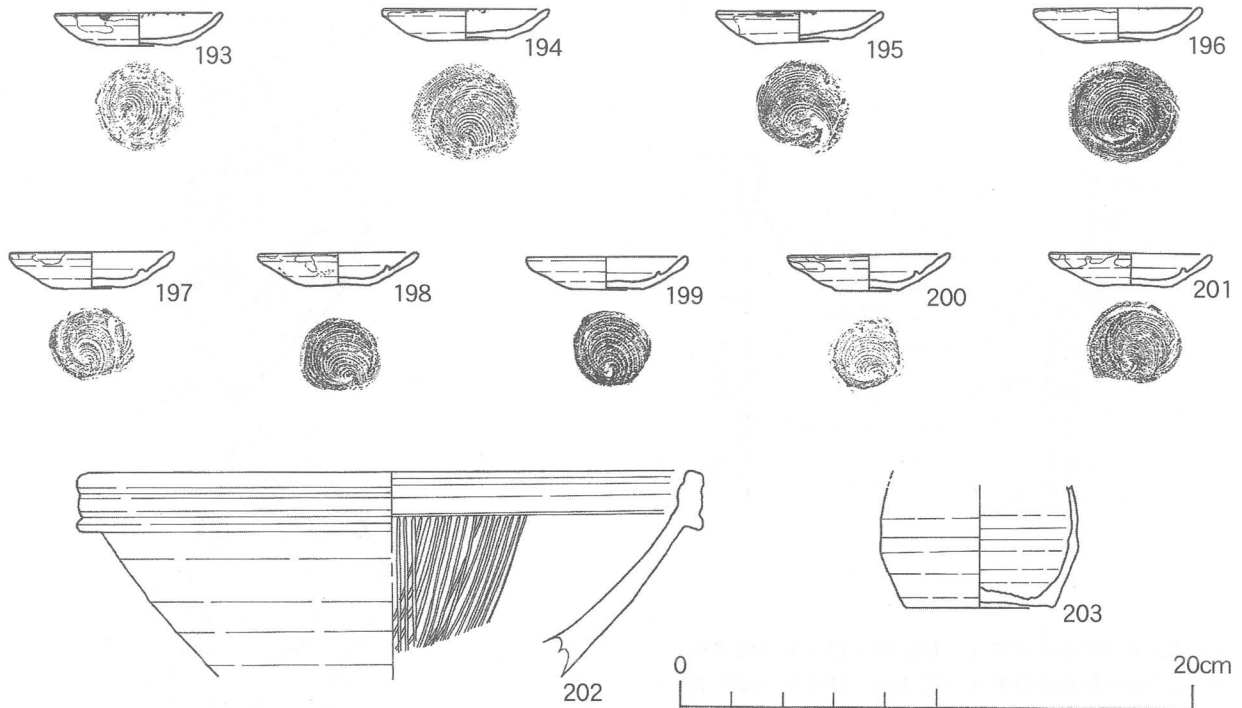
SK2023 (第26・27図・図版4・26)

調査区の北側中央で検出された竈である。遺構の上部は攪乱で削平されており、残存状態が良くなかった。また、焚き口部の南側をSP2021に壊されていた。燃烧室内側はほぼ円形を呈し、直径1.45m、深さが0.38mであった。東に主軸を向け、灰黄色粘土で構築されていた。平坦な底面中央部には、幅16cm、深さ10cmの溝状に一段深く掘り下げられた灰の掻き出し部が設けられていた。壁面には板状の凝灰岩切石が使用され、底面は還元し固く焼けていた。焚き口部は不整形を呈し、深さが0.50mで

SK2023



SP2021



第27図 SK2023・SP2021出土遺物（1/3）

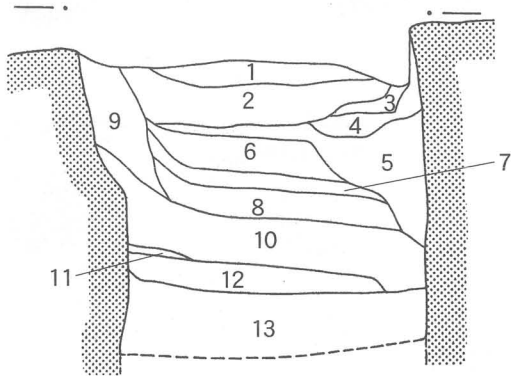
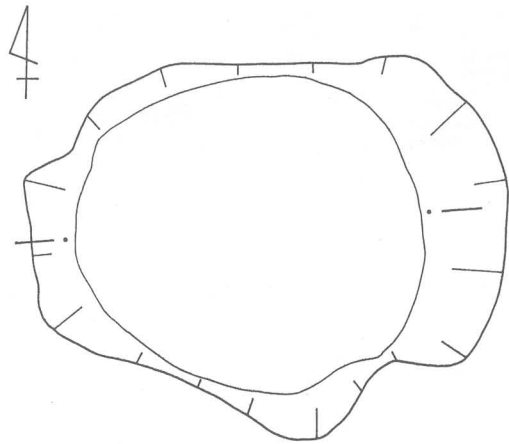
あった。

出土遺物は、第27図187から192である。手捏ね成形で口径10cm前後の大型の土師皿（187）、堺・明石焼系播鉢（188）、肥前白磁染付碗（189・190）・白磁染付小碗（191）、軒平瓦（192）などが出土している。

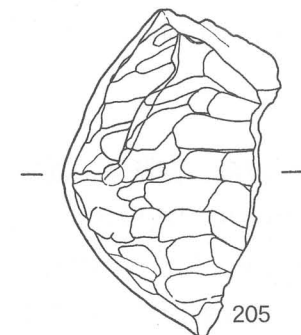
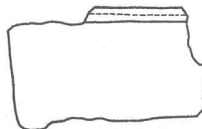
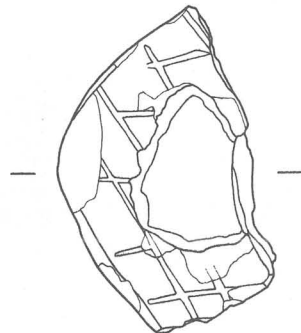
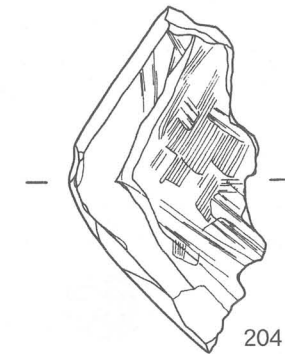
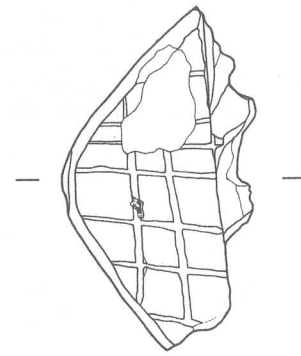
SP2021（第26・27図、図版4・26）

調査区の北側中央で検出されたピットである。SK2023の焼き口部を壊していた。規模は、南北0.45m、東西0.46m、深さが0.52mであった。平面形態は楕円形をしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。平坦な底面に、長さ20cm、幅8cmの板状の石が設置されていた。礎石の一部である可能性が高い。

出土遺物は第27図193から203である。ロクロ成形の柿釉皿（193～196）・柿釉受皿（197～201）、堺・明石焼系播鉢（202）、丹波焼徳利（203）などが出土している。



1. 2.5Y4/1灰黄色砂質土 (炭化物・焼土を少量含む)
2. 2.5Y5/4黄褐色粘質土 (炭化物・焼土を大量に含む)
3. 5Y4/1灰色砂質土 (炭化物・焼土を少量含む)
4. 2.5Y6/6明黄褐色シルト質粘土 (炭化物を多く含む)
5. 2.5Y4/1灰黄色粘質土 (焼土を大量、炭化物を多く含む)
6. 2.5Y6/6明黄褐色シルト質粘土 (炭化物を少量含む)
7. N3/0暗灰色粘質土 (炭化物を多く含む)
8. 10YR3/2黒褐色粘質土 (焼土・炭化物を多く含む)
9. 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 (焼土・炭化物を多く含む)
10. 5YR6/6橙色粘質土 (焼土主体に炭化物を多く含む)
11. 5Y6/4オリーブ黄色細砂
12. 10BG6/1青灰色砂質粘土
13. 5YR6/6橙色粘質土 (焼土を主体に炭化物を多く含む)



第28図 SE3001平面・断面図 (1/40)、SE3001出土遺物 (1) (1/4)

井戸跡

SE3001 (第28・29図、図版1・26・27)

調査区の南側中央で検出された素掘りの井戸跡である。北側の一部は試掘トレンチによって壊されていた。直径約2.3mのほぼ円形を呈し、壁は垂直に立ち上がっていた。確認面から1.6mの深さまで調査を行ったが、底面を確認することができなかった。覆土から少量の鋳型片が出土した。

出土遺物は第28図から第29図の204から214である。

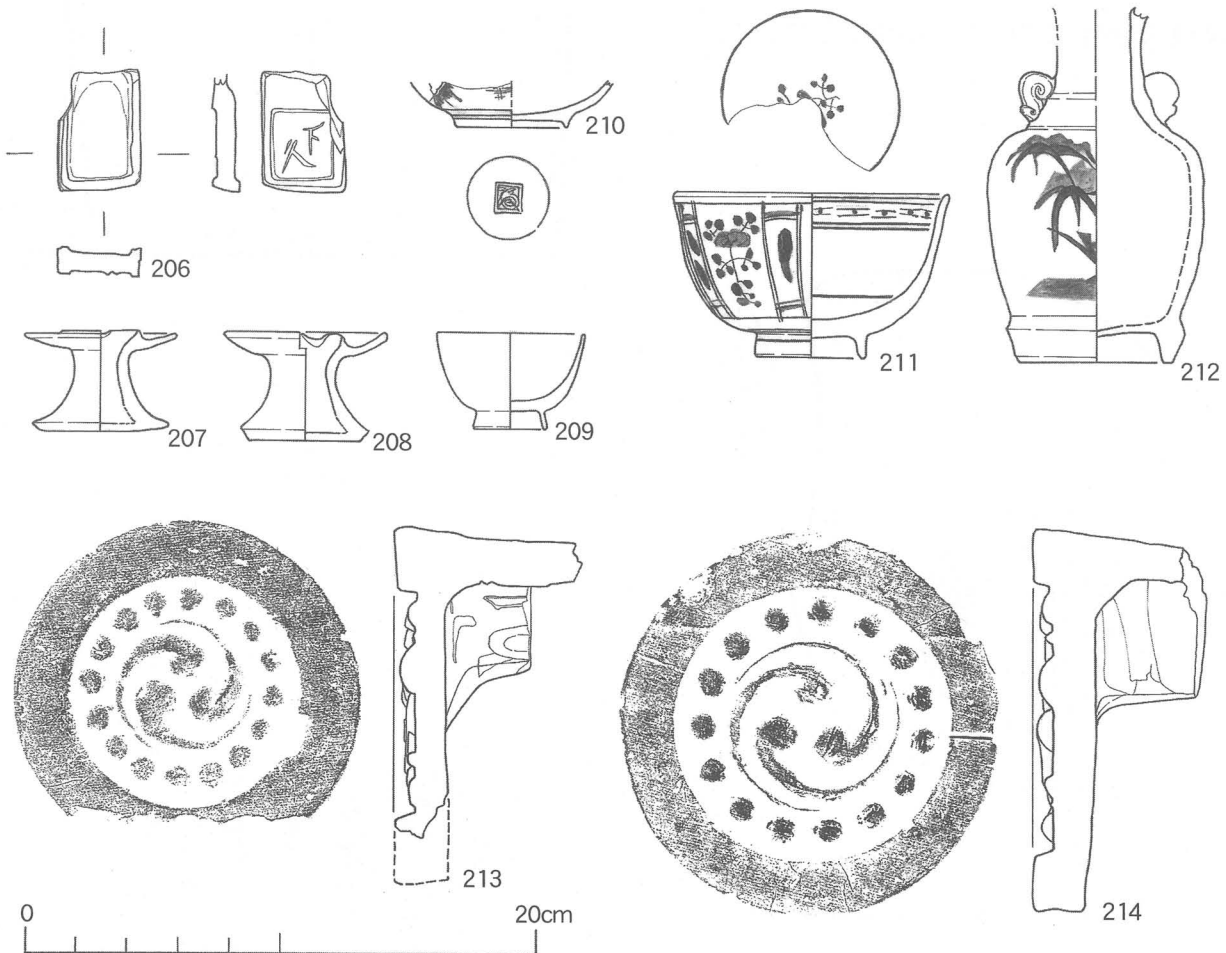
SX1001同様、この遺構からも、鋳造に関連する遺物である犁先真土型上型(204・205)が出土している。

鋳型以外の出土遺物は、柿釉の施された、裏に「下久」と銘をもつミニチュア製品の硯(206)、伊賀・信楽焼灰釉灯明受台(207・208)。209から212は肥前磁器で、白磁小杯(209)・白磁染付碗(210・211)・白磁染付瓶(212)などである。陶磁器以外では、軒丸瓦(213・214)などが出土している。

水琴窟跡

SK2011 (第30図、図版4・27)

調査区の南側で検出された水琴窟である。礎石列の南西角に位置しており、西側は攪乱で壊されていた。掘り方は、南北0.68m、深さが0.26mで、平面形態が不整形をしていた。ほぼ平坦な底面に丹波焼の桶が倒立した状態で設置されていた。



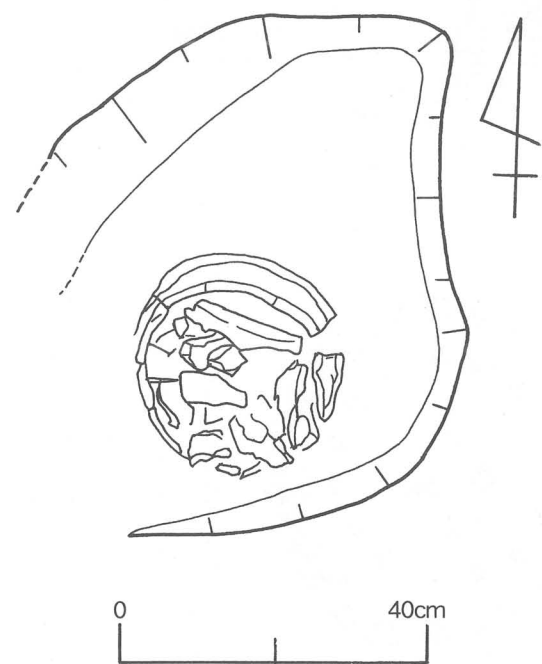
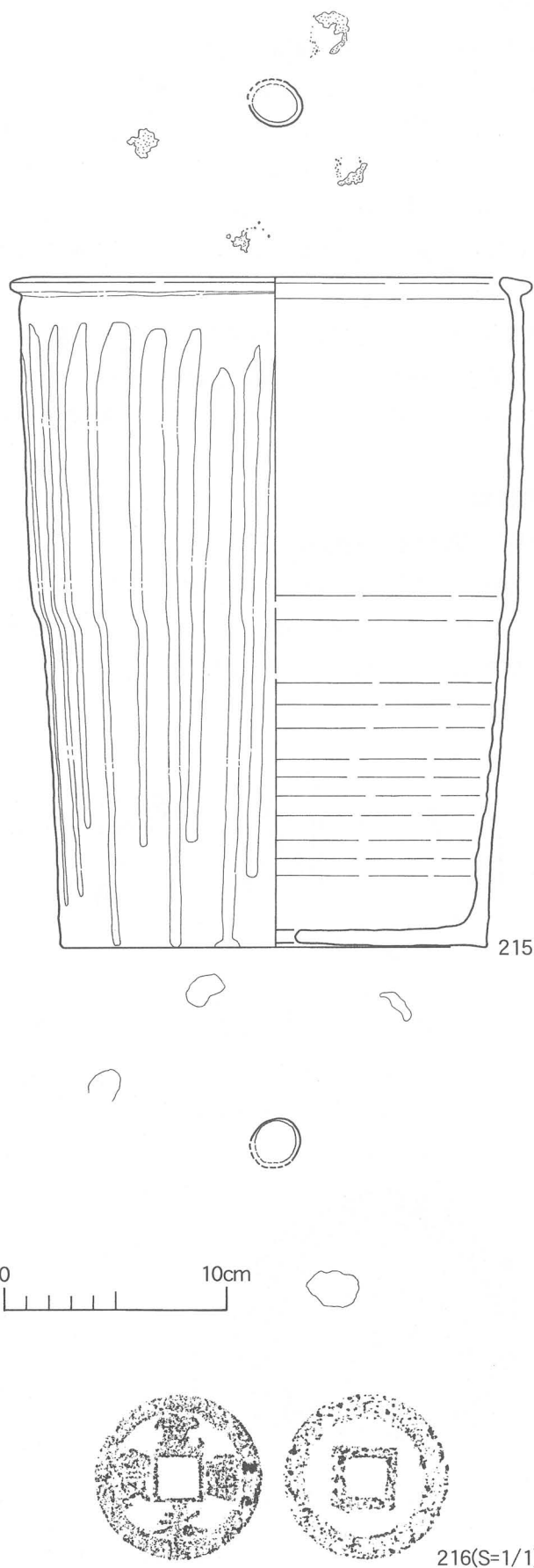
第29図 SE3001出土遺物(2)(1/3)

出土遺物は第30図215・216である。丹波焼桶(215)の底部中心が穿孔され、倒立された状態で出土したため、水琴窟として使用されていたと考えられる。水琴窟の内部構造は出土しなかった。桶のほかには、寛永通寶(216)などが出土している。

埋桶

SK3007 (第31・32図、図版4・28)

調査区南側で検出された埋桶である。桶の最大径は0.64mで、深さが0.69mであった。底部は平坦で、木質部が良好に残存していた。覆土上層には、多量の炭化物粒子が含まれていた。掘り方の直径は0.87mで、ほぼ同心円状に掘られていた。掘り方の埋土は灰オリーブ色砂質土で、直径3~10mmの礫が多量に含まれていた。出土遺物は第32図217から219である。丹波焼播鉢(217・218)、伊賀・信楽焼灰釉碗(219)などが出土している。

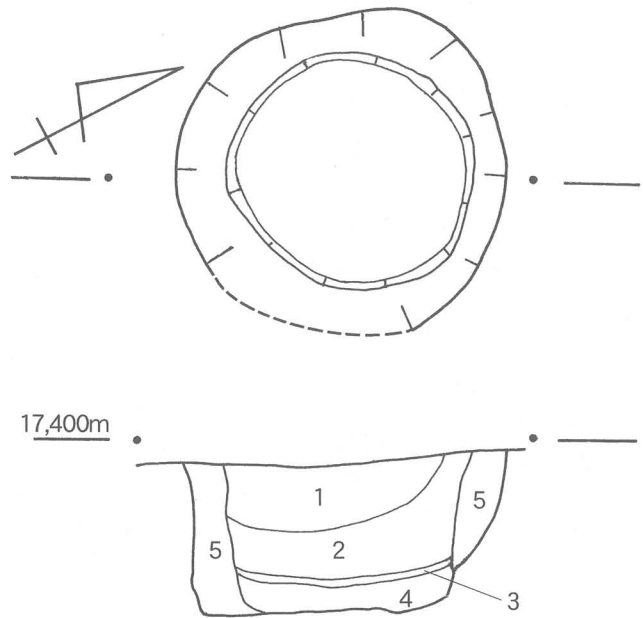


第30図 SK2011平面図(1/10)、出土遺物(1/3・1/1)

礎石列

礎石列 (第33図)

調査区の東側で2列検出した。当地点は、震災で壊れた住宅の基礎が大きく入っていたため、遺構の残りが悪かった。東側で礎石を4個、西側で3個を検出したが、調査区外へ延びていたと考えられる。それぞれの礎石には石と同規模のピットが伴っており、その中に礎石が設置されていた。石の形状が大小さまざま揃っていなかったことから、ある程度高さを水平に保ち、固定させるために掘られたものと考えられる。礎石間の距離はまちまちであった。



石列

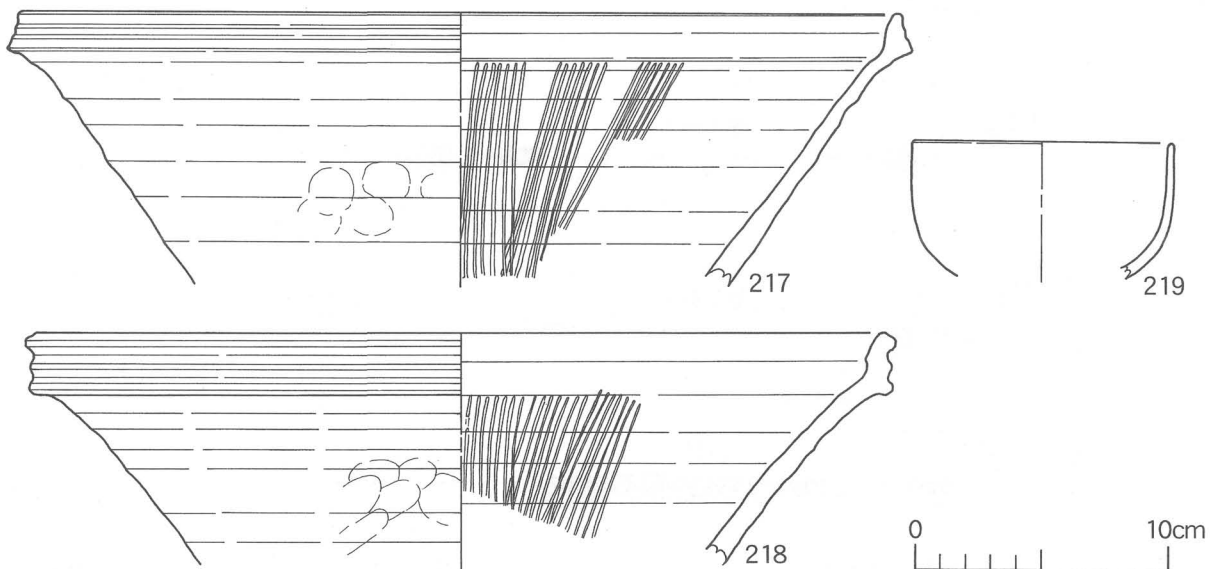
石列 (第33図)

調査区の南東で検出された。東西3.58m、南北0.44~0.72m、深さ0.25mの溝を伴い、溝中に大きな板状の石が11個ほとんど隙間無く東西方向に並べられていた。礎石列と石列は、建物に伴う礎石あるいは区画に関する遺構と考えられる。

1. 7.5YR3/2黒褐色砂質土 (炭化物を多量、焼土を少量含む)
2. 2.5Y7/6明黄褐色砂質土 (炭化物を少量含む)
3. 2.5Y2/1炭化層
4. 7.5Y5/1灰色砂質土
5. 5Y5/3灰オリーブ色砂質土 (礫を多量、炭化物を少量含む)

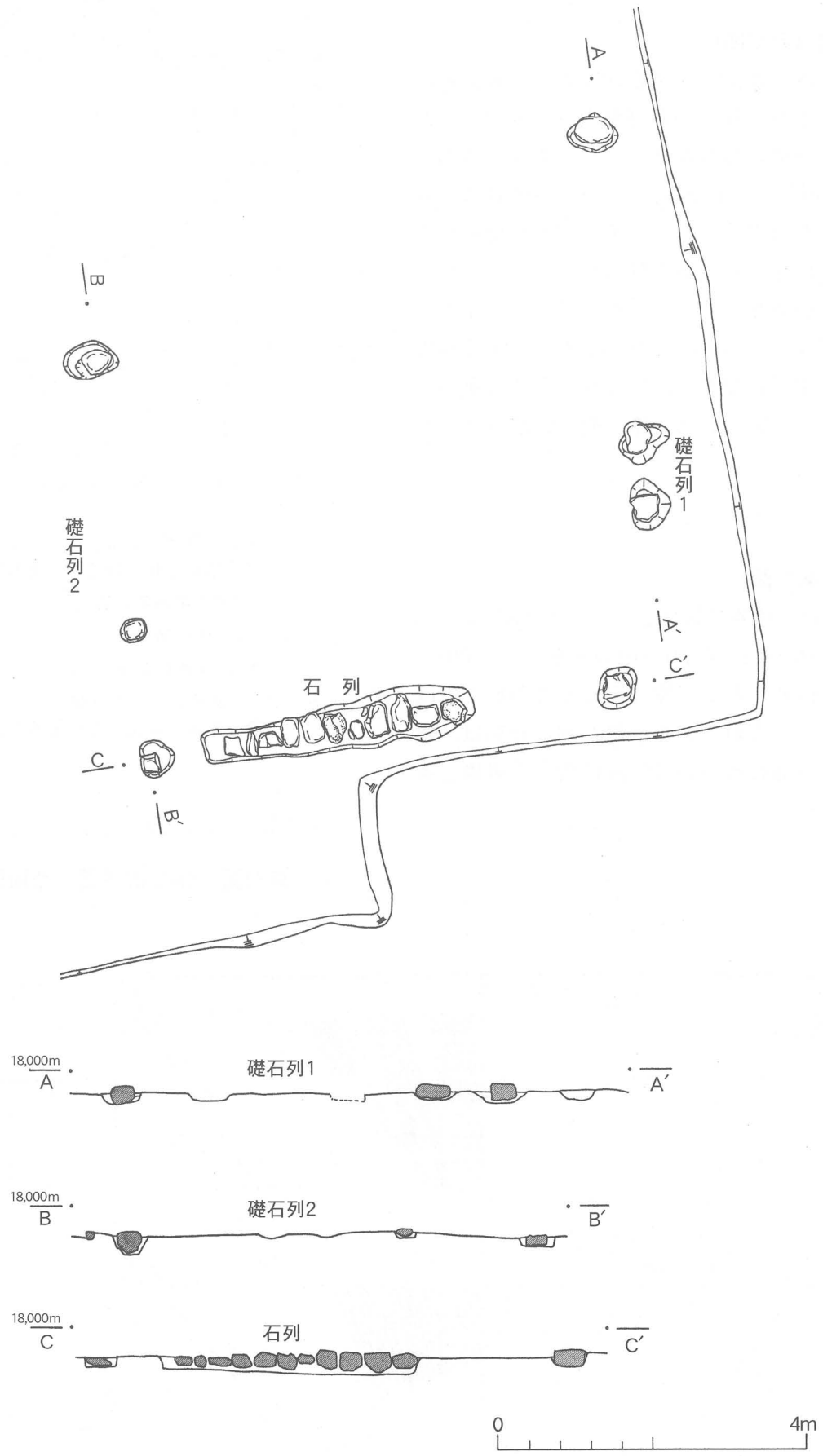


第31図 SK3007平面・断面図 (1/20)



第32図 SK3007出土遺物 (1/3)

4



第33图 礎石列1・礎石列2・石列平面・断面图 (1/80)

土坑

SK1005 (第6・34図、図版5・28)

調査区の南東で検出された土坑である。東側は攪乱によって壊されていたため、全体の規模は不明である。南北1.15m、深さが0.18mで、平面形態は不整形をしていた。

出土遺物は第34図220から225である。伊賀・信楽焼灰釉灯明受皿(220)・灰釉土瓶(222)、備前焼人形徳利(221)、肥前白磁染付碗蓋(223)・白磁染付小碗(224)、軒丸瓦(225)などが出土している。

SK2005 (第6・35図、図版5・28・29)

調査区の東側で検出された土坑である。規模は、東西1.6m、南北0.8m、深さが0.37mで、平面形態は長方形をしていた。壁は底面から緩やかに立ち上がっていた。

出土遺物は第35図226から237である。ロクロ成形の柿釉受皿(226)、手捏ね成形で口径10cmを越える大型の土師皿(227・228)、焙烙(229)、ミニチュア製品で動物の人形(231)、堺焼播鉢(230)。

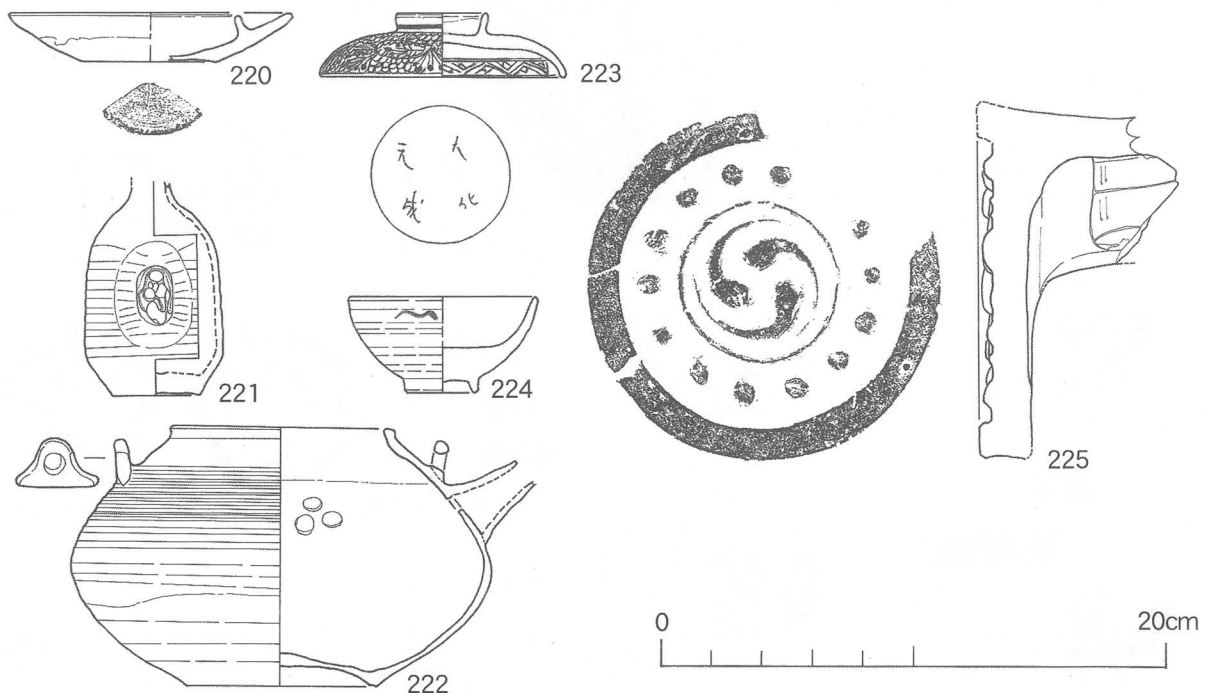
232~236は肥前磁器で、白磁染付小碗(232・233)・白磁染付碗(234・235)・白磁染付らっきょう形瓶(236)、緑青付着が著しく判読難(寛永通寶か)の銭(237)などが出土している。

SK2006 (第6・36図、図版5・29)

調査区の東側で検出された土坑である。規模は、東西1.57m、南北0.76m、深さが0.46mで、平面形態は長方形をしていた。壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。

出土遺物は第36図238から247である。ロクロ成形の柿釉受皿(238・239)、伊賀・信楽焼灰釉お歯黒把手付き盃(240)・灰釉端反碗(241・242)、産地不明陶器鉄絵碗(243)などである。

244から247は肥前磁器で、白磁染付広東碗(244)・白磁染付碗(245・246)・白磁染付筒形碗(247)などが出土している。



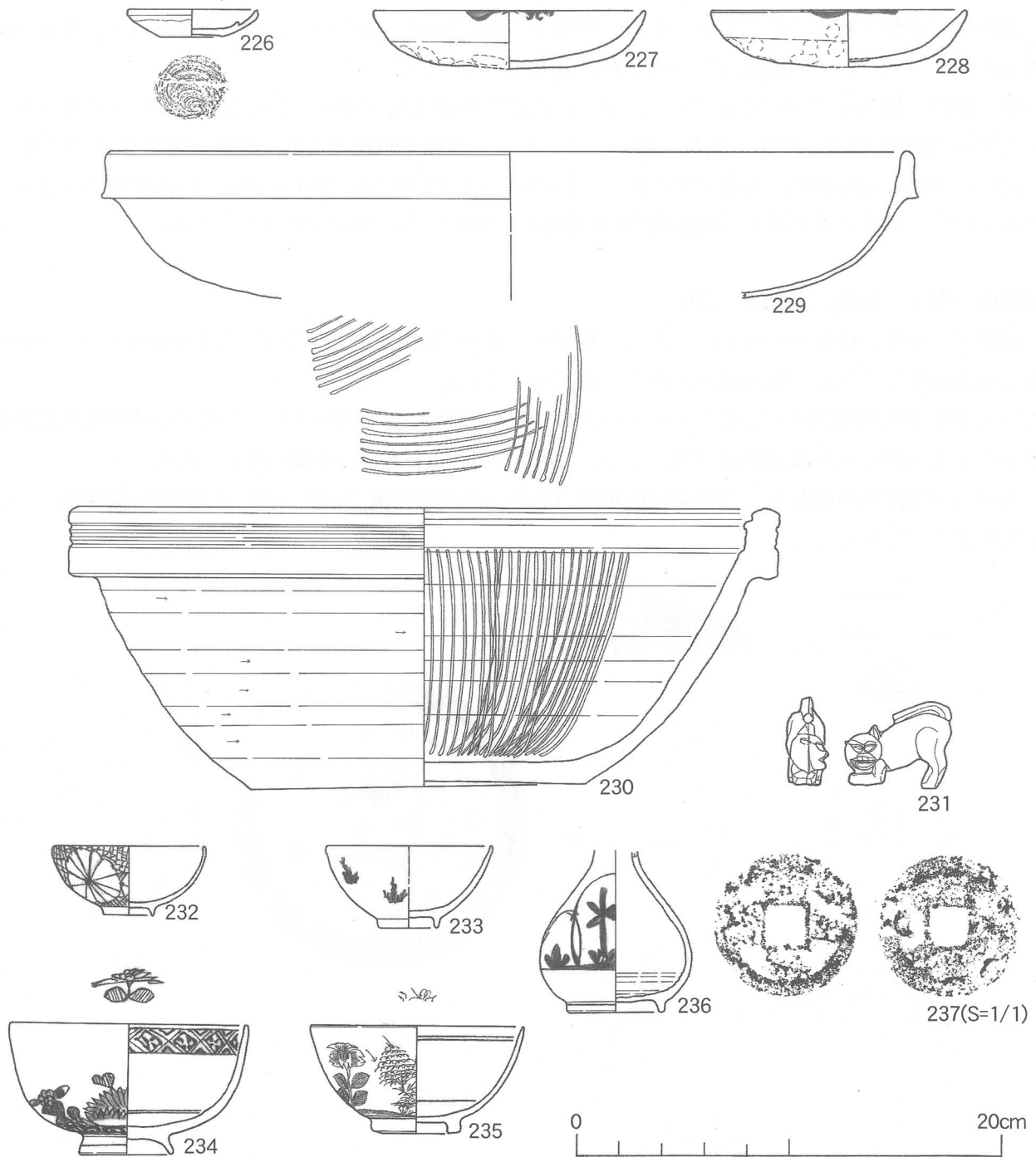
第34図 SK1005出土遺物(1/3)

SK2007 (第6・36図、図版30)

調査区の北側中央で検出された土坑である。規模は、南北0.85m、東西0.8m、深さが0.8mであった。平面形態は円形をしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。

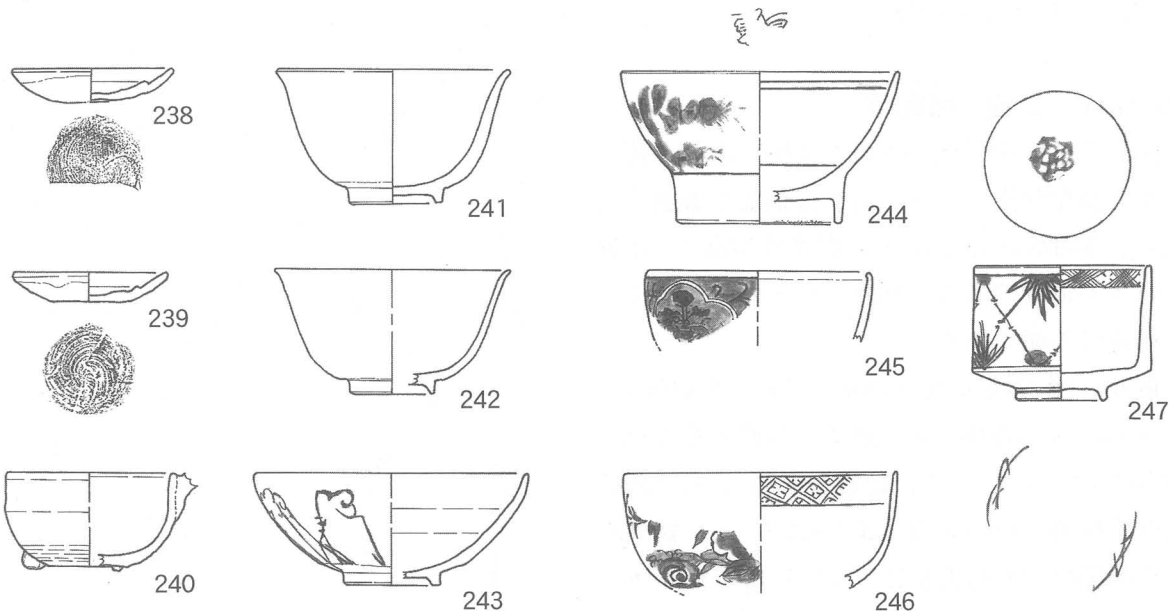
出土遺物は第36図248から259である。248から253は土師皿。ロクロ成形で無釉の土師皿(248・249)、柿釉灯明受皿(250)、柿釉皿(251~253)で、250以外には口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。素焼きの親子猿の人形(254)である。

255から258は伊賀・信楽焼製品で、灰釉蓋(255)・灰釉土瓶(256)・灰釉端反碗(257・258)。255の蓋は256の土瓶の蓋と口径が合わないため、別物と考える。ほかには、肥前白磁染付らっきょう形瓶

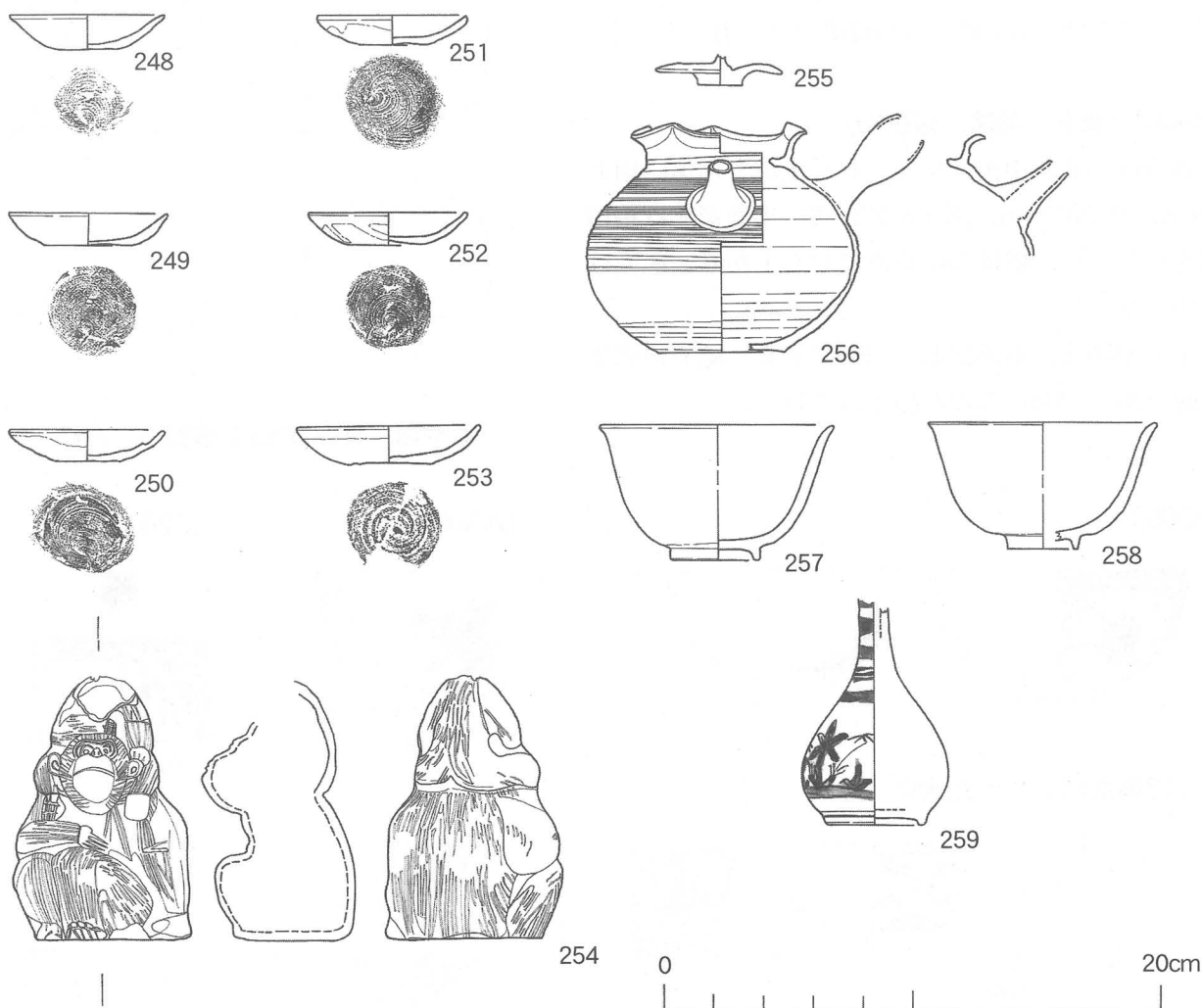


第35図 SK2005出土遺物 (1/1・1/3)

SK2006



SK2007



第36図 SK2006・SK2007出土遺物（1/3）

(259) などが出土している。

SK5060 (第6・37図、図版30)

調査区の北側中央で検出された土坑である。覆土から大量の鋳型が出土した。第4遺構面で確認されたが、出土遺物からSX1001との関連性が高く、本遺構面に属する遺構であると判断した。残りが悪く、規模や形態は不明である。

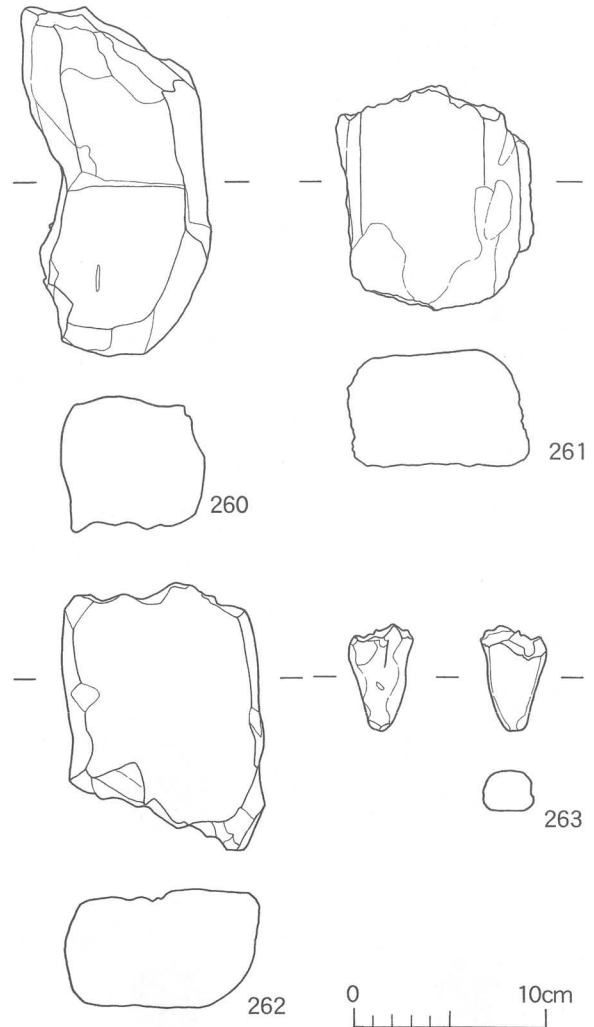
出土遺物は第37図260から263である。SX1001・SE3001同様、この遺構にも、鋳造に関連すると思われる遺物が出土している。鋳造製品は不明であるが、鋳型と推測されるもの(260~262)と、鋳型を焼くための道具である円錐ピン(263)などが出土している。

260~262は、全形は不明であり、製品を作るための鋳型なのか、鋳造のための道具であるかも不明である。この型のものは、この遺構のみの出土である。

SK5053 (第6・38図、図版30)

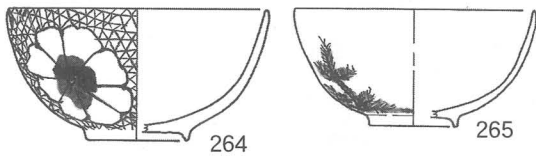
調査区の北側中央で検出された土坑である。南北0.92m、東西0.78m、深さが0.7mで、平面形態は楕円形をしていた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であった。

出土遺物は、第38図264と265である。肥前白磁染付碗(264・265)などが出土している。

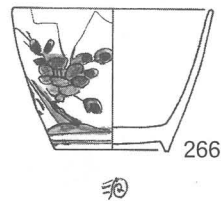


第37図 SK5060出土遺物(1/4)

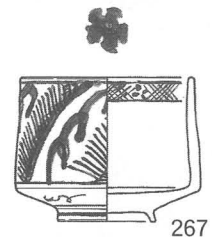
SK5053



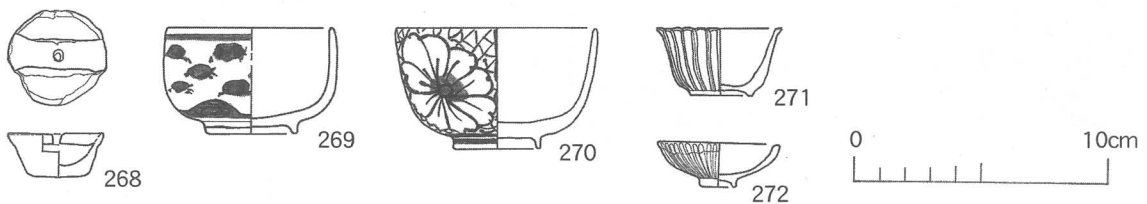
SK5061



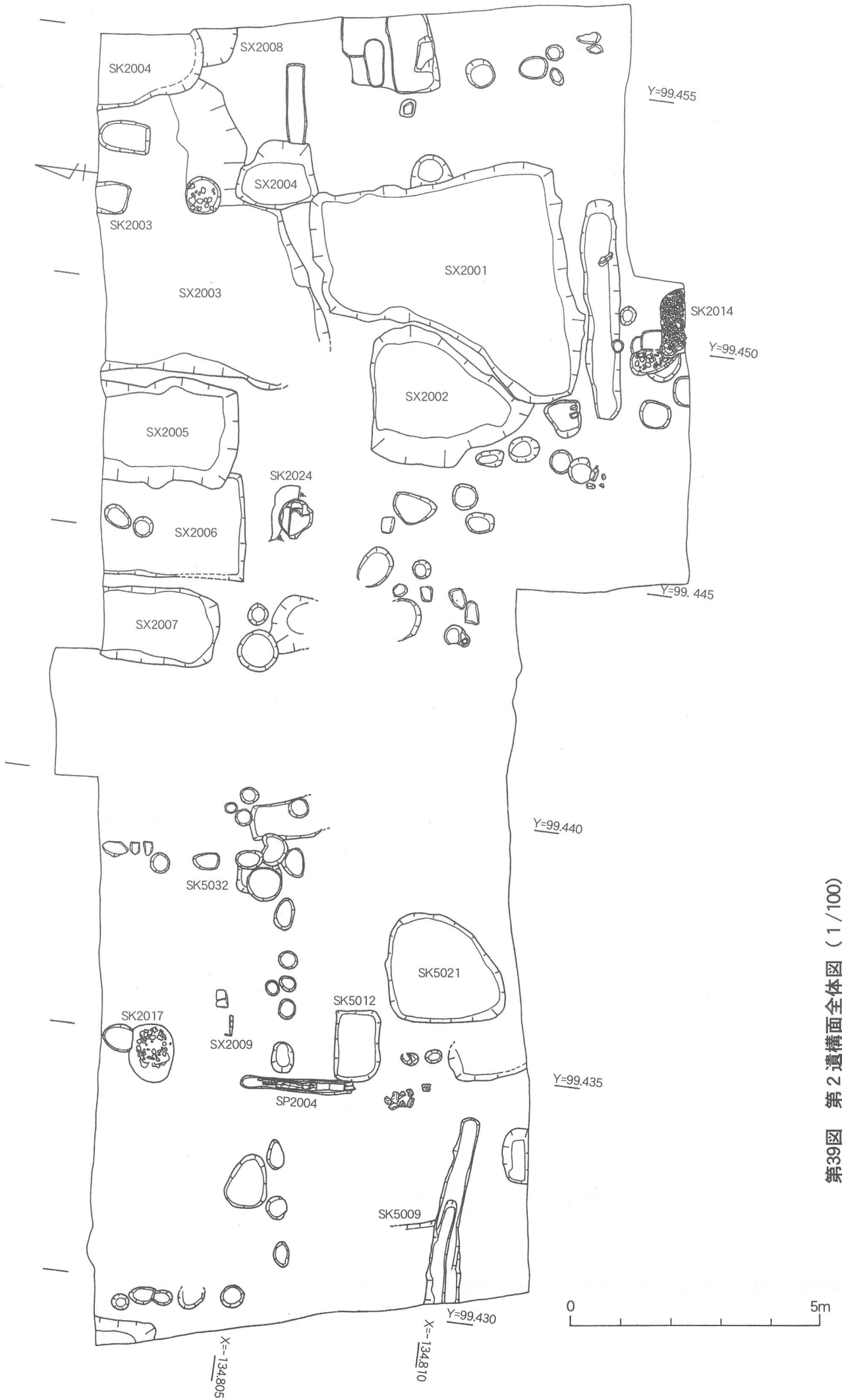
SP2017



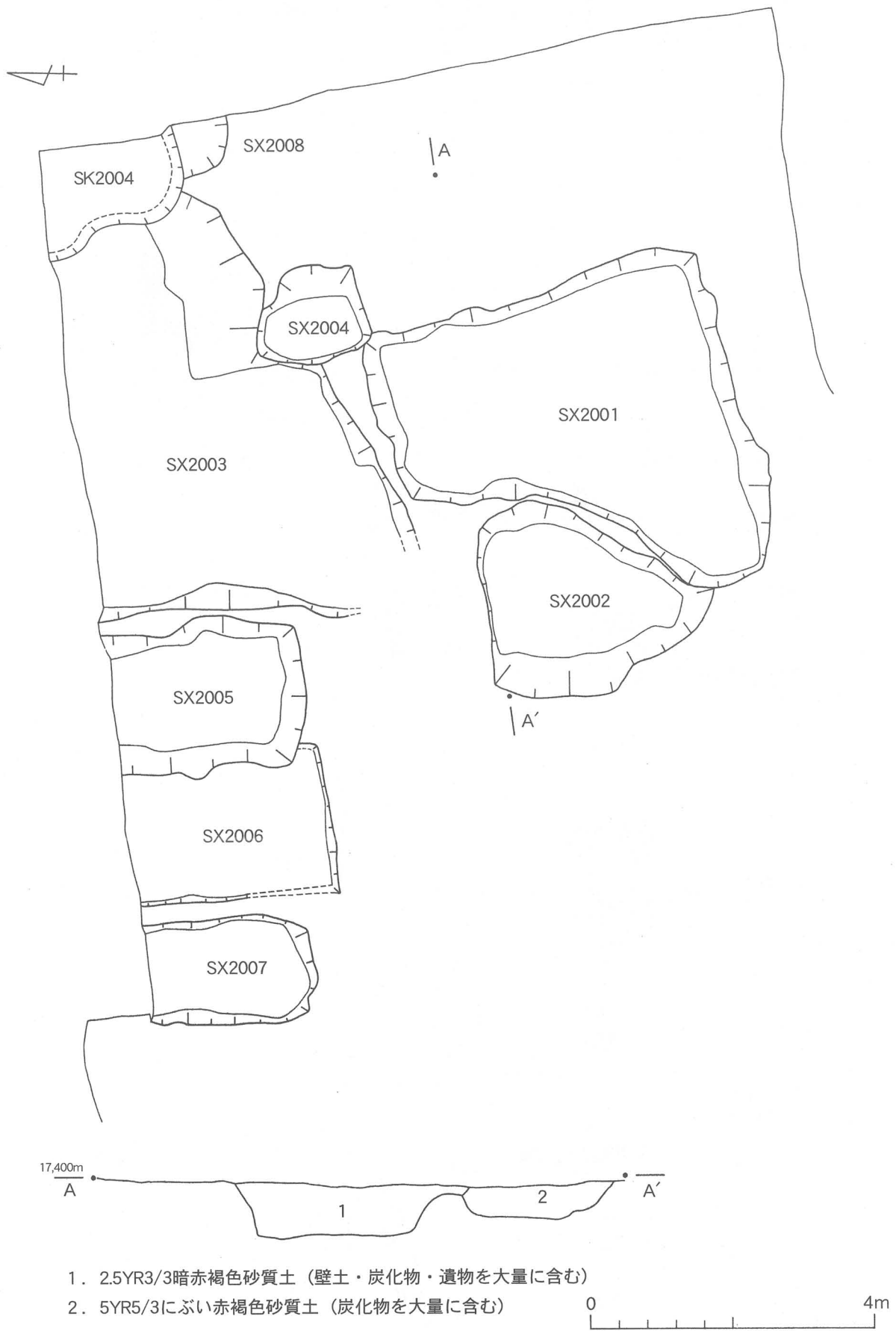
第1遺構面掘削時出土遺物



第38図 SK5053・SK5061・SP2017・第1遺構面掘削時出土遺物(1/3)



第39図 第2遺構面全体図 (1/100)



第40図 焼土土坑平面図、SX2001・SX2002断面図 (1/80)

SK5061 (第6・38図、図版30)

調査区南の拡張区西壁際で検出された土坑である。SX3006・3007等に壊されており、調査できたのは一部であった。規模、形態は不明である。

出土遺物は第38図266である。肥前白磁染付蕎麦猪口(266)などが出土している。

SP2017 (第6・38図・図版5・30)

調査区中央の北壁際で検出されたピットである。周辺の同規模のピットはなく、本ピット単独で検出された。南北0.28m、東西0.24m、深さが0.27mで、平面形態は円形をしていた。

出土遺物は、第38図267である。見込みにコンニャク印判五弁花をもつ肥前白磁染付筒形碗(267)などが出土している。

第1遺構面掘削時出土遺物(第38図、図版31)

出土遺物は第38図268から272などである。ミニチュア製品柿釉灯火器(268)。269から272は肥前磁器で、千鳥と波文の白磁染付小碗(269)・氷裂撫子文の白磁染付小碗(270)・型押し成形で口縁輪花の白磁小杯(271)・型押し成形の白磁紅皿(272)などが出土している。

第2遺構面(18世紀初頭)(第39図・図版6)

本遺構面は、元禄15(1702)年に起こった、中少路村から北ノ口町にかけて民家など439軒を焼いた火災面に相当する。標高は17.5mであった。

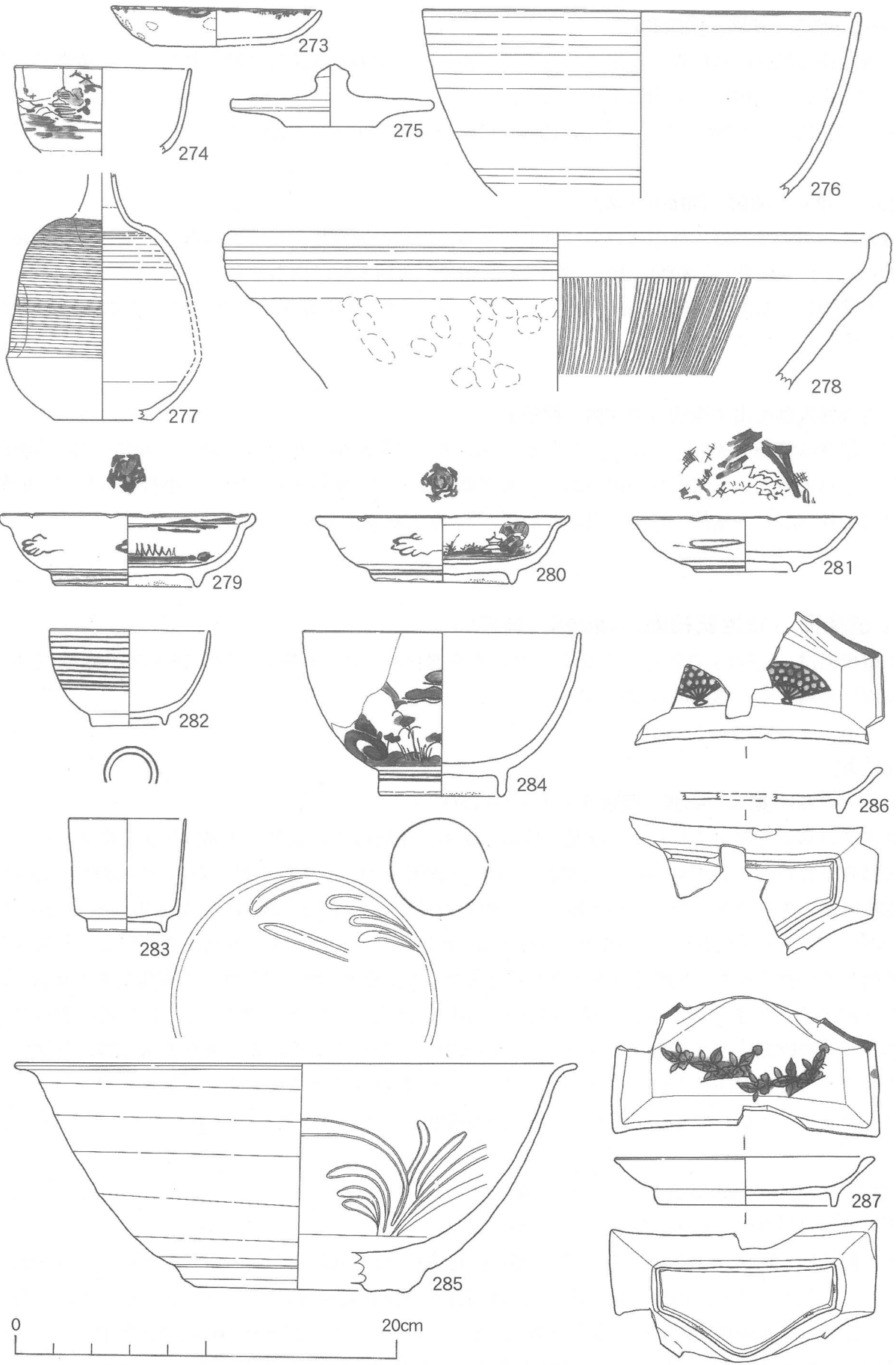
焼土土坑**SX2001~2008(第40~48図、図版6・7・31~37)**

調査区の東半で検出された焼土廃棄土坑群である。土坑は主に建物の土間部分から検出された。全体を調査できたものは少ないが、大型のもの(SX2001・2003)から小型のもの(SX2004・2007)など規模はまちまちであった。平面形態は、不整形のもの(SX2001~2004)と長方形のもの(SX2005~2008)の2タイプがあった。SX2001の埋土は、焼けた瓦片と壁土を含む層と炭化材を含む層が互層に堆積していた。また、陶磁器片が大量に出土した。SX2002の埋土は、焼土や炭化材を大量含み、焼けた瓦が少量だけ含まれていた。遺物はあまり出土しなかった。SX2003では、肥前系磁器片や丹波焼播鉢などの陶器片が大量に出土した。埋土の状況から分かるように焼土廃棄土坑には、分別してそれぞれ廃棄する物が決められていたようである。①炭化材・焼土を廃棄する土坑、②壁土材などの建築材を廃棄する土坑、③瓦を廃棄する土坑、④陶磁器片などの日常雑器を廃棄する土坑に分類できる。

SX2001(第40~42図、図版6・7・31・32)

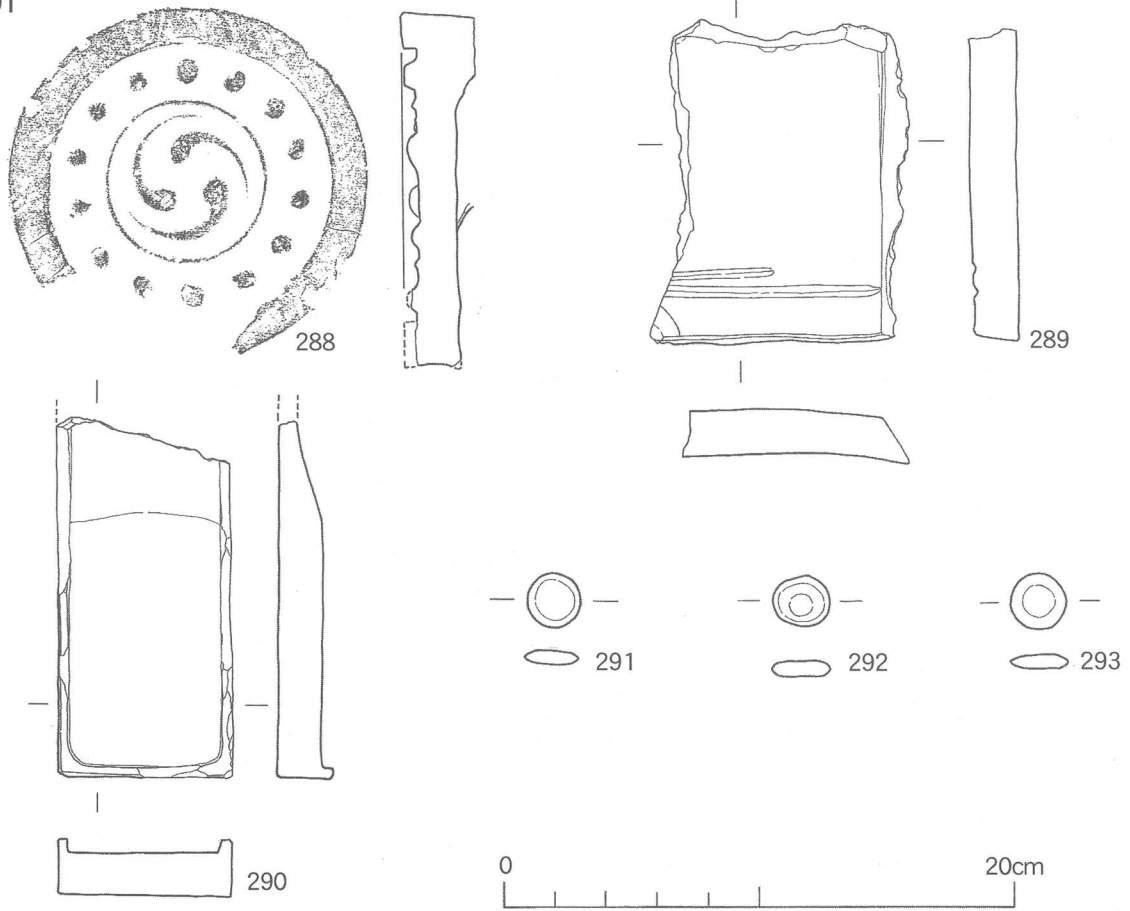
出土遺物は第41図から第42図の273から293である。

手握ね成形で口径10cmを越える大型の土師皿(273)。口縁部に煤が付着しているので、灯明皿に使用されていたと考える。陶器では、山水文の肥前京焼風陶器鉄絵碗(274)、丹波焼蓋(275)、丹波焼大鉢(276)、丹波焼播鉢(278)、備前焼徳利(277)などである。279から287は肥前製品で、口縁折れ縁で輪花の陶胎染付皿(279・280)・口縁輪花で折れ松葉文の白磁染付皿(281)・白磁染付富士山型皿(286・287)・横縞文の白磁染付碗(282)・白磁猪口(283)・草花文の白磁染付大碗(284)・内面にへ

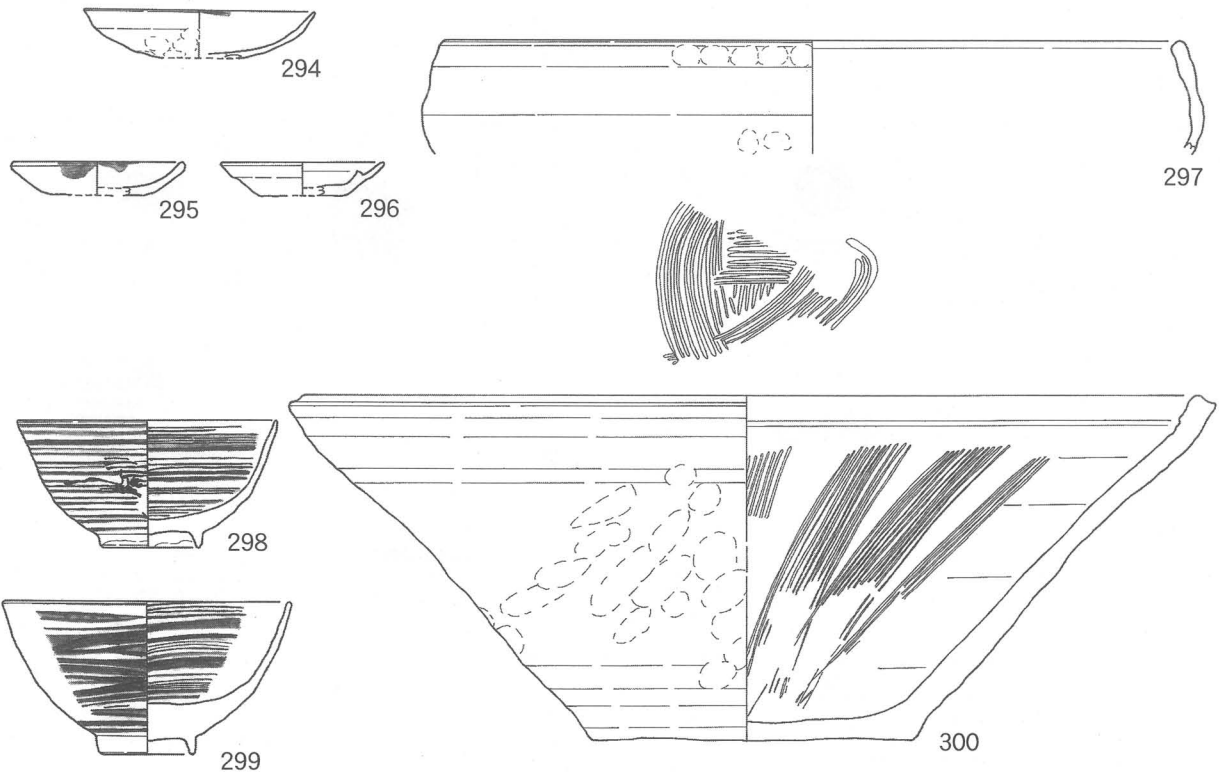


第41图 SX2001出土遺物 (1) (1/3)

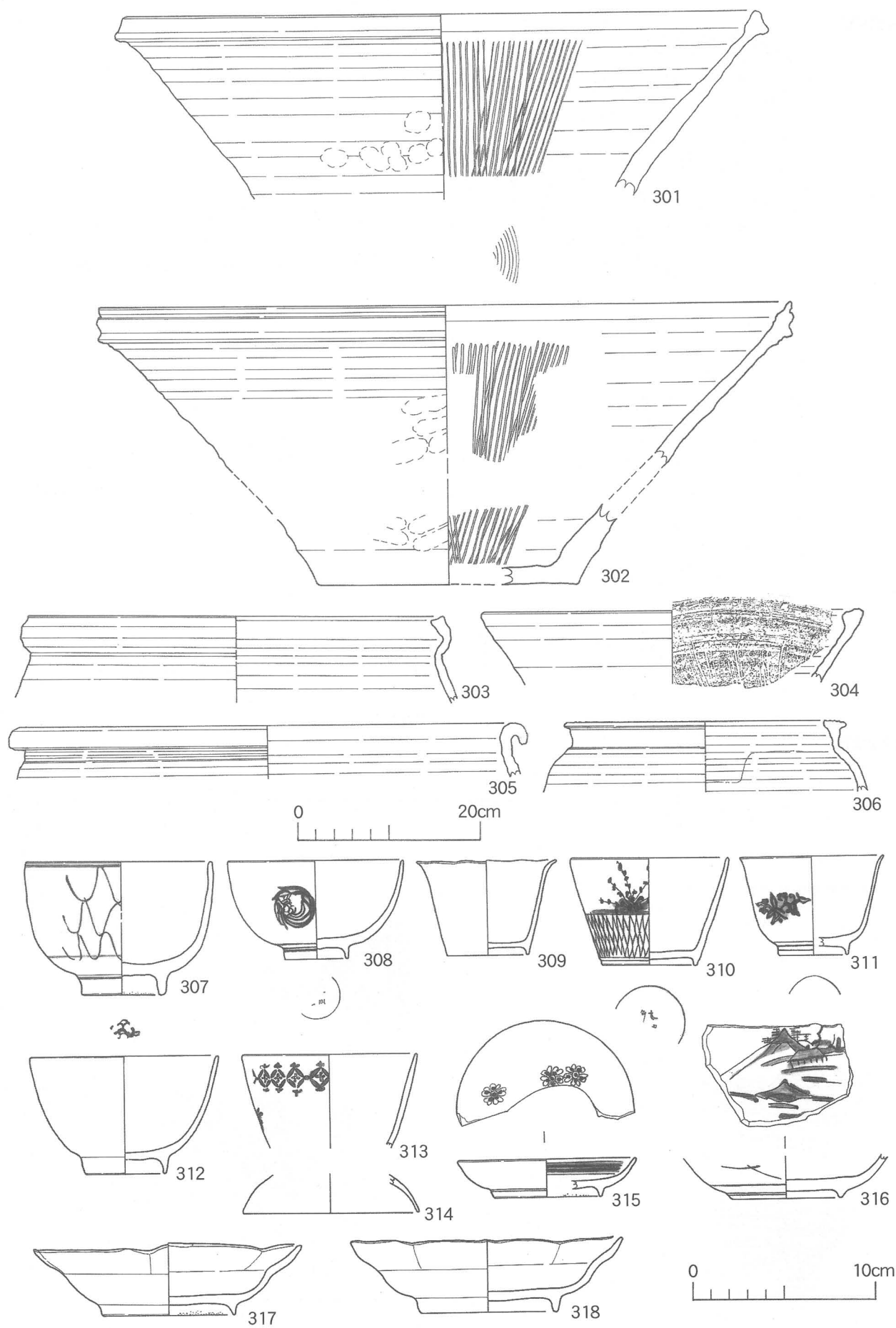
SX2001



SX2003

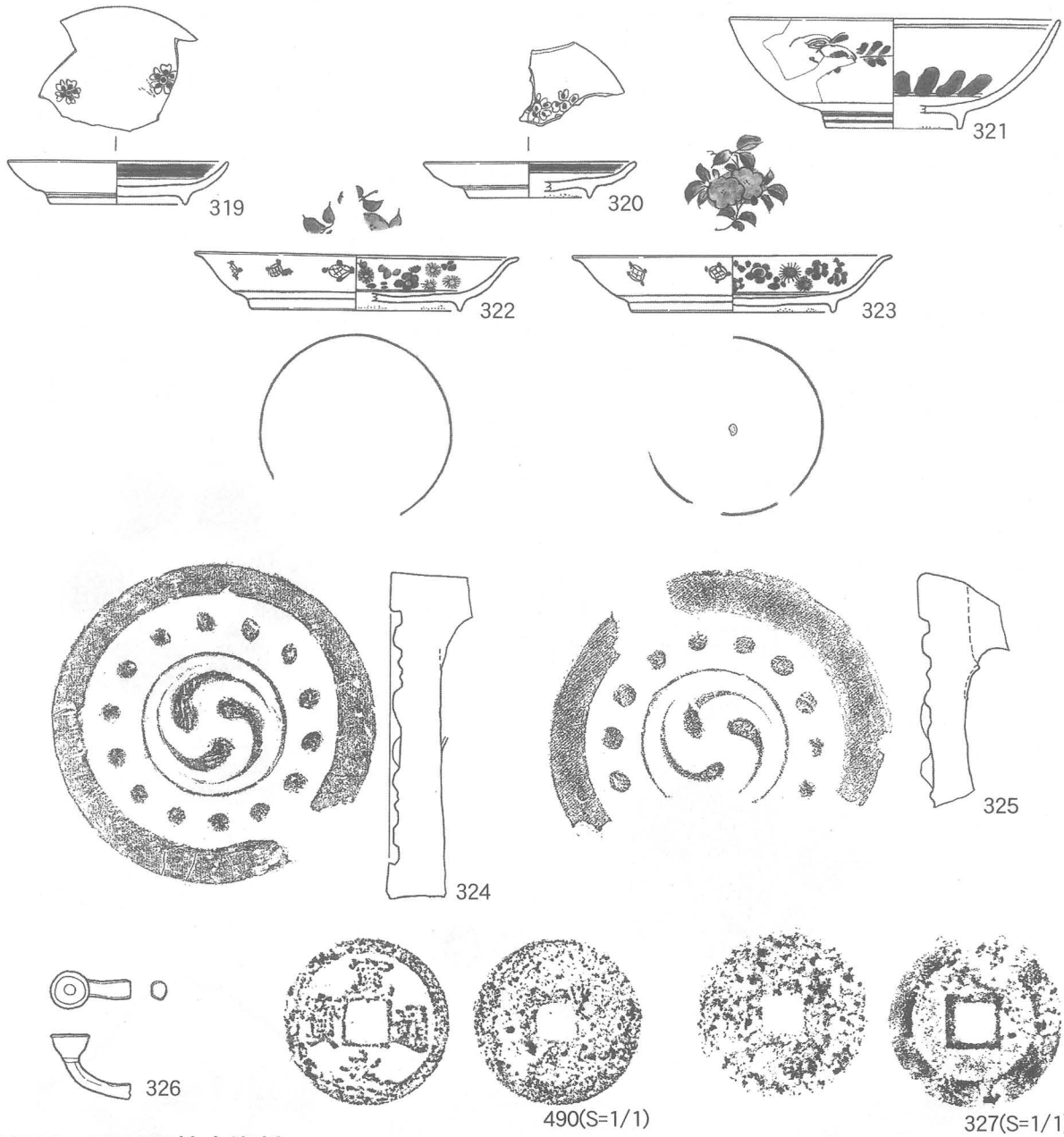


第42図 SX2001出土遺物(2)、SX2003出土遺物(1)(1/3)

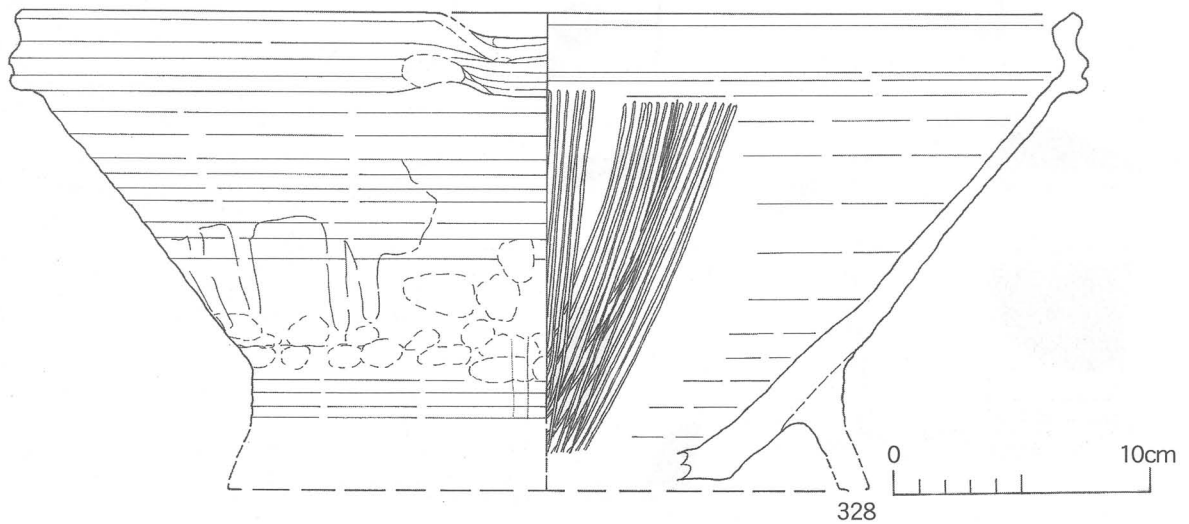


第43図 SX2003出土遺物 (2) (1/3・1/6)

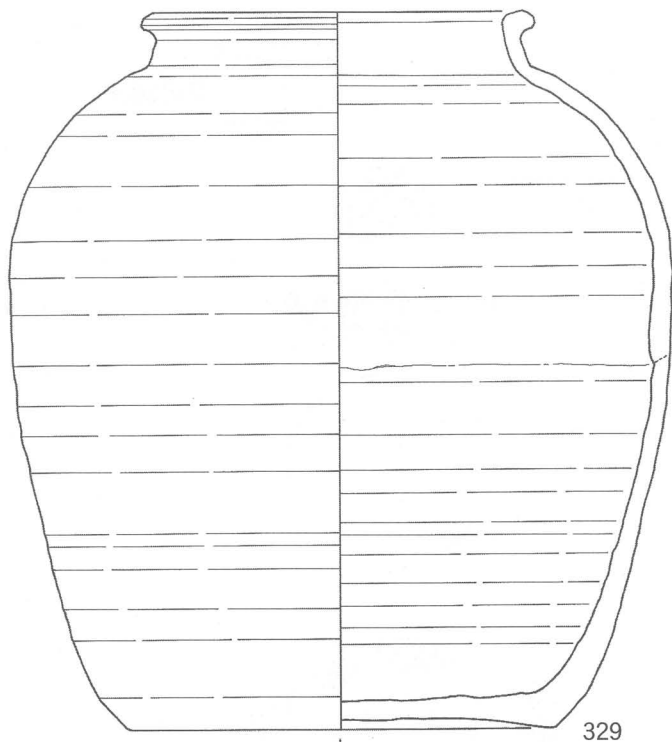
SX2003



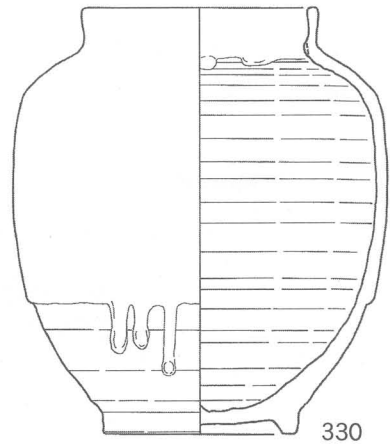
SX2001・SX2003接合資料



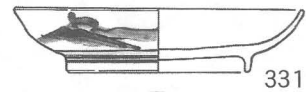
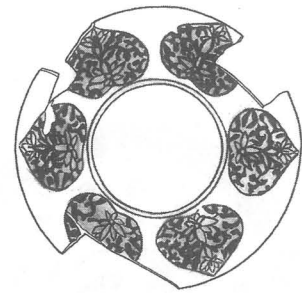
第44図 SX2003出土遺物 (3)、SX2001・SX2003接合資料 (1) (1/1・1/3)



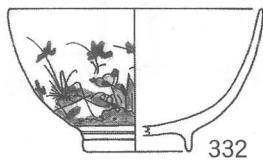
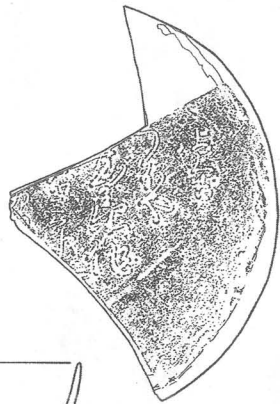
329



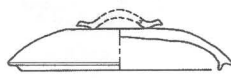
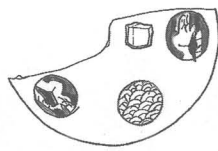
330



331



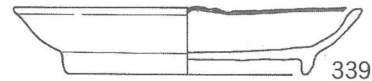
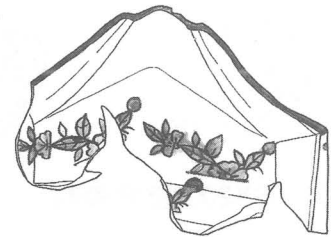
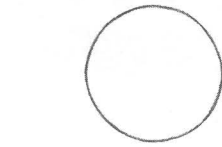
332



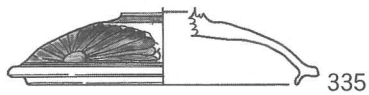
333



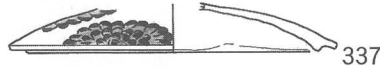
334



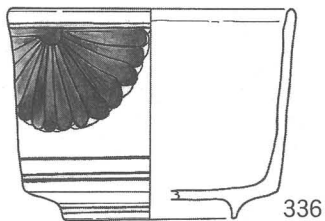
339



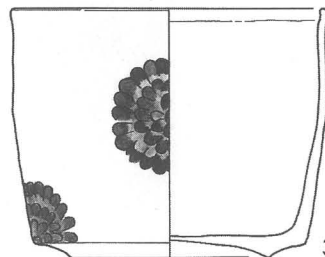
335



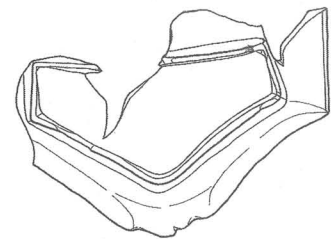
337



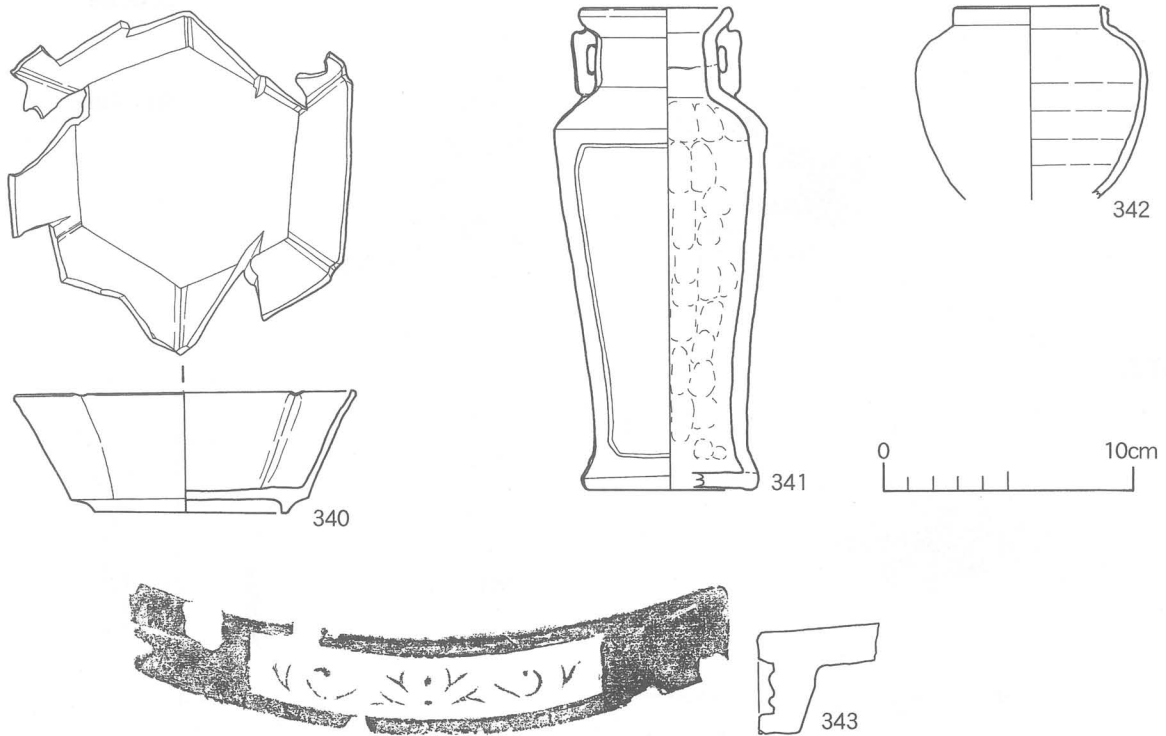
336



338



第45圖 SX2001・SX2003接合資料(2)(1/3)



第46図 SX2001・SX2003 接合資料(3)(1/3)

ラ描きで草文の陰刻が施された青磁大鉢(285)である。

図示できなかったが、279・280と同型で同じ文様をもつ皿(図版31-487~489)が数点出土されており、セット物と考えられる。

陶磁器のほかには、軒丸瓦(288)、熨斗瓦(289)、硯(290)、黒色の基石(291~293)などが出土している。

SX2003(第40・42~44図、図版6・7・33・34)

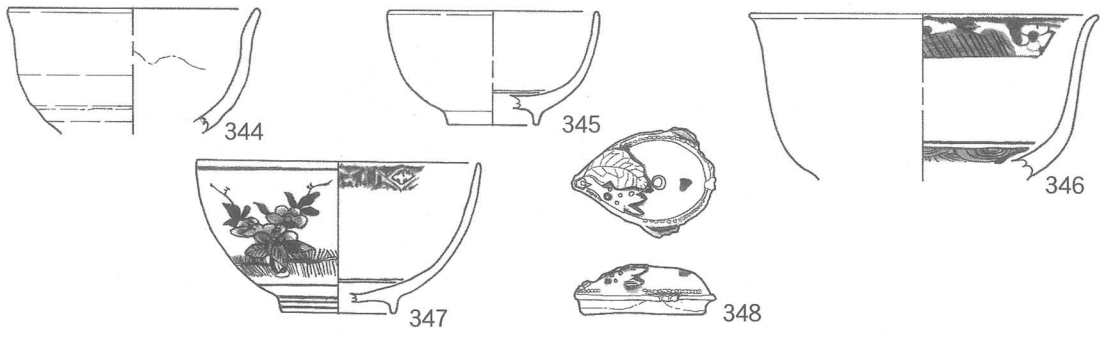
出土遺物は第42図から第44図の294から327・490である。

素焼き製品は、手捏ね成形の土師皿(294)、ロクロ成形の柿釉灯明皿(295)、ロクロ成形で無釉の灯明受皿(296)、焙烙(297)である。

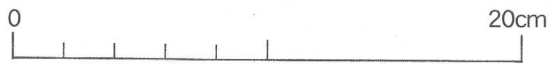
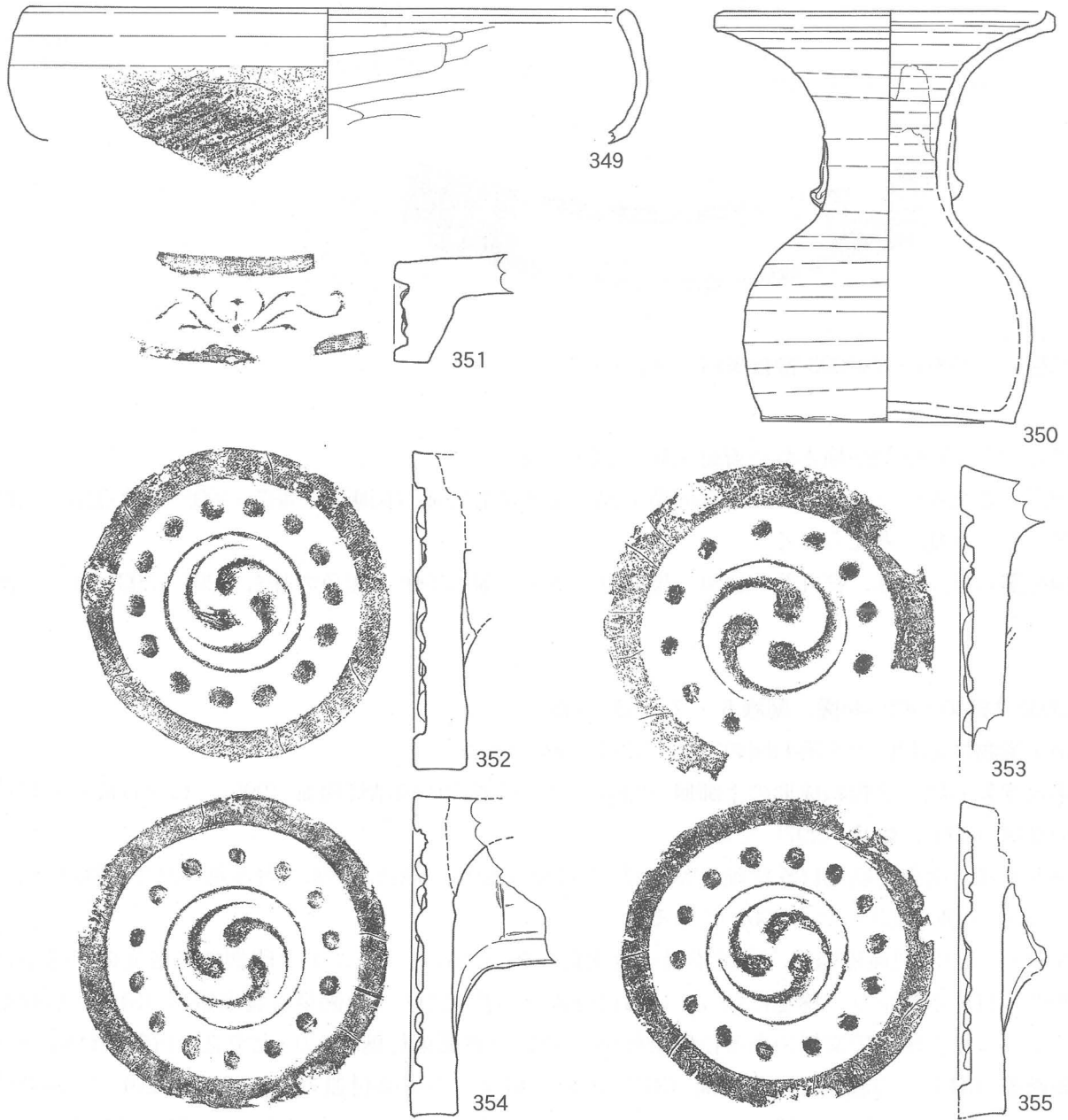
陶器では、唐津焼刷毛目鉄絵碗(298)・刷毛目碗(299)。300から306は丹波焼製品で、播鉢(300~302・304)・甕(303・305・306)である。

307から323は肥前磁器で、白磁染付一重網目文碗(307)・コンニャク印判で鳳凰文の白磁染付碗(308)・口縁が端反りで輪花になっている白磁端反小杯(309)・白磁染付蕎麦猪口(310)・口縁端反りでコンニャク印判で文様のある白磁染付小杯(311)・青磁染付碗(312)・七宝文の白磁染付碗(313)・青磁碗蓋(314)・口縁輪花の青磁皿(317・318)・桜文の白磁染付皿(315・319・320)・白磁染付皿(316)・草花文の白磁染付皿(321)・口縁端反りの七宝文の白磁染付皿(322・323)である。

SX2002

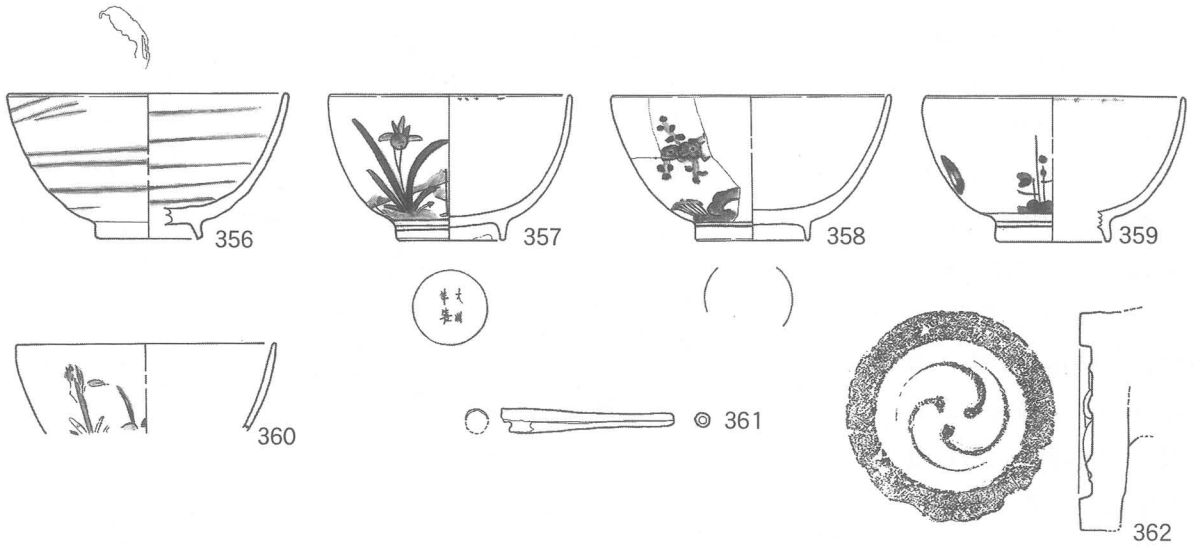


SX2005

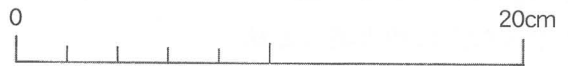
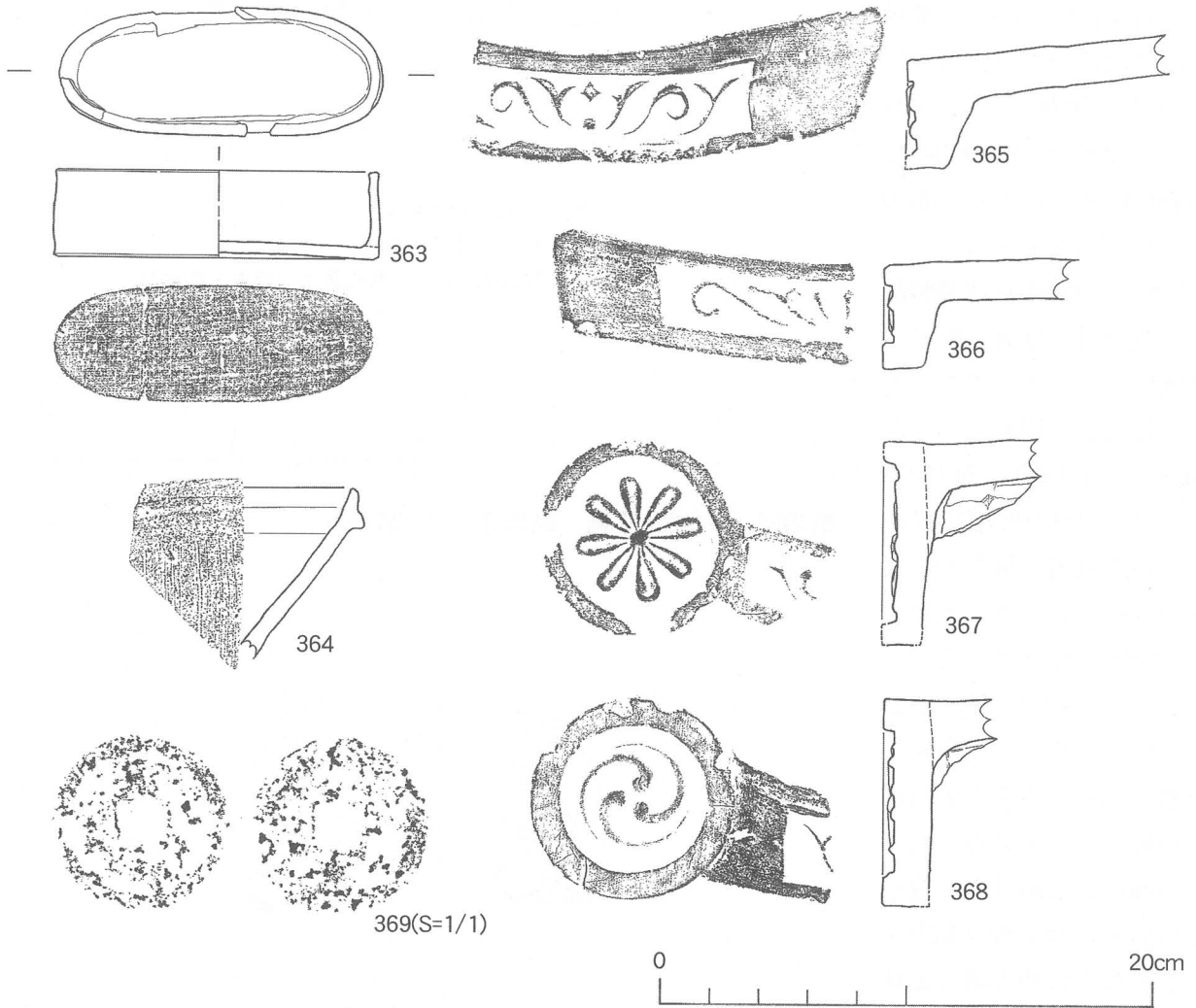


第47図 SX2002・SX2005出土遺物（1/3）

SX2006



SX2007



第48図 SX2006・SX2007出土遺物（1/1・1/3）

このなかで、317・318は同型であるため、315・319・320は同型・同文様であるため、322・323も同型・同文様であるため、それぞれセット物であったと考える。

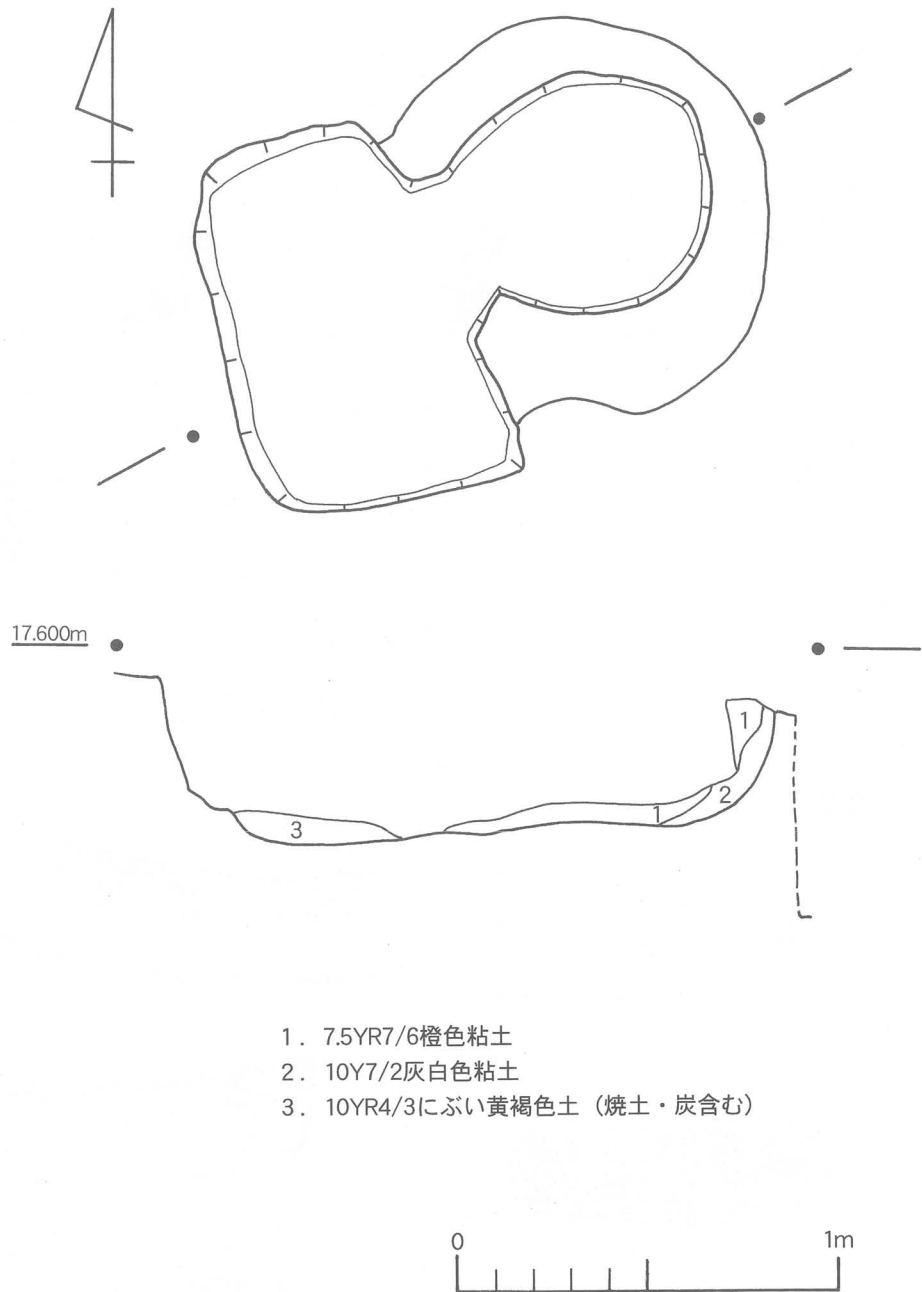
陶磁器のほかには、軒丸瓦 (324)、鳥衾瓦 (325)、銅製煙管の雁首 (326)、寛永通寶 (490)、緑青が著しく判読不可の銭 (327) などが出土している。

SX2001・SX2003接合資料
(第40・44～46図、図版6・7・34・35)

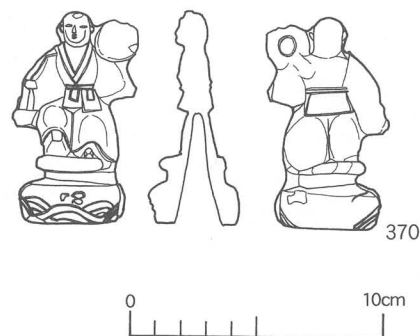
SX2001とSX2003の遺物は接合関係があり、2つは同時期の遺構と考えられる。SX2001とSX2003の接合資料は第44図から第46図の328から343である。

328から330は丹波焼製品で、高台付き播鉢 (328)・外面底部に「上々吉 つるや □□□ □和三年」の銘をもつ壺 (329)、壺 (330) である。329の底部に書かれている元号は最初の一字が欠けているが、天和三年(1683)と推測される。

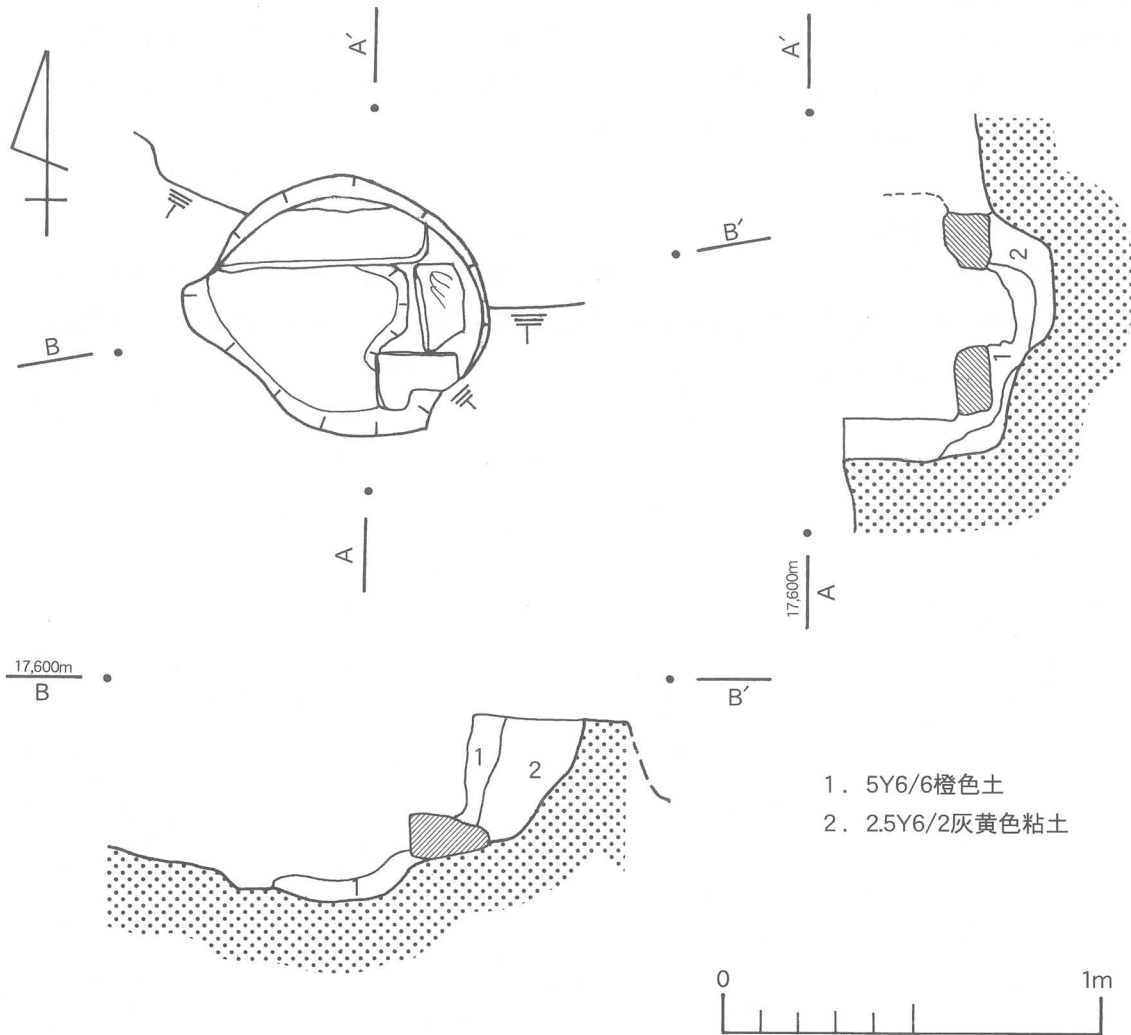
331から342は肥前磁器で、山文と松葉文の白磁染付皿 (331)・草花文の白磁染付碗 (332)・丸窓のなかに青海波文と風景文を施した白磁染付合子蓋 (333)・丸窓のなかに青海波文と風景文を施した白磁染付合子の身 (334)・白磁染付富士



第49図 SK2021平面・断面図 (1/20)



第50図 SK2021出土遺物 (1/3)



第51図 SK2024 平面・断面図 (1/20)

山型皿 (339)・菊花文の白磁染付鉢蓋 (335)・菊花文の白磁染付鉢 (336)・菊花文の白磁染付鉢蓋 (337)・菊花文の白磁染付鉢 (338)・白磁六角形鉢 (340)・青磁花器 (341)・白磁壺 (342) である。339の白磁染付富士山型皿は、SX2001でも同型の皿が2点出土しており、文様はそれぞれ異なるが、セット物だった可能性が考えられる。333と334が一個体の蓋と身の関係で、同様に335と336、337と338が一個体の蓋と身の関係である。陶磁器以外には、軒平瓦 (343) などがある。

SX2002 (第40・47図、図版6・7・36)

出土遺物は第47図344から348である。瀬戸・美濃焼天目碗 (344)、345から348は肥前磁器で、青磁染付碗 (345)・青磁染付端反碗 (346)・椿芝垣文の白磁染付碗 (347)・菜果を模した白磁染付水滴 (348) などが出土している。

SX2005 (第40・47図、図版6・7・36)

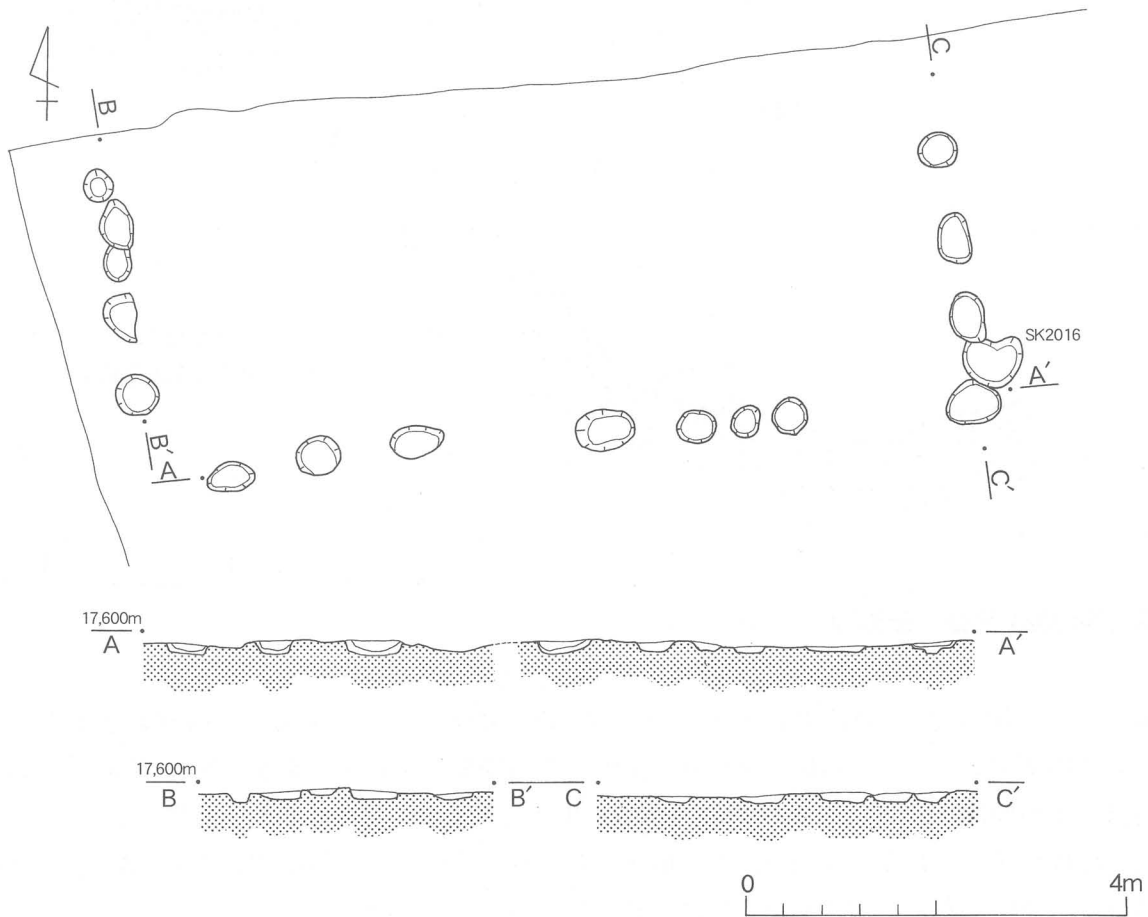
出土遺物は第47図349から355である。焙烙 (349)、瀬戸・美濃焼花器 (350)、軒平瓦 (351)、軒丸瓦 (352~355) などが出土している。

SX2006 (第40・48図、図版6・7・37)

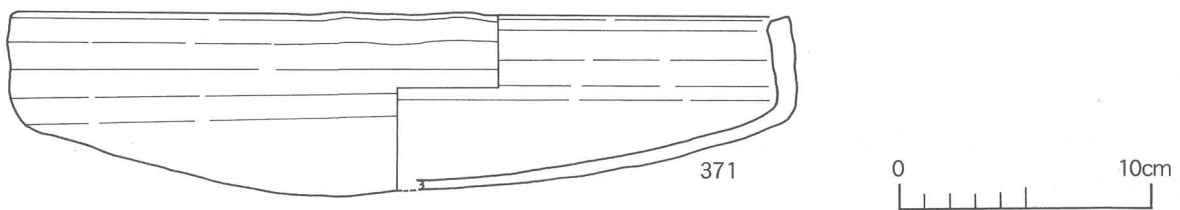
出土遺物は第48図356から362である。唐津焼刷毛目碗 (356)、草花文の肥前白磁染付碗 (357)、雪輪草花文の肥前白磁染付碗 (358)、染付とコンニャク印判で草花文を描く肥前白磁染付碗 (359)、肥前白磁色絵碗 (360)、銅製煙管の吸口 (361)、隅丸瓦 (362) などが出土している。

SX2007 (第40・48図、図版6・7・37)

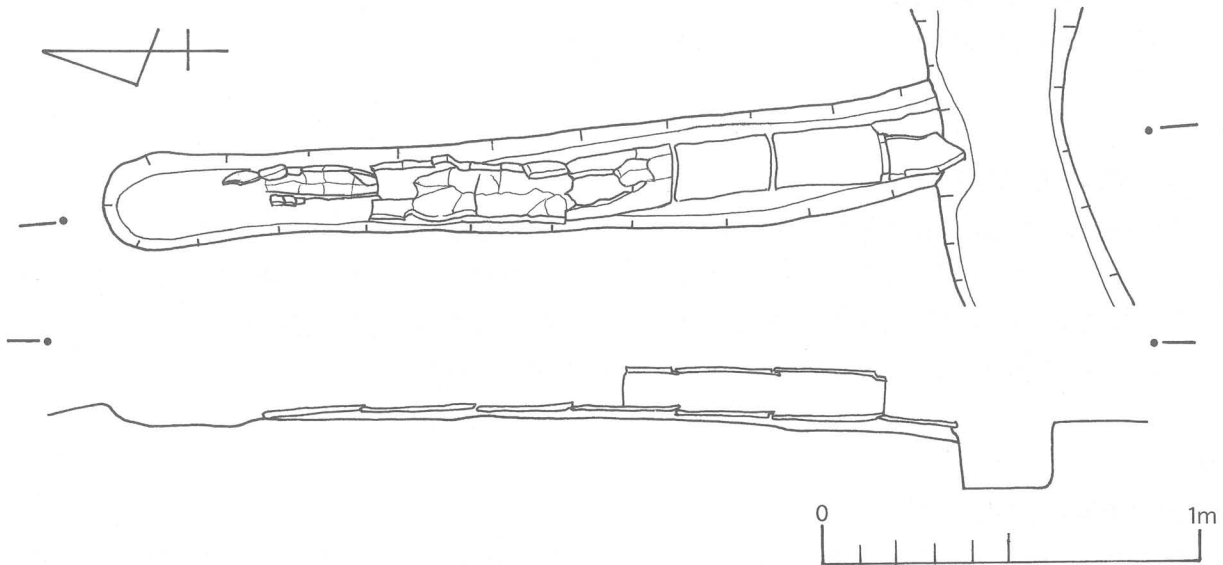
出土遺物は第48図363から369である。ロクロ成形の柿釉鬢水入れ (363)、丹波焼播鉢 (364)、軒平瓦 (365・366)、小丸部分に菊花文をもつ軒棧瓦 (367)・小丸部分に左巻き三巴文をもつ軒棧瓦 (368)、緑青の付着が著しく判読が出来ない銭 (369) などが出土している。



第52図 SB2001・SK2016平面・断面図 (1/80)



第53図 SK2016出土遺物 (1/3)



第54図 SD2004平面・断面図（1/20）

竈跡

SK2021（第49・50図、図版8・37）

調査区の北側中央で検出された竈である。焼土廃棄土坑であるSX2006の埋土を掘り込んで構築されていた。燃烧室内側の直径は0.66m、深さが0.27mであった。主軸を北東に向け、底面はほぼ平坦であった。内側壁面には厚さ約20cmの灰黄色粘土が貼られ、その大半が被熱のため酸化していた。焚き口部の規模は、南北1.02m、東西0.7m、深さが0.36mであった。平面形態は長方形を呈し、右袖に補強材として丸瓦が使用されていた。

出土遺物は第50図のミニチュア製品の人形（370）などが出土している。

SK2024（第51図、図版8）

調査区北側のSK2021に隣接して検出された竈である。燃烧室南側と焚き口部は、上面の遺構などに壊されており、残存していなかった。

燃烧室内側の直径は0.68m、深さが0.29mで、主軸を東に向けていた。SK2021同様に灰黄色粘土によって構築されていた。底面中央には、溝状に20cm深く掘り下げられた灰の掻き出し部が設けられていた。壁面には板状の石が使用されていた。

建物跡

SB2001（第52図、図版9）

調査区北西の壁際で検出された掘立柱建物跡である。北側は調査区外に延びていたため、全体を調査することができなかった。東西9間、南北4間以上で、各柱穴間の距離が等間隔ではなかった。柱穴の平面形態は円形を呈するものが多く、径は0.4~0.5mであった。東側に礎石の可能性が高い礫を3点検出したが、本遺構との関係は不明である。

SK2016（第52・53図、図版8・37）

調査区北西側で検出されたSB2001の西側ピット列にかかる土坑である。南北0.8m、東西1.0m、深

さ0.1mで、平面形態は不整形であった。底面から多量の土師器片が出土している。

出土遺物は第53図の焙烙（371）などが出土している。

溝

SD2004（第54図、図版9）

調査区西側の中央から検出された南北方向に走行する丸瓦敷きの溝である。検出された長さ2.7m、幅0.3m、深さが0.2mであった。北側は緩く立ち上がり、南側がSD2003と重複していた。溝の幅に合わせて、長さ50cmの丸瓦が7個組み敷かれていた。北側はSB2001の中央部分に位置することから、SD2003へと続く建物の排水施設の一部であった可能性が考えられる。

土坑

SX2009（第39・55図、図版7・38）

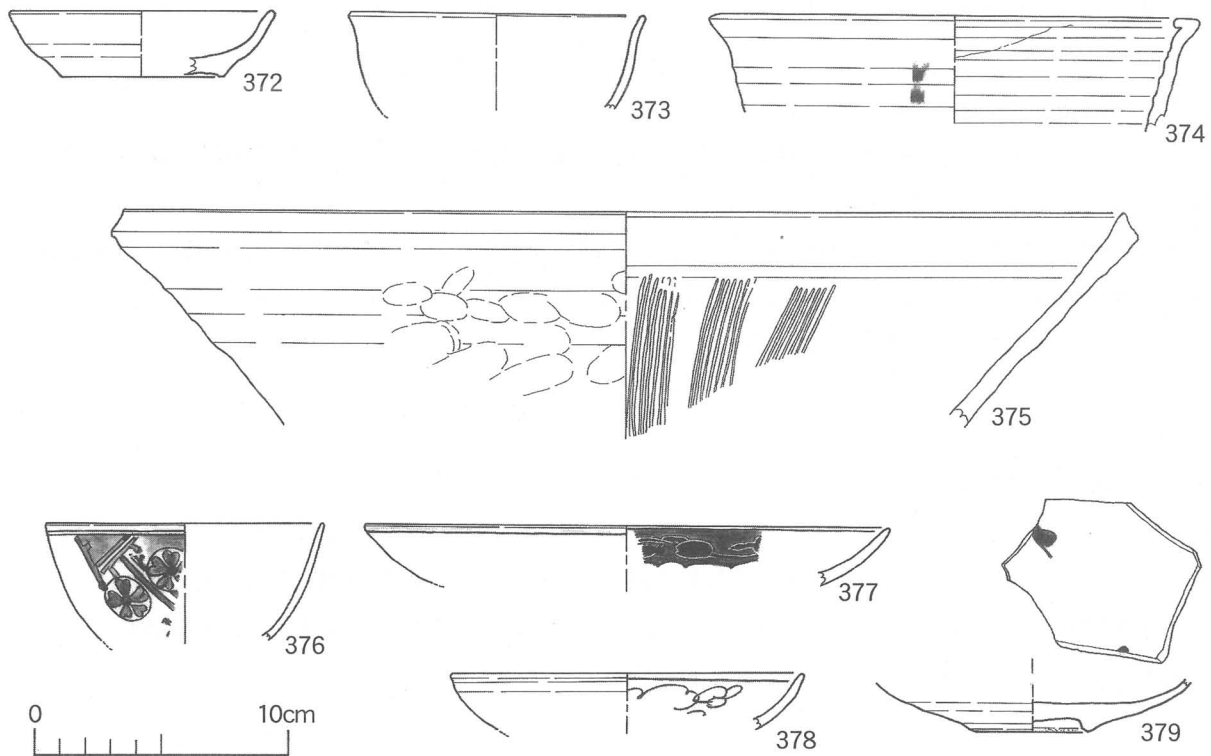
調査区西側で検出された。平瓦が4枚、L字状に立てて並べられているが、遺構の性質は不明である。

出土遺物は第55図372から379である。陶器は、瀬戸・美濃焼灰釉丸皿（372）・灰釉鉢（374）、丹波焼播鉢（375）、口縁端反で緑釉のかかった産地不明陶器碗（373）である。

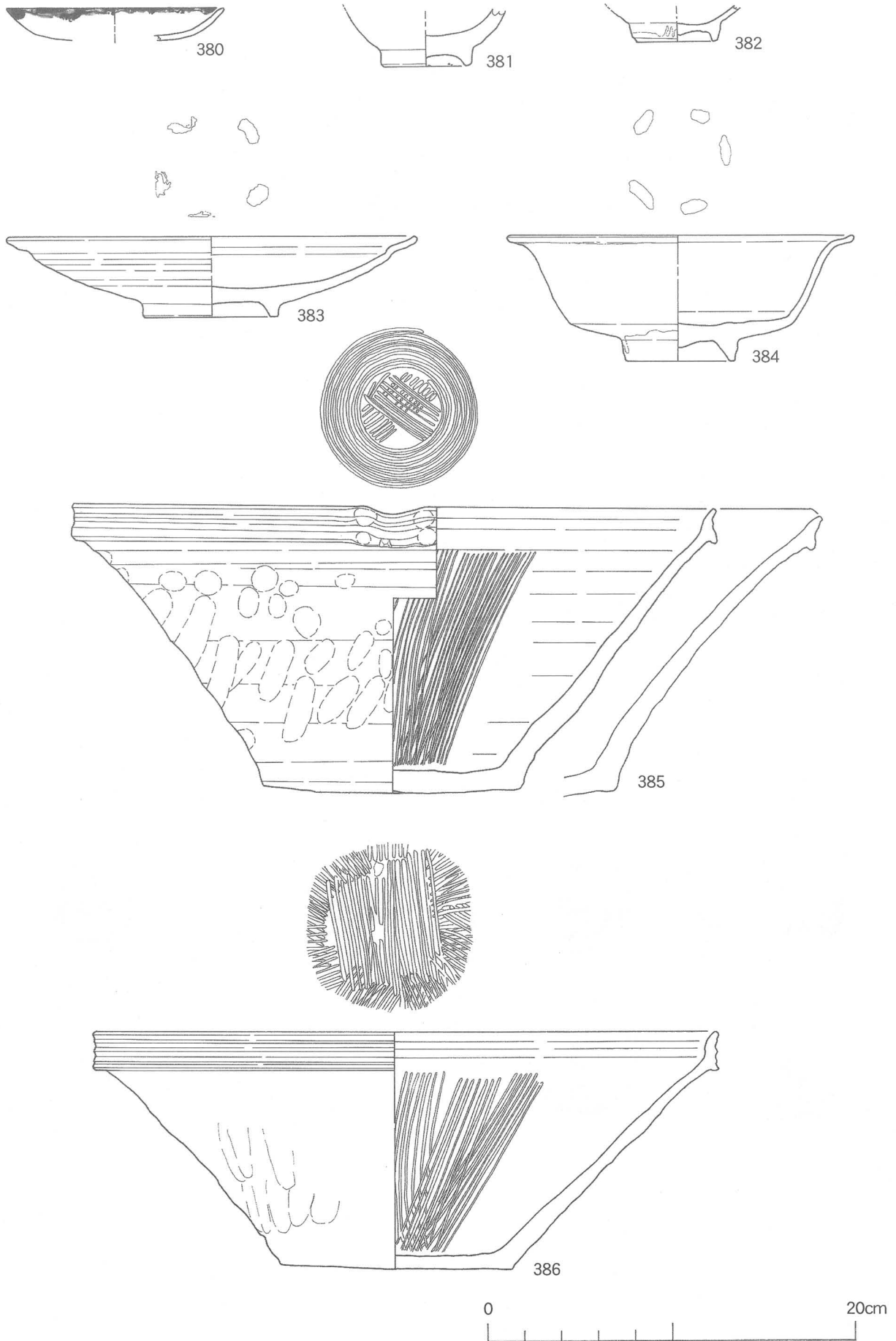
376から379は肥前磁器で、桜文の白磁染付碗（376）・墨弾きで文様を描く白磁染付皿（377）・丸文の白磁染付皿（378）・白磁染付皿（379）などが出土している。

SK5009（第39・56～58図、図版38・39）

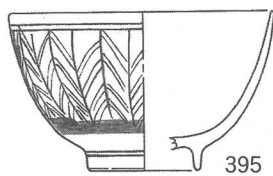
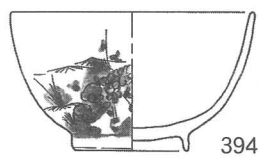
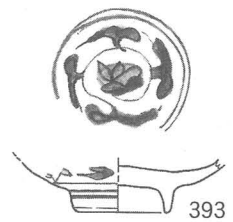
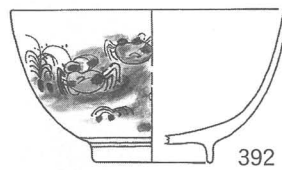
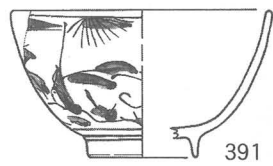
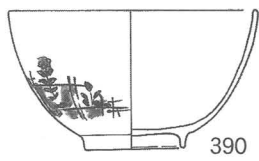
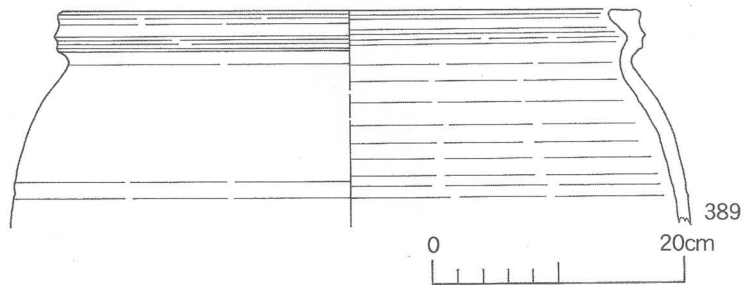
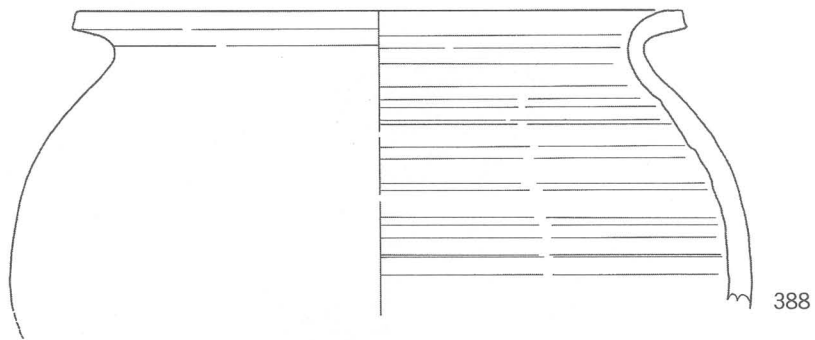
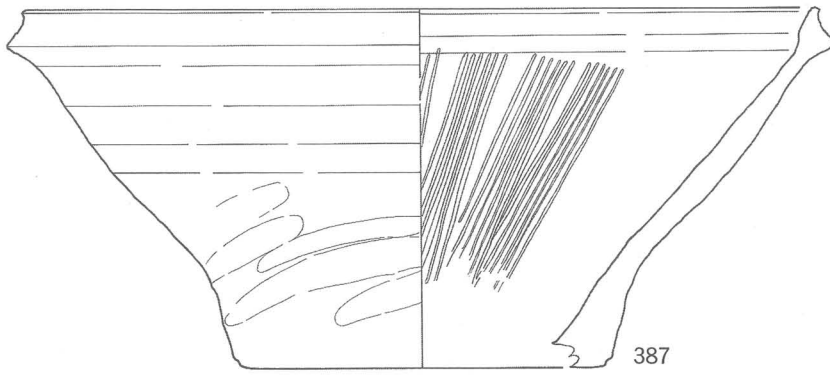
調査区の南西角で検出された土坑である。西側は調査区外に延びていたため、全体を調査すること



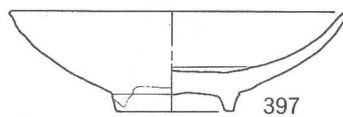
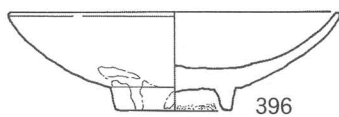
第55図 SX2009出土遺物（1/3）



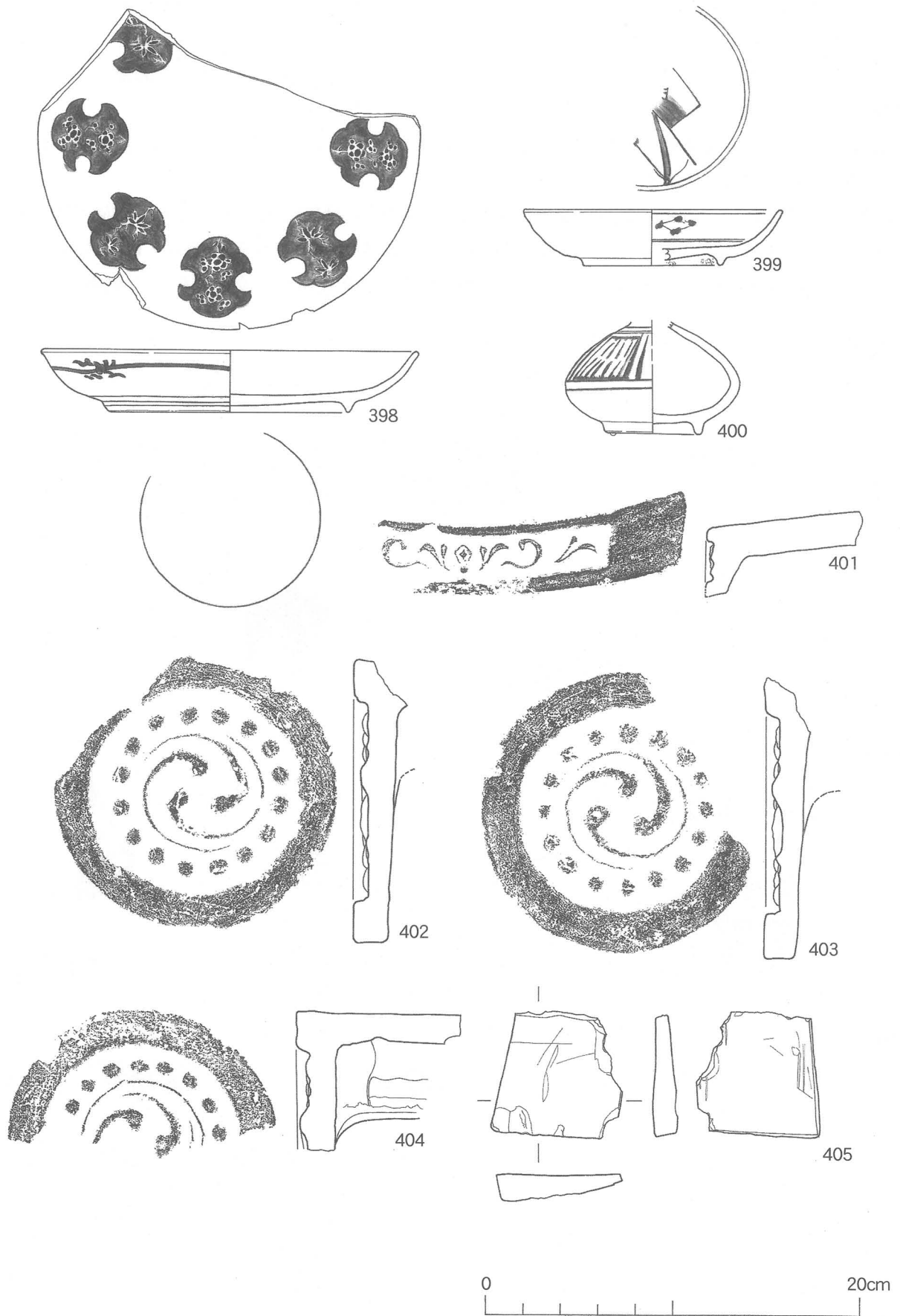
第56図 SK5009出土遺物 (1) (1/3)



牛
馬
器
明



第57図 SK5009出土遺物(2)(1/3・1/6)



第58図 SK5009出土遺物(3)(1/3)

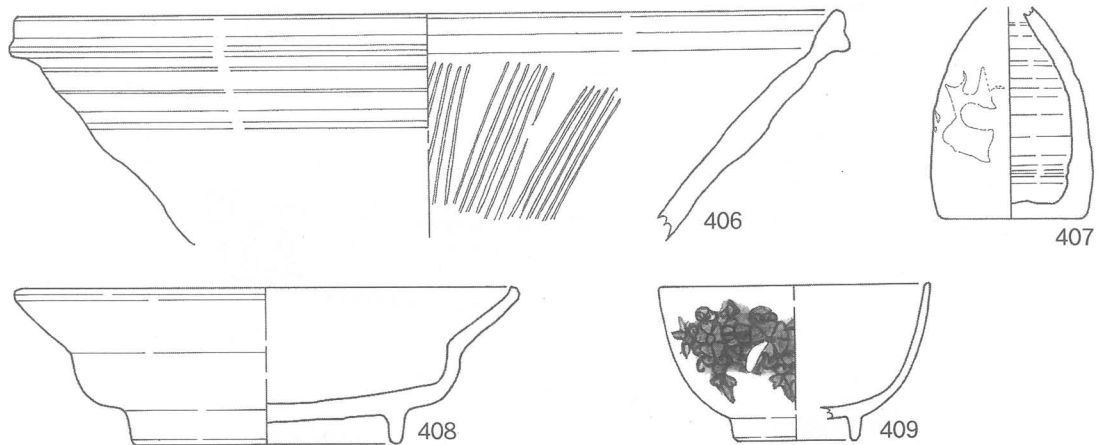
ができなかった。南北2.0m、深さが1.13mで、平面形態は不整形であった。覆土からは、播鉢や碗などの多量の陶磁器片が出土した。

出土遺物は第56図から第58図の380から405である。口径10cmを越える大型の土師皿（380）。これは口縁部に煤の付着があるため、灯明皿として使用されていたと考える。

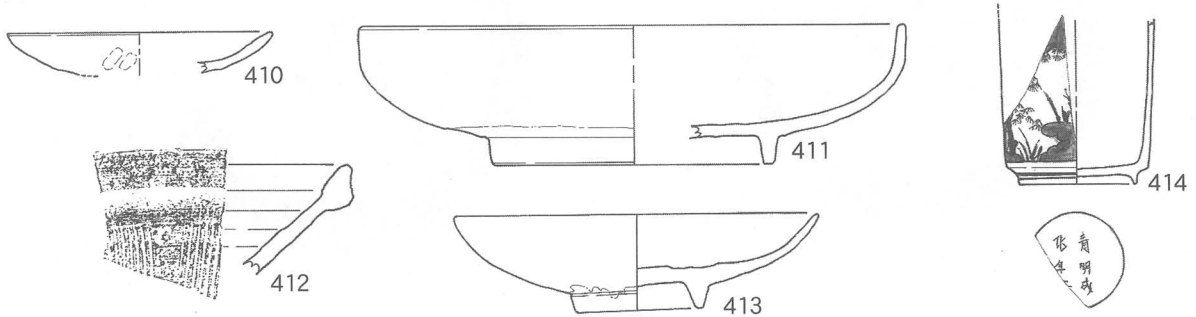
陶器は、肥前陶器灰釉皿（383）・陶器灰釉鉢（384）。385から389までは丹波焼製品で、播鉢（385～387）・甕（388・389）である。

390から392、394から400は肥前磁器で、花竹垣文の白磁染付碗（390）・草文の白磁染付碗（391）・蟹文の白磁染付碗（392）・梅文の白磁染付碗（394）・矢羽文の白磁染付碗（395）・白磁鉄釉碗（381・382）・白磁皿（396・397）・窓を作り、そのなかに墨弾きで梅文と笹文を交互に配す白磁染付皿（398）・

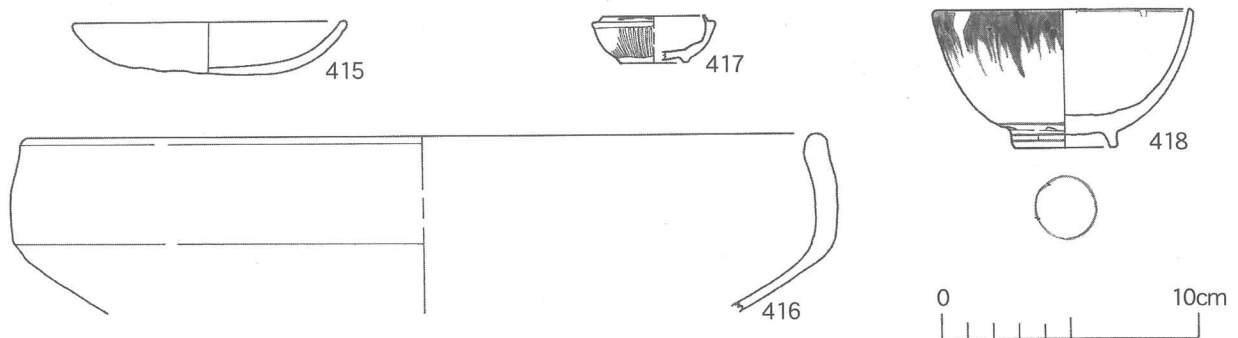
SK5012



SK5021



SK5032



第59図 SK5012・5021・5032出土遺物（1/3）

白磁染付皿 (399)・白磁色絵油壺 (400) である。肥前磁器以外にも、中国景德鎮窯の青花碗 (393) などがある。

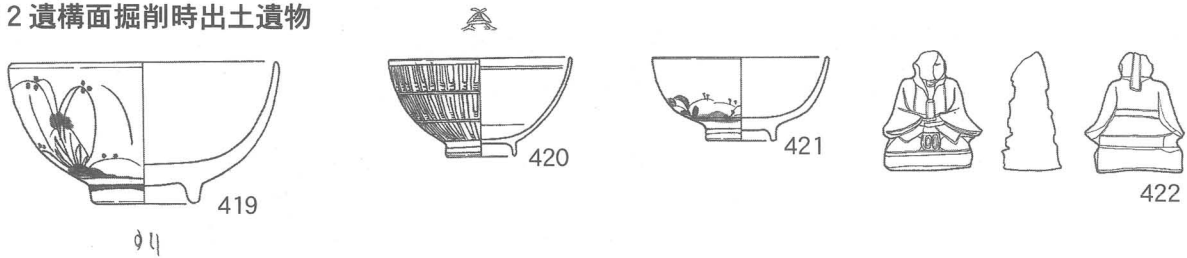
陶磁器以外では、軒平瓦 (401)・軒丸瓦 (402~404)・砥石 (405) などが出土している。

SK5012 (第39・59図、図版40)

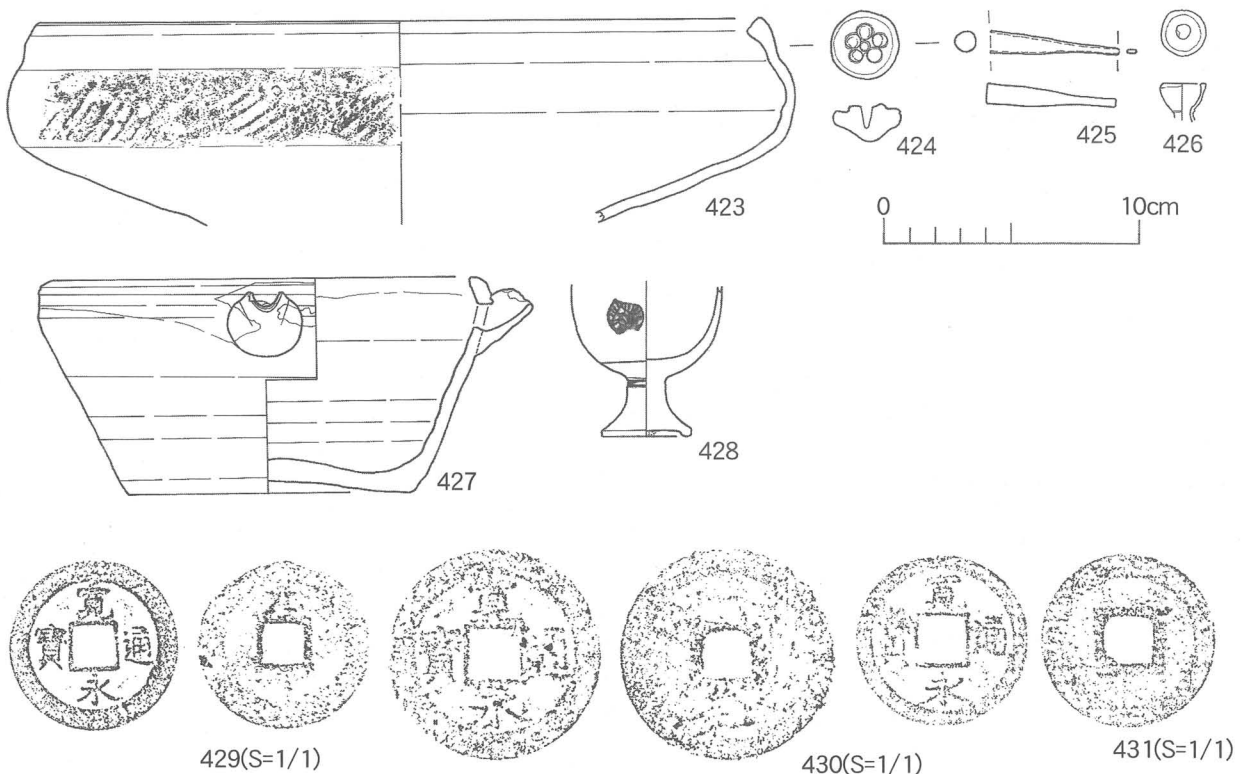
調査区西側で検出された土坑である。第4遺構面で確認されたが、出土遺物から本遺構面に属する遺構であると判断した。規模は、東西1.42m、南北0.93m、深さが0.54mであった。平面形態は長方形をしており、底面は平坦であった。

出土遺物は第59図406から409である。丹波焼播鉢 (406)、肥前系陶器瓶 (407)、肥前陶器灰釉皿 (408)、コンニャク印判花文の肥前白磁染付碗 (409) などが出土している。

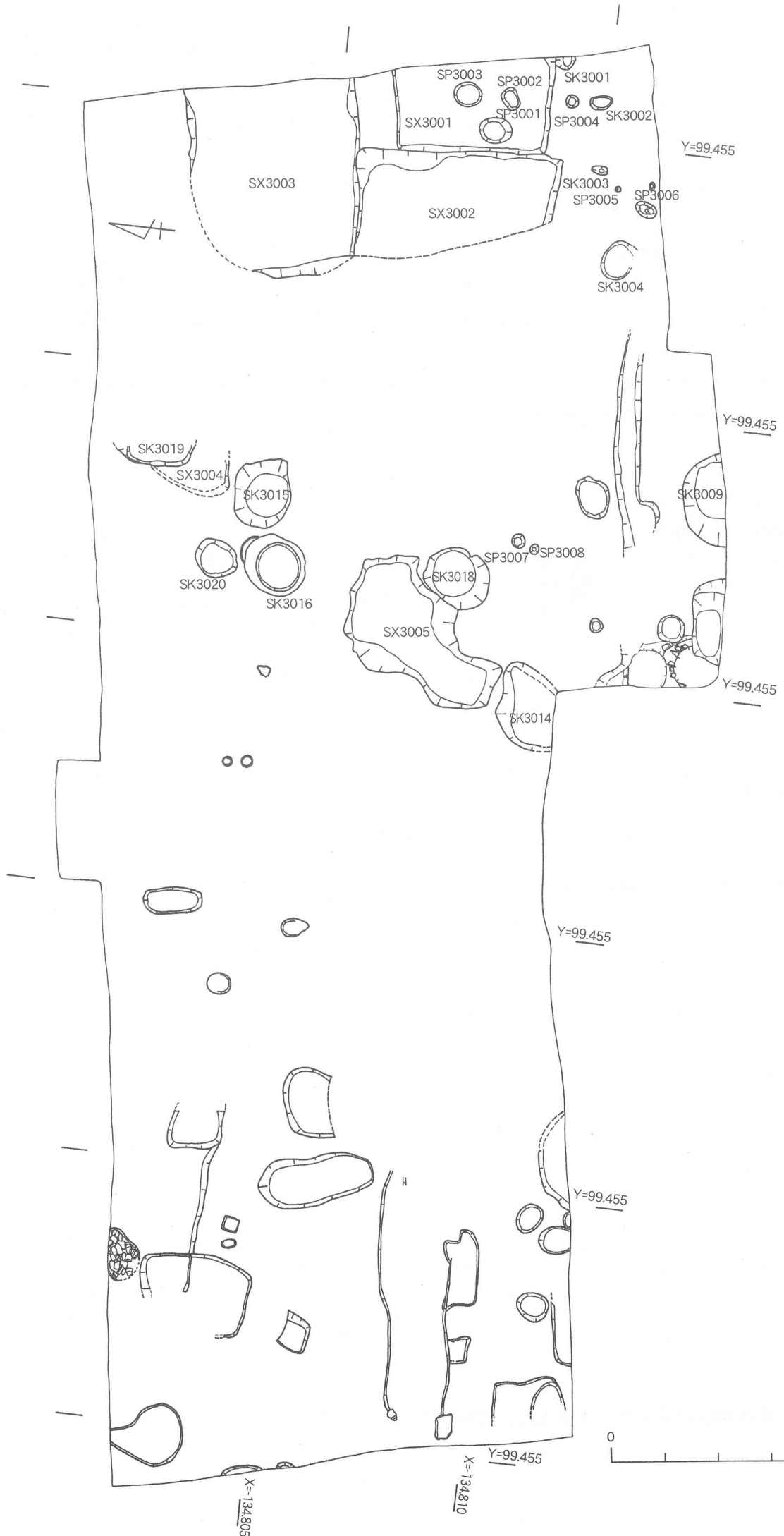
第2遺構面掘削時出土遺物



第2遺構面出土遺物



第60図 第2遺構面掘削時・第2遺構面出土遺物 (1/1・1/3)



第61図 第3遺構面全体図 (1/100)

SK5021 (第39・59図、図版40)

調査区の南西で検出された土坑である。南北2.4m、東西2.2m、深さが0.5mで、平面形態は楕円形をしていた。

出土遺物は第59図410から414である。手捏ね成形で口径が10cm前後の大型の土師皿(410)、肥前陶器灰釉皿(411)、丹波焼播鉢(412)、肥前青磁皿(413)、肥前白磁染付猪口(414)などが出土している。

SK5032 (第39・59図、図版8・40)

調査区の西側で検出された土坑である。SB2001の柱穴列に壊されていた。規模は、南北1.06m、東西0.78m、深さが0.67mであった。平面形態は楕円形で、北側に深さが0.4mの方形のテラス部をもっていた。

出土遺物は第59図415から418である。手捏ね成形で口径が10cm前後の大型の土師皿(415)、焙烙(416)、型押し成形の肥前白磁合子(417)、手描き雨降り文の肥前白磁染付碗(418)などが出土している。

第2遺構面掘削時出土遺物(第60図、図版40)

出土遺物は第60図419から422である。ミニチュア製品の天神像(422)、手描き草花文とコンニャク印判菊文併用の肥前白磁染付碗(419)、暦文の肥前白磁染付小碗(420)、草花文の肥前白磁染付紅猪口(421)などが出土している。

第2遺構面出土遺物(第60図、図版40・41)

出土遺物は第60図423から431である。焙烙(423)、ミニチュア製品の独楽(424)、丹波焼片口鉢(427)、肥前白磁染付仏飯具(428)、銅製の煙管の吸口(425)と雁首(426)、寛永通寶(429～431)などが出土している。429は背文「元」の細字背元銭、430は背に波型がある明和俯永銭などが出土している。

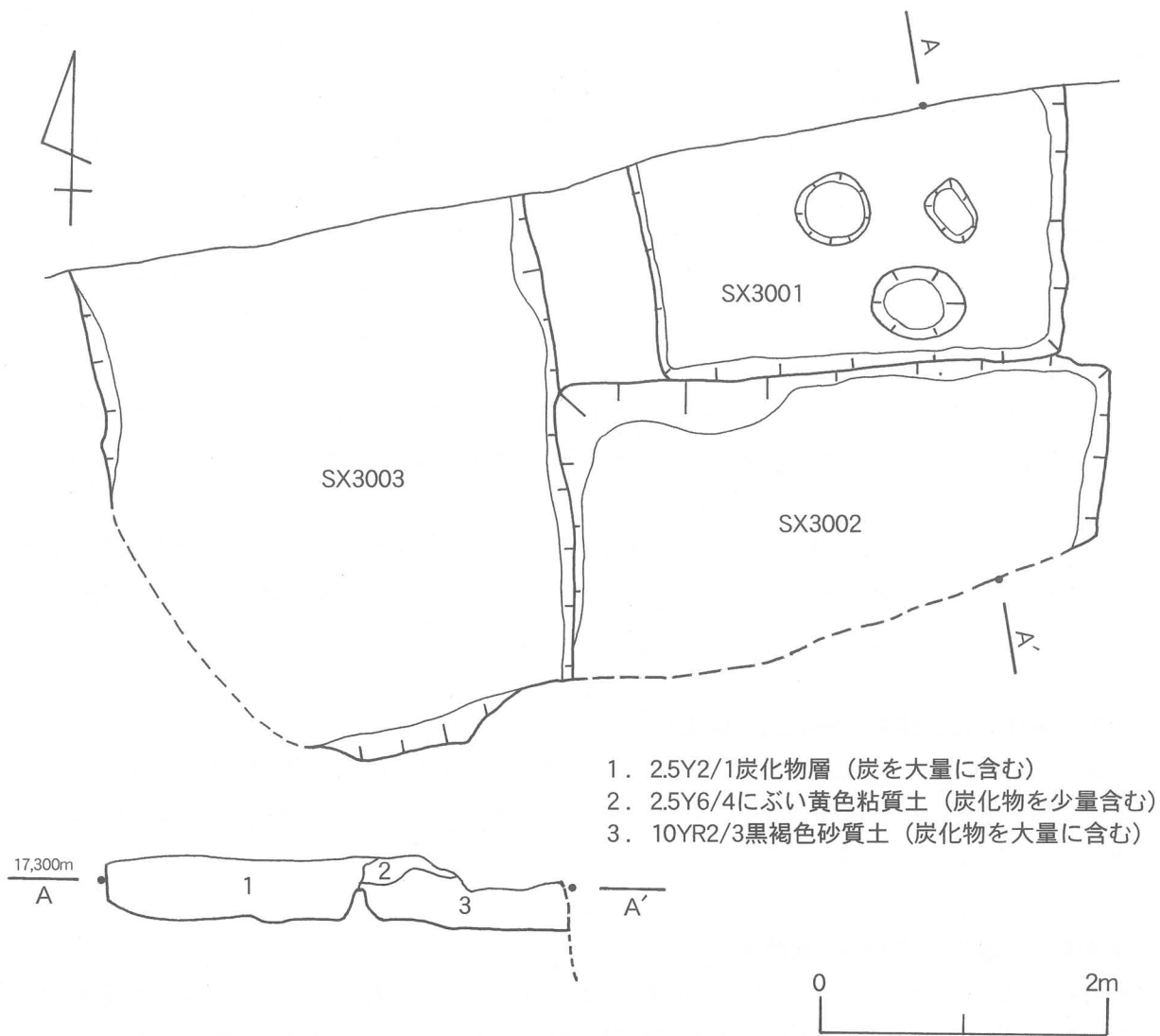
第3遺構面(17世紀末)(第61図、図版10)

本遺構面は、第2遺構面の火災の3年前である元禄12(1699)年の、寺院6ヶ寺、酒家16軒ほか多数の民家を焼いた火災面に相当する。標高は17.4mで、上面との比高差は10～20cmであった。

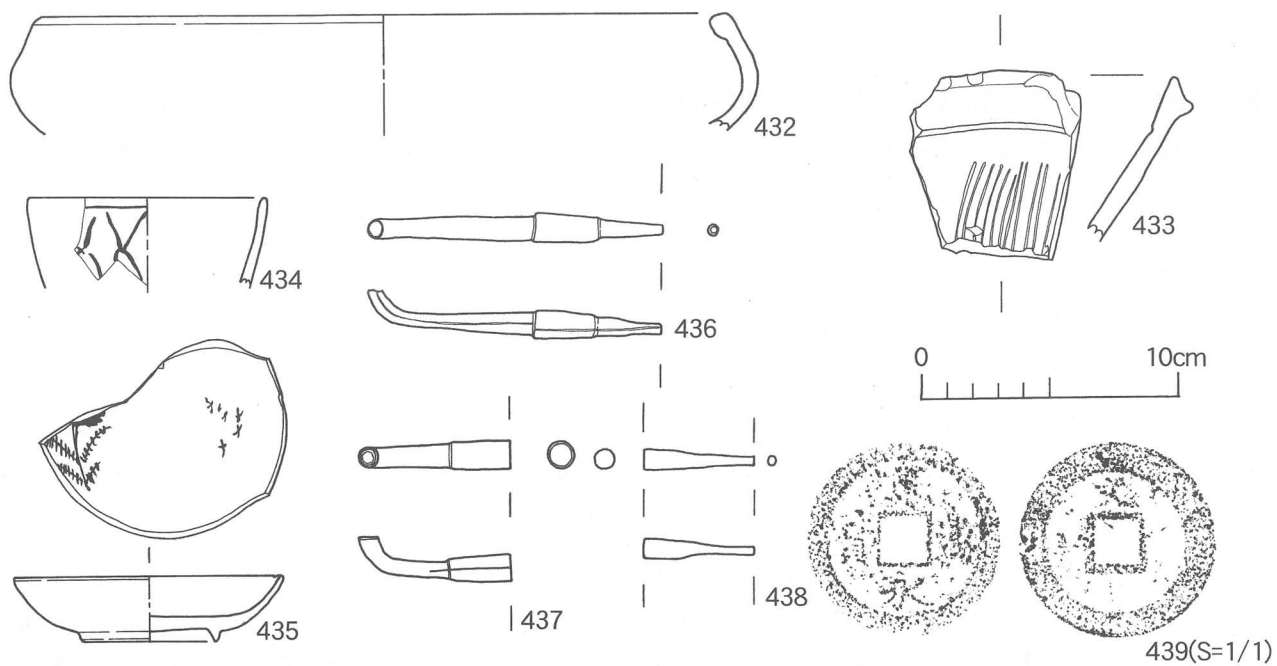
焼土土坑**SX3001～3003(第62・63図、図版11・41)**

調査区東壁際で検出された焼土廃棄土坑である。第2遺構面同様に建物の土間部分から検出された。3基の土坑は、調査区外に延びていたり、上面の焼土廃棄土坑に壊されていたため全体を検出することができなかった。土層断面からはSX3001とSX3002に新旧関係が認められ、SX3001が後に掘削されたことが判明した。

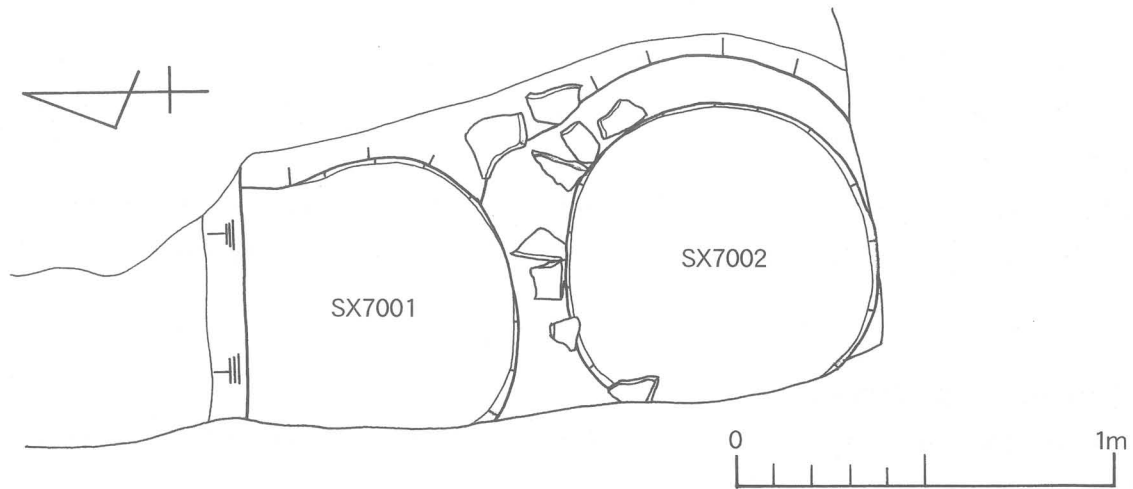
SX3001は、南北2.9m、深さが0.23mで、埋土には大量の炭が廃棄されていた。SX3002は、南北3.68m、深さが0.18mで、埋土に多量の炭化物と焼土が廃棄されていた。SX3003は、南北3.18m、深さが0.3mで、3基の中では一番規模の大きい土坑であった。3基ともに平面形態は長方形であったと思われる。



第62図 SX3001・3002・3003平面図、SX3001・SX3002断面図 (1/50)



第63図 SX3003出土遺物 (1/1・1/3)



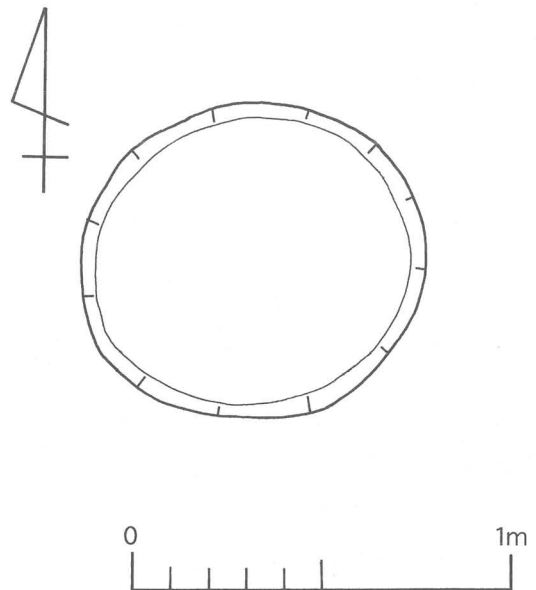
第64図 SX7001・SX7002平面図（1/20）

SX3003（第62・63図、図版11・41）

出土遺物は第63図432から439である。

焙烙（432）、丹波焼播鉢（433）、肥前白磁染付一重網目文碗（434）、口縁が輪花で見込みに花鳥文の肥前白磁染付皿（445）などがある。

陶磁器以外には、436から438は銅製の煙管で、吸口と雁首が接合されて一本の煙管になったもので、肩部に判読は出来ないが刻印をもつもの（436）・雁首（437）・吸口（438）や、背文に「文」の字をもつ寛永通寶（439）などが出土している。



第65図 SK3016平面図（1/20）

竈跡

SX7001・7002（第64図、図版10）

調査区南側の拡張区壁際で検出された竈である。焚き口がある西側は、調査区外に延びていたため全体の様相は不明である。南北方向に2基並んで構築されていた。北側のSX7001は燃焼室内側の直径が0.83m、深さが0.13mで、南側のSX7002は燃焼室内側の直径が0.86m、深さが0.17mであった。形態・形状から家庭用の竈であったと考えられる。

埋桶

SK3016（第65図、図版12）

調査区北東で検出された埋桶である。北側でSK3017を壊していた。桶の最大径は0.9mで、深さが0.66mであった。底部は平坦で、木質部が良好に残存していた。掘り方の幅は、0.1～0.25mで、南側に比べ北側が大きく掘られていた。

土坑

SX3005 (第61・66図、図版12・41)

調査区中央で検出された不整形を呈する土坑である。南北3.6m、東西2.4m、深さが0.42mで、底面はほぼ平坦であった。

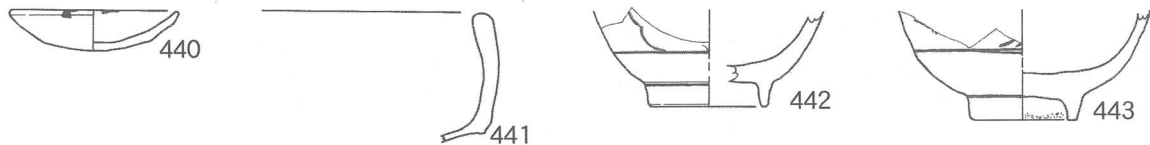
出土遺物は第66図440から443である。手捏ね成形の土師皿(440)。440は口縁部に煤が付着しているため、灯明皿として使用されていたと考える。焙烙(441)、肥前白磁染付碗(442・443)などが出土している。

SK3009 (第61・66図、図版41)

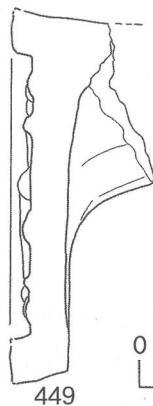
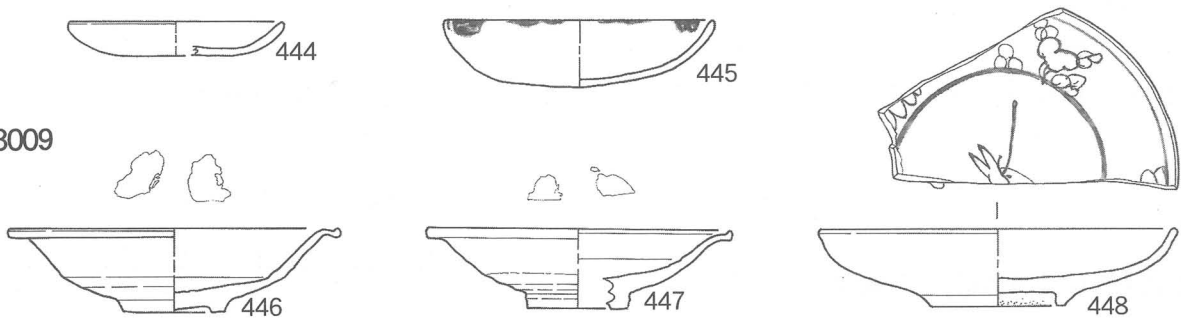
調査区の南壁際で検出された土坑である。全体の約1/2を調査した。東西1.73m、深さが0.51mで、平面形態は円形を呈すると思われる。

出土遺物は第66図444から449である。手捏ね成形の土師皿(444・445)。445は口径10cm前後の大型の土師皿で、口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたと考える。唐津焼砂目積み灰釉溝縁皿(446・447)、内面は花文で、見込みに蝶文の肥前白磁染付皿(448)がある。陶磁器以外には、軒丸瓦(449)などが出土している。

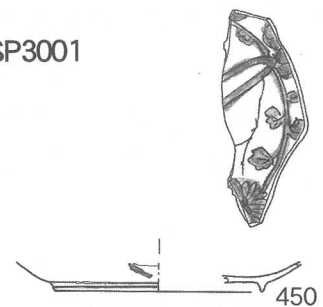
SX3005



SK3009



SP3001



第66図 SX3005・SK3009・SP3001出土遺物(1/3)

SP3001 (第61・66図、図版12)

調査区東側のSX3001内から検出されたピットである。規模は、南北0.62m、東西0.5m、深さが0.07mであった。平面形態は円形であった。

出土遺物は、第66図の中国製青花皿(450)などが出土している。

第3遺構面掘削時出土遺物(第67図、図版42)

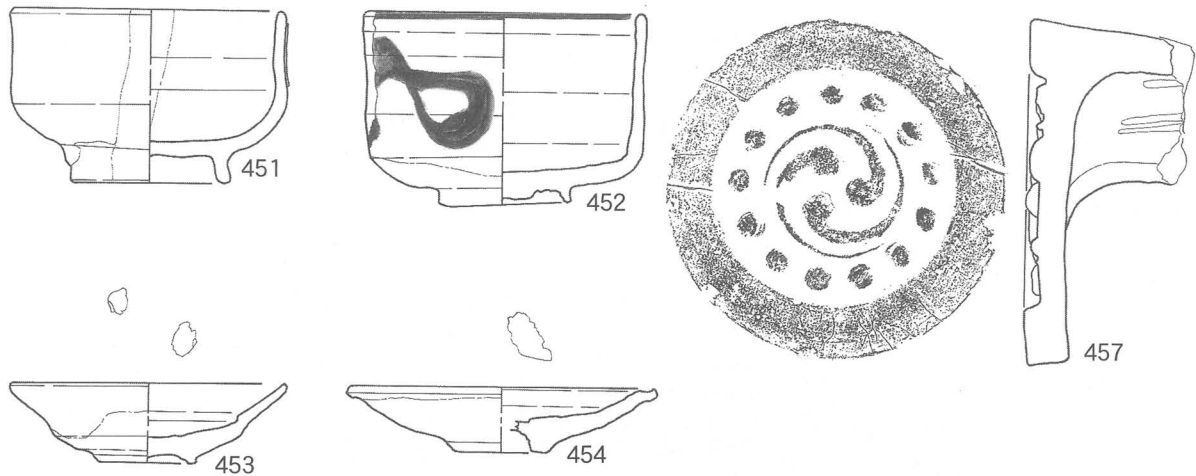
出土遺物は第67図451から457である。

鉄釉と灰釉を中央で掛け分けた瀬戸・美濃焼腰折碗(451)、口縁口錆で外面に鉄釉で文様を施した産地不明の鉄絵碗(452)、唐津焼胎土目積み灰釉皿(453)・砂目積み灰釉溝縁皿(454)、波雪輪文の肥前白磁染付碗(455)、肥前青磁香炉(456)、軒丸瓦(457)などが出土している。

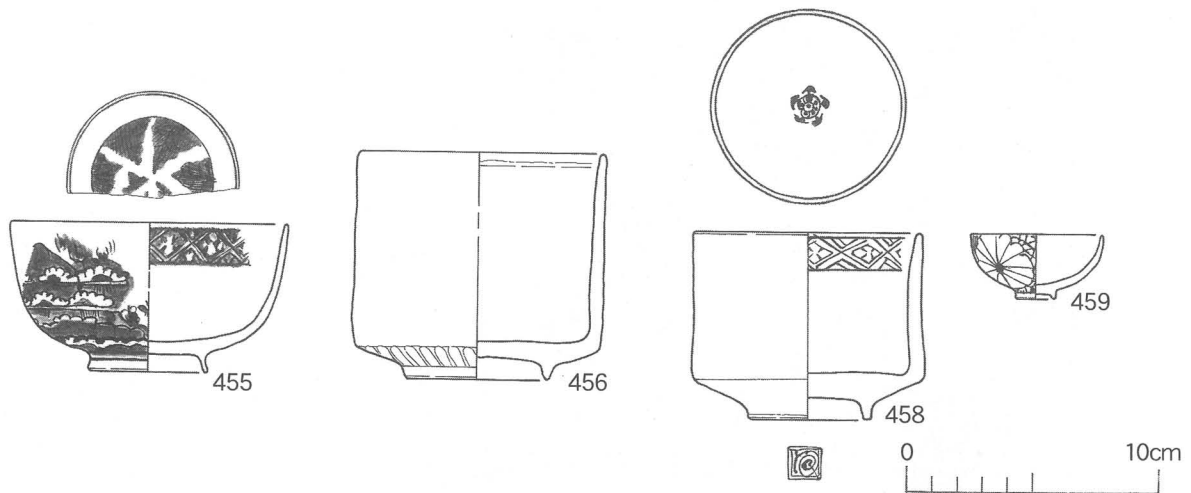
第3遺構面出土遺物(第67図、図版42)

出土遺物は第67図458と459である。見込みに手描き五弁花をもつ肥前青磁染付筒形碗(458)、氷裂菊花文の肥前白磁染付紅猪口(459)などが出土している。

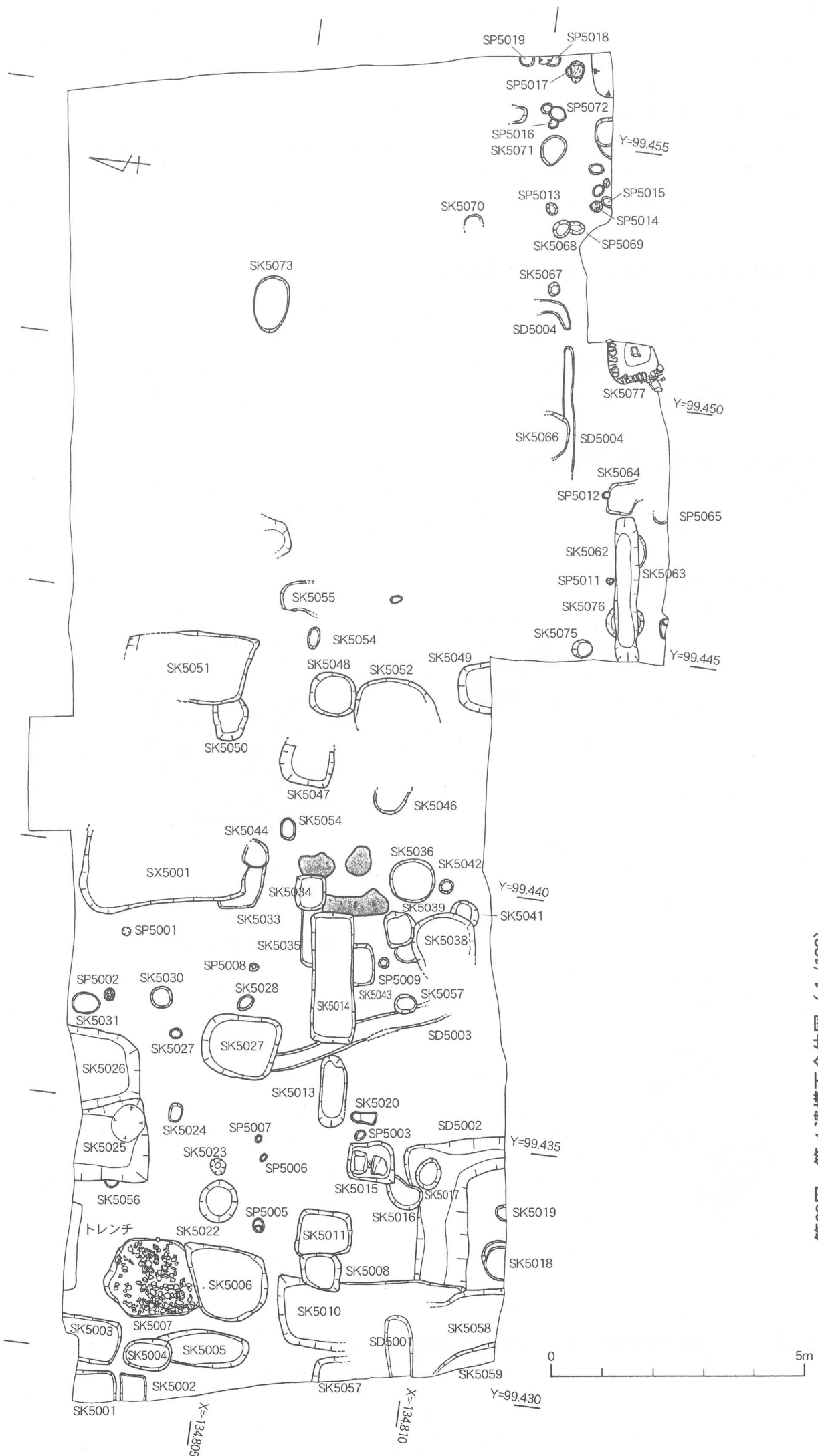
第3遺構面掘削時出土遺物



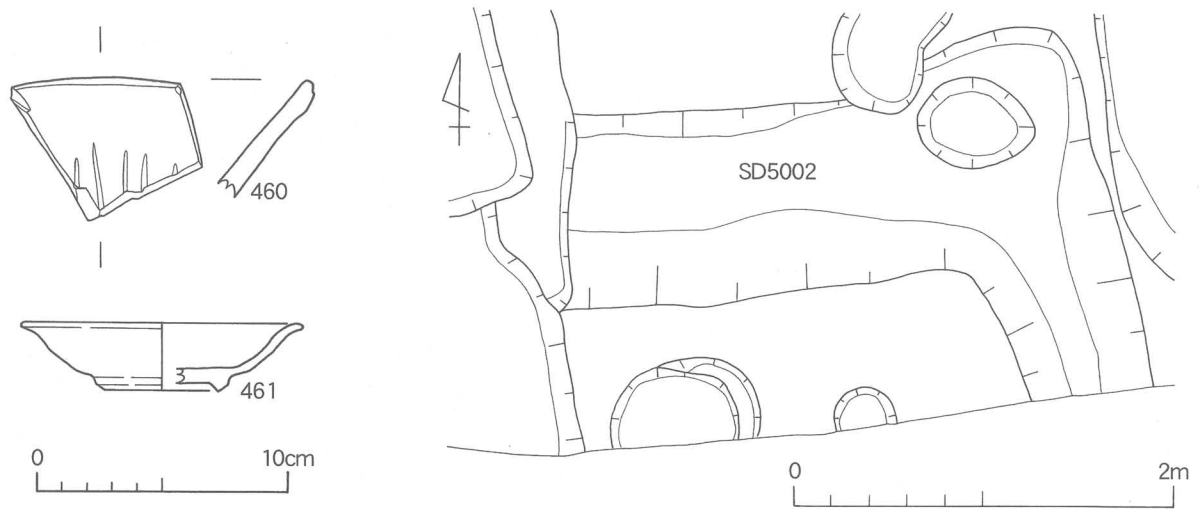
第3遺構面出土遺物



第67図 第3遺構面掘削時・第3遺構面出土遺物(1/3)



第68図 第4遺構面全体図 (1/100)



第69図 SD5002平面図（1/40）、出土遺物（1/3）

第4遺構面（17世紀前半～中葉、一部に有岡城期の遺構を含む）（第68図、図版13）

竪穴状遺構1基、溝4条、土坑77基、ピット19基を検出した。

調査区西端で検出された溝は、出土遺物から有岡城期まで遡る可能性がある。他にも、その時期の遺構が存在する可能性がある。

溝

SD5002（第69図、図版42）

調査区南西の壁際で検出された溝である。南北方向に走る溝が、調査区の壁際でほぼ直角に曲がり、西に延びていた。その先はSK5010などの土坑群に壊されており、部分的な検出にとどまった。幅0.63～1.04m、深さが0.3mと小規模の溝で、遺構の性格は不明である。出土した遺物から有岡城期までの時期に遡る可能性がある。

出土遺物は、第69図460と461である。摺り目へら描きの丹波焼播鉢（460）と、口縁端反で内面に陰刻で文様をもつ中国製青磁皿（461）などが出土している。

土坑

SK5001（第68・70図、図版42）

調査区の北西角で検出された土坑である。大半が調査区外に延びているため全体を調査することができなかったが、SK5003と同様の長方形を呈すると思われる。深さは0.18mで、底面はほぼ平坦であった。

出土遺物は、第70図462と463である。瀬戸・美濃焼天目碗（462）、笹文の肥前白磁染付碗（463）などが出土している。

SK5008（第68・70図、図版43）

調査区の西側で検出された土坑である。東側でSK5011を、西側でSK5010を壊していた。規模は、南北0.79m、東西0.73m、深さが0.18mで、平面形は台形をしていた。

出土遺物は第70図464から472である。

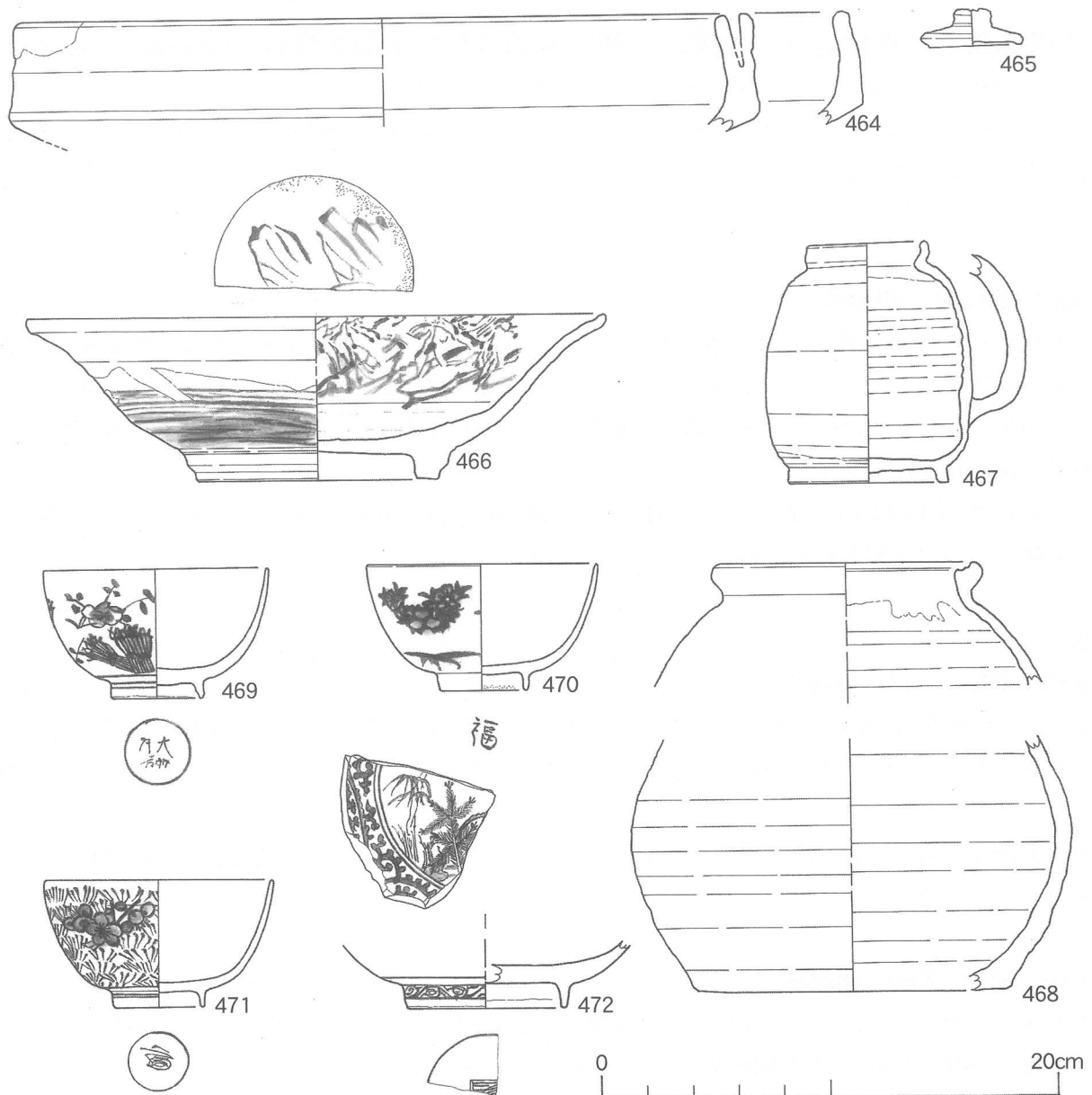
焙烙 (464)、唐津焼刷毛目鉢 (466)、瀬戸・美濃焼灰釉水注 (467)、丹波焼壺 (468)、産地不明陶器蓋 (465) である。468の口縁部と底部には接合点はないが、同一個体と考えられる。

469から472は肥前磁器で、手描き梅文とコンニャク印判稲束文併用の白磁染付碗 (469)・手描き笹文とコンニャク印判花文併用の白磁染付碗 (470)・コンニャク印判梅文の白磁染付碗 (471)・見込み松竹文の白磁染付皿 (472) などが出土している。

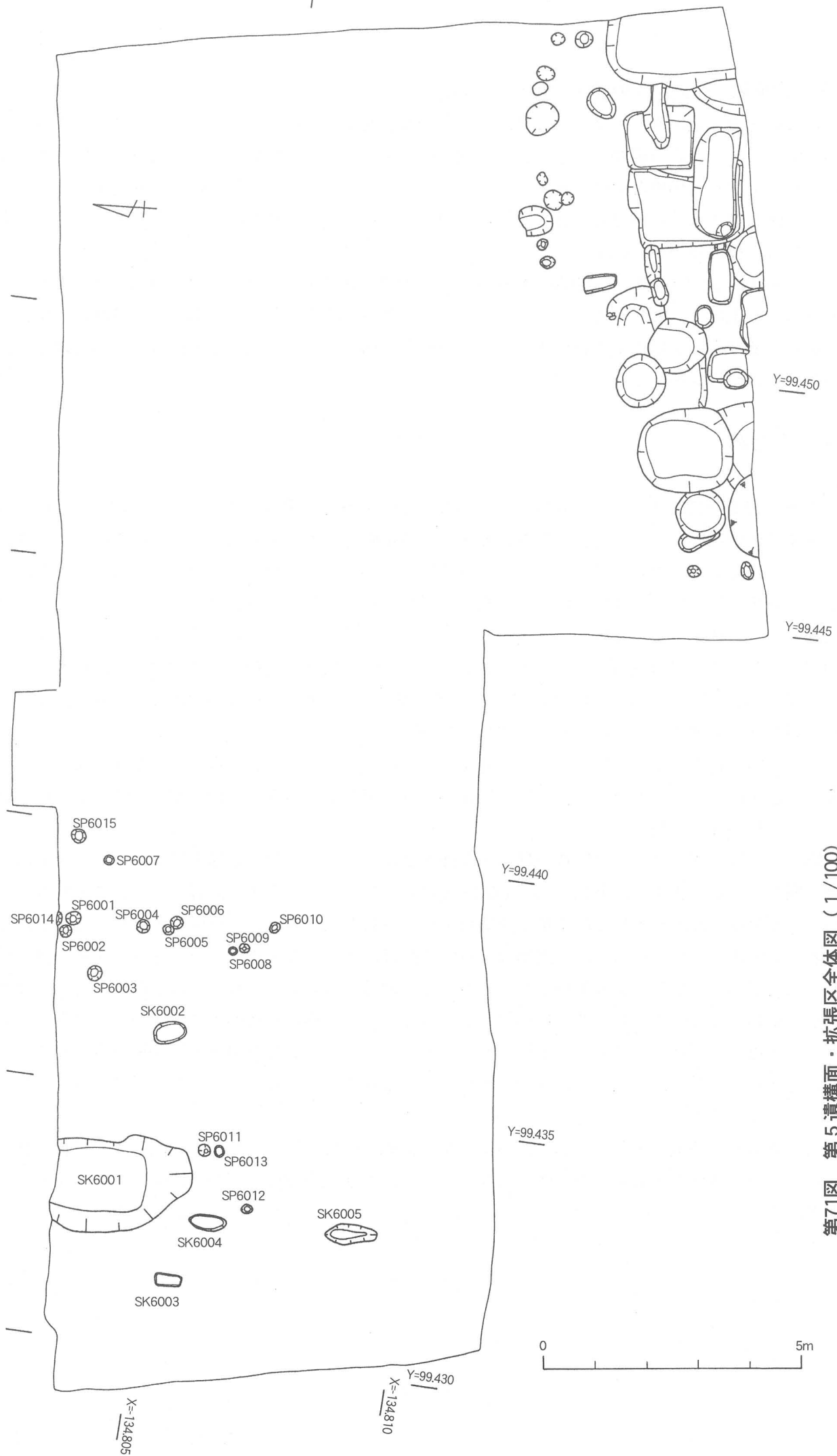
SK5001



SK5008



第70図 SK5001・SK5008出土遺物 (1/3)



第71図 第5遺構面・擴張区全体図 (1/100)

第5遺構面（弥生～中世）（第71図、図版13）

最終確認面の地山面からは土坑5基、ピット15本を検出した。これらの遺構は、調査区西側の比較的に地山の残りが良い範囲で検出された。調査区の東側は、上面で確認された複数の遺構が地山まで深く達しており、明確な遺構を検出することができなかった。第4遺構面から第5遺構面までの掘削中に、畿内第IV様式の櫛描波状文を施した壺胴部片や古墳時代後期の須恵器片などの土器が少量出土している。標高は16.9mであった。

SK6001は、調査区西側の北壁際で検出された。全体を調査することができなかったが、大型の長方形を呈する土坑で、東西1.83m、深さが0.13mと浅い掘り込みをもつものであった。遺物は、中世の鍔の狭い羽釜などの土器片が少量出土した。その他の遺構は、遺物の出土が無かったため時期を決定するまでには至らなかった。（中山）

4. まとめ

今回の調査で特に注目したい遺構は、SX1001である。第1遺構面で検出したSX1001は、出土遺物や遺構の検出状態から江戸時代後期から幕末頃の鑄造関連土坑と考えられる。この土坑は、調査区外へと広がっており、現時点では全体像は不明確である。しかし、現存している絵地図には、今回の調査区の近傍に江戸時代、鑄物や鍛冶を正業としていた者がいたことを書き記している。また、伊丹市北部には「鑄物師」という地名が残っており、鑄物を正業としていた者が多く定住していたことを窺わせる。ところが、「酒造業」は古くから注目されており、数々の史資料や考察の発表が行われているが、「鑄物業」については皆無であることからSX1001は大変興味深い資料である。今回の発見が「伊丹の鑄物師」の解明の端緒になればと思う。（船越）

また、同一の面で2基連結式の酒造用竈が検出されたことから、当地点の江戸時代後期以降の商工業の変遷を推測することができる。18世紀後半では小規模な酒造業が、19世紀には鑄物業が行われていた可能性が考えられる。

第2・3遺構面では、江戸時代中期の火災面を2面検出した。第3遺構面で検出された火災面は、焼土廃棄土坑から出土した遺物から、元禄12(1699)年に起こった火災で間違いがないと思われる。しかし、元禄15(1702)年と思われる第2遺構面で検出された火災面は、焼土廃棄土坑から出土した遺物と若干の矛盾が認められる。出土遺物は、丹波焼播鉢などの陶器で考えると、元禄15年の火災と一致する点が多い。しかし、肥前系磁器などの出土した磁器で考えると、見込みなどにコンニャク印判を施した遺物が多く認められ、新しい様相を呈することから、僅かな時期のズレが認められる。そのことから元禄15年以降の火災面の可能性も僅かに残る。しかし、第2遺構面と第3遺構面との層位がほとんど無いことから、それほどの時間差が無いものと考えられ、現段階では第2遺構面は元禄15年の火災であると考えられる。

第4遺構面の整地土中などからは、弥生土器、須恵器片が少量出土した。今回の調査では、弥生から古墳時代の遺構を検出することはできなかったが、本地点周辺に同時期の遺構の存在を窺わせるものである。（中山）

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX1001	第8図-1 図版14-1	犁先真土型	素焼き	最大厚 6.1 cm	下型 下面に線刻で「天保…卯口…」の銘有り 胎土に砂粒・石粒を大量に、雲母粉を若干含む	20% 上面に鉄分付着物有り
	第8図-2 図版14-2	犁先真土型	素焼き	最大厚 6.7 cm	下型 下面に線刻で銘有り 胎土に砂粒・石粒を多量に含む	2% 下面に鉄分付着物有り
	第8図-3 図版14-3	犁先真土型	素焼き		上型か下型か不明 下面に線刻で銘有り(一文字は「丑」か) 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	下面に鉄分付着
	第8図-4 図版14-4	犁先真土型	素焼き	最大厚 5.1 cm	上型 側面・下面丁寧なナデ調整 下面に線刻で銘有り 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	上面全面に真土付着 上下面に鉄分付着物有り
	第8図-5 図版14-5	犁先真土型	素焼き		下型 下面に線刻で銘有り 胎土に砂粒・石粒を多量に、若干雲母粉含む	10% 上面に鉄分付着物有り
	第9図-6 図版14-6	犁先真土型	素焼き	最大長 47.2 cm 最大幅 32.0 cm 最大厚 6.7 cm	上型 上面に斜格子状の線を刻む 下面縁に添って強いナデ(顕著に指頭圧痕残る) 胎土に砂粒・石粒を多量に、若干雲母粉含む	98% 上面に真土付着 下面に鉄分付着物有り
	第9図-7 図版14-7	犁先真土型	素焼き	最大厚 6.3 cm	下型 胎土に砂粒・石粒を多量に、若干雲母粉含む	10% 上面に鉄分付着痕有り
	第9図-8 図版14-8	犁先真土型	素焼き	最大厚 6.2 cm	下型 側面・下面丁寧なナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	5% 側面・下面鉄分付着物有り 上面端部真土残存
	第9図-9 図版15-9	犁先真土型	素焼き	最大厚 6.1 cm	上型 上面に斜格子状の線刻む 側面・下面丁寧なナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	上面に真土残存
	第10図-10 図版15-10	犁先真土型	素焼き	最大厚 9.7 cm	下型 側面丁寧なナデ調整 下面縁に添った強いナデ(顕著に指頭圧痕残る) 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	25% 上面に若干砂付着
	第10図-11 図版15-11	犁先真土型	素焼き	最大厚 5.2 cm	上型 上面平坦 側面・下面丁寧なナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	上面に真土残存、鉄分付着痕有り 側面・下面砂と鉄分付着痕有り
	第10図-12 図版15-12	不明	素焼き	縦 14.2 cm 横 15.5 cm 厚み 4.1 cm	下型か 上面形状不明の凹型有り 下面ヘラ描きで「八」の銘有り 胎土に雲母粉含む	100% 未使用品か
	第10図-13 図版15-13	犁先真土型	素焼き	最大厚 5.3 cm	上型 下面に線刻で銘有り 側面・下面丁寧なナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	上面に真土残存
	第11図-14 図版15-14	鑄型	素焼き	最大厚 3.5 cm	下型 下面に線刻で「…巳年八月…細工」の銘有り 上面凹みを作り、筋状の線を浅く刻む 外径面・下面丁寧なナデ調整	50% 上面薄く真土付着 上面に鉄分付着物有り
	第11図-15 図版15-15	鑄型	素焼き	外径 (21.0) cm 内径 3.6 cm 最大厚 4.6 cm	形状不明の上型 上面に放射状に筋を刻む 外径面・下面ナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	上面に鉄分付着物有り 遺物番号16と上下セット関係
	第11図-16 図版15-16	鑄型	素焼き	外径 18.0 cm 内径 3.0 cm 最大厚 5.4 cm	形状不明の下型 上面に筋を刻む 外径面・下面ナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	上面に鉄分付着有り 遺物番号15と上下セット関係
	第11図-17 図版16-17	ジョウ	素焼き	幅 6.4 cm 最大厚 5.7 cm	鍋の内型 上面に筋を刻む 外径面・下面ナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	内径面に薄く真土付着 上面に鉄分付着痕有り
	第11図-18 図版16-18	鑄型	素焼き	幅 5.3 cm 厚み 5.1 cm	形状不明の上型 上面に筋を刻む 外径面・内径面丁寧なナデ調整と指頭圧痕有り 下面丁寧なナデ調整	四面ともに鉄分付着物有り
	第11図-19 図版16-19	ジョウ	素焼き	幅 6.8 cm 最大厚 5.8 cm	鍋の内型 上面に筋を刻む 外径面・下面ナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	内径面・割れ口に薄く真土付着 上面・外径面に鉄分付着
	第11図-20 図版16-20	鑄型	素焼き	幅 5.2 cm 厚み 5.0 cm	形状不明の下型 上面に筋を浅く刻む 外径面・下面丁寧なナデ調整 内径面ハケ状工具による調整	上面・下面・外形面に鉄分付着物有り

第1表 第192次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX1001	第11図-21 図版16-21	鑄型	素焼き	外 径 (15.6) cm 内 径 (6.9) cm 最大厚 3.8 cm	形状不明の上型 上面に筋を細かく刻む 外径面・内径面・下面丁寧なナデ調整 胎土に砂粒・雲母粉含む	下面に鉄分と砂付着
	第11図-22 図版16-22	鑄型	素焼き	幅 5.4 cm 厚 み 5.2 cm	形状不明の下型 四面ともに丁寧なナデ調整	外径面下部に鉄分付着物有り
	第12図-23 図版16-23	羽口	素焼き	外 径 (13.8) cm 内 径 (8.2) cm	後端部 外面コビオサエ痕 内面縦方向の皺有り 胎土に雲母粉含む	
	第12図-24 図版16-24	羽口	素焼き	外 径 (14.2) cm 内 径 (9.4) cm	後端部 外面コビオサエ痕 内面丁寧なナデ 胎土に雲母粉含む	断面と外面に鉄分付着痕か
	第12図-25 図版16-25	羽口	素焼き	外 径 (11.4) cm 内 径 (8.8) cm	後端部 外面コビオサエ痕 胎土に雲母粉含む	内外面の一部に鉄分付着痕か
	第12図-26 図版16-26	羽口	素焼き	外 径 (13.2) cm 内 径 (7.6) cm	外面ナデ 胎土に雲母粉含む	外面前端部にスラグ状の付着物と砂付着 内面砂付着
	第12図-27 図版16-27	羽口	素焼き	外 径 (13.2) cm 内 径 (8.2) cm	外面ナデ 内面縦方向の皺有り 胎土に雲母粉含む	外面前端部にスラグ状の付着物と砂付着 内面砂付着
	第12図-28 図版16-28	羽口	素焼き	外 径 (15.6) cm 内 径 (8.2) cm	胎土に雲母粉含む	外面前端部にスラグ状の付着物と砂付着 内面砂付着
	第12図-29 図版16-29	羽口	素焼き	外 径 (14.2) cm 内 径 (8.2) cm	胎土に雲母粉含む	外面スラグ状の付着物と砂付着 内面前端部焼けている
	第12図-30 図版16-30	不明	素焼き	外 径 (9.8) cm 内 径 (5.2) cm	後端部 内外面丁寧なナデ 後端部は内面に横方向に面を作り、1ヶ所三角の切り込みを入れる 胎土に雲母粉含む	外面に鉄分付着物有り 内面は燃焼の為黒く焼けている
	第12図-31 図版16-31	円錐ピン	素焼き		形状は円錐型 ナデ調整 外面中心部に孔有り(貫通せず)	鑄型を焼くための道具 外面強い焼成を受ける 外面真土残存
	第12図-32 図版16-32	鑄型	素焼き	幅 5.3 cm 最大厚 3.1 cm	形状不明の下型 上面丁寧なナデ 上面中心部に先端が尖り棒状凸面 下面はナデ 胎土に雲母粉含む	上面と側面焼けている 上面に鉄分付着物有り 遺物番号33と上下関係
	第12図-33 図版16-33	鑄型	素焼き	高 さ 2.1 cm 厚 み 1.4 cm	形状不明の上型 外面ヘラケズリ調整 内面先端が尖り棒状の凹型 胎土に雲母粉付着	内外面若干焼けている 遺物番号32と上下関係
	第12図-34 図版16-34	焼塩壺	素焼き	口 径 (6.1) cm	輪積み成形 内面頸部丁寧なヨコナデ 内面体部布目痕有り 外面体部刻印有り	10% 内面体部下半焼けている為、鑄造関係で転用し使用か
	第13図-35 図版16-35	受皿	陶器	口 径 6.6 cm 器 高 1.1 cm	灰釉 外面口縁部より下露胎	伊賀・信楽 95%
	第13図-36 図版16-36	土瓶蓋	陶器	口 径 9.7 cm 器 高 4.1 cm 底 径 4.9 cm	無釉 つまみ擬宝珠形	産地不明 100%
	図版16-473	炉壁	素焼き		粗砂にスラグが溶着	
	図版16-474	炉壁	素焼き		粗砂にスラグが溶着	
	図版16-475	炉壁	素焼き		粗砂にスラグが溶着	
	図版16-476	不明	素焼き		形状不明の下型 上面に放射状に筋を浅く刻む 外径面丁寧なナデ調整 内径面・下面ナデ調整 胎土に砂粒・雲母粉含む	30% 上面に鉄分付着物と砂付着 外径面に鉄分付着物有り

第2表 第192次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX1001	図版16-477	不明	素焼き		形状不明の上型 下面に放射状の筋を浅く刻む 外径面・上面丁寧なナデ調整 内径面ナデ調整 胎土に砂粒・雲母粉含む	20% 下面に砂付着
	図版16-478	不明	素焼き		形状不明の下型 上面に格子状に筋を浅く刻む 外径面丁寧なナデ調整 内径面・下面ナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	20% 上面に砂付着
	図版16-479	不明	素焼き		形状不明の下型 上面に放射状の筋を浅く刻む 外径面丁寧なナデ調整 内径面・下面ナデ調整 胎土に砂粒・雲母粉含む	20% 上面に砂付着 外径面に鉄分付着物有り
	図版16-480	不明	素焼き		形状不明の下型 上面・内径面に筋を刻む 外径面・下面丁寧なナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	外径面・割れ口に鉄分不着物有り 全面に真土付着
	図版16-481	不明	素焼き		形状不明の下型 上面に筋を刻む 外径面・下面丁寧なナデ調整 内径面ナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	内径面・下面に鉄分付着物有り
	図版16-482	不明	素焼き		形状不明の下型 上面・内径面に格子状の筋を刻む 外径面丁寧なナデ調整 胎土に砂粒・雲母粉含む	下面割れ口に鉄分付着物有り 外径面に真土付着
	図版16-483	不明	素焼き		形状不明の下型 上面・内径面に格子状の筋を刻む 外径面丁寧なナデ調整 胎土に砂粒・雲母粉含む	下面割れ口に鉄分付着物有り
	図版16-484	不明	素焼き		形状不明の下型 上面に細かく円周に沿って筋を刻む 内径面・外径面・下面丁寧なナデ調整 胎土に砂粒・雲母粉を含む	内径面に鉄分付着 内径面・割れ口に砂付着
	図版16-485	炉壁	素焼き		粗砂にスラグが溶着	
	図版16-486	炉壁	素焼き		粗砂にスラグが溶着	
	第13図-37 図版17-37	花器	陶器	口径 2.2 cm 器高 9.7 cm 底径 3.2 cm	内面頸部から外面体部下半まで白色釉を掛け、その上から透明釉を掛ける 外面底部露胎	伊賀・信楽系 100%
第13図-38 図版17-38	行平鍋	陶器	口径 (15.4) cm 器高 6.3 cm 底径 (6.6) cm	灰釉 脚2ヶ所残存 把手部型押し成形による陽刻の文様有り 外面体部下半露胎	伊賀・信楽 45% 内外面貫入 外面底部煤けている	
第13図-39 図版17-39	土鍋	陶器	口径 18.8 cm	外面体部上半から内面塗り土を施す 把手2ヶ所有り 外面体部下半露胎	伊賀・信楽系 60% 底部周辺煤けている	
第13図-40 図版17-40	蓋	陶器	口径 14.5 cm 器高 3.8 cm つまみ径 3.5 cm	外面つまみ周辺鉄釉で花文を、上面に灰釉でイチン掛けを花文を施す 内面口縁部から外面露胎	伊賀・信楽系 50%	
第13図-41	擂鉢	陶器		クシ目一単位9本	堺・明石 2%	
第13図-42 図版17-42	染付小碗	白磁	口径 8.2 cm 器高 3.3 cm 高台径 2.8 cm	外面井桁文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50%	
第13図-43 図版17-43	染付小碗	白磁	口径 7.0 cm 器高 5.1 cm 高台径 3.1 cm	腰丸形 外面草花文と源氏香文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 99%	
第13図-44 図版17-44	染付小碗	白磁	口径 8.9 cm 器高 9.1 cm 高台径 3.7 cm	口縁端反り 外面蝶文 内面口縁部文様有り 見込み圏線と蝶文 高台量付露胎	肥前 80%	
第13図-45 図版17-45	染付碗	白磁	口径 9.6 cm 器高 4.9 cm 高台径 3.5 cm	外面葉文とコンニャク印判菊文併用 内面口縁部圏線有り 見込み圏線と寿字文 高台量付露胎	肥前 80%	
第13図-46 図版17-46	染付碗	白磁	口径 9.1 cm 器高 4.9 cm 高台径 3.5 cm	外面葉文とコンニャク印判菊文併用 内面口縁部圏線有り 見込み圏線と寿字文 高台量付露胎	肥前 95%	

第3表 第192次調査遺物観察表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX1001	第13図-47 図版17-47	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.3 cm 周縁厚 1.8 cm	橘文を中心飾りとする均整唐草文	瓦当部 50% 瓦当部銀化現象
	第13図-48 図版17-48	銭	銅	径 2.2 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
SD1001	第15図-49 図版18-49	焙烙	素焼き	口 径 30.4 cm	底部外型成形 内外面ヨコナデ 外面腰部ヘラケズリ	45% 外面煤けている
	第15図-50	焙烙	素焼き		内外面体部ヨコナデ	5% 外面煤けている
	第15図-51 図版18-51	土師皿	素焼き	口 径 (11.8) cm 器 高 2.2 cm cm	手握ね成形 外面体部指頭圧痕 内外面口縁部ヨコナデ 内面丁寧なナデ	在地 50% 口縁部煤付着
	第15図-52 図版18-52	土師皿	素焼き	口 径 9.6 cm 器 高 2.1 cm cm	手握ね成形 外面体部指頭圧痕 内外面口縁部ヨコナデ 内面丁寧なナデ	在地 100% 口縁部煤付着
	第15図-53 図版18-53	土師皿	素焼き	口 径 12.5 cm 器 高 2.9 cm	手握ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 内外面ナデ	在地 95% 口縁部煤付着
	第15図-54 図版18-54	土師皿	素焼き	口 径 9.5 cm 器 高 2.4 cm	手握ね成形 外面体部指頭圧痕 内外面口縁部ヨコナデ 内面丁寧なナデ	在地 99% 口縁部煤付着
	第15図-55 図版18-55	ミニチュア製品	素焼き	高 さ 5.5 cm 幅 3.3 cm 厚み 3.1 cm	人形(猿) 型押し成形 底部孔有り 表面雲母粉付着	98%
	第15図-56 図版18-56	ミニチュア製品	素焼き	径 4.4 cm 高 さ 1.4 cm	独楽 型押し成形 中心に孔有り(貫通) 表面に赤色で着色された跡有り 表面雲母粉付着	55%
	第15図-57 図版18-57	十能	素焼き	最大厚 3.3 cm	型作り成形 内面丁寧なナデ	30%
	第15図-58 図版18-58	鉄絵鉢	陶器	口 径 16.5 cm 器 高 8.9 cm 高台径 8.2 cm	口縁口錆 外面風景文 高台量付露胎	瀬戸・美濃 95% 内外面貫入する
	第15図-59 図版18-59	皿	陶器	口 径 9.1 cm 器 高 1.9 cm 底 径 3.8 cm	灰釉 内面口縁部菊花状の粘土貼り付け 見込み3条の斜格子上クシ目有り 目跡3ヶ所有り 外面体部から底部露胎	伊賀・信楽 85% 内面貫入する 口縁部煤付着
	第15図-60	壺	陶器	口 径 11.2 cm 器 高 15.6 cm 底 径 (8.0) cm	鉄釉 外面肩部から鉄釉流し掛け 底部露胎	信楽 75%
	第15図-61 図版18-61	小鉢	陶器	口 径 (10.9) cm	鉄釉	京焼系 15%
	第15図-62 図版18-62	ミニチュア製品	陶器	口 径 (8.3) cm 器 高 3.6 cm 高台径 3.2 cm	ままごと道具(土鍋) 鉄釉 把手1ヶ所残存 脚1ヶ所残存 底部周辺露胎	伊賀・信楽 25%
	第15図-63 図版18-63	德利	陶器	底 径 2.4 cm	外面塗り土を施す 外面胴部を凹ませ、布袋を型抜きし、貼り付け 外面体部下半・内面露胎	備前 95%
	第15図-64	甕	陶器	口 径 (35.6) cm 器 高 45.5 cm 底 径 20.0 cm	外面鉄釉の上から灰釉流し掛け 内面灰釉 底部露胎	丹波 80%
	第15図-65 図版18-65	鉢	陶器	口 径 (19.1) cm 器 高 13.1 cm 底 径 11.2 cm	外面鉄釉と灰釉で文様を描く	丹波 50% 二次焼成受ける
第15図-66 図版18-66	播鉢	陶器		クシ目一単位8本 外面口縁部から内面口口ロナデ 外面体部指頭圧痕調整	丹波 2%	

第4表 第192次調査遺物観察表(4)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SD1001	第15図-67 図版18-67	播鉢	陶器		クシ目一単位8本	丹波 5% 外面自然釉掛かる
	第16図-68 図版18-68	播鉢	陶器	口径 32.6 cm 器高 12.8 cm 底径 16.1 cm	クシ目一単位9本 見込みクシ目一単位7本 外面体部口クロヘラケズリ 底部離れ砂付着	明石 90%
	第16図-69 図版18-69	播鉢	陶器	口径 (33.0) cm 器高 12.0 cm 高台径 (15.4) cm	クシ目一単位7本 見込みクシ目一単位7本 外面体部口クロヘラケズリ 口縁部肩口部に刻印有り	堺 30%
	第16図-70 図版19-70	軒丸瓦	瓦	周縁厚 1.8 cm 瓦当厚 1.3 cm	左巻き三巴文 珠文数13個 瓦当側接合面横方向のカキメ有り 表面雲母粉付着	瓦当部 98%
	第16図-71 図版19-71	軒丸瓦	瓦	周縁厚 2.0 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 珠文数15個 瓦当側接合面横方向のカキメ有り	瓦当部 98%
	第17図-72 図版19-72	染付碗	白磁	口径 12.3 cm 器高 6.0 cm 高台径 5.2 cm	外面丸文を手描きとコンニャク印判併用 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 高台内圏線と方形枠の渦福 高台量付露胎	肥前 95% 量付離れ砂付着
	第17図-73 図版19-73	染付碗	白磁	口径 11.6 cm 器高 5.9 cm 高台径 4.8 cm	外面丸文を手描きとコンニャク印判併用 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 高台内圏線と銘 高台量付露胎	肥前 95% 量付離れ砂付着
	第17図-74 図版19-74	染付碗	白磁	口径 9.8 cm 器高 4.9 cm 高台径 4.0 cm	外面草花文 高台内銘有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 98%
	第17図-75 図版19-75	染付碗	白磁	口径 9.7 cm 器高 5.0 cm 高台径 4.1 cm	外面二重網目文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 98%
	第17図-76 図版19-76	染付碗	青磁	口径 11.4 cm 器高 6.5 cm 高台径 4.4 cm	筒形 外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台内二重方形枠の渦福 高台量付露胎	肥前 80% 離れ砂付着
	第17図-77 図版19-77	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 4.9 cm 高台径 3.6 cm	外面靈芝花文 内面口縁部二重圏線 見込み二重圏線と花文 高台量付露胎	肥前 50% 二次焼成受ける
	第17図-78 図版19-78	染付碗	白磁	口径 8.4 cm 器高 4.0 cm 高台径 3.2 cm	外面網目文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と文様有り 高台量付露胎	肥前 50%
	第17図-79	染付碗	白磁	口径 (10.3) cm 器高 5.4 cm 高台径 3.8 cm	外面蝶連子格子文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と寿字文有り 高台量付露胎	肥前 55%
	第17図-80 図版19-80	染付碗	白磁	口径 13.0 cm 器高 6.7 cm 高台径 7.1 cm	広東形 外面草花文 見込み花文 高台量付露胎	肥前 65%
	第17図-81	染付碗	白磁	口径 (10.5) cm 器高 5.7 cm 高台径 6.3 cm	広東形 外面文様有り 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と蝶文有り 高台量付露胎	肥前 35% 見込み付着物有り
	第17図-82 図版19-82	染付碗	白磁	口径 8.6 cm 器高 5.3 cm 高台径 2.8 cm	外面松文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台量付露胎	肥前 65%
	第17図-83 図版19-83	染付碗	白磁	口径 (8.8) cm 器高 5.2 cm 高台径 (3.6) cm	外面松文 内面口縁部二重圏線 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45%
	第17図-84 図版20-84	染付碗	白磁	口径 11.8 cm 器高 6.3 cm 高台径 5.1 cm	外面草花文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と草花文 高台量付露胎	肥前 55% 見込み中心部丸く打ち欠く
	第17図-85 図版20-85	染付碗	青磁	口径 (7.3) cm 器高 6.7 cm 高台径 (3.6) cm	筒形 外面・高台内青磁釉 内面白磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎	肥前 45%
	第17図-86 図版20-86	染付碗	青磁	口径 7.9 cm 器高 6.1 cm 高台径 4.0 cm	筒形 外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台内銘有り 高台量付露胎	肥前 95% 高台量付離れ砂付着

第5表 第192次調査遺物観察表(5)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等	
SD1001	第17図-87 図版20-87	染付碗	白磁	口径 7.2 cm 器高 5.7 cm 高台径 3.6 cm	筒形 外面コンニャク印判で文様有り 内面口縁部二重圏線 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花高台量付露胎	肥前 90%	
	第17図-88	染付碗	白磁	口径 (8.9) cm	口縁端反り 外面山水文 内面口縁部圏線有り	瀬戸 15%	
	第17図-89 図版20-89	染付小杯	白磁	口径 (7.1) cm 器高 3.7 cm 高台径 (3.2) cm	口縁端反り 外面人物文 見込み鷺文 高台量付露胎	肥前 40%	
	第17図-90 図版20-90	染付小杯	白磁	口径 7.3 cm 器高 3.4 cm 高台径 2.9 cm	口縁端反り 外面文様有り 高台量付露胎	肥前 50%	
	第17図-91 図版20-91	紅皿	白磁	口径 4.9 cm 器高 1.6 cm 高台径 1.6 cm	型押し成形 外面高台周辺露胎	肥前 50% 内外面貫入	
	第17図-92 図版20-92	染付紅猪口	白磁	口径 5.9 cm 器高 1.9 cm 高台径 2.5 cm	外面笹文 高台量付露胎	肥前 45%	
	第17図-93 図版20-93	染付紅猪口	白磁	口径 (5.2) cm 器高 2.4 cm 高台径 (3.0) cm	外面水裂菊文 口縁部露胎 高台量付露胎	肥前 40%	
	第17図-94 図版20-94	染付皿	白磁	口径 (8.4) cm 器高 1.8 cm 高台径 (5.0) cm	見込み文様有り 高台量付露胎	肥前 15%	
	第17図-95	皿	白磁	口径 (9.6) cm 器高 2.5 cm 高台径 4.1 cm	口縁折れ縁状 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50%	
	第17図-96	皿	白磁	口径 19.4 cm 器高 4.6 cm 高台径 9.6 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 25%	
	第18図-97 図版20-97	染付皿	白磁	口径 (14.1) cm 器高 3.7 cm 高台径 8.4 cm	外面唐草文 内面草花文 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花有り 高台内圏線と渦福有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45%	
	第18図-98 図版20-98	染付皿	白磁	口径 18.2 cm 器高 5.5 cm 高台径 10.1 cm	外面唐草文 内面花唐草文 見込み圏線とコンニャク印判五弁花 高台内圏線と方形枠の渦福 高台量付露胎	肥前 60%	
	第18図-99 図版20-99	赤絵皿	白磁	口径 (19.2) cm 器高 9.1 cm 高台径 (11.2) cm	口縁口紅 外面折れ松葉文 内面・見込み文字有り 見込み蛇の目釉剥ぎ、圏線と連弁文 連弁文に緑釉施す 量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 内外面赤で文様を施す	
	第18図-100 図版20-100	染付皿	青磁	口径 (14.9) cm 器高 5.2 cm 高台径 8.7 cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 内面口縁部四方襷文 見込み草花文 高台内二重方形枠に渦福 蛇の目凹型高台	肥前 50%	
	第18図-101 図版21-101	仏飯具	白磁	口径 (5.7) cm 器高 5.0 cm 高台径 3.3 cm	外面松文 底部露胎	肥前 80%	
	第18図-102 図版21-102	仏飯具	白磁	底径 4.2 cm	鉄釉 外面体部下口縁部有り 底部露胎	肥前 50%	
	第18図-103 図版21-103	水滴	白磁	厚み 3.1 cm	型押し成形 上面に陽刻で花文を施す 内面露胎	肥前 15%	
	SD1002	第18図-104 図版21-104	土師皿	素焼き	口径 (6.7) cm 器高 1.7 cm	ロク口成形 底部糸切り痕有り(左巻き)	在地 50%
		第18図-105 図版21-105	受皿	素焼き	口径 (6.9) cm 器高 1.3 cm	ロク口成形 底部糸切り痕有り	在地 25% 内外面焼けている
第18図-106 図版21-106		土師皿	素焼き	口径 (10.6) cm 器高 (2.0) cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 25% 口縁部煤付着	

第6表 第192次調査遺物観察表(6)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SD1002	第18図-107 図版21-107	ミニチュア製品	素焼き	縦 2.1 cm 幅 1.9 cm 厚み 1.2 cm	芥子面子(猿) 型押し成形	95%
	第18図-108 図版21-108	染付碗	白磁	口径 (10.2) cm 器高 5.3 cm 高台径 3.7 cm	外面丸文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と丸文 高台壘付露胎	肥前 50%
	第18図-109	柄付き皿	鉄	最大厚 1.1 cm	柄部分は断面蒲鉾型を呈する	全体に赤錆付着のため、腐蝕が著しい
SD2001	第18図-110 図版21-110	土師皿	素焼き	口径 (10.1) cm 器高 2.3 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指頭圧痕 内面体部ナデ	在地 20% 内面煤けている
	第18図-111 図版21-111	土師皿	素焼き	口径 (8.1) cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 35%
	第18図-112 図版21-112	土師皿	素焼き	口径 (7.0) cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 30%
	第18図-113 図版21-113	土師皿	素焼き	口径 (8.1) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 30% 口縁部煤付着
	第18図-114 図版21-114	土師皿	素焼き	口径 (12.5) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指頭圧痕 内面体部ナデ	在地 15% 口縁部煤付着
	第18図-115 図版21-115	ミニチュア製品	素焼き	径 4.4 cm 高さ 2.0 cm	独楽(菊) 型押し成形 中心に孔有り(貫通せず) 表面雲母粉付着	100%
	第18図-116 図版21-116	ミニチュア製品	素焼き	最大幅 4.7 cm 最大厚 1.8 cm	人形(天神) 型押し成形 底部に孔有り(貫通せず) 表面雲母粉付着	90%
	第18図-117 図版21-117	ミニチュア製品	軟質施釉陶器	径 4.0 cm 高さ 1.6 cm 厚み 2.7 cm	灯火器 型作り成形 内面柿釉 外面ナデ 内面ヨコナデ 灯明芯保持部分貼り付け、中心に孔有り(貫通)	98%
	第18図-118 図版21-118	ミニチュア製品	素焼き	縦 3.2 cm 幅 2.8 cm 高さ 1.0 cm	芥子面子(顔) 型押し成形	100%
	第18図-119 図版21-119	ミニチュア製品	素焼き	縦 3.1 cm 幅 2.0 cm 高さ 0.8 cm	芥子面子(顔) 型押し成形	98%
	第18図-120 図版21-120	ミニチュア製品	素焼き	縦 3.4 cm 幅 2.2 cm 高さ 1.0 cm	芥子面子(顔) 型押し成形	99%
	第19図-121 図版21-121	焙烙	素焼き	口径 (36.9) cm	内外面ヨコナデ	3% 外面体部煤けている
	第19図-122 図版21-122	焙烙	素焼き	口径 (35.4) cm	外面口縁部から内面ヨコナデ 外面体部ナデ	15% 外面体部雲母粉付着 外面煤けている
	第19図-123 図版21-123	焙烙	素焼き	口径 (31.8) cm	底部外型成形 内外面ヨコナデ	5% 外面煤けている
	第19図-124 図版21-124	皿	陶器	口径 (12.8) cm 器高 2.6 cm 高台径 (8.0) cm	灰釉 見込み目跡1ヶ所残存 外面体部下半から下露胎	瀬戸・美濃 25% 内外面貫入する
	第19図-125	合子	陶器	口径 (7.6) cm 器高 4.6 cm 底径 (4.3) cm	灰釉 口縁端部・高台周辺露胎	伊賀・信楽 20% 内外面貫入する
	第19図-126 図版21-126	花器	陶器	口径 19.6 cm 器高 18.9 cm 底径 10.7 cm	鉄釉 耳2ヶ所所有り 底部露胎	伊賀・信楽 60%

第7表 第192次調査遺物観察表(7)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SD2001	第19図-127 図版21-127	片口鉢	陶器	口径 11.8 cm 器高 4.5 cm 高台径 5.2 cm	灰釉 外面体部下半から下露胎 削り出し高台	伊賀・信楽 85%
	第19図-128	ミニチュア製品	陶器	口径 (8.6) cm 器高 3.7 cm 底径 (3.8) cm	ままごと道具(土鍋) 鉄釉 脚1ヶ所残存 見込み目跡1ヶ所残存 底部周辺露胎	伊賀・信楽 20%
	第19図-129 図版21-129	土鍋	陶器	口径 18.6 cm 器高 8.0 cm 底径 7.9 cm	鉄釉 把手2ヶ所有り 脚2ヶ所残存 見込み目跡2ヶ所残存 底部周辺露胎	伊賀・信楽 85% 外面煤けている
	第19図-130 図版22-130	鉢	陶器	口径 33.6 cm 器高 12.0 cm 高台径 11.3 cm	三島手 外面口縁部から体部上半灰釉 外面体部下半鉄釉を刷毛塗り 内面長石釉 内面象嵌で文様を施す 見込み環状に砂目有り 高台露胎	唐津 80%
	第20図-131 図版22-131	播鉢	陶器	口径 33.1 cm 器高 13.4 cm 底径 14.0 cm	クシ目一単位9本	堺 90% 二次焼成受ける
	第20図-132 図版22-132	播鉢	陶器	口径 (36.2) cm 器高 13.2 cm 底径 16.0 cm	クシ目一単位10本	堺 45%
	第20図-133 図版22-133	播鉢	陶器	口径 (28.2) cm 器高 9.2 cm 高台径 (13.5) cm	クシ目一単位9本	堺 40% 二次焼成受ける
	第21図-134	染付紅猪口	白磁	口径 (7.7) cm 器高 3.8 cm 高台径 2.9 cm	外面笹文 高台量付露胎	肥前 60%
	第21図-135 図版22-135	染付碗	白磁	口径 (11.8) cm 器高 6.0 cm 高台径 4.7 cm	外面丸文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 高台内銘有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50%
	第21図-136 図版22-136	染付碗	白磁	口径 9.5 cm 器高 5.0 cm 高台径 4.3 cm	外面雪輪草花文 高台内銘有り 高台量付露胎	肥前 98%
	第21図-137 図版22-137	染付碗	白磁	口径 10.3 cm 器高 5.3 cm 高台径 3.9 cm	外面桜文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と手描き五弁花 高台量付露胎	肥前 90% 内外面貫入 二次焼成受ける
	第21図-138 図版22-138	染付碗	白磁	口径 (10.5) cm 器高 5.2 cm 高台径 3.9 cm	外面文様有り 内面口縁部二重圏線有り 見込み二重圏線と虫文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 55%
	第21図-139 図版22-139	染付碗	白磁	口径 10.7 cm 器高 5.5 cm 高台径 3.9 cm	外面七宝文と算盤文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と源氏香文 高台量付露胎	肥前 90%
	第21図-140 図版22-140	染付碗	白磁	口径 10.8 cm 器高 5.8 cm 高台径 4.7 cm	外面竹文 見込み二重圏線と虫文 高台量付露胎	肥前 80%
	第21図-141 図版22-141	染付碗	白磁	口径 11.0 cm 器高 6.1 cm 高台径 4.6 cm	内外面・見込み横縞文 高台量付露胎	肥前 85%
	第21図-142 図版22-142	染付碗	白磁	口径 (8.8) cm 器高 5.1 cm 高台径 (3.7) cm	外面松文 内面口縁部二重圏線有り 内面二重圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 30%
	第21図-143	染付碗	白磁	口径 (11.4) cm 器高 7.4 cm 高台径 5.9 cm	外面花文 口縁端部・内面口縁部露胎 高台量付露胎	肥前 25%
	第21図-144	染付碗	白磁	口径 (11.6) cm 器高 5.9 cm 高台径 (6.4) cm	広東形 外面扇面文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と文様有り 高台内圏線有り 高台量付露胎	肥前 30%
	第21図-145 図版23-145	染付碗	白磁	口径 11.7 cm 器高 6.6 cm 高台径 4.8 cm	外面蛸唐草文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と環状松竹梅文 高台量付露胎	肥前 90% 二次焼成受ける
	第21図-146 図版23-146	染付碗	青磁	口径 (7.1) cm 器高 6.5 cm 高台径 3.9 cm	筒形 外面青磁釉 内面白磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 量付露胎 離れ砂付着	肥前 80%

第8表 第192次調査遺物観察表(8)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SD2001	第21図-147 図版23-147	染付碗	白磁	口径 (8.0)cm 器高 6.1cm 高台径 4.1cm	筒形 外面唇文 高台周辺文様有り 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台量付露胎	肥前 40%
	第21図-148 図版23-148	染付碗	白磁	口径 (7.3)cm 器高 5.9cm 高台径 3.6cm	筒形 口縁口錆 外面凹線を巡らし、その中央に鉄釉を帯状に施す 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 70%
	第21図-149 図版23-149	染付鉢	白磁	口径 (10.0)cm 器高 7.9cm 高台径 (7.0)cm	筒形 口縁口青 外面瓔珞文 内面口縁部瓔珞文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 蛇の目凹型高台	肥前 35% 内外面貫入
	第21図-150 図版23-150	染付蓋物蓋	白磁	口径 9.0cm 器高 2.9cm	外面草花文 口縁部露胎 離れ砂付着	肥前 80%
	第21図-151 図版23-151	染付碗蓋	白磁	口径 10.7cm 器高 2.8cm つまみ径 6.0cm	外面寿字文 内面二重圏線有り 見込み二重圏線と寿字文 つまみ内圏線と銘有り 高台量付露胎	肥前 95% 内外面貫入
	第21図-152 図版23-152	青花皿	白磁	口径 13.9cm 器高 4.4cm 高台径 5.9cm	口縁折れ縁 内面口縁部圏線有り 見込み花文 削り出し高台 高台露胎 高台外側側面に離れ砂付着	中国 80% 二次焼成受ける
	第21図-153 図版23-153	染付皿	白磁	口径 (14.4)cm 器高 3.0cm 高台径 (7.7)cm	内面草花文 見込み圏線とコンニャク印判五弁花と蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45% 二次焼成受ける
	第21図-154 図版23-154	染付皿	白磁	口径 (13.5)cm 器高 3.9cm 高台径 (8.8)cm	外面唐草文 内面竹文 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 高台内圏線と渦福 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50%
	第21図-155 図版23-155	紅皿	白磁	口径 4.6cm 器高 1.5cm 高台径 1.3cm	型押し成形 外面口縁部より下露胎	肥前 90%
	第21図-156 図版24-156	染付皿	白磁	口径 (12.5)cm 器高 3.5cm 高台径 4.8cm	内面二重斜格子文 見込み圏線と蛇の目釉剥ぎアルミナ砂塗布 重ね焼き痕有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
	第22図-157 図版24-157	大皿	青磁	口径 (26.4)cm 器高 8.5cm 高台径 9.9cm	口縁輪花 脚3ヵ所有り 見込み蛇の目釉剥ぎ 見込み離れ砂付着 外面口縁部下に凹線有り 蛇の目凹型高台 離れ砂付着	肥前 75% 内外面貫入
	第22図-158 図版24-158	染付皿	白磁	口径 (11.2)cm 器高 2.8cm 高台径 (6.3)cm	型打ち成形 口縁輪花で口錆 内面口縁部丸と菱形文 見込み圏線と唐子文 高台量付露胎	肥前 50%
	第22図-159 図版24-159	染付皿	白磁	口径 11.5cm 器高 3.0cm 高台径 6.9cm	型打ち成形 口縁輪花 外面蕪束文 内面唐草文 見込み二重圏線有り 高台内圏線有り 高台量付露胎離れ砂付着	肥前 90% 二次焼成受ける
	第22図-160 図版24-160	染付鉢	白磁	口径 16.4cm 器高 6.3cm 高台径 9.6cm	外面唐草文 内面草花文 見込み環状松竹梅文と帯上に渦文めぐる 蛇の目凹型高台 高台内二重方形枠の渦福 高台離れ砂付着	肥前 70%
	第22図-161 図版24-161	染付鉢	白磁	口径 21.0cm 器高 7.6cm 高台径 11.4cm	口縁折れ縁で輪花 外面唐草文 内面口縁部波に花文 見込み二重圏線と竹梅文 高台内銘有り 蛇の目凹型高台	肥前 90% 高台内離れ砂付着 二次焼成受ける
	第22図-162	染付瓶	白磁	口径 4.9cm 器高 22.4cm 高台径 7.8cm	外面蛇籠文 内面頸部から下露胎 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 80%
	第22図-163 図版24-163	染付水注	白磁	口径 7.2cm 器高 8.5cm 高台径 7.0cm	外面花唐草文 口縁部・高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 85% 二次焼成受ける
	第22図-164 図版24-164	軒丸瓦	瓦	周縁厚 1.8cm 瓦当厚 1.1cm	左巻き三巴文 珠文数10個以上 瓦当部雲母粉付着	50% 二次焼成受ける
	第22図-165 図版24-165	軒丸瓦	瓦	瓦当厚 1.6cm	左巻き三巴文 珠文数7個以上 瓦当部雲母粉付着	50% 二次焼成受ける
	第23図-166 図版24-166	軒平瓦	瓦	上弦幅 23.6cm 瓦当高 4.1cm 周縁厚 2.4cm	均整唐草文 中心飾りは左巻き三巴文 瓦当部雲母粉付着	75%

第9表 第192次調査遺物観察表(9)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SD2001	第23図-167 図版24-167	軒棧瓦	瓦	瓦当高 4.3 cm	均整唐草文 瓦当部雲母粉付着	35%
	第23図-168 図版24-168	軒平瓦	瓦	瓦当厚 1.1 cm	青海波文と菊花文(花卉数8枚)	瓦当部 40% 瓦当部銀化現象
	第23図-169 図版25-169	道具瓦	瓦	幅 4.8 cm 厚み 2.6 cm	上面ナデの後クシ目を入れる クシ目一単位8本	二次焼成を受ける
	第23図-170 図版25-170	道具瓦	瓦	厚み 2.5 cm	上面、辺に沿ったヨコナデの後クシ目を入れる クシ目単位5本・6本	二次焼成を受ける
	第23図-171 図版25-171	煙管	銅	吸口径 4.8 cm 長さ 0.5 cm	吸口 肩部に葉文 接合部に向かって右横に合わせ目	85%
SD2003	第23図-172	鉢	陶器	口径 (14.8) cm 器高 5.7 cm 底径 (8.3) cm	内面口縁部から下灰釉を施す	丹波 15%
	第23図-173 図版25-173	染付碗	白磁	口径 (9.0) cm 器高 5.0 cm 高台径 3.6 cm	外面草花文 内面口縁部圏線有り 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45%
	第23図-174 図版25-174	染付碗	白磁	口径 9.9 cm 器高 5.1 cm 高台径 4.1 cm	外面雪輪草花文 高台内銘有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 見込み・口縁端部に付着物有り
	第23図-175 図版25-175	染付碗	白磁	口径 7.4 cm 器高 5.7 cm 高台径 3.4 cm	筒形 外面コンニャク印判で文様 内面口縁部二重圏線 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 高台付近龍文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 90%
SX3006	第25図-176 図版25-176	土鍋	軟質施釉陶器	口径 21.2 cm 器高 10.0 cm 底径 9.4 cm	柿釉 ロクロ成形 把手2ヶ所有り 脚1ヶ所残存	85% 見込み・外面焼けている
	第25図-177 図版25-177	碗	陶器	口径 (10.6) cm 器高 5.1 cm 高台径 (4.2) cm	内外面巻き刷毛目文 見込み蛇の目釉剥ぎ 重ね焼き痕有り 高台内窯道具痕か 高台量付露胎	唐津 20%
	第25図-178	鉄絵碗	陶器	口径 (11.2) cm 器高 5.7 cm 高台径 4.2 cm	外面白色釉と鉄釉で文様を施す 見込み目跡2ヶ所残存 高台周辺露胎	伊賀・信楽 40% 内外面貫入
	第25図-179 図版25-179	染付碗	青磁	口径 11.3 cm 器高 6.3 cm 高台径 4.6 cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台内二重方形枠の渦福 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 85%
	第25図-180 図版25-180	染付碗	白磁	口径 (10.3) cm 器高 5.4 cm 高台径 (3.6) cm	外面文様有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 25% 内外面貫入 二次焼成を受ける
	第25図-181	染付小碗	青磁	口径 (8.8) cm 器高 4.8 cm 高台径 3.4 cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
	第25図-182	染付碗	白磁	口径 (8.6) cm	筒形 外面コンニャク印判で菊文	肥前 10% 内外面貫入
	第25図-183 図版25-183	染付碗	白磁	口径 (7.5) cm 器高 6.5 cm 高台径 3.9 cm	筒形 外面薄丸文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台量付露胎	肥前 75% 内外面貫入
	第25図-184 図版25-184	皿	白磁	口径 (9.1) cm 器高 2.4 cm 高台径 3.4 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ 高台周辺露胎	肥前 70%
	第25図-185 図版25-185	染付碗蓋	白磁	口径 9.2 cm 器高 2.7 cm つまみ径 4.8 cm	外面寿字文 内面口縁部圏線有り(部分的に二重圏線) 見込み圏線と寿字文 高台量付露胎	肥前 80%
	第25図-186	蓋付鉢	青磁	口径 9.8 cm	筒形 外面青磁釉 内面白磁釉 口縁露胎	肥前 40%

第10表 第192次調査遺物観察表 (10)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SK2023	第27図-187 図版25-187	土師皿	素焼き	口径 10.2 cm 器高 2.4 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナデ と指頭圧痕 内面体部ナデ	在地 85%
	第27図-188	播鉢	陶器		クシ目一単位10本	堺・明石系 2%
	第27図-189 図版25-189	染付碗	白磁	口径 9.9 cm 器高 5.4 cm 高台径 3.8 cm	外面草花文 高台量付露胎	肥前 20%
	第27図-190 図版25-190	染付碗	白磁	高台径 4.3 cm	外面文様有り 高台内崩れた「大明年製」銘有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 35% 見込み砂粒 付着
	第27図-191 図版25-191	染付小碗	白磁	口径 (8.1) cm 器高 3.9 cm 高台径 (3.1) cm	外面若松文 高台量付露胎	肥前 50% 内外面貫入 入る
	第27図-192	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.8 cm 周縁厚 1.5 cm	均整唐草文	瓦当部 60% 二次焼成 受ける
SP2021	第27図-193 図版26-193	皿	軟質施 釉陶器	口径 6.7 cm 器高 1.3 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	100% 口縁部煤付着
	第27図-194 図版26-194	皿	軟質施 釉陶器	口径 6.6 cm 器高 1.2 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	100% 口縁部煤付着
	第27図-195 図版26-195	皿	軟質施 釉陶器	口径 6.6 cm 器高 1.2 cm cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	100%
	第27図-196 図版26-196	皿	軟質施 釉陶器	口径 6.6 cm 器高 1.3 cm cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	100%
	第27図-197 図版26-197	受皿	軟質施 釉陶器	口径 6.5 cm 器高 1.9 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	100%
	第27図-198 図版26-198	受皿	軟質施 釉陶器	口径 6.3 cm 器高 1.9 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	100%
	第27図-199 図版26-199	受皿	軟質施 釉陶器	口径 6.4 cm 器高 1.3 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	100%
	第27図-200 図版26-200	受皿	軟質施 釉陶器	口径 6.3 cm 器高 1.8 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	99%
	第27図-201 図版26-201	受皿	軟質施 釉陶器	口径 6.3 cm 器高 1.3 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	100%
	第27図-202	播鉢	陶器	口径 (24.4) cm	クシ目一単位8本	堺・明石 5%
	第27図-203	徳利	陶器	底径 5.8 cm	鉄釉 底部内面露胎 底部重ね焼き痕有り	丹波 25%
	SE3001	第28図-204 図版26-204	犁先真土型	素焼き	厚み 6.5 cm	上型 上面に斜格子状の線を刻む 下面に強いナデ (顕著に指頭圧痕残る) 胎土に砂粒・雲母粉含む
第28図-205 図版26-205		犁先真土型	素焼き	厚み 6.1 cm	上型 上面に斜格子状の線を刻む 下面凹みを作 り、その中をハケ状のナデと8本一単位のハケを施 す	10% 上面に真土残存と 鉄分付着物有り
第29図-206 図版27-206		ミニチュア製品	素焼き	幅 3.3 cm 厚み 1.0 cm	硯 型押し成形 裏面に「下久」銘有り 表面雲母粉 付着	90%

第11表 第192次調査遺物観察表 (11)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SE3001	第29図-207 図版27-207	受台	陶器	口径 (6.0) cm 器高 4.0 cm 底径 5.4 cm	灰釉 底部露胎	伊賀・信楽 80% 内外面貫入
	第29図-208 図版27-208	受台	陶器	口径 (6.4) cm 器高 4.3 cm 底径 4.4 cm	灰釉 底部露胎	伊賀・信楽 80% 内外面貫入
	第29図-209 図版27-209	小杯	白磁	口径 (5.9) cm 器高 3.8 cm 高台径 2.9 cm	高台量付露胎	肥前 60%
	第29図-210	染付碗	白磁	高台径 4.5 cm	外面文様有り 高台内圏線と二重方形枠の渦福 高台量付露胎	肥前 15%
	第29図-211 図版27-211	染付碗	白磁	口径 10.8 cm 器高 6.5 cm 高台径 4.4 cm	外面葡萄文 内面口縁部文様有り 見込み圏線と葡萄文 高台量付露胎	肥前 50%
	第29図-212 図版27-212	染付瓶	白磁	高台径 6.0 cm	外面松竹文 外面頸部に耳2ヶ所有り 内面頸部下 半から露胎 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 90%
	第29図-213 図版27-213	軒丸瓦	瓦	瓦当厚 1.2 cm	左巻き三つ巴文 珠文数16個 丸瓦部凹面布目痕と 縦方向にヘラによるケズリ有り 表面雲母粉付着	50% 瓦当部銀化現象
	第29図-214 図版27-214	軒丸瓦	瓦	径 15.0 cm 周縁厚 2.2 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三つ巴文 珠文数15個	55%
SK2011	第30図-215 図版27-215	桶	陶器	口径 23.4 cm 器高 30.4 cm 底径 19.2 cm	内外面・底部塗り土を施す 外面体部灰釉流し掛け 内面底部砂目4ヶ所残存 外面底部砂目5ヶ所残存 離れ砂付着	丹波 85% 底部中心に 孔を穿つ
	第30図-216 図版27-216	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
SK3007	第32図-217 図版28-217	擂鉢	陶器	口径 (36.0) cm	クシ目一単位7本 外面口縁部から内面ヨコナデ 外面体部ヨコナデの後指頭圧痕調整	丹波 5% 内面体部自然 釉掛かる
	第32図-218 図版28-218	擂鉢	陶器	口径 (34.6) cm	クシ目一単位7本 外面口縁部から内面ヨコナデ 外面体部ヨコナデの後指頭圧痕調整	丹波 5%
	第32図-219	碗	陶器	口径 (10.4) cm	灰釉	伊賀・信楽 5%
SK1005	第34図-220	受皿	陶器	口径 (11.3) cm 器高 2.0 cm 底径 (5.4) cm	灰釉 外面体部下露胎	伊賀・信楽 25% 内外 面貫入
	第34図-221 図版28-221	德利	陶器	底径 3.5 cm	外面塗り土を施す 外面胴部を凹ませ、布袋を型抜 きし、貼り付け	備前 95%
	第34図-222 図版28-222	土瓶	陶器	口径 8.9 cm 器高 10.3 cm 底径 9.6 cm	灰釉 口縁端部・底部周辺・内面体部露胎	伊賀・信楽 85% 内外 面貫入 外面底部煤 けている
	第34図-223 図版28-223	染付碗蓋	白磁	口径 9.8 cm 器高 2.6 cm つまみ径 3.6 cm	外面草花文 内面口縁部四方禰文 見込み圏線と簡 略化した「大化元成」 高台内銘有り 高台量付露胎	肥前 95%
	第34図-224 図版28-224	染付小碗	白磁	口径 (7.6) cm 器高 3.8 cm 高台径 (3.0) cm	外面文様有り 高台量付露胎	肥前 55% 二次焼成受 ける
	第34図-225 図版28-225	軒丸瓦	瓦	周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.5 cm	右巻き三巴文 内圏線めぐり 珠文数14個	50% 瓦当部銀化現象
SK2005	第35図-226 図版28-226	受皿	軟質施 釉陶器	口径 6.2 cm 器高 1.3 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	90%

第12表 第192次調査遺物観察表 (12)

遺構名	番号	器種	材質	法量		文様・技法の特徴	備考	
							産地・残存率・年代等	
SK2005	第35図-227 図版28-227	土師皿	素焼き	口径 器高	12.8 cm 2.8 cm	手捏ね成形 外面口縁部・内面ヨコナデ 外面体部 指頭圧痕	在地	45% 口縁部煤付着
	第35図-228 図版28-228	土師皿	素焼き	口径 器高	12.1 cm 2.7 cm	手捏ね成形 外面口縁部・内面ヨコナデ 外面体部 ナデ	在地	50% 口縁部煤付着
	第35図-229 図版28-229	焙烙	素焼き	口径	(38.0) cm	底部外型成形 外面口縁部から内面ヨコナデ	80%	内外面体部煤けている
	第35図-230 図版28-230	播鉢	陶器	口径 器高 底径	(33.6) cm 13.1 cm 15.9 cm	クシ目一単位8本 見込み焼台の痕跡有り	堺	40%
	第35図-231 図版29-231	ミニチュア製品	素焼き	高さ 幅 厚み	4.1 cm 5.0 cm 2.0 cm	人形(動物) 型押し成形 表面雲母粉付着	98%	
	第35図-232 図版29-232	染付小碗	白磁	口径 器高 高台径	(7.2) cm 3.3 cm (2.4) cm	外面氷裂菊花文 高台量付露胎	肥前	90%
	第35図-233 図版29-233	染付小碗	白磁	口径 器高 高台径	(7.8) cm 3.9 cm (2.8) cm	外面若松文 高台量付露胎	肥前	40% 内外面貫入する
	第35図-234 図版29-234	染付碗	白磁	口径 器高 高台径	(11.2) cm 6.2 cm 4.5 cm	外面花文 内面口縁部四方襷文 見込み二重圏線と 花文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前	50% 外面貫入する
	第35図-235 図版29-235	染付碗	白磁	口径 器高 高台径	(10.1) cm 5.1 cm (4.1) cm	外面草花文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線 と文様有り 高台量付露胎	肥前	40%
	第35図-236 図版29-236	染付瓶	白磁	高台径	4.6 cm	らっきょう形 外面草花文 内面露胎 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前	55%
	第35図-237	銭	銅	径 厚み	2.3 cm 0.1 cm	寛永通寶か	100%	緑青付着が著しく判読難
SK2006	第36図-238 図版29-238	受皿	軟質施釉陶器	口径 器高	6.2 cm 1.2 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外面口縁部より下露胎	50%	口縁部煤付着
	第36図-239 図版29-239	受皿	軟質施釉陶器	口径 器高	6.5 cm 1.4 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外面口縁部より下露胎	70%	内面煤付着
	第36図-240	お歯黒把手付き盃	陶器	口径 器高 底径	(6.8) cm 3.9 cm (3.2) cm	灰釉 脚1ヶ所残存 外面体部下露胎	伊賀・信楽	30% 内面鉄分付着
	第36図-241 図版29-241	碗	陶器	口径 器高 高台径	9.4 cm 3.7 cm 5.4 cm	灰釉 口縁端反り 高台周辺露胎	伊賀・信楽	70% 内外面貫入する
	第36図-242 図版29-242	碗	陶器	口径 器高 高台径	(9.4) cm 5.0 cm 3.4 cm	灰釉 口縁端反り 高台周辺露胎	伊賀・信楽	30% 内外面貫入する
	第36図-243 図版29-243	鉄絵碗	陶器	口径 器高 高台径	(11.0) cm 4.5 cm (3.8) cm	外面文様有り 高台周辺露胎	産地不明	35%
	第36図-244 図版29-244	染付碗	白磁	口径 器高 高台径	(11.1) cm 6.1 cm 6.6 cm	広東形 外面文様有り 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と蝶文有り 高台量付露胎	肥前	55%
	第36図-245	色絵碗	白磁	口径	(8.8) cm	外面朱色の地に金で唐草文と文様有り 口縁端部・内面口縁部露胎	肥前	5% 外面二次焼成受ける
	第36図-246	色絵碗	白磁	口径	(11.0) cm	外面色絵と呉須で花文を描く 内面口縁部四方襷文	肥前	15%

第13表 第192次調査遺物観察表(13)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SK2006	第36図-247 図版29-247	染付碗	白磁	口径 7.0 cm 器高 5.4 cm 高台径 3.6 cm	筒形 外面竹文 高台周辺文様有り 内面口縁部四方禪文 見込み圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 98%
SK2007	第36図-248 図版30-248	土師皿	素焼き	口径 (6.3) cm 器高 1.4 cm	ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き)	在地 25% 口縁部煤付着
	第36図-249 図版30-249	土師皿	素焼き	口径 6.4 cm 器高 1.3 cm	ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き)	在地 95% 口縁部煤付着
	第36図-250 図版30-250	受皿	軟質施釉陶器	口径 6.4 cm 器高 1.3 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外面口縁部より下露胎	90%
	第36図-251 図版30-251	皿	軟質施釉陶器	口径 6.2 cm 器高 1.2 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外面口縁部より下露胎	99% 口縁部煤付着
	第36図-252 図版30-252	皿	軟質施釉陶器	口径 6.5 cm 器高 1.3 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り紺有り(右巻き) 外面口縁部より下露胎	95% 口縁部煤付着
	第36図-253	皿	軟質施釉陶器	口径 7.4 cm 器高 1.5 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外面口縁部より下露胎	70% 口縁部煤付着
	第36図-254 図版30-254	人形	素焼き	幅 7.1 cm 厚み 5.7 cm	親子猿 型押し成形 底部ナデ 底部に2ヶ所小穴有り	90% 表面部分的に焼けている
	第36図-255	蓋	陶器	口径 5.2 cm 底径 1.8 cm	灰釉 下面露胎	伊賀・信楽 60%
	第36図-256 図版30-256	急須	陶器	口径 7.1 cm 器高 8.9 cm 底径 5.0 cm	灰釉 口縁花弁状 外面体部下半露胎	伊賀・信楽 60% 底部焼けている
	第36図-257 図版30-257	碗	陶器	口径 9.6 cm 器高 5.6 cm 高台径 3.7 cm	灰釉 口縁端反り 高台周辺露胎	伊賀・信楽 60% 内外面貫入
	第36図-258 図版30-258	碗	陶器	口径 9.2 cm 器高 5.1 cm 高台径 2.8 cm	灰釉 口縁端反り 高台周辺露胎	伊賀・信楽 85% 内外面貫入
	第36図-259 図版30-259	染付瓶	白磁	高台径 4.1 cm	らっきょう形 外面竹文と横縞文 高台量付露胎	肥前 90%
SK5060	第37図-260 図版30-260	不明	素焼き		形状不明 上面段が付いている 上面・両側面ナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	上面・内径面に鉄分付着物有り
	第37図-261 図版30-261	不明	素焼き	幅 9.5 cm	形状不明 上面ナデ調整 胎土に砂粒・石粒・雲母粉含む	
	第37図-262 図版30-262	不明	素焼き	最大厚 6.2 cm	形状不明 粗雑な作り 胎土に砂粒・石粒含む	下面若干煤付着
	第37図-263 図版30-263	円錐ピン	素焼き		形状は蒲鉾型 内側に向くと推測される面は平面 胎土に砂粒・石粒を含む	鑄型を焼くための道具 外面強い焼成を受ける 外面真土残存
SK5053	第38図-264 図版30-264	染付碗	白磁	口径 (10.4) cm 器高 5.3 cm 高台径 (4.1) cm	外面氷裂撫子文 高台量付露胎	肥前 25% 内外面貫入
	第38図-265 図版30-265	染付碗	白磁	口径 (9.6) cm 器高 4.6 cm 高台径 (3.5) cm	外面若松文 高台量付露胎	肥前 30%
SK5061	第38図-266 図版30-266	染付蕎麦猪口	白磁	口径 8.0 cm 器高 5.7 cm 高台径 4.6 cm	外面椿文 高台内に簡略化された渦福有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 95% 内外面貫入 二次焼成受ける

第14表 第192次調査遺物観察表 (14)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SP2017	第38図-267 図版30-267	染付碗	白磁	口径 (6.9) cm 器高 5.7 cm 高台径 4.0 cm	筒形 外面文様有り 高台周辺文様有り 内面口縁部四方襷文 見込み圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
第1遺構 面掘削時 出土遺物	第38図-268 図版31-268	ミニチュア製品	軟質施釉陶器	口径 3.9 cm 器高 3.1 cm 底径 1.8 cm	灯火器 型作り成形 内面柿釉 外面ナデ 内面ヨコナデ 灯明芯保持部分貼り付け、中心に孔有り(貫通)	95%
	第38図-269 図版31-269	染付小碗	白磁	口径 6.6 cm 器高 4.3 cm 高台径 3.9 cm	外面千鳥と波文 高台量付露胎	肥前 50%
	第38図-270 図版31-270	染付小碗	白磁	口径 8.0 cm 器高 4.8 cm 高台径 3.5 cm	外面氷裂撫子文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 80%
	第38図-271 図版31-271	小杯	白磁	口径 5.0 cm 器高 2.7 cm 高台径 2.5 cm	口縁端反りで輪花 型押し成形 高台量付露胎	肥前 95%
	第38図-272 図版31-272	紅皿	白磁	口径 4.9 cm 器高 1.8 cm 高台径 1.4 cm	型押し成形 外面口縁部より下露胎	肥前 100%
	SX2001	第41図-273 図版31-273	土師皿	素焼き	口径 11.1 cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面口縁部・内面ヨコナデ 外面体部指頭圧痕
第41図-274		鉄絵碗	陶器	口径 (9.4) cm	外面山水文 外面体部下露胎	肥前(京焼風) 10% 内外面貫入 内外面煤けている
第41図-275 図版31-275		蓋	陶器	口径 10.7 cm 器高 3.4 cm 底径 5.7 cm	上面鉄釉 底部糸切り痕有り 下面周縁重ね焼き痕有り 下面露胎	丹波 60% 下面鉄分付着物有り 二次焼成受ける
第41図-276 図版31-276		大鉢	陶器	口径 (23.2) cm	塗り土を施した上から鉄釉を掛ける 口縁端部から内面口縁部は鉄釉を施さない	丹波 40% 二次焼成受ける
第41図-277 図版31-277		徳利	陶器	底径 5.1 cm	外面肩から体部下半にかけて条線をもつ 内面口縁部から下露胎	備前 40% 二次焼成受ける
第41図-278 図版31-278		播鉢	陶器	口径 (35.0) cm	クシ目一単位14本 内面・外面口縁部ヨコナデ 外面体部指頭圧痕	丹波 5% 内外面煤けている
第41図-279 図版31-279		染付皿	陶胎	口径 13.4 cm 器高 3.9 cm 高台径 7.7 cm	口縁折れ縁で輪花 外面飛雲文 内面風景文 見込み圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 90% 内外面貫入 二次焼成受ける
第41図-280 図版31-280		染付皿	陶胎	口径 13.3 cm 器高 3.5 cm 高台径 7.4 cm	口縁折れ縁で輪花 外面飛雲文 内面風景文 見込み圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 85% 内外面貫入 二次焼成受ける
図版31-487		染付皿	陶胎	口径 13.6 cm 器高 3.4 cm 高台径 7.5 cm	口縁折れ縁で輪花 外面飛雲文 内面風景文 見込み圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 95% 内外面貫入 二次焼成受ける
図版31-488		染付皿	陶胎	口径 13.3 cm 器高 3.5 cm 高台径 7.3 cm	口縁折れ縁で輪花 外面飛雲文 内面風景文 見込み圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 85% 内外面貫入 二次焼成受ける
図版31-489		染付皿	陶胎	口径 13.3 cm 器高 3.4 cm 高台径 7.5 cm	口縁折れ縁で輪花 外面飛雲文 内面風景文 見込み圏線とコンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 90% 内外面貫入 二次焼成受ける
第41図-281 図版32-281		染付皿	白磁	口径 (11.8) cm 器高 2.9 cm 高台径 (5.4) cm	口縁輪花 外面折れ松葉文 見込み山水文 高台量付露胎	肥前 40% 内外面貫入
第41図-282 図版32-282		染付碗	白磁	口径 8.5 cm 器高 5.1 cm 高台径 (3.9) cm	外面横縞文 高台内二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 50%
第41図-283 図版32-283		猪口	白磁	口径 (6.2) cm 器高 6.0 cm 高台径 4.2 cm	高台量付露胎	肥前 45% 内外面貫入 外面に煤の付着が見られる

第15表 第192次調査遺物観察表 (15)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX2001	第41図-284 図版32-284	染付大碗	白磁	口径 (14.7) cm 器高 8.7 cm 高台径 6.8 cm	外面草花文 高台内圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 30%
	第41図-285 図版32-285	大鉢	青磁	口径 (29.7) cm 器高 12.0 cm 高台径 11.4 cm	青磁釉 内面・見込みへラ描きで草文を陰刻する 蛇の目凹型高台	肥前 50% 内面砂状の付着物有り 二次焼成受ける
	第41図-286 図版32-286	染付皿	白磁	器高 2.4 cm	型打ち成形(変形五角形) 口縁部部分的に口青 見込みコンニャク印判で扇文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 二次焼成受ける 器形は富士山か
	第41図-287 図版32-287	染付皿	白磁	口径 13.6 cm 器高 2.6 cm 高台径 (9.4) cm	型打ち成形(変形五角形) 口縁部部分的に口青 見込みコンニャク印判で花文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 85% 高台内に煤付着 器形は富士山か
	第42図-288 図版32-288	軒丸瓦	瓦	瓦当厚 1.5 cm	左巻き三巴文 内圏線めぐる 珠文数14個 瓦当側接合面横方向のカキメ有り	瓦当部 95% 瓦当部銀化現象 二次焼成受ける
	第42図-289	熨斗瓦	瓦	厚み 1.9 cm	縁にへらで二条の凹線有り 上下面雲母粉付着	10%
	第42図-290 図版32-290	硯	石	短辺 6.8 cm 厚み 2.2 cm		粘板岩 85% 海部・陸部に墨の吸着痕有り 二次焼成受ける
	第42図-291 図版32-291	碁石	石	径 2.1 cm 最大厚 0.6 cm	黒色	98%
	第42図-292 図版32-292	碁石	石	径 2.4 cm 最大厚 0.8 cm	黒色	100%
	第42図-293 図版32-293	碁石	石	径 2.3 cm 最大厚 0.6 cm	黒色	100%
SX2003	第42図-294	土師皿	素焼き	口径 (9.1) cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ヨコナデ	在地 25%
	第42図-295	皿	軟質施釉陶器	口径 (6.9) cm 器高 1.3 cm	柿釉 ロクロ成形	20% 口縁部煤付着
	第42図-296	受皿	素焼き	口径 (6.4) cm 器高 1.3 cm	無釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り	5%
	第42図-297	焙烙	素焼き	口径 (29.0) cm	外面体部上半ヨコナデの後指押さえ 外面体部下半右上がり平行タキ痕有り 外面口縁部から内面ヨコナデ	在地 5% 外面煤けている
	第42図-298 図版33-298	鉄絵碗	陶器	口径 (10.2) cm 器高 5.0 cm 高台径 4.0 cm	内外面巻刷毛目文 外面文様有り 高台量付露胎 高台量付に重ね焼き痕有り	唐津 40%
	第42図-299 図版33-299	碗	陶器	口径 (11.4) cm 器高 6.0 cm 高台径 3.8 cm	内外面巻刷毛目文 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台量付露胎 離れ砂付着	唐津 60% 二次焼成受ける
	第42図-300 図版33-300	播鉢	陶器	口径 (36.2) cm 器高 13.5 cm 底径 (12.5) cm	クシ目一単位11本 外面口縁部ロクロナデ 外面体部ロクロナデの後ナデアゲ	丹波 25% 外面底部周辺に付着物有り
	第43図-301 図版33-301	播鉢	陶器	口径 (35.8) cm	クシ目一単位8本 外面口縁部ロクロナデ 外面体部ロクロナデの後指頭圧痕調整	丹波 5%
	第43図-302 図版33-302	播鉢	陶器	口径 (38.2) cm 器高 15.3 cm 高台径 (14.0) cm	クシ目一単位7本 外面口縁部ロクロナデ 外面体部ロクロナデの後ナデアゲ	丹波 10%
	第43図-303 図版33-303	壺	陶器	口径 (45.2) cm	内外面塗り土を施す	丹波 5%

第16表 第192次調査遺物観察表 (16)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX2003	第43図-304 図版33-304	播鉢	陶器	口 径 (21.0) cm	クシ目一単位7本 外面口クロナデ	丹波 2%
	第43図-305 図版33-305	甕	陶器	口 径 (56.4) cm	内外面塗り土を施す	丹波 2%
	第43図-306 図版33-306	甕	陶器	口 径 (30.7) cm	鉄釉 口縁4条の沈線めぐる	丹波 2% 二次焼成受ける
	第43図-307 図版33-307	染付碗	白磁	口 径 (10.3) cm 器 高 7.4 cm 高台径 4.7 cm	外面網目文 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 70%
	第43図-308 図版33-308	染付碗	白磁	口 径 (9.7) cm 器 高 5.4 cm 高台径 (3.5) cm	外面コンニャク印判で鳳凰文 高台内圏線と崩れた「大明年製」銘有り 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 内外面貫入
	第43図-309	小杯	白磁	口 径 (7.7) cm 器 高 5.2 cm 高台径 (4.4) cm	口縁端反りで輪花 高台置付露胎	肥前 70%
	第43図-310 図版33-310	染付蕎麦猪口	白磁	口 径 (8.7) cm 器 高 5.9 cm 高台径 5.2 cm	外面草花文と網目文 高台内圏線と崩れた「大明年製」銘有り 高台置付露胎	肥前 45%
	第43図-311 図版33-311	染付小杯	白磁	口 径 (7.9) cm 器 高 5.4 cm 高台径 (3.9) cm	口縁端反り 外面コンニャク印判で文様有り 高台内圏線有り 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
	第43図-312	染付碗	青磁	口 径 (10.4) cm 器 高 6.5 cm 高台径 (4.5) cm	外面青磁釉 内面白磁釉 口縁口錆 見込み手描き五弁花 高台置付露胎	肥前 20% 二次焼成受ける
	第43図-313	染付碗	白磁	口 径 (9.6) cm cm	外面七宝文と文様あり	肥前 15%
	第43図-314	碗蓋	青磁	口 径 (9.7) cm	外面青磁釉 内面白磁釉 口縁口錆	肥前 10%
	第43図-315 図版33-315	染付皿	白磁	口 径 (9.8) cm 器 高 2.1 cm 高台径 (5.9) cm	見込み桜文 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 45%
	第43図-316 図版33-316	染付皿	白磁	高台径 (6.2) cm	外面文様有り 見込み山水文 高台置付露胎	肥前 10% 内外面貫入
	第43図-317 図版33-317	皿	青磁	口 径 (14.8) cm 器 高 4.0 cm 高台径 (7.6) cm	口縁輪花 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 内外面縦方向に貫入する 内外面煤けている
	第43図-318 図版34-318	皿	青磁	口 径 (14.7) cm 器 高 4.0 cm 高台径 7.3 cm	口縁輪花 見込み目跡2ヶ所残存 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 二次焼成受ける
	第44図-319	染付皿	白磁	口 径 (9.7) cm 器 高 2.0 cm 高台径 (6.0) cm	見込み桜文 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 25%
	第44図-320	染付皿	白磁	口 径 (9.3) cm 器 高 1.6 cm 高台径 (5.4) cm	見込み桜文 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 10%
	第44図-321	染付皿	白磁	口 径 (14.6) cm 器 高 4.9 cm 高台径 (6.0) cm	外面草花文 内面口縁部二重圏線有り 内面文様有り 見込み二重圏線有り 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 10% 二次焼成受ける
	第44図-322 図版34-322	染付皿	白磁	口 径 14.2 cm 器 高 2.5 cm 高台径 9.3 cm	口縁端反り 外面七宝文 内面口縁部二重圏線 内面梅菊文 見込み二重圏線と椿文 高台内圏線 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 二次焼成受ける
	第44図-323 図版34-323	染付皿	白磁	口 径 (14.0) cm 器 高 2.5 cm 高台径 (8.9) cm	口縁端反り 外面七宝文 内面口縁部圏線 内面梅菊文 見込み二重圏線と椿文 高台内圏線と目跡 高台置付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 二次焼成受ける

第17表 第192次調査遺物観察表 (17)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX2003	第44図-324 図版34-324	軒丸瓦	瓦	径 14.4 cm 周縁厚 2.6 cm 瓦当厚 1.8 cm	右巻き三巴文 内圏線めぐる 珠文数14個 表面雲母粉付着	瓦当部 98% 瓦当部銀化現象 二次焼成受ける
	第43図-325 図版34-325	鳥衾瓦	瓦	周縁厚 1.9 cm 瓦当厚 1.6 cm	右巻き三巴文 内圏線めぐる 珠文数10個以上 瓦当側接合面縦方向のカキメ有り	瓦当部 85% 瓦当部銀化現象 二次焼成受ける
	第44図-326 図版34-326	煙管	銅	火皿径 1.7 cm	雁首 皿部は火皿部に向かって左横に合わせ目	80% 緑青付着
	第44図-327 図版34-327	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm		100% 緑青付着が著しく判読不可
	第44図-490	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
SX2001 ・ SX2003 接合資料	第44図-328 図版34-328	擂鉢	陶器	口 径 (42.0) cm	クシ目一単位 8本 脚付き高台 外面口縁部から体部下半鉄釉を流し掛ける 高台周辺露胎	丹波 25% 二次焼成受ける
	第45図-329 図版34-329	壺	陶器	口 径 (15.4) cm 器 高 28.3 cm 底 径 (16.9) cm	赤土泥釉 外面口縁部から頸部、底部に灰釉を施す 外面底部にヘラ描きで「上々吉 つるや □□□ □和三年」の銘有り	丹波 25% 外面底部焼き台痕有り 内面口縁部鉄分付着物有り
	第45図-330	壺	陶器	口 径 (9.2) cm 器 高 16.8 cm 高台径 (7.6) cm	鉄釉 内面頸部より下・外面体部下半より下露胎	丹波 30% 二次焼成を受け、鉄釉が海綿状になる
	第45図-331 図版34-331	染付皿	白磁	口 径 11.4 cm 器 高 2.6 cm 高台径 7.2 cm	外面山文と松葉文 内面コンニャク印判で木の葉の窓のなかに花唐草文 見込み二重圏線有り 高台内圏線有り 高台量付露胎	肥前 80% 二次焼成受ける
	第45図-332 図版34-332	染付碗	白磁	口 径 (10.0) cm 器 高 5.6 cm 高台径 4.2 cm	外面草花文 高台内圏線と「大明年製」銘有り 高台量付露胎	肥前 50% 二次焼成受ける
	第45図-333 図版35-333	染付合子蓋	白磁	口 径 (8.0) cm	外面丸窓のなかに青海波文と風景文 口縁部露胎 離れ砂付着	肥前 45% 二次焼成受ける
	第45図-334 図版35-334	染付合子	白磁	口 径 (8.2) cm 器 高 3.4 cm 高台径 (5.4) cm	外面丸窓のなかに青海波文と風景文 口縁部から内面口縁部露胎 蛇の目凹型高台	肥前 40% 二次焼成受ける
	第45図-335 図版35-335	染付鉢蓋	白磁	口 径 (10.7) cm	筒形 外面菊文 口縁部露胎	肥前 45% 内面貫入 二次焼成受ける
	第45図-336 図版35-336	染付鉢	白磁	口 径 (11.3) cm 器 高 8.3 cm 高台径 (6.8) cm	筒形 外面菊文 口縁部から内面口縁部露胎 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 35% 二次焼成受ける
	第45図-337 図版35-337	染付鉢蓋	白磁	口 径 11.5 cm	外面菊花文 口縁部露胎	肥前 30% 二次焼成受ける
	第45図-338 図版35-338	染付鉢	白磁	口 径 (12.3) cm 器 高 9.8 cm 底 径 (7.7) cm	筒形 外面菊花文 口縁部露胎 底部露胎	肥前 30% 二次焼成受ける
	第45図-339 図版35-339	染付皿	白磁	口 径 (13.6) cm 器 高 2.6 cm 底 径 9.6 cm	型打ち成形(変形五角形) 口縁部部分的に口青 見込みコンニャク印判で桜文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 80% 二次焼成受ける 器形は富士山か
	第46図-340 図版35-340	鉢	白磁	口 径 (13.8) cm 器 高 4.8 cm 高台径 7.9 cm	六角形 高台量付露胎	肥前 80% 二次焼成受ける
	第46図-341 図版35-341	花器	青磁	口 径 6.1 cm 器 高 19.4 cm 底 径 6.9 cm	型押し成形 体部四方に窓を設けて文様を施す 頸部に耳2ヶ所残存 底部露胎	肥前 75% 二次焼成受ける
	第46図-342 図版35-342	壺	白磁	口 径 6.2 cm	外面頸部から内面露胎	肥前 80% 二次焼成受ける

第18表 第192次調査遺物観察表 (18)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX2001 ・SX2003 接合資料	第46図-343 図版35-343	軒平瓦	瓦	上弦幅 24.3 cm 瓦当高 4.1 cm 周縁厚 1.8 cm	均整唐草文	20% 二次焼成受ける
	SX2002	第47図-344	天目碗	陶器	口 径 (10.0) cm	鉄釉 外面体部下半露胎
	第47図-345 図版36-345	染付碗	青磁	口 径 (8.3) cm 器 高 4.6 cm 高台径 (3.6) cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 見込み二重圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
	第47図-346	染付碗	青磁	口 径 (13.7) cm	口縁端反り 外面青磁釉 内面白磁釉 内面口縁部花文 見込み二重圏線と文様有り	肥前 25%
	第47図-347 図版36-347	染付碗	白磁	口 径 (11.2) cm 器 高 6.0 cm 高台径 (4.5) cm	外面椿芝垣文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と五弁花 高台量付露胎	肥前 45%
	第47図-348 図版36-348	染付水滴	白磁	長 辺 5.7 cm 短 辺 4.4 cm 最大厚 2.0 cm	形状不明(菜果か) 型押し成形 上面中央孔有り 底部露胎	肥前 98%
SX2005	第47図-349	焙烙	素焼き	口 径 (26.8) cm	内外面体部ヨコナデ 底部との接合部に右上がりの平行タタキ痕有り	5% 胎土に雲母粉含む 外面煤けている
	第47図-350 図版36-350	花器	陶器	口 径 15.2 cm 器 高 18.3 cm 底 径 11.3 cm	外面から内面頸部まで柿釉の上から鉄釉を施す 耳2ヶ所有り 内面頸部から下露胎 底部透明釉を施す	瀬戸・美濃 90%
	第47図-351 図版36-351	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.5 cm 周縁厚 1.6 cm	均整唐草文	瓦当部 30% 瓦当部銀化現象 二次焼成受ける
	第47図-352 図版36-352	軒丸瓦	瓦	径 14.1 cm 周縁厚 2.4 cm 瓦当厚 1.7 cm	右巻き三巴文 珠文数14個 内圏線めぐる 瓦当側接合面縦方向のカキメ有り	瓦当部 100% 瓦当部銀化現象
	第47図-353 図版36-353	軒丸瓦	瓦	瓦当厚 1.6 cm	左巻き三巴文 珠文数10個以上 瓦当側接合面縦方向のカキメ有り	瓦当部 80% 瓦当部銀化現象 二次焼成受ける
	第47図-354 図版36-354	軒丸瓦	瓦	径 14.1 cm 周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.3 cm	右巻き三巴文 内圏線めぐる 珠文数14個 瓦当側接合面横方向のカキメ有り	瓦当部 100% 瓦当部銀化現象 二次焼成受ける
	第47図-355 図版36-355	軒丸瓦	瓦	径 14.1 cm 周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.4 cm	右巻き三巴文 内圏線めぐる 珠文数14個 瓦当側接合面縦方向のカキメ有り	瓦当部 100% 瓦当部銀化現象 二次焼成受ける
	SX2006	第48図-356 図版37-356	碗	陶器	口 径 (11.2) cm 器 高 5.8 cm 高台径 (4.2) cm	内外面巻刷毛目文 重ね焼き痕有り 高台量付露胎
第48図-357 図版37-357		染付碗	白磁	口 径 9.7 cm 器 高 5.8 cm 高台径 4.4 cm	外面草花文 高台内圏線と簡略化した「大明年製」銘有り 高台量付露胎	肥前 75% 二次焼成受ける
第48図-358		染付碗	白磁	口 径 (11.1) cm 器 高 5.8 cm 高台径 (4.6) cm	外面雪輪草花文 高台内圏線有り 高台量付露胎	肥前 25% 二次焼成受ける
第48図-359		染付碗	白磁	口 径 (10.4) cm 器 高 5.8 cm 高台径 (4.5) cm	外面染付とコンニャク印判で草花文を描く	肥前 25% 内外面貫入 二次焼成を受ける
第48図-360		色絵碗	白磁	口 径 (10.4) cm	口縁口錆 外面草花文	肥前 5% 二次焼成受ける
第48図-361 図版37-361		煙管	銅	吸口径 0.6 cm 長 さ 6.9 cm	吸口 上面に合わせ目	95% 緑青付着
第48図-362 図版37-362		隅丸瓦	瓦	径 8.6 cm 周縁厚 1.7 cm 瓦当厚 1.4 cm	左巻き三巴文 瓦当側接合面縦方向のカキメ有り	瓦当部 100% 瓦当部銀化現象 二次焼成受ける

第19表 第192次調査遺物観察表 (19)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX2007	第48図-363 図版37-363	鬢水入れ	軟質施釉 陶器	長辺 (13.2)cm 短辺 5.3cm 高さ 3.6cm	柿釉 ロクロ成形 底部布目痕 底部露胎	60%
	第48図-364	播鉢	陶器		クシ目一単位6本 外面体部ヨコナデ	丹波 2%
	第48図-365 図版37-365	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.5cm 周縁厚 1.5cm	均整唐草文	40% 瓦当部銀化現象 二次焼成受ける
	第48図-366 図版37-366	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.3cm 周縁厚 1.7cm	均整唐草文 瓦当部雲母粉附着	20% 二次焼成受ける
	第48図-367 図版37-367	軒棧瓦	瓦	瓦当高 3.8cm 周縁厚 1.7cm	菊花文(花卉数8枚)・均整唐草文	瓦当部 20% 瓦当部銀 化現象 小巴部分(瓦当 厚1.3cm)
	第48図-368 図版37-368	軒棧瓦	瓦	瓦当高 4.8cm 周縁厚 1.7cm	左巻き三巴文・均整唐草文	瓦当部 30% 瓦当部銀 化現象 二次焼成受ける
	第48図-369	銭	銅	径 2.5cm 厚み 0.1cm		100% 緑青附着が著し く判読不可
SK2021	第50図-370 図版37-370	ミニチュア製品	素焼き	高さ 8.4cm 幅 4.4cm 厚み 3.6cm	人形(人物像) 型押し成形 底部孔有り(貫通せず) 表面雲母粉附着	98%
SK2016	第53図-371 図版37-371	焙烙	素焼き	口径 31.0cm 器高 7.0cm	底部外型成形 内外面体部ヨコナデ 内面底部ナデ	80% 内面口縁部・体部 の一部に自然釉掛かる
SX2009	第55図-372 図版38-372	皿	陶器	口径 (10.5)cm 器高 2.6cm 高台径 (6.4)cm	灰釉 高台内輪トチン痕有り 高台畳付露胎	瀬戸・美濃 20% 内外 面貫入
	第55図-373 図版38-373	碗	陶器	口径 (11.6)cm	口縁端反り 緑釉 外面に厚く釉掛かる	産地不明 5% 内外 面・貫入
	第55図-374 図版38-374	鉢	陶器	口径 (19.2)cm	灰釉 内面口縁部より下露胎	瀬戸・美濃 5% 内外 面・貫入
	第55図-375 図版38-375	播鉢	陶器	口径 (40.3)cm	クシ目一単位7本 内外面塗り土を施す 外面ヨコ ナデ後指頭圧痕調整	丹波 5% 外面口縁端 部に自然釉掛かる
	第55図-376 図版38-376	染付碗	白磁	口径 (11.0)cm	外面桜文	肥前 5%
	第55図-377 図版38-377	染付皿	白磁	口径 (20.6)cm	内面墨弾きで文様有り	肥前 5%
	第55図-378	染付皿	白磁	口径 (13.9)cm	内面丸文	肥前 5% 二次焼成受 ける
	第55図-379	染付皿	白磁	高台径 (4.9)cm	見込み文様有り 高台畳付露胎 離れ砂附着	肥前 10% 内外面貫入 入る
SK5009	第56図-380	土師皿	素焼き	口径 (12.0)cm	手捏ね成形 内外面体部ヨコナデ 外面底部・見込 みナデ	在地 5% 口縁煤附着
	第56図-381 図版38-381	碗	白磁	高台径 4.9cm	外面鉄釉 内面白磁釉 高台畳付露胎	肥前 15%
	第56図-382	碗	白磁	高台径 4.5cm	外面鉄釉 内面白磁釉 高台露胎	肥前 10%

第20表 第192次調査遺物観察表 (20)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SK5009	第56図-383 図版38-383	皿	陶器	口径 (22.6) cm 器高 4.4 cm 高台径 7.4 cm	灰釉 口縁折れ縁 見込み砂目5ヶ所有り 高台量付砂目5ヶ所有り	肥前 30%
	第56図-384 図版38-384	鉢	陶器	口径 (18.9) cm 器高 6.9 cm 高台径 6.0 cm	口縁折れ縁 外面灰釉 内面銅緑釉 見込み蛇の目釉剥ぎ 砂目5ヶ所有り 高台内に兜巾状のものを 持つ 高台露胎	肥前 55%
	第56図-385 図版38-385	播鉢	陶器	口径 35.0 cm 器高 15.6 cm 高台径 14.2 cm	クシ目一単位8本 外面口縁部・内面口クロナデ 外面体部口クロナデの後ナデアゲ	丹波 95%
	第56図-386 図版38-386	播鉢	陶器	口径 (34.0) cm 器高 12.9 cm 底径 12.6 cm	クシ目一単位7本 外面口縁部から内面口クロナデ 外面体部指頭圧痕調整	丹波 50%
	第57図-387 図版38-387	播鉢	陶器	口径 (33.0) cm 器高 14.3 cm 底径 (14.5) cm	クシ目一単位6本 外面体部上半から内面口クロナ デ 外面体部下半口クロナデの後ナデアゲ	丹波 20% 内面自然釉 掛かる
	第57図-388 図版38-388	壺	陶器	口径 (24.6) cm		丹波 5%
	第57図-389 図版38-389	壺	陶器	口径 (46.0) cm	内外面塗り土を施す	丹波 2%
	第57図-390 図版38-390	染付碗	白磁	口径 9.9 cm 器高 5.6 cm 高台径 4.0 cm	外面花竹垣文 高台量付露胎	肥前 75%
	第57図-391	染付碗	白磁	口径 (10.4) cm 器高 5.9 cm 高台径 (4.4) cm	外面草文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 20%
	第57図-392 図版38-392	染付碗	白磁	口径 11.1 cm 器高 6.2 cm 高台径 4.8 cm	外面蟹文 高台内圏線有り 高台量付露胎	肥前 75% 内外面貫入 入る
	第57図-393	青花碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.5 cm 高台径 (4.6) cm	外面花文 見込み二重圏線と花文 高台内圏線と渦 福有り 高台量付露胎	中国(景德鎮) 10%
	第57図-394 図版38-394	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.5 cm 高台径 (4.6) cm	外面梅文 高台内「大明年製」銘有り 高台量付露 胎	肥前 35%
	第57図-395 図版39-395	染付碗	白磁	口径 (10.6) cm 器高 6.3 cm 高台径 (4.5) cm	外面矢羽文 高台量付露胎	肥前 45%
	第57図-396 図版39-396	皿	青磁	口径 13.2 cm 器高 3.9 cm 高台径 4.5 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ 重ね焼き痕有り アルミナ砂 塗布 高台露胎 離れ砂付着	肥前 75%
	第56図-397	皿	青磁	口径 (13.5) cm 器高 4.0 cm 高台径 4.6 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ 重ね焼き痕有り 高台周辺露 胎 離れ砂付着	肥前 50%
	第58図-398 図版39-398	染付皿	白磁	口径 20.3 cm 器高 3.4 cm 高台径 13.0 cm	外面唐草文 内面窓に墨弾きで梅と笹文 高台内圏 線有り 高台内目跡1ヶ所有り 高台量付露胎	肥前 80% 内外面貫入 入る
	第58図-399 図版39-399	染付皿	白磁	口径 (13.9) cm 器高 3.0 cm 高台径 (7.5) cm	内面圏線と文様有り 見込み二重圏線と文様有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45%
	第58図-400 図版39-400	色絵油壺	白磁	最大幅 9.4 cm 高台径 5.3 cm	外面体部に赤・緑・青で縦縞文を施す 内面・高台 量付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
	第58図-401 図版39-401	軒平瓦	瓦	瓦当高 2.4 cm 周縁厚 1.1 cm	均整唐草文 表面雲母粉付着	40%
	第58図-402 図版39-402	軒丸瓦	瓦	径 15.1 cm 周縁厚 1.4 cm 瓦当厚 1.9 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 表面雲母粉付着	瓦当部 95%

第21表 第192次調査遺物観察表 (21)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SK5009	第58図-403 図版39-403	軒丸瓦	瓦	周縁厚 1.2 cm 瓦当厚 1.8 cm	左巻き三巴文 珠文数16個 瓦当側接合面に横方向のカキメ有り	瓦当部 80%
	第58図-404 図版39-404	軒丸瓦	瓦		左巻き三巴文 内圏線めぐり 珠文数8個以上 丸瓦部凹面コビキBと布目痕有り 表面雲母粉附着	25%
	第58図-405 図版39-405	砥石	石	厚み 1.5 cm		粘板岩
SK5012	第59図-406	播鉢	陶器	口径 (32.8) cm	クシ目一単位6本 内外面塗り土を施す 外面口縁部・内面口クロナデ 外面体部口クロナデの後ナデアゲ	丹波 2%
	第59図-407 図版40-407	瓶	陶器	底径 (5.2) cm	外面体部灰釉 外面底部・内面露胎	肥前系 35%
	第59図-408 図版40-408	皿	陶器	口径 (19.8) cm 器高 6.2 cm 高台径 (10.4) cm	灰釉 高台内蛇の目釉剥ぎ有り	肥前 15% 内外面貫入
	第59図-409 図版40-409	染付碗	白磁	口径 (10.7) cm 器高 6.5 cm 高台径 (5.0) cm	外面コンニャク印判花文 高台量付露胎 離れ砂附着	肥前 25%
SK5021	第59図-410	土師皿	素焼き	口径 (10.5) cm	手捏ね成形 外面口縁部・内面ヨコナデ 外面体部ナデ	在地 5%
	第59図-411 図版40-411	皿	陶器	口径 (21.4) cm 器高 5.5 cm 高台径 (11.1) cm	灰釉 高台周辺露胎	肥前 10% 内外面貫入
	第59図-412	播鉢	陶器		内外面口クロナデ	丹波 1%
	第59図-413 図版40-413	皿	青磁	口径 14.2 cm 器高 3.8 cm 高台径 5.0 cm	青磁釉 見込み蛇の目釉剥ぎ 重ね焼き痕有り 高台周辺露胎	肥前 70%
	第59図-414	染付猪口	白磁	高台径 (4.7) cm	外面竹文 高台内圏線と「大明成化年製」銘有り 高台量付露胎	肥前 10%
SK5032	第59図-415 図版40-415	土師皿	素焼き	口径 10.8 cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナデと指頭圧痕 内面体部ナデ	在地 99%
	第59図-416	焙烙	素焼き	口径 (31.4) cm	底部外型成形 内外面ヨコナデ 外面底部との接合部ヘラケズリ	5% 外面煤けている
	第59図-417	合子	白磁	口径 (4.8) cm 器高 1.8 cm 高台径 (2.7) cm	型押し成形 口縁部・内面体部・高台露胎	肥前 25% 口縁部に紅附着
	第59図-418 図版40-418	染付碗	白磁	口径 10.2 cm 器高 5.4 cm 高台径 4.1 cm	外面雨降り文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台内圏線有り 高台量付露胎	肥前 80%
第2遺構 面掘削時 出土遺物	第60図-419 図版40-419	染付碗	白磁	口径 10.8 cm 器高 5.6 cm 高台径 4.3 cm	外面コンニャク印判菊文と手描き草花文 高台内銘有り 高台量付露胎 離れ砂附着	肥前 85%
	第60図-420 図版40-420	染付小碗	白磁	口径 7.4 cm 器高 3.9 cm 高台径 2.8 cm	外面暦文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と虫文 高台量付露胎	肥前 85%
	第60図-421 図版40-421	染付紅猪口	白磁	口径 7.0 cm 器高 3.3 cm 高台径 2.8 cm	外面草花文 高台量付露胎 離れ砂附着	肥前 100% 内外面貫入
	第60図-422 図版40-422	ミニチュア製品	素焼き	高さ 4.8 cm 幅 4.0 cm 厚み 2.1 cm	人形(天神) 型押し成形 表面雲母粉附着	95%

第22表 第192次調査遺物観察表 (22)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
第2遺構面 出土遺物	第60図-423	焙烙	素焼き	口 径 (28.4) cm	底部外型成形 外面体部右上がり平行タキ痕有り 外面口縁部・内面ヨコナデ	5% 外面煤けている
	第60図-424 図版40-424	ミニチュア製品	素焼き	径 2.8 cm 厚 み 1.5 cm	独楽(梅)型押し成形 中心に孔有り(貫通せず) 表面雲母粉付着	100%
	第60図-425 図版41-425	煙管	銅	吸口径 0.8 cm 長 さ 5.1 cm 接合部径 0.2 cm	吸口	100% 緑青付着
	第60図-426	煙管	銅	火皿径 1.8 cm	雁首	45% 緑青付着
	第60図-427 図版41-427	片口鉢	陶器	口 径 17.8 cm 器 高 8.5 cm 底 径 11.0 cm	外面鉄釉 内面灰釉 注口1ヶ所有り 口縁部・底 部露胎 離れ砂付着	丹波 80%
	第60図-428 図版41-428	仏飯具	白磁	高台径 3.5 cm	外面コンニャク印判葉文 高台量付露胎 離れ砂付 着	肥前 75%
	第60図-429 図版41-429	銭	銅	径 2.3 cm 厚 み 0.1 cm	寛永通寶 背文「元」	99% 緑青付着 細字背 元銭 寛保元年(1741)初 鑄
	第60図-430 図版41-430	銭	銅	径 2.9 cm 厚 み 0.1 cm	寛永通寶 背に波型有り	100% 緑青付着 明和俯 永銭(11波) 明和6年(1769) 初鑄
	第60図-431 図版41-431	銭	銅	径 2.3 cm 厚 み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
	SX3003	第63図-432 図版41-432	焙烙	素焼き	口 径 (26.6) cm	外面口縁部から内面ヨコナデ
第63図-433 図版41-433		播鉢	陶器		クシ目一単位7本 外面口縁部から内面ヨコナデ	丹波 2%
第63図-434 図版41-434		染付碗	白磁	口 径 (9.4) cm	外面網目文	肥前 2% 内外面貫入 入る
第63図-435 図版41-435		染付皿	白磁	口 径 (10.6) cm 器 高 2.6 cm 高台径 5.4 cm	口縁輪花 見込み花鳥文 高台量付露胎 離れ砂付 着	肥前 25%
第63図-436 図版41-436		煙管	銅	接合部径 0.4 cm	雁首と吸口が接合 首部は火皿部に向かって左横に 合わせ目 吸口は接合部に向かって左横に合わせ目 肩部に刻印有り	90% 緑青付着
第63図-437 図版41-437		煙管	銅	接合部径 1.1 cm	雁首 首部は火皿部に向かって左横に合わせ目	80% 緑青付着
第63図-438 図版41-438		煙管	銅	吸口径 0.4 cm 長 さ 4.3 cm 接合部径 0.8 cm	吸口	100% 緑青付着
第63図-439 図版41-439		銭	銅	径 2.5 cm 厚 み 0.1 cm	寛永通寶 背文「文」	100% 緑青付着「通」の 字判読難 寛文8年(1668) 初鑄
SX3005		第66図-440 図版41-440	土師皿	素焼き	口 径 6.8 cm 器 高 1.6 cm	手捏ね成形 内外面ナデ
	第66図-441	焙烙	素焼き		底部外型成形 内外面ナデ	2%
	第66図-442 図版41-442	染付碗	白磁	高台径 (4.7) cm	外面文様有り 高台量付露胎	肥前 5%

第23表 第192次調査遺物観察表 (23)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SX3005	第66図-443	染付碗	白磁	高台径 4.3 cm	外面文様有り 高台壘付露胎 離れ砂付着	肥前 35% 内面貫入する
SK3009	第66図-444	土師皿	素焼き	口径 (8.6) cm 器高 1.4 cm	手握ね成形 外面ナデと指頭圧痕 内面ヨコナデ	在地 30%
	第66図-445 図版41-445	土師皿	素焼き	口径 (10.5) cm 器高 2.2 cm	手握ね成形 外面ナデ 内面ヨコナデ	在地 90% 口縁部煤付着
	第66図-446 図版41-446	皿	陶器	口径 (13.2) cm 器高 3.8 cm 高台径 (4.0) cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目2ヶ所残存 高台壘付砂目2ヶ所残存	唐津 25%
	第66図-447 図版41-447	皿	陶器	口径 (12.1) cm 器高 3.2 cm 高台径 4.0 cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目2ヶ所有り 外面体部下鉄漿を塗る 高台露胎	唐津 30%
	第66図-448 図版41-448	染付皿	白磁	口径 (14.2) cm 器高 3.1 cm 高台径 (5.3) cm	内面花文 見込み圏線と蝶文 高台壘付露胎 離れ砂付着	肥前 25%
	第66図-449	軒丸瓦	瓦	周縁厚 2.4 cm 瓦当厚 1.5 cm	左巻き三巴文 珠文数16個	20%
	SP3001	第66図-450	青花皿	白磁	高台径 (8.3) cm	外面文様有り 内面花文 高台内ケズリ有り 高台壘付露胎 離れ砂付着
第3遺構面掘削時出土遺物	第67図-451 図版42-451	腰折碗	陶器	口径 11.1 cm 器高 6.4 cm 高台径 6.9 cm	口縁部隅丸方形か? 鉄釉と灰釉を中央で掛け分け 高台壘付露胎	瀬戸・美濃 70% 灰釉部分貫入する
	第67図-452 図版42-452	鉄絵碗	陶器	口径 (11.3) cm 器高 7.7 cm 高台径 5.3 cm	口縁口鏑 灰釉 外面文様有り 高台周辺露胎	産地不明 65% 内外面貫入する
	第67図-453 図版42-453	皿	陶器	口径 (11.1) cm 器高 3.2 cm 高台径 (3.9) cm	灰釉 見込み胎土目2ヶ所残存 外面体部下露胎	唐津 20%
	第67図-454 図版42-454	皿	陶器	口径 (12.4) cm 器高 2.6 cm 高台径 (3.9) cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目1ヶ所残存 外面口縁部より下露胎	唐津 10% 内外面貫入する
	第67図-455 図版42-455	染付碗	白磁	口径 (11.1) cm 器高 5.9 cm 高台径 (4.8) cm	外面波雪輪文 内面口縁部四方樺文 見込み二重圏線と羊歯文 高台壘付露胎	肥前 45%
	第67図-456 図版42-456	香炉	青磁	口径 (9.8) cm 器高 9.0 cm 高台径 5.8 cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 高台周辺に花卉状にソギを施す 口縁部・高台壘付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 二次焼成受ける
	第67図-457 図版42-457	軒丸瓦	瓦	径 13.8 cm 周縁厚 1.8 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 珠文数13個 丸瓦部凹面布目痕有り	55%
	第3遺構面出土遺物	第67図-458 図版42-458	染付碗	青磁	口径 9.2 cm 器高 7.5 cm 高台径 4.9 cm	筒形 外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 内面口縁部四方樺文 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台内二重方形枠の渦福
第67図-459 図版42-459		染付紅猪口	白磁	口径 5.3 cm 器高 2.6 cm 高台径 1.6 cm	外面氷裂菊花文 高台壘付露胎	肥前 95%
SD5002	第69図-460 図版42-460	搦鉢	陶器		摺目へら描き 内外面口クロナデ	丹波 2% 内面に自然釉掛かる
	第69図-461 図版42-461	皿	青磁	口径 (11.2) cm 器高 1.7 cm 高台径 (5.2) cm	口縁端反り 内面陰刻で文様有り 内面口縁部に重ね焼き痕有り 高台周辺露胎	中国 15%
SK5001	第70図-462	天目碗	陶器	口径 (10.8) cm	鉄釉 外面体部下露胎	瀬戸・美濃 5%

第24表 第192次調査遺物観察表 (24)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SK5001	第70図-463 図版42-463	染付碗	白磁	口径 (9.6) cm 器高 6.6 cm 高台径 4.2 cm	外面笹文 高台露胎	肥前 30%
SK5008	第70図-464 図版43-464	焙烙	素焼き	口径 (32.4) cm	底部外型成形 内外面ヨコナデ 把手貼り付け 把手に孔有り(貫通せず)	30% 底部焼けている胎土に雲母粉含む
	第70図-465 図版43-465	蓋	陶器	径 4.5 cm 器高 1.6 cm つまみ径 1.7 cm	無釉 ロク口成形	不明 100%
	第70図-466 図版43-466	鉢	陶器	口径 (25.5) cm 器高 7.2 cm 高台径 (10.7) cm	外面体部上半から内面灰釉 内面打ち刷毛目文 外面体部下半鉄槌を施す 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台露胎	唐津 50%
	第70図-467 図版43-467	水注	陶器	口径 (5.4) cm 器高 10.6 cm 高台径 7.1 cm	灰釉 高台周辺露胎	瀬戸・美濃 75%
	第70図-468 図版43-468	壺	陶器	口径 (12.0) cm 底径 (14.0) cm	内面口縁部・外面鉄釉 外面底部・内面露胎	丹波 25% 外面口縁部自然釉付着
	第70図-469 図版43-469	染付碗	白磁	口径 9.9 cm 器高 5.7 cm 高台径 4.1 cm	外面コンニャク印判稲束文と手描き梅文併用 高台内圏線と「大明年製」銘有り 高台畳付露胎	肥前 90%
	第70図-470 図版43-470	染付碗	白磁	口径 10.2 cm 器高 3.9 cm 高台径 5.6 cm	外面コンニャク印判花文と手描きで笹文併用 高台内「福」銘有り 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 95%
	第70図-471 図版43-471	染付碗	白磁	口径 (10.1) cm 器高 4.0 cm 高台径 5.6 cm	外面コンニャク印判梅文 高台内圏線と渦福有り 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 50%
	第70図-472	染付皿	白磁	高台径 (7.0) cm	内面唐草文 見込み松竹文 高台内圏線と銘有り 高台畳付露胎	肥前 5%

第25表 第192次調査遺物観察表 (25)

第2節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第209次調査

所在地 伊丹市伊丹3丁目630-2、3

調査面積 326㎡

調査期間 平成10年4月30日～6月30日

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山上雅弘・岡本一秀

1. 遺跡の概要

調査地点周辺の旧地番は鳩ノ垣内630番地に該当するが、同所は元禄7年(1694)の「柳沢吉保領伊丹郷町絵図」段階では畠ないし農地となっている。その後、18世紀中頃以降には酒蔵であったことが確認され、天保15年(1844)の「伊丹郷町分間絵図」でも周辺は市街地として描かれている。これらの事実は多くの点で今回の発掘調査の成果に符合した。そのほか、本地点には有岡城の城郭域と城下町域を区画する大溝筋が南・西辺に隣接することが推測された。この点から本地点の中世の様相を知ることには城郭構造の把握にとって重要と考えられた。

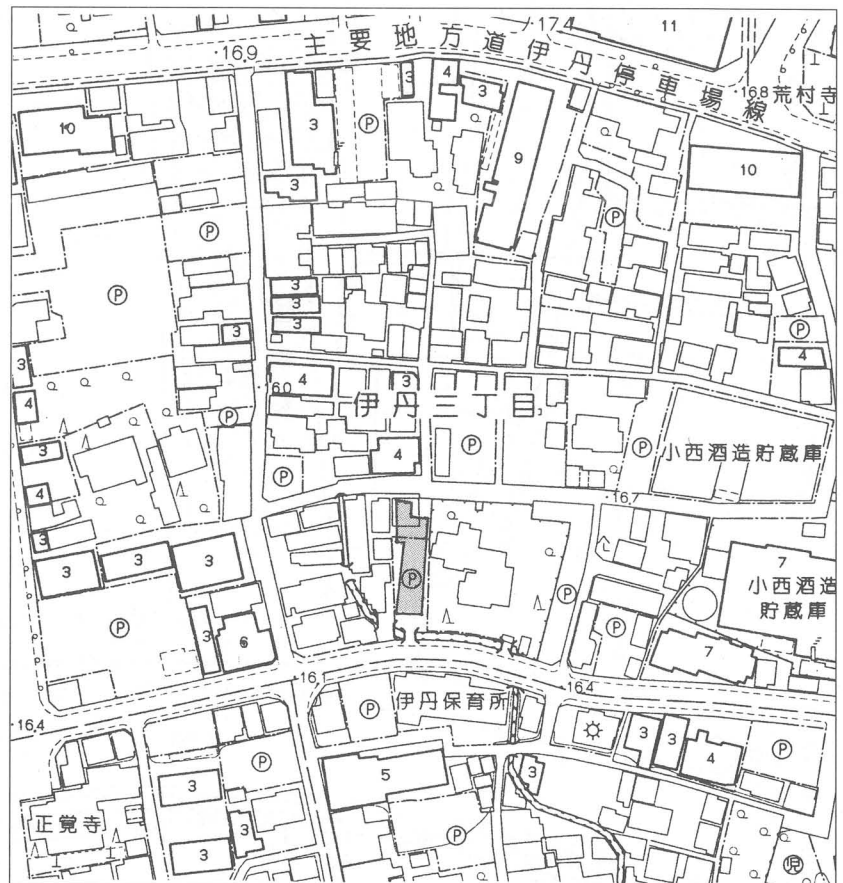
本地点が文献に登場するのは近代以降で『明治19年酒造場絵図面届書』に登場する久納豊蔵邸が存在し、同20年に本地点の蔵で428石を醸造(銘柄「風吟」)したのが初見である。

なお、豊蔵は同35年(1902)には川辺郡酒造組合に参加するが、同42年にはすでに酒造業組合には名を連ねていない。おそらくこの直前に廃業したと思われるが、前後の本地点についての詳細は文献等の資料からは辿ることが出来ない。

その後同地を所有するのは鹿島為次郎である。彼は大手町で明治41年に創業し、同42年には662石を醸造(銘柄は「誉鹿」)、大正元年538石、同8年870石、同14年750石を醸造した。その後、かれは大正年間に堺町・桜町に移転するが、この堺町の蔵が本地点と推測される。(久納豊蔵の蔵を取得したものと考えられる。)一方、大正14年には鹿島酒造合名会社が伊丹酒造組合に参加しているがこれは鹿島為次郎の酒造場から発展したものであろう。

これ以降の詳細については明かにできるものはないが、昭和初期までは酒蔵業が営まれていたといわれている。

(注 酒蔵の検証については、
伊丹市立博物館 和島館長
にご教示いただいた。)



第72図 調査区位置図 平成10年測量 (1/2,500)

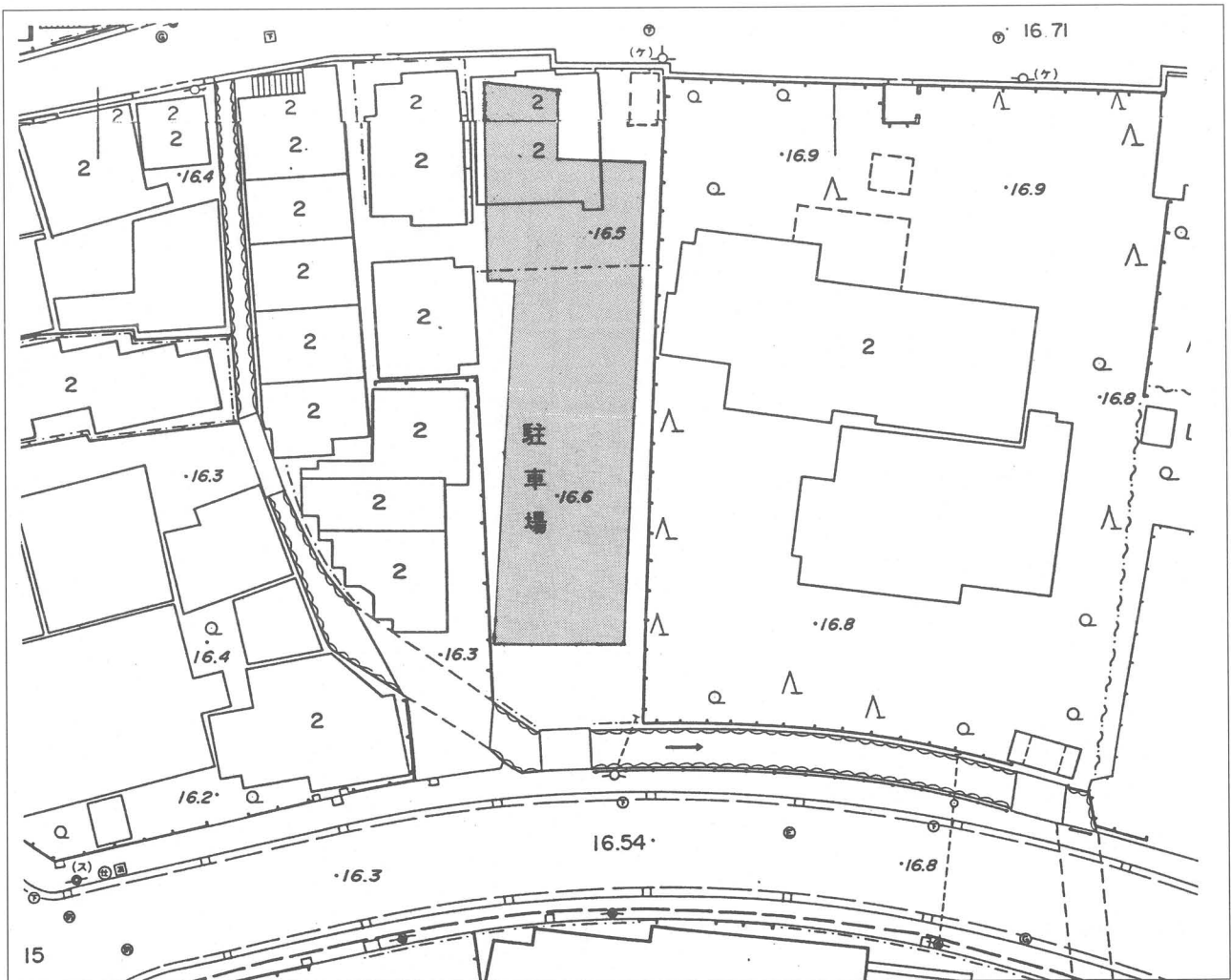
2. 調査の概要

当該地において阪神・淡路大震災の復興に伴う共同住宅建設事業が計画された。本地点は周知の遺跡「有岡城跡・伊丹郷町遺跡」の範囲内にあたるため本発掘調査（当時は全面調査）を実施することとなった。調査に際して伊丹市教育委員会より、震災復興関連事業として兵庫県教育委員会に職員派遣依頼があり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所職員が調査を実施した。調査は4月30日から実施し、埋め戻しを含めて6月30日に終了した。現場終了に先立ち伊丹市教育委員会と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の間で最終の立会を7月26日に行なった。

現場作業は近年までアスファルト敷きとなっていたためこれを重機で除去し、表土までをやはり重機で排土した。これより下層はすべて人力で作業を行なった。また、掘削土は調査区内に残土の置き場がないためすべて搬出し、調査終了後再び埋め戻し作業を行なった。遺構面の検出は2面について実施したが、面検出後写真撮影を行ない、実測図を作成して現場を記録保存した。

今回の調査では、特に江戸期・昭和前期（第1・2面）にかけて長く酒蔵が存在したことが確認され貴重な成果となった。そのほか、最下層では若干の戦国時代の遺構・遺物も検出されたことから、わずかながら伊丹城・有岡城期前後の当該地の状況についても垣間見ることができた。

なお、第74図は久納豊蔵期の当地点の見取り図である。これによれば、南側に搾り場が置かれ北側に居宅が描かれる。図との比較によって、今回の調査地点はこの酒蔵の東側2/3に該当することが



第73図 調査区設定図 昭和60年測図 (1/500)

知れる。戦後この地が分筆されそれぞれ宅地となったのだろう。また、この図によって当時の表通りは現在と異なり北側の道であることが知れ、居宅が通りに面し店が隣接する構造となっていたことがわかる。今回検出されたレンガ竈1は規模から考えて産業用のものではないため、住居部分の煮炊きなどに使用された可能性が大きい。

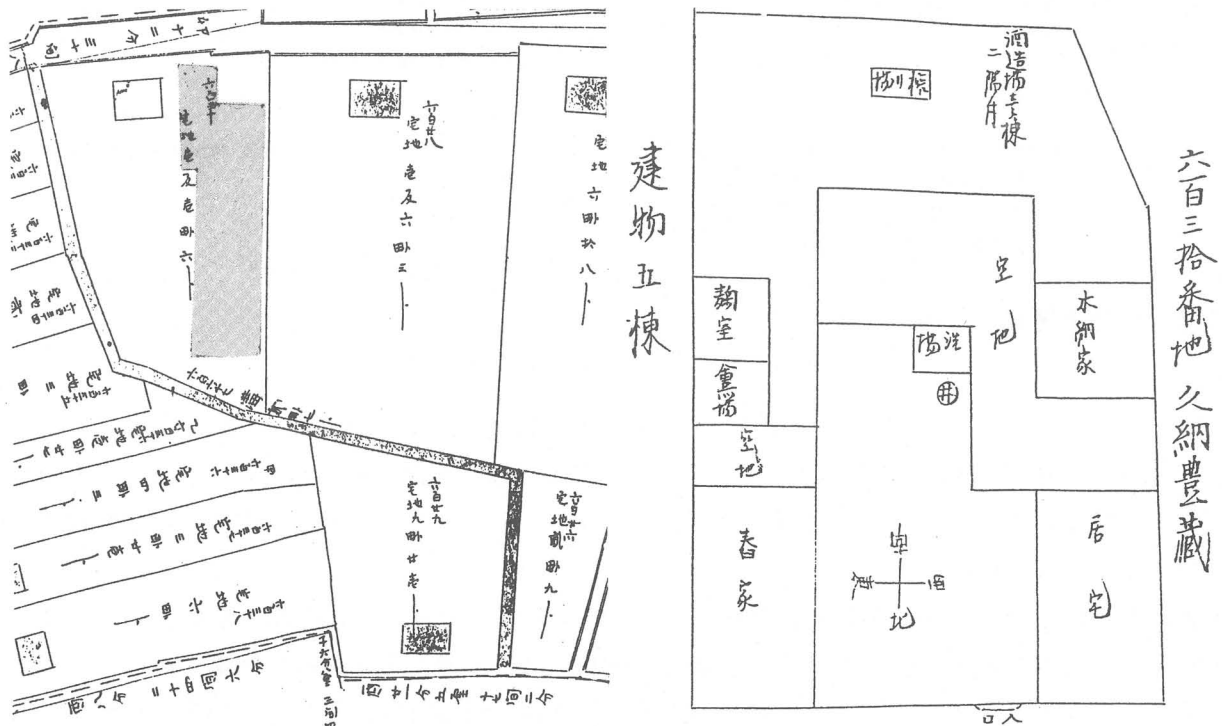
なお、調査区周辺の標高は16.5mを測る。この西側に流れる用水周辺は16.3mとやや低くなる。この用水溝は南に流下するが、調査区南端付近でやや東側に湾曲する。この地形の形状に制約されて、宅地見取り図の形状も南西側が一部隅欠きとなっている。

3. 調査成果

層序 (第75図)

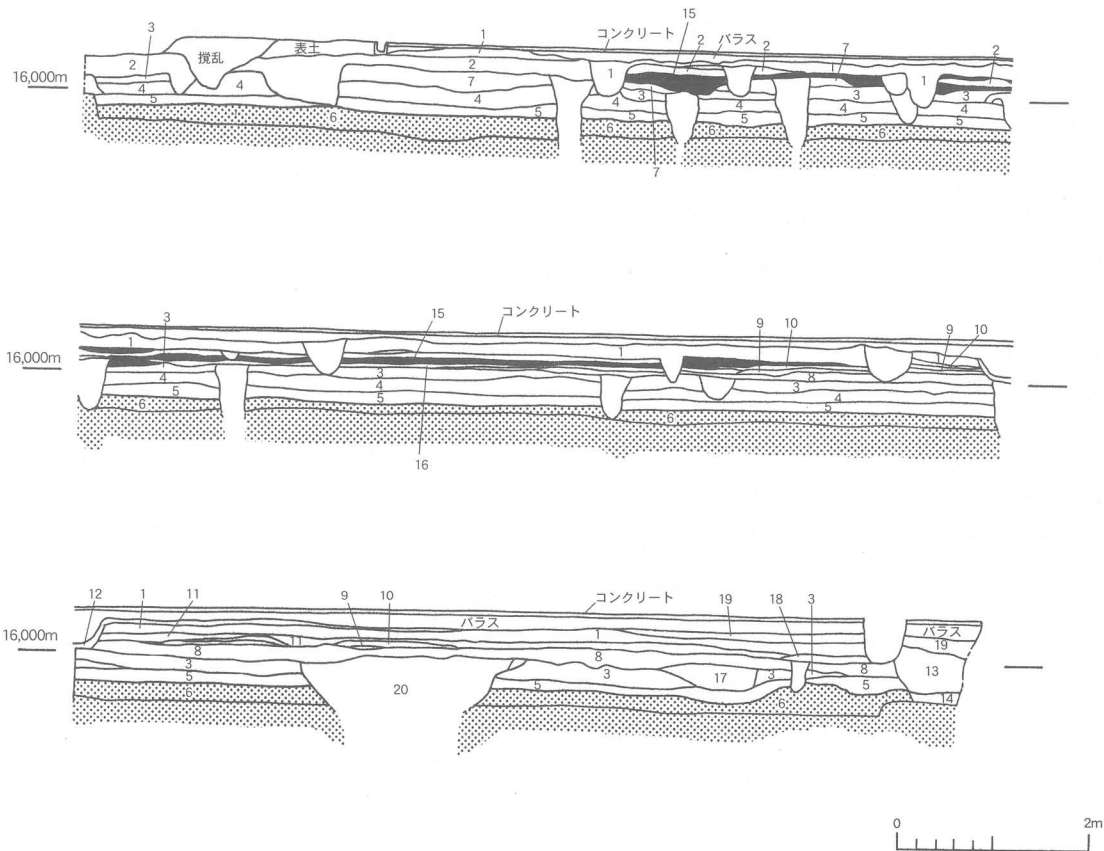
今回の調査では現場作業として2面を検出したが、実際の現地は少なくとも2回の客土が行なわれ、長期間にわたって多くの変遷を経たことが明らかである。そこでここでは調査区東壁の土層堆積状況を通して変遷を検討したい。ただし、調査の作業段階で、調査区四周の全体の土層堆積について詳細に検討したわけではないので、部分的には客土が及ばない部分や、東側に下がる地形を嵩上げするために、西側のみを部分的に客土している箇所などについては、詳細なデータを紹介することができない。従って、それらについては現場の印象を述べるにとどめておきたい。

土層堆積はコンクリートを除去すると炭混じりの焼土層(1・2・15層など)が広く堆積する。この層は部分的に瓦や被熱した生活雑器・建築資材などを包含しながら調査区の中央から北側を中心に認められた。また、この層は一定の厚さを有し大量の焼土と炭を伴うことから、地区内の建物の焼失に伴うものと判断される。



第74図 『大正4年伊丹町地籍図謄本』(左)・『明治19年酒造場絵図面届書』(右)

(スクリーントーン部分は調査区推定地)



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 表土 (焼土・炭・礫混じり) 2. 2.5YR3/1暗赤灰色土 (炭・焼土を含む) …上層焼土層 3. 10YR4/1褐灰色土 (漆喰・瓦礫を含む) 4. 10YR5/8黄褐色土 (砂礫を含む) …客土 5. 2.5Y4/2暗灰黄色土
(中世までの旧表土、少量の炭を含み汚れた土) 6. 地山 7. 5YR4/1褐灰色細砂～極細砂 (漆喰・瓦片・炭を多量に含む) 8. 5Y4/1灰色細砂～極細砂 (シルト質、漆喰・炭混じり) 9. 7.5YR5/8明褐色細砂～極細砂 (地山土の客土) 10. 7.5YR4/1褐灰色細砂～極細砂 (土壌化した土) | <ol style="list-style-type: none"> 11. 2.5Y7/8黄色混礫細砂～粗砂 (地山礫混じり土の客土) 12. 2.5Y6/6明黄褐色細砂～中砂
(2～3cm大の礫含む、現代客土) 13. 2.5YR2/1赤黒色細砂～極細砂 (炭・礫混じり) 14. 2.5Y3/1黒褐色細砂～極細砂 (炭層) 15. 炭層 16. 下層焼土層 17. 5Y5/3灰オリーブ色混砂細砂～粗砂 (地山客土の汚れた土) 18. 11層より表土混じりの土 19. 13層より土壌化の進んだ土 20. 5Y5/2灰オリーブ色混礫土
(3～5cm大の礫含む) …男柱5の埋土 |
|--|---|

第75図 東壁土層図 (1/80)

一方、この下層では2回の客土が観察され周辺の嵩上げが行なわれている。前者は3層.褐灰色土および7層.褐灰色細砂～極細砂で内部に漆喰や瓦片などを多量に包含する。ただし、上層で認められたガラス片や昭和以降に認められる遺物は含まれていない。また、この層上面で遺構が一定数検出できるため、この層は遺構面と捉えられる。

後者の客土は下層の4層.黄褐色土である。この層にも多くの瓦片や陶磁器片が混入するが漆喰は含まれない。基本的には全体に広がるが、調査区西側ではやや厚く客土され、南端の東壁付近では確認することができなかった。これは、男柱の設置など酒蔵の改築に伴って南側で掘削が頻繁に行なわれた結果と考えられる。また、南端部の土層堆積は全体に軟弱で掘り返しが度々行なわれた印象が強い。このため、上層の客土もやや厚く嵩上げされるが層上面は北側より下がり気味になり、蔵の南側敷地端で再び高くなっている。これらはすべて蔵の改築に伴う上面での掘り返しによる影響と推測さ

れる。従って、もともと下層客土は基本的に調査区全体に広がっていたと考える。さらに、この下層の客土上面からも遺構が検出されるため、同層上面は遺構面と判断した。ただし、南端部では同層の堆積が認められないため、現場作業では北側の検出面に合わせて遺構検出作業を行なった。

さらに、これらの客土を除去すると旧来の伊丹段丘上に堆積した5層・暗灰黄色土が広く検出できる。ただし、改変の著しい当地区ではこの層も上層の攪乱や浸透などによる影響によって、土壌が一部変化するが、現場では大きく5層として捉えた。同層下層には黄色シルト質土を基本とする伊丹段丘層が検出できる。

以上のような土層堆積となるがこれらについて時期と遺構面との相関関係について次に説明したい。現場作業では時間的な制約から下層客土面（4層上面）および伊丹段丘面（6層上面）の2面を検出し、上層客土段階は遺構の検出状況を観察しながら下層客土段階と同時に行なっている。また、表土については重機を用いて掘削を行なったが、これによる排土は1・2・15層を中心に行なっている。従って、上層客土（3・7層）以降の遺構変遷については層位的な把握よりも遺構の切り合いや遺物の検討などを中心に行なっている。

これらのことから、本報告では上層客土段階以降を第1面、下層客土段階を遺構面とする段階を第2面、伊丹段丘面を遺構面とする段階を第3面として報告する。それぞれの時期区分は、第1面が近代以降、第2面が18世紀末～明治初期、第3面が14～16世紀代と考えられる。

さらに、第2面については遺構が稠密に検出され、切り合いが多く認められることから長時間に渡る変遷が想起される。このため、これらの遺構の検討を行なった結果、少なくとも2段階に大きく区分できると考えられる。これらを第2面上層と第2面下層と呼称して報告することとした。もちろん後述するとおり、それぞれの段階個々の中でも遺構の変遷があることは明らかであるが、一応第2面上層と第2面下層の間に大きな画期があることは確実である。

さらに、第1面についても多くの変遷を経ていることが明らかである。酒蔵が機能した最終期から、現在の宅地となった時期までである。また、現地での調査や聞き取りの結果、上記の焼土層（1・2・15層など）は戦災による酒蔵焼失時の被災層であることが判明している。

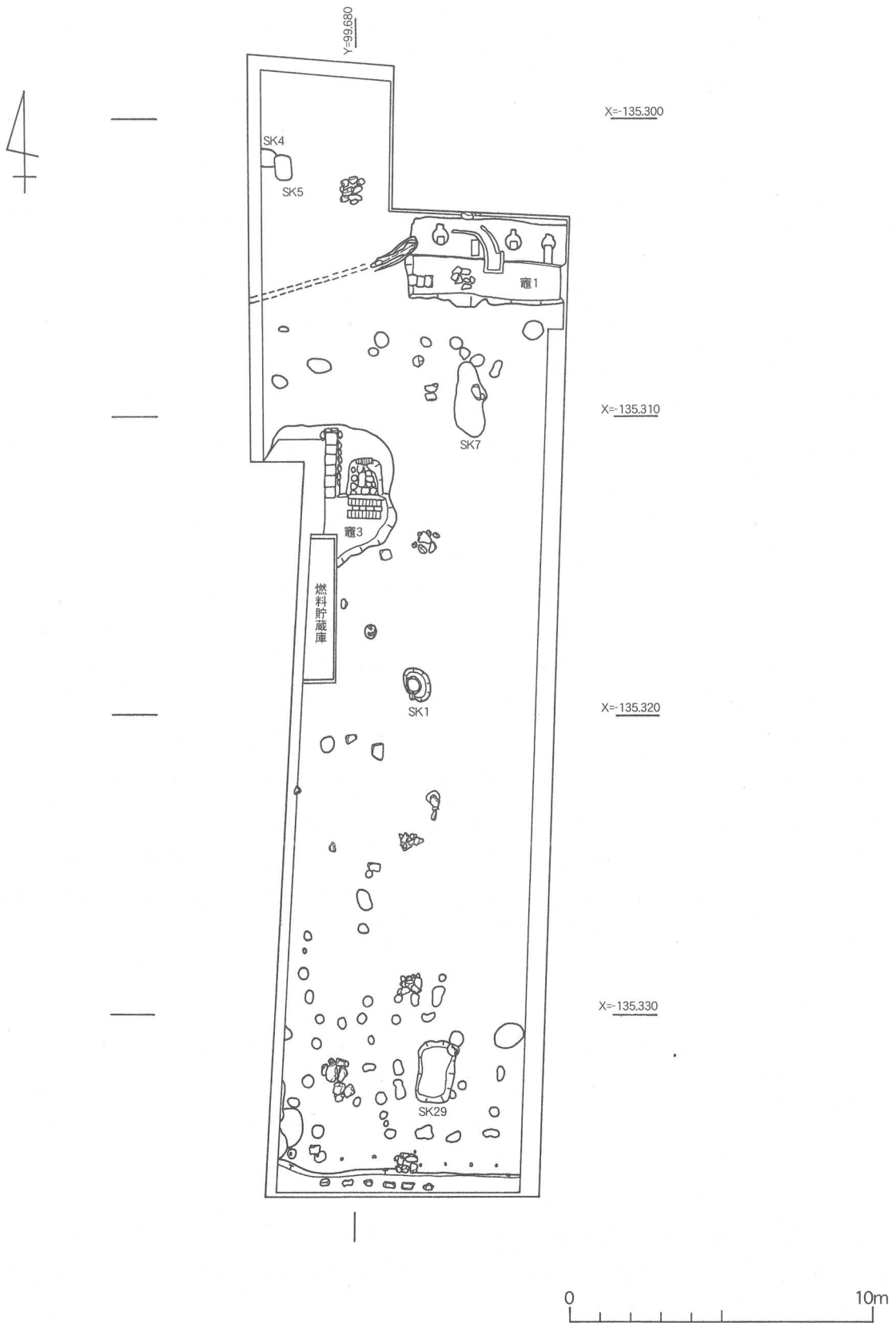
一方、第3面の伊丹段丘を地表面とした時期についても長期間にわたって遺構が変遷したことが想起され実際には第5層を細分できる可能性も残されるが、現場作業の制約から今回は詳細な検討を行なうことができなかった。

遺構概要

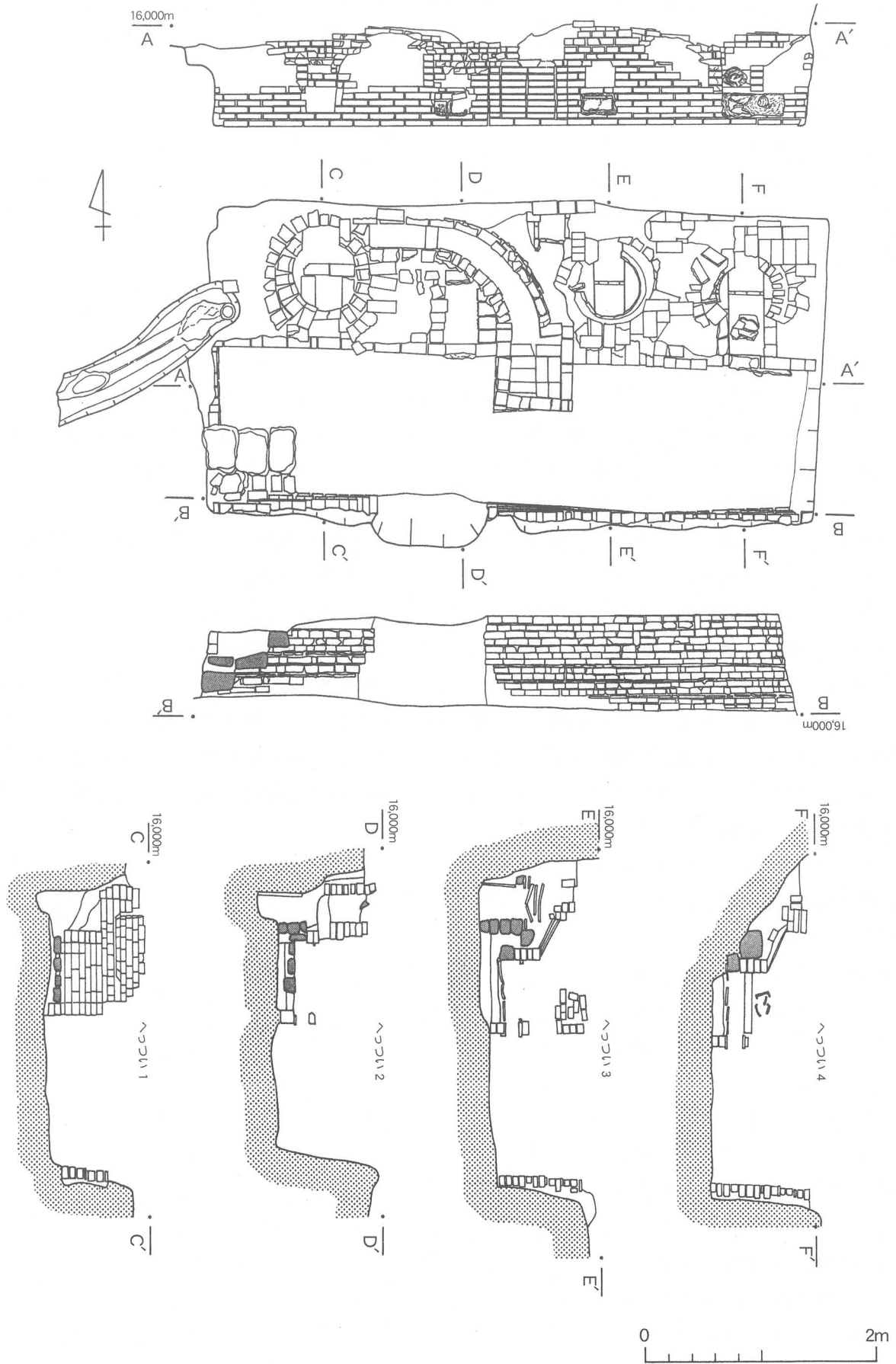
調査の結果、中世から近代までの遺構・遺物が出土し、3面の遺構面が検出された。特に、18世紀中頃～近代に至るまでの期間は酒蔵に関連する遺構が多数検出され、上記史料の内容と一致することが判明した。この他、最下層では14～16世紀代の遺構も検出され伊丹城・有岡城の時代にも営みがあったことを明らかにした。しかし、期待された大溝筋などの堀をはじめとする城郭に直接関連する遺構については明らかにすることができなかった。

検出された遺構には竈6基（内煉瓦竈2基を含む）・男柱8か所の他、燃料貯蔵庫・埋桶・囲炉裏・礎石・礎石根固め・土坑・土器溜り・柱穴・溝・瓦溜など酒蔵関連施設を中心として多種多様なものがある。

なお、本文では複数の竈が並ぶ連立竈が多数検出されたが、報告にあたって竈の記述を以下のように統一した。竈全体については従来のとおり竈と呼称し、個々のかまどについてはへっついとし、それぞれ竈1、へっつい1などと呼称して区別した。



第76図 第1面全体図 (1/200)



第77図 竈1平面・断面図(1/50)

出土遺物には土師器皿・焙烙・火消壺、染付碗・皿・鉢、青磁染付碗・蓋、丹波焼播鉢・甕、備前系播鉢、石製品（砥石）、金属製品（銅銭、火箸、鉄片）などがある。

第1面（第76図・図版44）

近代以降の遺構面である。この時期は昭和初期までは酒蔵であるが、戦災によって焼失し、その後は宅地あるいは倉庫となったといわれている。

検出された遺構は酒蔵に関連するものが大半で、竈1・3（いずれも煉瓦竈）・礎石根固め痕跡・燃料貯蔵庫・囲炉裏・土坑などがある。

竈跡

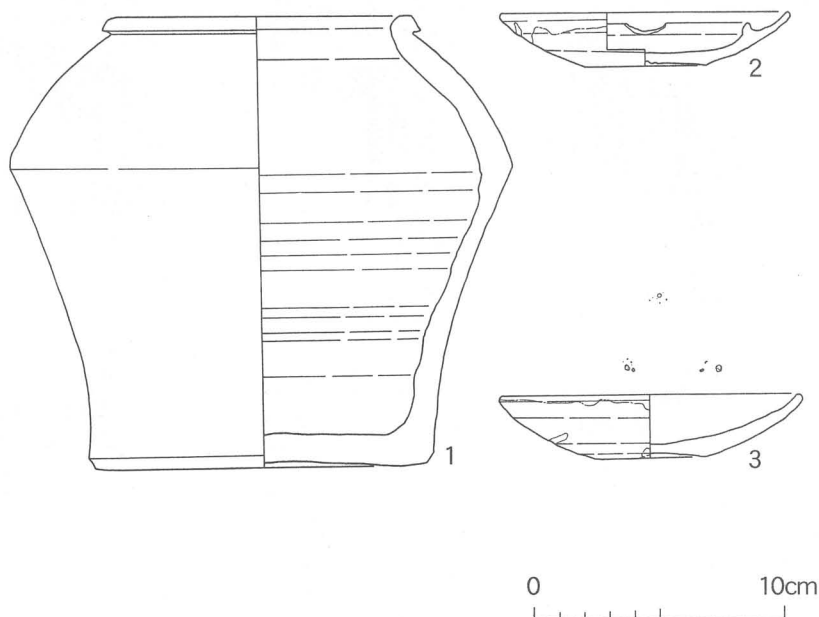
竈1（第77・78図、図版45・46・60）

煉瓦竈である。地面を掘り下げ、前庭部及び竈の基礎部分を地下に据え、焚口を南側に開口する構造である。規模は竈全体が幅5.2m、奥行き2.7m、検出面からの深さ約0.9mで、前庭部は奥行き1.1m前後である。全体としては大型の遺構であるが個々のへっついが小規模であるため酒造用に使用されたものではなく炊飯や煮炊用の竈と推定される。

調査の結果、この竈は一時期のみの使用ではなく何回かの改修・改築を行っていることが判明した。当初へっつい4基が構築されるが、のちにへっつい2を破棄し上部にへっつい1の煙道を取り付け、へっつい2・3間にある煙突へと排煙する構造となっている。これとは別に、外面からは窺い知れないが、裏側にも煙道の一部が検出された。この煙道は外部への通路が遮断されているので、一世代前の遺構の残存部と考えられる。ただし、この裏側の煙道はさきほどのへっつい1の煙突に繋がる。このため煙突部のみは一世代前の竈でも同じ場所にあったことが推測される。

竈構築は外観をすべて煉瓦で構築するが、裏込めや灰落としの壁・底部には江戸期の竈に使用していた石材を転用している箇所が多い。さらに、前面やへっつい上部など視覚的に見える場所は整然と煉瓦を並べるが、裏側は雑な造りが目立つ。また、竈から西側へは土管が敷設され排水溝が延ばされていた。この溝は煙突などから浸水する雨水のためのものか、竈本体からの水を受けるものかは残存状態が悪く判然としないが、調査区西壁までつながっていることから、建物外への排水を目的としたものであろう。このほか、前庭部の西壁には昇降用の石段が敷設される。

竈は廃棄後、基礎部は埋め戻していたが、地上部は削平されていた。一方、へっつい1の焚口に火消し壺1個体が割られて据えられていたがこれは竈廃棄時の祭祀と



第78図 竈1出土遺物（1/3）

考えられ、火消壺はこの祭祀に関係した遺物である。また、竈の前庭部の埋め戻しにはコークス殻が充填されていた。煉瓦造りの燃料貯蔵庫と合わせて酒蔵の最終時期はコークスを燃料として使用したことが推測される。

竈1から出土した遺物には前述の土師質火消壺(1)、伊賀・信楽系の灯明皿(2・3)の3点がある。以上から考えてこの竈の使用時期は昭和初期と考えられる。

竈3(第79~81図、図版47・49・60)

酒造用の煉瓦竈である。半地下式で前庭部及び竈の基礎部分を地下に据え、焚口を南側に開放する構造である。2連のへっついで構成されるが、西側は調査区外に位置する。竈はへっつい部分や、背後の煙道などがすべて意図的に破壊されており、残存状態は良好ではない。規模はへっつい1の灰落としが幅0.8m、奥行き1.0m、高さ0.3mである。へっついの規模は検出状況からすると直径1.6m前後と推測される。また、背後の煙道は基底部の煉瓦の幅から推定すると幅60cm前後と考えられる。この他、西壁面には東側のへっついと間隔や高さ構造が同一の煙道基礎が認められ、2連のへっついが同形・同規模であることを推測させる。

背後の煙道とは別に2基のへっついの間には煙道が造られる。構造は壁を竈石、底に大型の平瓦を据えるもので幅30cm前後を測る。内部は灰層が厚く堆積した被熱した状況であった。また、煙道の前面には煙突が存在したと思われ、煙突を積んだ煉瓦の据付け痕跡が確認された。

竈の前庭部は検出面から深さ1.1m、南北幅は最大で2.0mを測り、平面形状を隅円に掘削している。焚口前には部分的に煉瓦を敷く。灰の処理を容易にするためであろう。一方、竈側の基礎部は竈5の掘り込みを利用して構築する。竈5を埋めながら竈基礎を作り上げるもので、一定の高さまでは土砂を斜めに流し粗く埋めている。そして、上部のみ粘質土を置き灰落とし廻りやへっついを構築し、へっつい部分は漆喰を塗っている。この漆喰痕跡のみが僅かであるが検出できた。

竈本体は視覚的に見える部分には煉瓦を使用する。ただし、灰落としの壁・床面、煙道やへっついの下部には江戸期の竈石を転用する。

なお、竈3のへっついおよび前庭部は近代の煉瓦・陶磁器・瓦類によって埋め戻されていた。この際、竈に使用した煉瓦や転用した竈石を多数埋め戻しており、この埋め戻しは竈廃棄後直ぐに実施されたと考えられる。さらに、その上層には断片となった漆喰が多数堆積し、部分的に煉瓦を敷いた痕跡も観察された。おそらく、この漆喰は洗い場の痕跡と思われる。

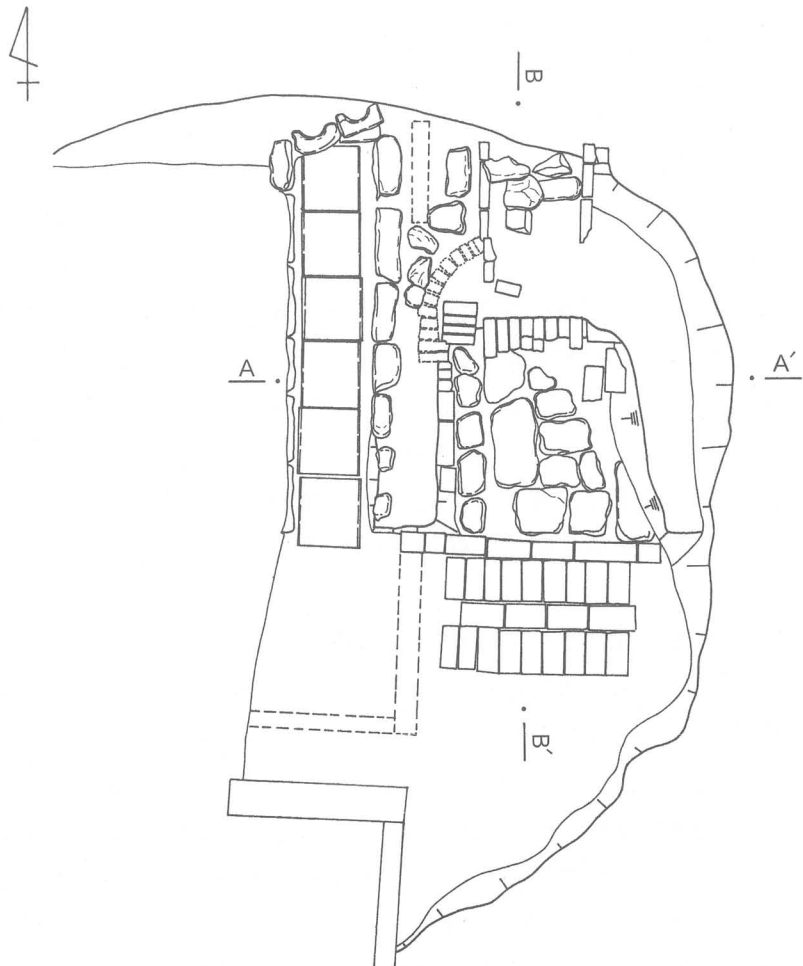
竈3から出土した遺物には丹波焼徳利(4)、寛永通宝(5)がある。このほか煙道に使用された瓦と前庭部に敷かれた煉瓦がある。瓦はすべて平瓦で、煉瓦は竈1と同じタイプのものであった。

丹波焼徳利は口径2.5cm、器高16.7cm、底径7.6cmを測る。外面に鉄釉を施し、「清水福」・「今津」の文字がイッチン描きされる。なお、本個体は底部下半に被熱痕跡を残す。

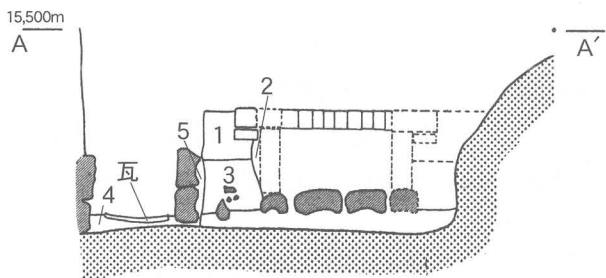
礎石根固め痕跡(第76図・図版44)

礎石・および根固め石を完全に抜き取られたSK1など、多数の痕跡を検出することができた。礎石が残るものはなく調査区内で検出されたものは、すべて礎石下の根固め石であった。SK1は当初土坑として検出したが、並びから考えて、酒蔵の礎石を支えた根固め石を置いた痕跡である。

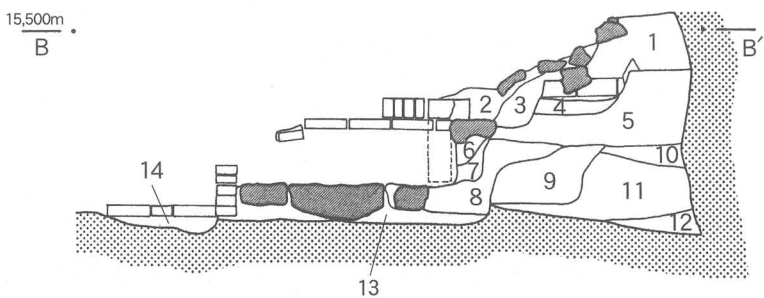
礎石の根固めは地山の深さに合わせて根石を入れており、男柱や竈などの下層遺構のある部分では、深く掘削して地山に根石が届くように石を据えていた。礎石の並びが復原できたのは調査区中央に並ぶ1列で、これに対応する礎石列は調査区外に広がっていたと考えられる。検出できた礎石列は



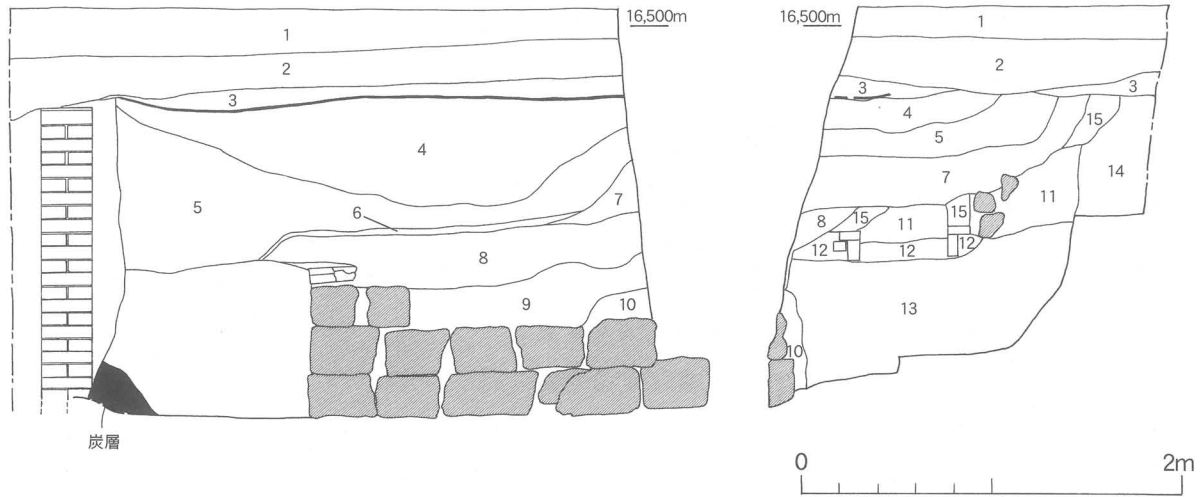
1. 5YR4/8赤褐色粗砂 (被熱する)
2. 5YR4/6赤褐色中砂～粗砂
3. 10YR4/6褐色細砂 (5～8cm大の礫含む)
4. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質細砂 (瓦の下の細砂)
5. 10YR4/3にぶい黄褐色中砂～細砂 (煙道の壁の石の裏込み)



1. 5Y4/1灰色シルト質細砂
2. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質細砂
3. 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 (1～2cm大の礫を含む)
4. 2.5Y5/1黄灰色細砂
5. 2.5Y4/2暗灰色シルト質細砂
6. 10Y6/1灰色シルト質細砂
7. 10Y6/1灰色シルト質細砂 (1～2cm大の礫を含む)
8. 7.5YR4/3褐色細砂
9. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質極細砂 (粗砂を含む)
10. 2.5Y5/1黄灰色シルト質中砂～細砂
11. 2.5GY オリーブ灰色シルト質細砂
12. 7.5GY5/1緑灰色粘質土
13. 2.5Y5/1黄灰色中砂～細砂
14. 10BG2/1青黒色細砂 (礫多く含む)



第79図 竈3平面・断面図 (1/40)



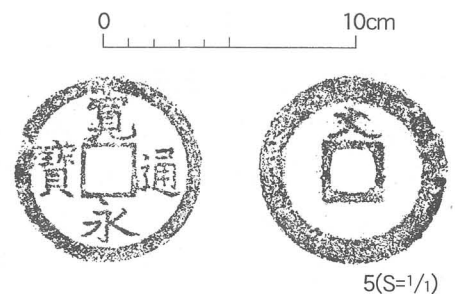
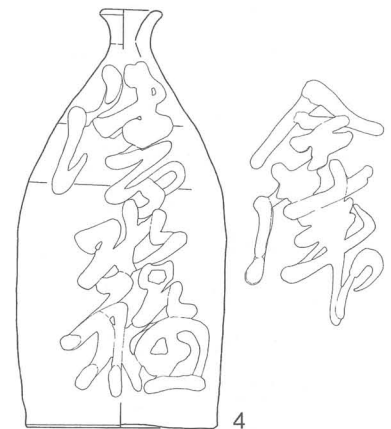
- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 碎石 2. 表土 3. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト質土微砂 (焼土層) 4. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質土細砂 (微量の炭含む) 5. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質土細砂 (漆喰を多量に含む) 6. 10R7/1赤黒色土 (焼結土層) 7. 2.5Y6/6明黄褐色土細砂 (焼土・炭を少し含む) 8. 2.5Y6/6明黄褐色土細砂 (レンガ・灰・漆喰・炭を多く含む) | <ul style="list-style-type: none"> 9. 5YR4/6赤褐色シルト質土微砂 (炭・レンガを少し含む) 10. 5R4/4にぶい赤褐色シルト質土微砂 (焼土・炭を少し含む) 11. 2.5Y4/2暗灰黄色土微砂 12. 10YR3/4暗褐色シルト質土細砂 (炭を少し含む) 13. 10YR3/3暗褐色細砂 (竈3埋土) 14. 10YR4/2灰黄褐色シルト質土細砂 (炭・焼土粒・漆喰を微量に含む) 15. 5YR4/3にぶい赤褐色細砂 (焼土層) |
|--|--|

第80図 竈3西壁・北壁断面図 (1/40)

近代以降の蔵の棟持ち柱の通りと推定される。ただし、この根固め石は竈1の上に構築されていること、一部に被熱痕跡が観察されることから、戦災によって焼失した建物の基礎と判断される。また、これによって竈1は戦災前に廃棄されたことが明かになった。さらに、蔵が昭和の初期に一度建替えられていることも確認できた。燃料貯蔵庫は戦災によって廃棄されているのでこの建物に伴う遺構としては調査区西端で見つかったこの貯蔵庫が同時期のものと考えられる。

柱通りはほぼ南北で柱間は5～6mを測る。但し、柱の東西方向については調査区の外側に存在すると思われ、建屋の具体的な内容を明らかにすることは出来なかった。

なお、礎石据付痕跡はこれら以外には検出できなかったため、古い段階の酒蔵の構造を明らかにすることはできなかった。



第81図 竈3出土遺物 (1/1・1/3)

燃料貯蔵庫 (第76図、図版44)

西側の壁際から検出された遺構で、東辺の一部分を明らかにすることができた。南北4.9m、東西1.0m以上、深さ1.7m以上の規模を測る。竈などで使用される燃料を蓄えておく貯蔵庫 (薪のちに石炭) として使われたものである。壁は煉瓦を積み、表面 (底面を含む) にモルタルを塗り込める。かなり深いもので地山を掘り下げた地下貯蔵庫である。壁部分は墨が付着し煤けた状態であった。竈3を切って構築されており明らかに新しい時期のものと考えられる。また、竈1の煉瓦に比べやや大型の製品を使用している。

内部には瓦や炭、漆喰片、陶磁器・ガラス片等が投棄され、埋め立て土砂に大量に混入されていた。すべてのものが高熱の火を受けていることや、陶磁器やガラス片の様子から明らかに戦災時の焼失にともなう瓦礫と判断された。このため、本遺構は近代に構築され戦災時に廃棄されたものと考えられる。構築時期は竈1の煉瓦との比較からこれよりも新しく、さらに切り合いから竈3よりも新しい。

そして、礎石痕跡での検討結果から廃棄は戦災時と考えられるので、上記の礎石根固め痕跡の建物と共存すると推測される。

土坑

SK 4・5 (囲炉裏) (第76・82図、図版48)

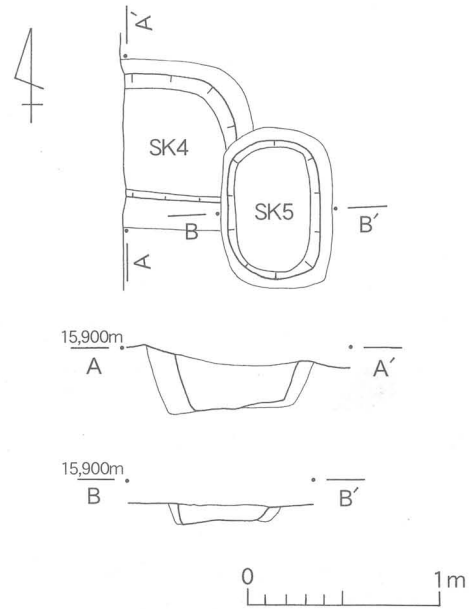
調査区北側に検出された遺構で、SK 4・5の2基が見つかった。両者は切り合っておりSK 5がSK 4を切っている。時期は出土状況から近代に入る。両者とも壁面に厚さ10~15cm前後の粘土を貼り、底部に焼土面が観察できた。内部には灰混じりの土が充填される。おそらく粘土はさらに高く盛られ、床面に達していたと思われるが、戦災時の攪乱のため上面は破壊されていた。規模はSK 4が長さ60cm以上、幅70cm、深さ15cmである。SK 5が長さ72cm、幅50cm、深さ15cmを測る。

この遺構は久納豊蔵邸見取り図の居宅部分に該当するもので、この建物内に構築された囲炉裏と考えられる。ただし、2基の遺構が切り合っているため、建物内の改築が少なくとも1回以上行われたことがわかる。

SK 7 (第76・83図、図版60)

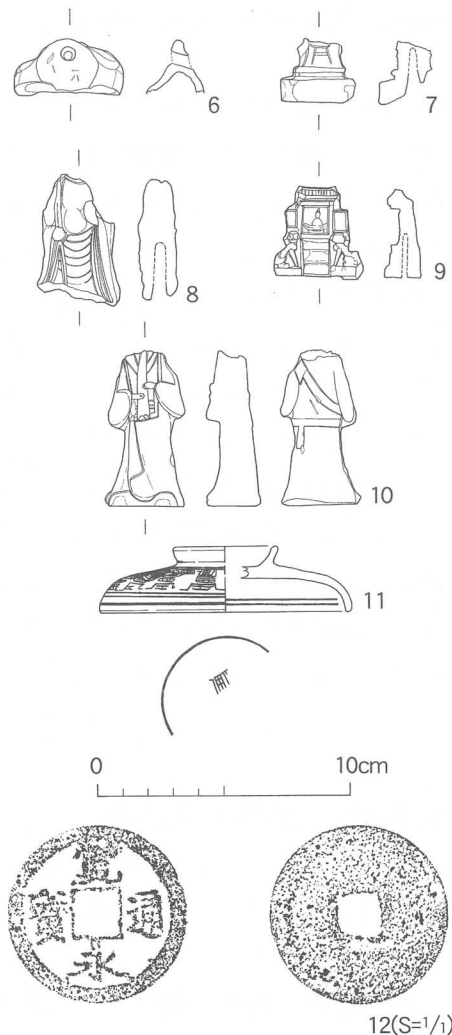
平面長楕円形の土坑である。内部にコークス殻などが混入していた。規模は長さ2.4m、最大幅0.9m、深さ0.15~0.3mを測る。検出状況からすると本土坑は廃棄土坑と考えられるがコークスの存在から最終的には竈1と同時期に埋まった可能性が大きい。内部には瓦片を含む多量の遺物が出土した。図化したものは7点である。肥前系碗蓋(11)・ミニチュア製品(6~10)・銅銭(12)がある。

11は口径10cm、器高2.6cmを測る。外面に寿字文、内面は口縁部に二重圏線と見込み圏線が描かれ内部に寿字文が施される。6は鈴の模倣品である。小片のため詳細は不明であるが鈴の上端部のみの破片と思われる。7は箱庭道具と考えられる製品で、祠を模倣したもので、表面に雲母が付



第82図 SK 4・SK 5 平面・断面図

(1/40)



第83図 SK 7 出土遺物 (1/1・1/3)

着する。8は仏像を模倣した製品である。破片のため全形は不明であるが、前面に朱が塗布されている。9は箱庭道具と考えられる製品で、神社を模倣したもので、表面に雲母が付着する。高さ3.6cm、幅3.5cmを測る。10は虚無僧を模倣したミニチュア製品である。表面に朱が塗布されている。12は寛永通宝である。

SK29（第76図、図版44）

平面長方形を呈する土坑である。規模は長さ2.1m、幅1.3m、深さ0.35mを測る。内部は黄色のシルトが充填され、礫などが多量に混入されていたが、土器などはまったく無かった。検出状況から考えると敷地造成に伴う工事などで掘削された穴を造成土で埋め立てた痕跡と推測される。

第1面の小結

この段階の始まりは囲炉裏の存在や内部の配置からすると明治42年の久納豊蔵邸以降（明治時代後半以降）と考えられる。層直上には戦災被災層が堆積し、この下層に礎石根固め痕跡が検出されていることや、礎石根固め痕跡が竈1廃絶後に据えられることからすると何段階かの変遷を経ていることは明らかである。

聞き取りによれば戦後調査区周辺の建物は酒蔵をやめ、倉庫として使用されたという。また、戦災によると思われる焼土層の存在や燃料貯蔵庫の埋め立て土砂が焼土層で占められていた事実は蔵が戦災に伴って焼失したことを物語っている。この状況は今回の調査成果に符号している。ただし、酒蔵を廃棄後も単に倉庫として利用したのではなく、何らかの営みが行なわれていたことも今回確認された。

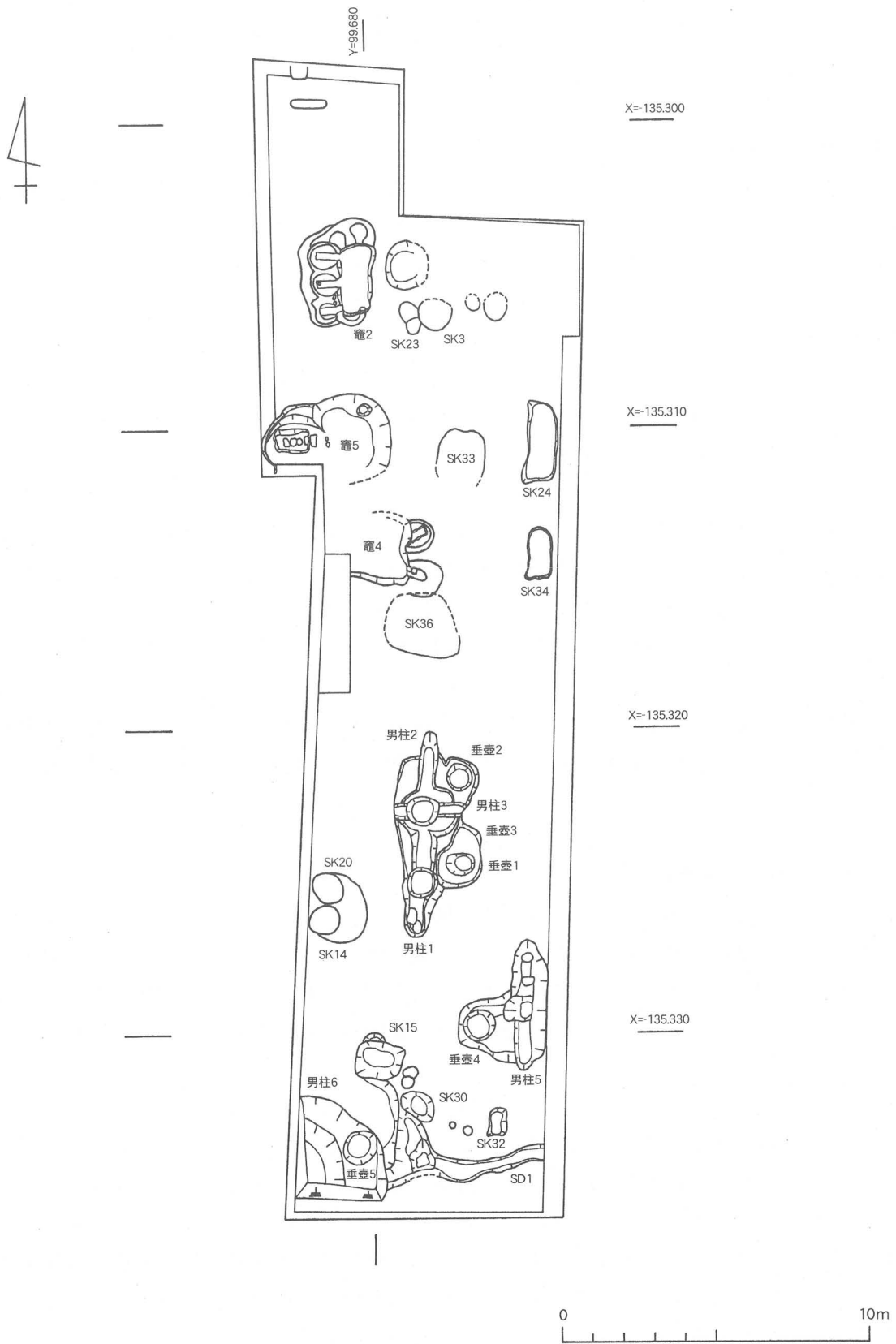
なお、調査南端部分では南側に大きく下る地形となるため、これを埋め立てて造成した痕跡が検出されている。このほか、周囲には杭状のピットが多数検出されたが、これらの痕跡は建物建築時の工事に伴うものと考えられる。

第2面（第84・95図、図版44）

第2面は18世紀前後から明治初期にかけての遺構面で、この時期は酒蔵が最も活況を呈した時期である。検出できた遺構には竈4基・男柱8か所・埋桶・礎石・土坑などがある。特に、男柱はすべて江戸期のもので、調査区北側から南側に移動する傾向が認められた。また、近代の男柱が今回の調査では検出されていないこのことから、この時期（第1面段階）には搾り場が西側に移動したことが推測される。

このほか、この時期は検出状況からさらに上層段階と下層段階に分離できるため、記述も2段階に分けて行なった。この区分けは主として遺構の切り合いから判断したもので、全体的な土層による分離は行なえない。これは酒蔵が部分的に改築・補修しながら営まれたため、部分的に整地や客土を行なった箇所が特に南側を中心に広がるためである。ただし、このことは第2面の期間を通じて全面的な立替が行なわれなかった可能性も示唆するもので、酒蔵の変遷を考える上で重要な成果を多数もたらせてくれたといえる。その一方で、何度も大型の竈や男柱が造り替えられところを見ると酒蔵の経営に伴って施設の配置換えや変更は頻繁に行なわれていたようである。

第2面の中では上層段階は竈や男柱の大型化が顕著で酒蔵の生産量が上がった時期であると推測される。また、下層段階では埋桶遺構が多数検出されるが、竈や男柱が小規模で酒蔵の変遷を窺える。



第84図 第2面上層全体図 (1/200)

第2面上層（第84図、図版44）

第2面上層は酒蔵が最盛期を迎えた時期である。竈・男柱・埋桶・土坑・溝などを中心に多数の遺構が検出された。

竈跡

竈2（第85図、図版48・64）

個々のへっついが小規模であることから炊飯などの煮炊用の竈と考えられる。当初3基以上のへっついが存在したがこれをすべて廃棄し、あらたに東側に焚口を開放する3基のへっついが構築される。元来竈基礎部や前庭部を掘り込んだ半地下式の竈と思われるが残存状況が悪く、詳細を窺うことはできない。

竈全体の規模は長さ3.5m、幅2.5mを測り、地山を20cmほど掘削して構築している。それぞれのへっついの大きさはへっつい1が直径0.5m、炊口幅0.15m、へっつい2が直径0.5m前後（一部破壊のため詳細は不明）、炊口幅0.15m前後（同左）、へっつい3が直径0.9m、炊口幅0.18m、へっつい4が直径0.65m、炊口幅0.18m、へっつい5が直径0.45m、炊口幅0.15mを測る。いずれも上部を削平され高さは20～30cmほどしか遺存しない。

当初構築されたへっつい1・2・6は1・2が南側に焚口を開放させ、6がこれに向かい合うように構築したもので、焚口を北側に向け、2連の竈が対になって使用されたと思われる。ただし、南側はへっつい6の1基のみが残存している。おそらくへっつい6の西側竈はへっつい5を構築する際に破壊されたのであろう。構築に際しては地山をやや掘り窪め粘土質の土を貼っている。壁の構築に際しては拳大ないし人頭大の石を芯に据えて、その周辺に粘土を貼り付けていた。さらに、竈内壁や外面などの表面部については化粧のために面を平滑に仕上げ、炊口などの要所には瓦を砕いて貼り付けたりしていた。例えば、へっつい1・2の焚口は丸瓦片を立てて袖部を補強する。

また、へっつい1～3では何度かの補修痕跡が認められ、竈内は紫色ないし赤色に変色していることから長い期間の使用が推定される。また、窪み状に検出できた前庭部には炭層が堆積していた。

このほか、へっつい3・4・5使用時にはへっつい1・2とへっつい6の前面を粘土で塗り込めていたと思われる。

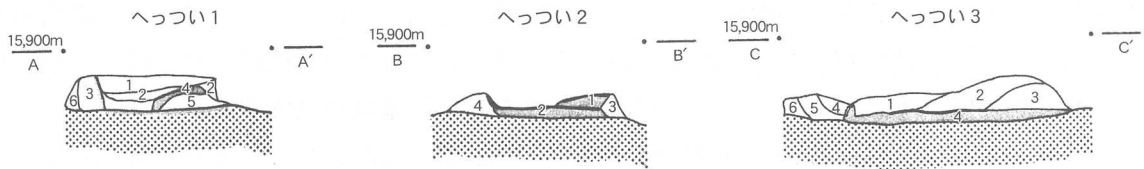
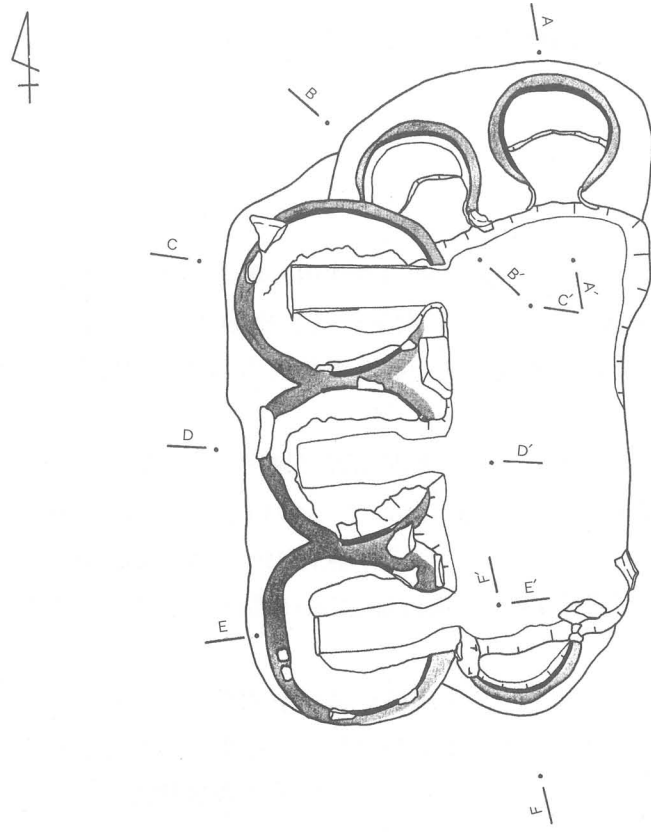
へっつい1・2では燃焼部の床面をやや嵩上げしている。嵩上げの範囲は焚口方向に高く奥に行くほど低くなっており、内部には炭が多量に堆積していた。へっつい1・2・6に灰落としが存在したかどうかは不明である竈周辺ないし内部から出土した土器は炊口に転用された瓦片と肥前系陶磁器細片のみである。

竈4（第86図、図版49）

竈4は竈5より古く、男柱7・8よりも新しい。多くの遺構が重なって造られるため、攪乱が著しく遺存状況は良くない。竈3や燃料貯蔵庫に前庭部を破壊され、竈3の埋戻し、礎石の据え付けのための掘削など様々な破壊が認められた。

構造は半地下式の2連竈で、構造や規模から酒造用と考えられる。焚口は西側に設けるが、へっつい2の炊口はへっつい1側へやや寄って構築される。前庭部の詳細は不明であるが、底部は標高14.8m前後で、竈5よりやや浅い。

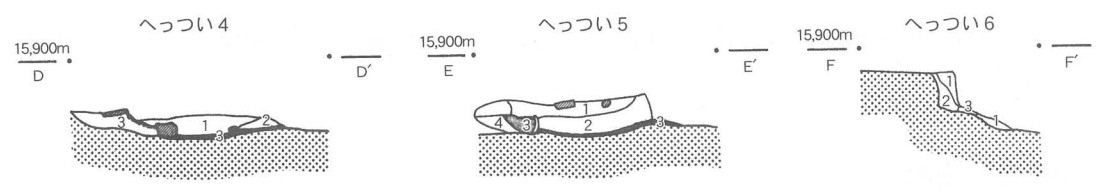
へっつい1は直径0.85m、底部の高さが標高14.9m、へっつい2は直径0.8m、底部の高さが標高15.1mである。へっつい規模はほぼ同じであるが、へっつい1のほうが0.2m前後深くへっついを構築



- 1. 2.5YR2/1赤黒色(炭層)
- 2. 7.5Y5/1灰色細砂土
- 3. 2.5YR4/1赤灰色シルト質土微砂(竈構築土)
- 4. 5YR5/8明赤褐色シルト質土微砂(竈構築土)
- 5. 7.5YR4/1褐灰色シルト質土微砂(竈構築土)
- 6. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土細砂(竈構築土)

- 1. 5YR6/8橙色シルト土細砂
- 2. 5YR5/3にぶい赤褐色シルト質土細砂
- 3. 7.5Y7/2灰白色シルト質土細砂
- 4. 5Y5/2暗灰黄色シルト質土細砂

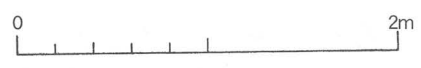
- 1. 2.5Y5/2暗灰黄色微砂
- 2. 5YR5/6明赤褐色シルト質土微砂
- 3. 7.5Y5/1灰色細砂土
- 4. 5YR4/8赤褐色土細砂
- 5. 7.5Y5/1灰色土微砂(竈構築土)
- 6. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質土細砂



- 1. 7.5Y5/1灰色細砂土
- 2. 5YR5/6明赤褐色シルト質土微砂
- 3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土微砂(焼土・炭を多く、遺物・瓦片を少し含む)

- 1. 7.5Y5/1灰色細砂土(焼土・炭を微量に含む)
- 2. 5YR5/6明赤褐色シルト質土微砂
- 3. 2.5YR4/6赤褐色土微砂
- 4. 2.5GY5/1オリーブ灰色土微砂(粘土ブロック含む)

- 1. 赤色被熱層
- 2. 灰色粘土層
- 3. 灰褐色



第85図 竈2平面・断面図(1/40)

している、大型の釜を据えるのに適した構造となっている。

また、へっつい1の壁面には長方形の竈石を貼り付けていたと思われ、一石だけが残存する。さらに灰落としに敷いた石も確認されるため、全体が貼石構造であったと思われるが大半が意図的に外されている。この際へっついの壁面は大きく損傷を受けたようで、石を据えた痕跡はほとんど明確にできなかつた。へっつい2も燃焼部の床面と灰落としがかるうじて残る。灰落としの側面は加工石、底部と奥壁は平瓦片で構築する。

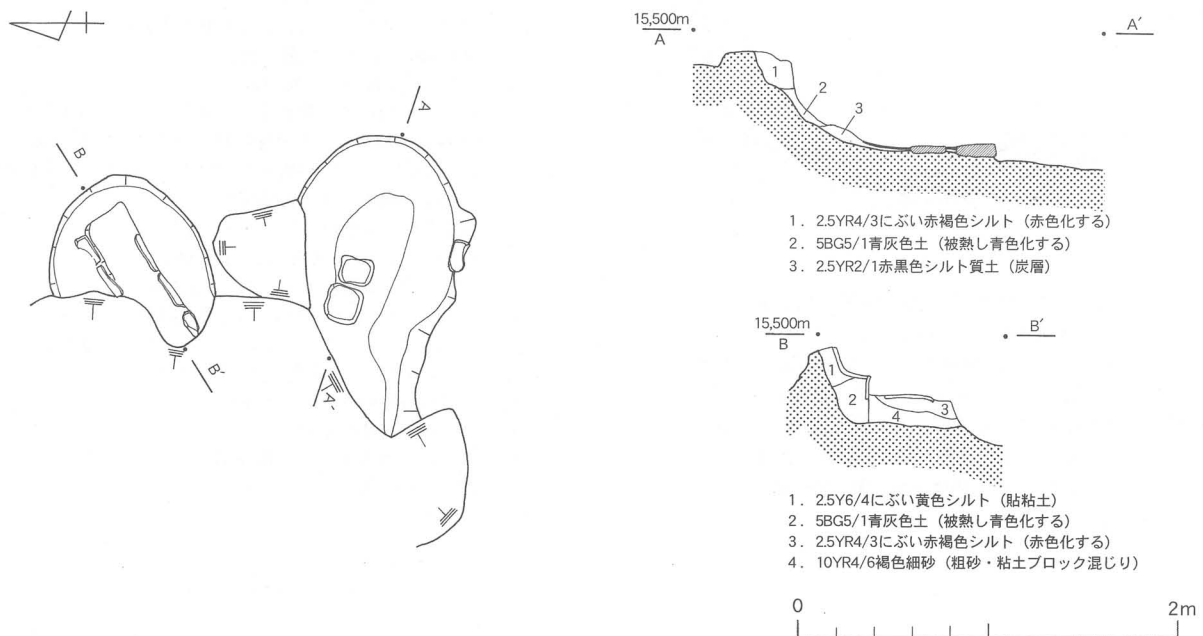
竈5 (第87・88図、図版49・60)

竈5は竈4の北西、調査区西壁際で検出された。検出状況から竈5は竈3より古く、隣接する男柱7・8よりも新しい。一方、同じ第2面上層の竈4は男柱8より新しいことがわかっているため、竈5・4の時期差はそれほど大きくないと考えられる。

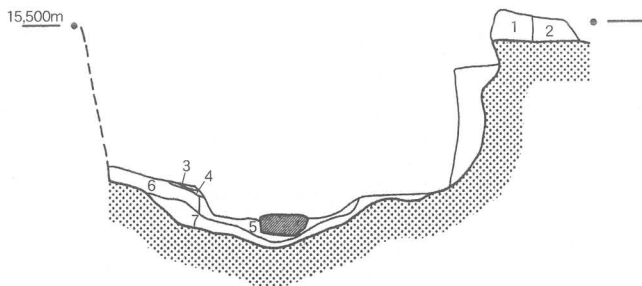
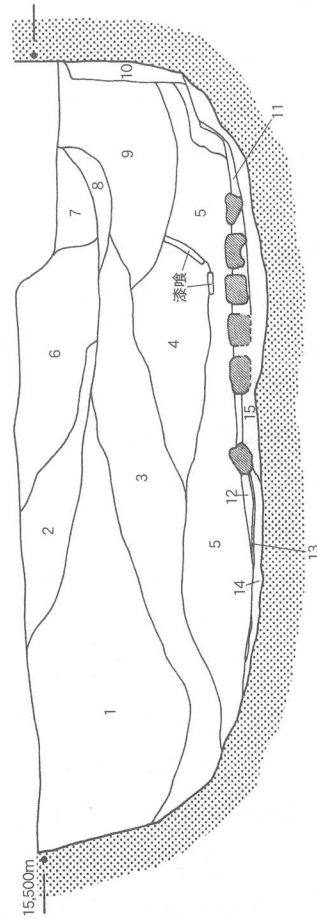
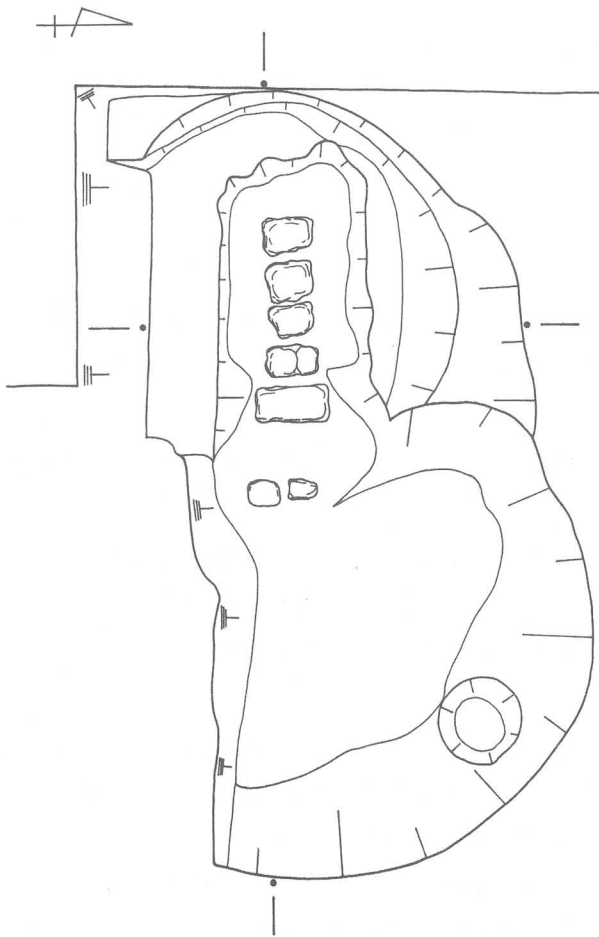
また、竈5の残存状況は竈3に切られ、南側は燃料貯蔵庫の掘方によって破壊されている。このほか周辺の遺構の埋戻し、礎石の据え付けのための掘削、廃棄時にはへっつい部分の石材などが抜かれるなど、様々な破壊が認められた。その上に多くの遺構が重なって造られるため、攪乱が著しく遺存状況は良くない。また、竈は廃棄時には埋め立て土砂とともに多くの棧瓦が投棄され添圧しながら埋め立てが行なわれていた。この状況から、おそらくこの竈の廃棄後すぐに竈3が構築されたことが推測される。

竈の構造は半地下式の2連竈で、構造や規模から酒造用と考えられる。検出は調査区の制約によってへっつい1部分と前庭部に限られた。焚口は西側に設けるが、前庭部は円形に掘削される。構築は地山を1.3mほど掘削しておりかなり深い。底部は標高14.5m前後で、竈3より深い。

また、へっつい1の壁面には長方形の竈石を貼り付けていたと思われ、一石だけが残存する。さらに灰落としに敷いた石も竈石として使用されるものと同じ石材が底部に据えられていた。へっつい開口部付近にはやや大型の石材が据えられるが、状況からするとこの付近が焚口と考えられる。



第86図 竈4平面・断面図 (1/40)



1. 2.5YR4/6赤褐色シルト質土極細砂 (土壌化)
2. 7.5YR4/6褐色土 (土壌化)
3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土極細砂 (土壌化)
4. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト質土極細砂 (土壌化)
5. 5YR4/3にぶい赤褐色シルト質土極細砂 (土壌化)
6. 2.5YR4/6赤褐色シルト質土極細砂 (土壌化)
7. 5YR4/3にぶい赤褐色シルト質土極細砂

1. 10YR3/4暗褐色シルト質土極細砂
(明黄褐色シルトブロック・1~2cm大の礫含む)
2. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト質土極細砂
(瓦片を多量に、10cm大の礫含む)
3. 2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質土極細砂
(土壌化、瓦片を多量に含む)
4. 10YR5/1灰色シルト質土極細砂
5. 7.5GY5/1緑灰色 (腐食土、多量の焼土を点在状に含む)
6. 5YR9/8赤褐色シルト質土極細砂 (焼土塊・炭粒を若干含む)
7. 5Y4/1灰色シルト質土極細砂 (瓦片を少量含む、やや軟弱な土)
8. 7.5YR4/3褐色シルト質土極細砂
(焼土塊・黄橙色ブロックを少量含む)
9. 5YR4/3にぶい赤褐色シルト質土極細砂
(焼土塊・黄橙色ブロックを少量含む)
10. 2.5YR4/3にぶい赤褐色シルト質土極細砂
(全体に赤みが強く、シルトブロックを少量含む)
11. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質土極細砂
12. 10YR3/1黒褐色細砂 (土壌化)
13. 7.5YR3/3暗褐色細砂
14. 7.5YR3/3暗褐色シルト質土極細砂
15. 2.5YR4/6赤褐色土 (土壌化)



第87図 竈5 平面・断面図 (1/40)

しかし大半の石材は、竈廃棄時に大半が取り去られたと考えられ、本来は壁面など全体が貼石構造であったと思われる。また、この廃棄時の作業で、へっついの壁面は大きく損傷を受けたようで、竈本体の形状が不明になっている。ただ、側壁全体が赤変した硬化面として検出され、広く内側まで被熱した状態が観察できた。このことから、竈は長時間に渡って使用されたことが窺え、幕末～明治初期の当蔵の中心的な酒造用竈だったことが窺える。

竈5から出土した土器には棧瓦片や陶磁器などがあるが図化できたのは6点である。

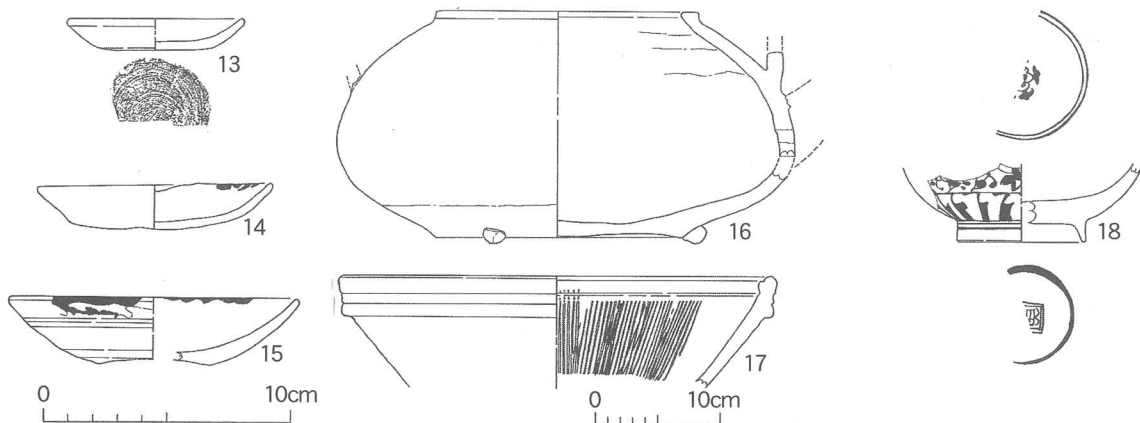
図化したものは土師器皿(13・14)、陶器皿(15)、陶器製土瓶(16)、備前系播鉢(17)、肥前系染付碗(18)である。13は口径7.2cm、器高1.8cmの糸切り皿である。14は口径9.6cm、器高1.8cmの手づくね皿で、外面に指頭痕跡を残し、内外面をヨコナデする。15は灰釉の皿で口径11.8cm、器高2.8cmを測る。16は伊賀・信楽系の土瓶で底部に安定のための脚を持つ。17は口径35cmを測り、8本単位の櫛目をもつ播鉢である。厚手の口縁部をもち、内面に櫛目の境を示す沈線を入れている。18は口縁部を欠く染付碗で高台径5.2cmを測る。やや焼成が甘く内面には貫入が観察できる。さらに、内面には花唐草文、見込み二重圏線と手描きの五弁花を描く。高台内面には銘を観察できる。

酒造関連遺構

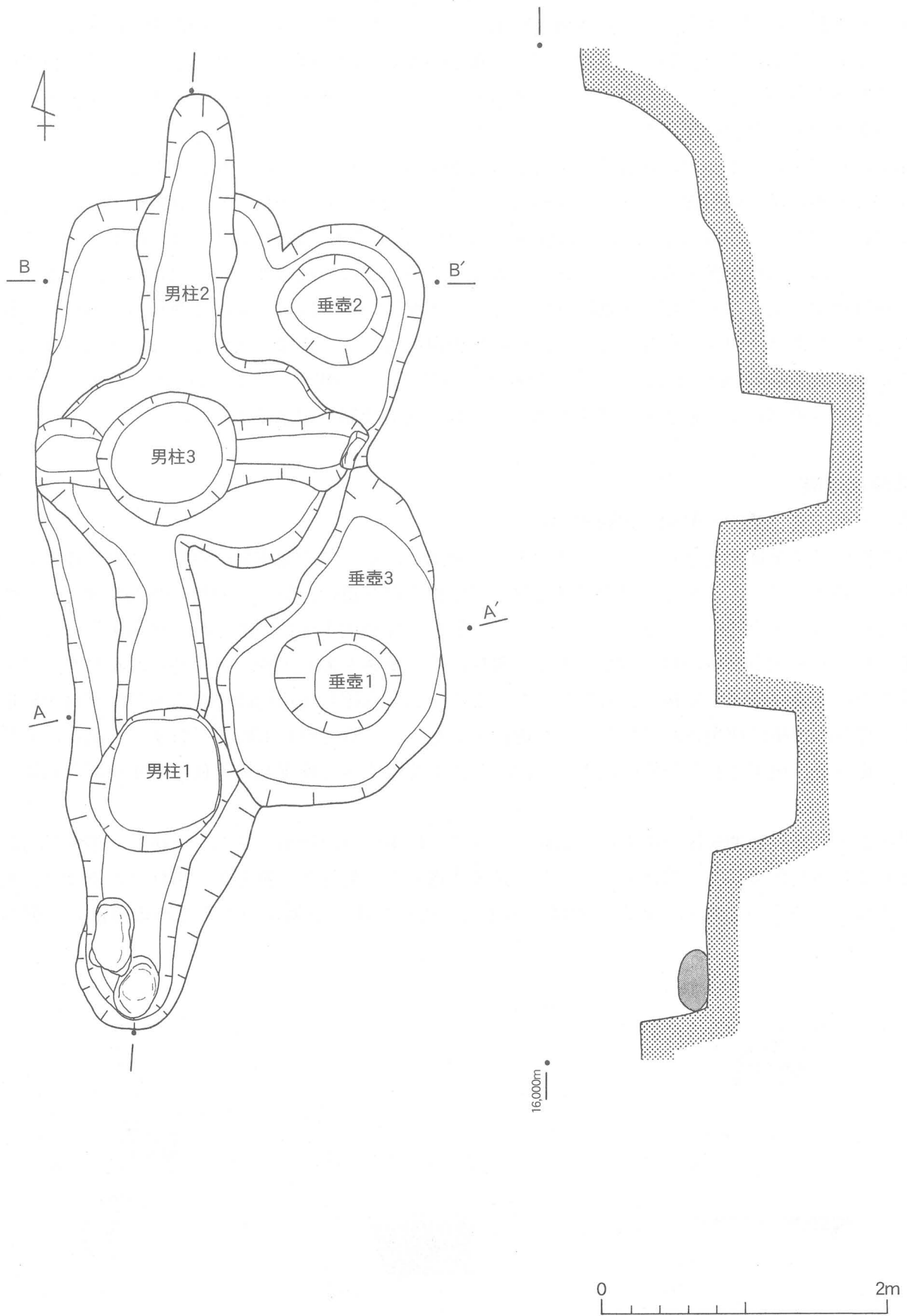
男柱1・2・3(第89・90図、図版50・61)

調査区内では全期間を通じて合計8基の男柱を検出したが、この遺構群のみが一時期に連立していた男柱と考えられる。しかし、周辺では近接して検出された遺構が多く、前後の時期で繰り返し作り替えが行われたようである。その一方ですべての男柱で柱や横木が抜き去られ、横木を押さえるために置かれた石も大半が抜かれていた。また、男柱に伴う垂壺も掘方と据え付け時におかれた砂の痕跡が残るのみで壺本体は全て抜き去られていた。このことから搾り場遺構は廃棄と同時に資材が転用され次の搾り場構築に使用されていたことが確認できた。この点は伊丹郷町のこれまでの調査にも共通する。従って、検出された男柱の埋土から出土した土器はすべて廃棄時の年代を示す一群と判断される。

男柱1・2・3は調査区の南寄り、試掘トレンチ1に重なった遺構である。近接した場所で男柱を何度も作り替えたようで、男柱1→2→3の順で変遷する。男柱1と垂壺1、男柱2と垂壺3、男柱3と垂壺2がセットになる。また、男柱1の上には近代の礎石を据えつけるための攪乱穴が掘られ



第88図 竈5出土遺物(1/3・1/6)



第89図 男柱1~3・垂壺1~3平面・断面図(1/40)

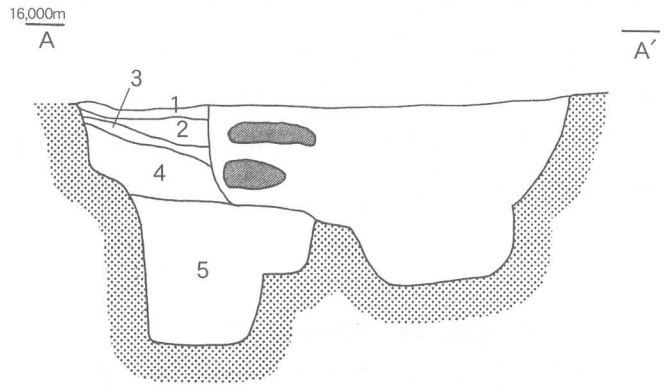
る。

男柱1は横木を南北に据え、掘方の形状は隅丸方形、直径1.05mを測る。柱底は検出面から1.6m（標高14.1m）の深さである。埋土は礫混じりの砂質土で（掘削された地山土）が充填される。横木は長さ3.6m前後と推定され、掘方底は検出面から0.8m前後（標高14.9m）である。垂壺は東側に設置される。掘方の直径は1.6m、深さは検出面から0.96m前後（標高14.62m）である。底部に砂痕跡が観察できた。

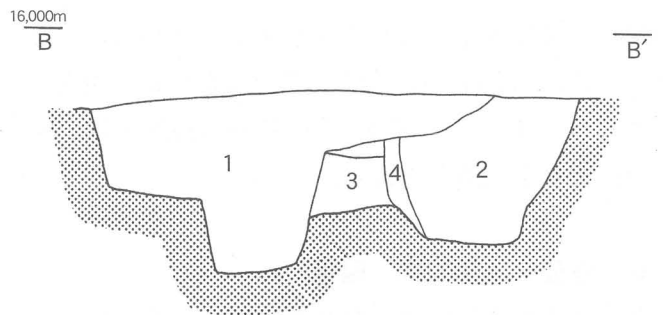
男柱2・3は同一の掘方を共有するが、東西に横木を据える男柱3が早く、南北に横木を据える男柱4がこれに続く。男柱の掘方は楕円形、直径90cm前後、深さは検出面より1.7m（標高14.0m）で男柱1よりやや深い。横木は男柱2が深く、男柱3が浅い。

長さは男柱2が北側で2.3mを測り、この倍とすれば、4.6mと推定される。男柱3の横木は短く全長2.3mである。

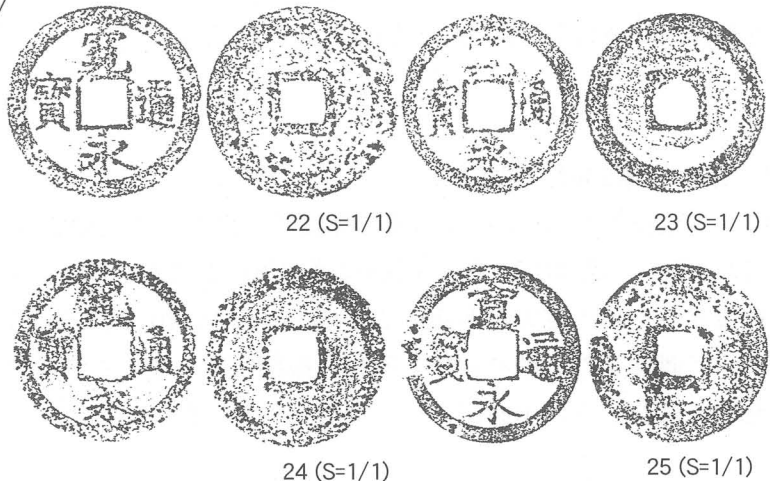
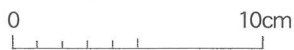
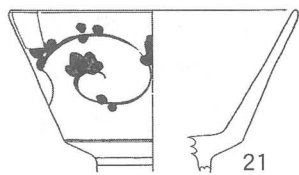
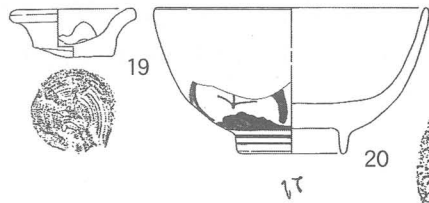
男柱1からは土師器蓋（19）・染付磁器碗（20・21）・銅銭（22～24）が出土した。土師器蓋19は口径5.1cm、器高1.9cmを測る。底部には糸切り痕跡を観察できる。20は肥



1. 10YR3/3暗褐色粘質土（焼土）
2. 2.5Y5/4黄褐色シルト（土壌化）
3. 2.5Y6/8明褐色シルト（土壌化）
4. 10YR4/4褐色シルト（土壌化）
5. 10YR4/4にぶい黄褐色シルト（土壌化）



1. 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂（1～3cm大の礫多量に含む）
2. 2.5Y6/6明黄褐色細砂（砂ぎめの砂）
3. 10YR5/3にぶい黄褐色砂（土壌化、1～3cm大の礫含む）
4. 7.5YR4/1褐灰色粗砂（土壌化、シルトブロック含む）



第90図 男柱1・男柱2・垂壺1・垂壺2断面図（1/40）、男柱1・男柱2出土遺物（1/1・1/3）

前系染付磁器碗である。口径11.1cm、器高5.8cm、高台径4.4cmを測る。外面には草花文、高台内には銘を観察できる。21は肥前系染付磁器碗である。口径11.1cmを測る。22～24はいずれも寛永通宝である。直径2.4cmを測る。男柱2からは銅銭(25)1枚が出土した。直径2.4cmを測る。

出土遺物はすべて幕末のものとして判断されるが、いずれにしても出土遺物が少量であるため詳細な時期を検討することは困難であった。ここでは遺構の切り合いや検出状況から第2面の土層の時期と考えた。

男柱5・垂壺4 (第91図、図版51・61)

調査区南側の東端に検出された遺構である。西側に垂壺(垂壺4)を置く。柱掘方は方形で南北に0.9m、東西に0.6m、深さは地表面から1.25m(柱底の標高14.28m)である。横木は長さ4.1m前後、幅25～30cm前後と推定される。横木周辺に据えられた石が北側に2石残される。また、この男柱の特徴は柱や横木の掘方幅が周囲にあまり広がっていない点で、掘方壁面が直に掘削される。これは柱抜き時の掘方が広がらなかったためと推測される。垂壺は直径1.08m、深さ1.15m(底の標高は14.44m)。掘方の壁面は直に掘削しており下層には砂が堆積していた。

内部からは瓦片や陶磁器小片が出土したが図化したのは、染付皿(27)と火入れ(26)がある。27は口径13.4cm、器高4.1cm、高台径5.2cmを測る。内面二重斜格子文、見込み二重圈線と蛇の目釉剥ぎが観察される。26は口径9.6cmで、内外面口縁部灰釉、外面体部上半に鉄釉を掛け分け、外面体部下半・内面口縁部より下は露胎となる。

男柱6・垂壺5 (第92図・図版51)

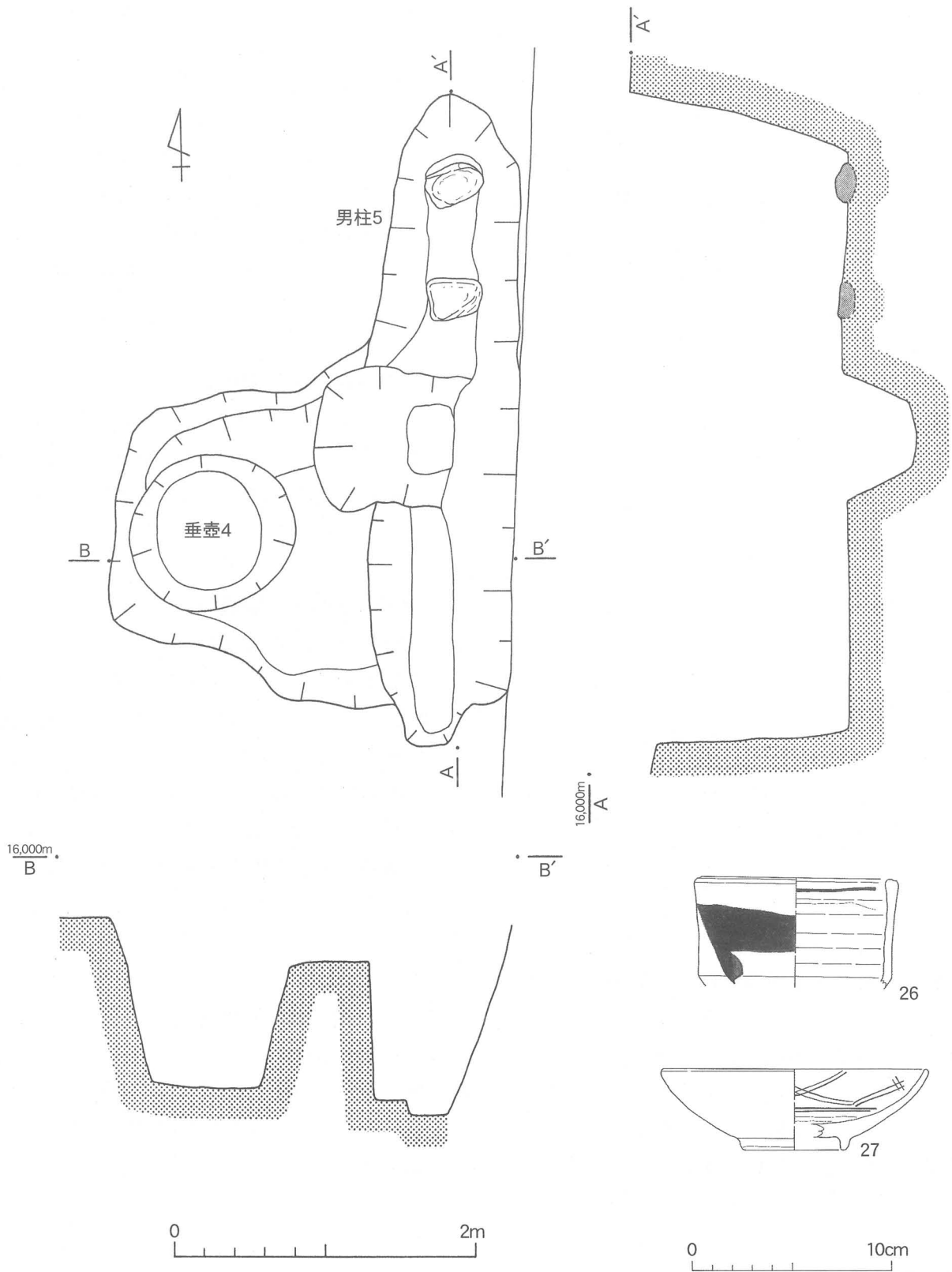
調査区南西の隅に検出された遺構で、一部を検出した。南・西外側に大半がある。垂壺(垂壺5)は東側に位置する。この垂壺の存在と底部の形状から男柱と推測した。但し、掘方は後世の攪乱が著しい。攪乱は2時期に渡っており、下層がシルトをブロック状に混入させる砂層で上層が瓦混じりの埋め立て層である。下層はおそらく男柱を抜き取った後に埋め戻した土砂と考えられる。時期は幕末頃であろう。上層は近代の金属製品や炭・焼土を多量に含むもので昭和に入る時期の埋め立てと考えられる。

男柱の形状が不明であるが、掘方の底が南北方向に水平であるので、横木はこの方向に据えられていたと考えられる。掘方底部の深さは検出面から1.1cm前後(標高14.3m)、垂壺は平面円形で直径1.1m前後を測る。深さは0.9m(標高14.5m)前後を測る。

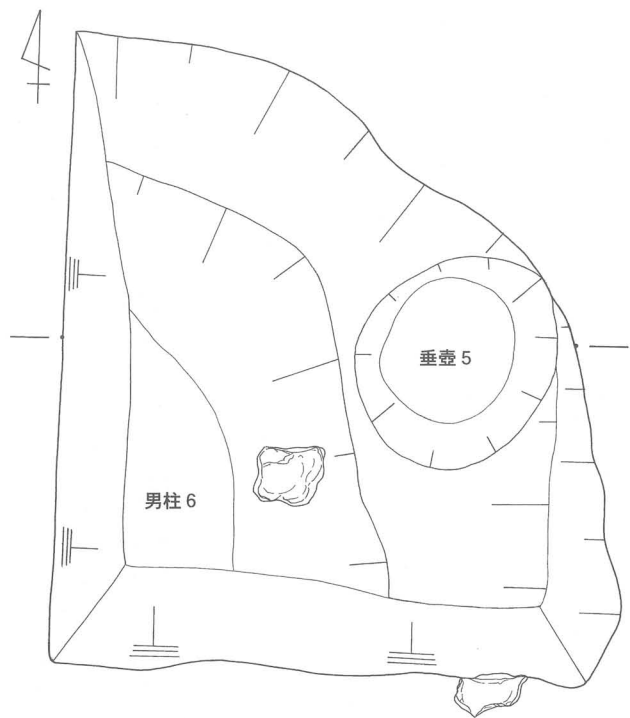
埋桶

SK14・SK26 (第84図、図版44)

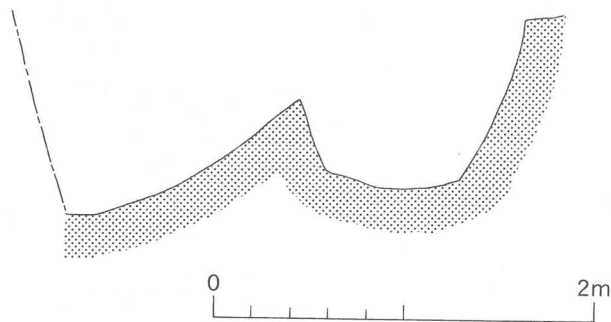
SK14・SK26の2つの土坑は2連の埋桶で、調査区の西壁際の南よりで検出された。SK14は桶本体の直径が1.05m、深さ0.5mで、SK26は桶本体の直径が1.05m、深さ0.5mで、さらに外周には2つの埋桶を埋設するための掘方がある。この掘方は直径2.2mを測る。ただし、この掘方は下層の男柱4の掘方によって置換した土砂を含めて同時に掘削してしまった可能性も残される。いずれも桶そのものは残存せず、礫混じりの土砂によって埋戻されていた。



第91図 男柱5・垂壺4平面・断面図(1/40)、男柱5出土遺物(1/3)



16,000m



第92図 男柱6・垂壺5平面・断面図 (1/40)

土坑

SK15 (第84図、図版44)

平面隅丸の長方形で、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.3mを測る。内部には暗褐色のシルト質土と拳大の礫が充填されていた。この周辺では検出されたSK30・32や周辺の小規模なピットなどが多数検出されたが、これらは搾り場構築の際の作業や、搾り場作業時に掘削された土坑と考えられる。具体的な機能あるいは構築作業の内容は不明であるが、周辺にはかなり掘削を繰り返した痕跡が観察された。

SK30 (第84図、図版44)

SK15の南東に位置する、平面不定形を呈する土坑で、長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.5mを測る。内部には軟弱な印象を持つ礫混じりのシルト質土を充填していた。

SK32 (第84図、図版44)

SK15・30の東側で検出された土坑で、平面不定形を呈する。規模は長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.25mを測る。土坑の側面は急激に掘削され、底はほぼ水平であった。礎石の根固め痕跡の可能性も残されるが根固め石が残らないため結論付けられなかった。内部には黄色のシルト質土を充填するが、軟弱な印象を持つ土砂である。

溝

SD 1 (第84図、図版44)

調査区の南端で検出された小規模な溝である。東西方向に検出されたもので西に向かって流下している。長さ3.5mが検出され、幅0.6mを測る。この溝も搾り場の作業などに関連して掘削されたものと考えられる。作業時に生じる排水を流す機能を持っていたとも考えられるが素掘りで、断面形状も明確でないため、意図的に掘削されたものかどうかは結論付けられない。

土坑

SK 3 (第93図、図版61)

この土坑は竈1に切られた土坑である。平面円形を呈し、直径1.2m、深さ0.6mを測る。形状からすると小型の桶を据えた埋桶であった可能性が高いが、埋戻し時に大きく攪乱を受け、桶などは残存し

ていなかった。

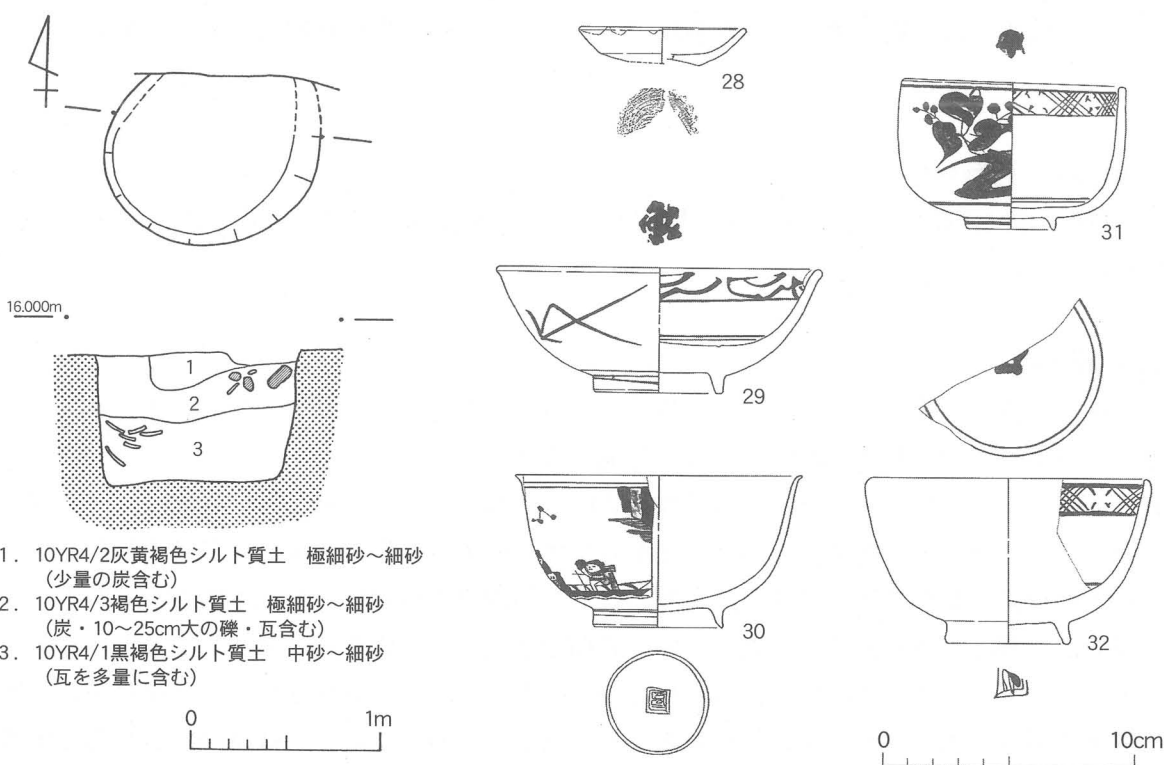
内部からは陶磁器が出土した。図化したものは柿釉陶器皿(28)、磁器碗(29~32)の5点である。28は口径6.7cm、器高1.5cmで底部糸切りの皿である。29は口径13cm、器高5.2cm、高台径5cmである。外面には松葉文、見込みは蛇の目釉剥ぎ、さらに二重圏線とコンニャク印判による五弁花を施している。30は口径11.4cm、器高6cm、高台径5.2cmで口縁部が端反りになる個体である。外面には人物文と漢詩、高台には二重圏線と銘が観察される。31は口径9cm、器高5.8cm、高台径3.6cmで外面には水草と蝶の文様を描き、口縁部内面には四方禰文、見込みは二重圏線とコンニャク印判による五弁花、高台内には渦福が確認される。32は口径11.2cm、器高6.6cm、高台径5cmを測る。外面は青磁釉となる青磁染付である。口縁部内面には四方禰文、見込み二重圏線とコンニャク印判の五弁花、高台内は渦福を持つ。これらの遺物は日常雑器として使用された食器や灯明具である。時期は19世紀前半頃である。

SK23 (第84図、図版44)

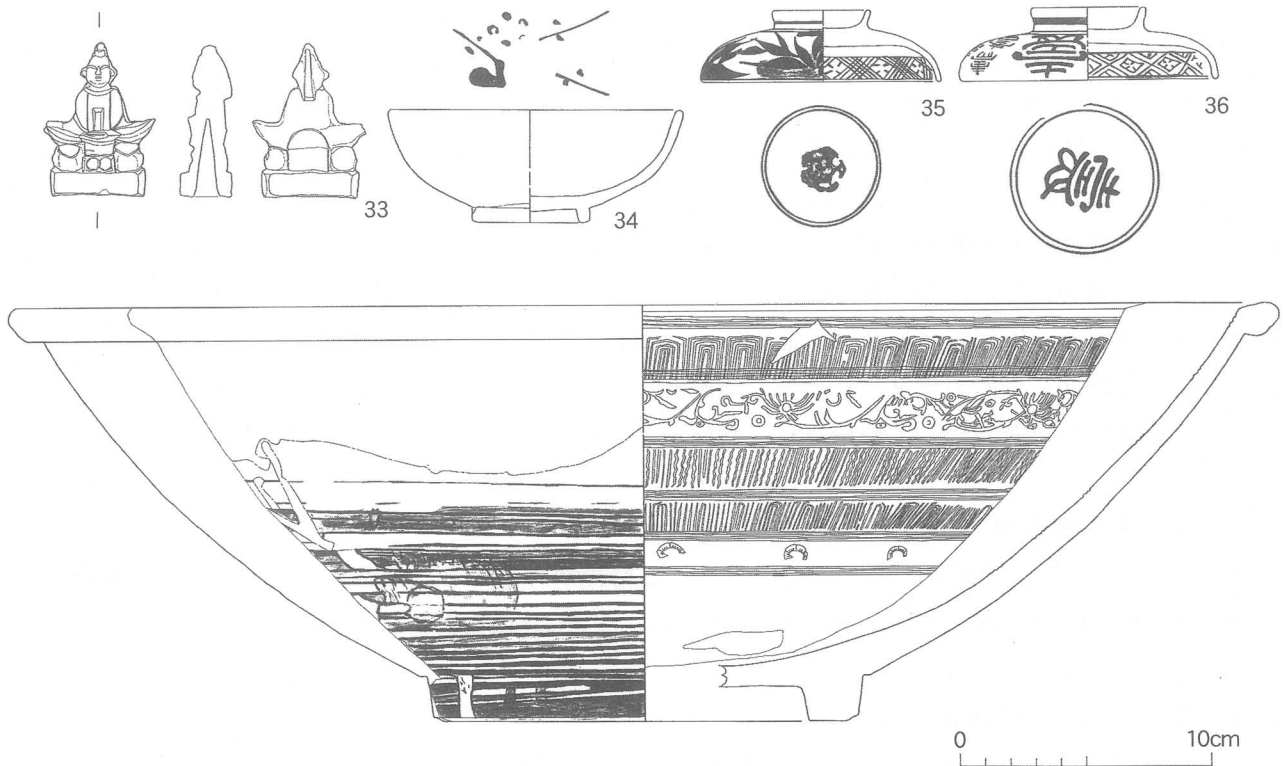
SK 3に切られる小規模な土坑で内部はさらに2時期が存在する。北側のほうが古く、南側が新しい。北側が直径0.6m、深さ0.2m、南側が直径0.3m、深さ0.15mを測る。

SK24 (第84・94図、図版62)

SK24は南北方向に長軸を持つ長方形の土坑である。長軸2.5m、幅1.0m、深さ0.4mを測る。内部からは多数の陶磁器や瓦片などが出土したが、このうち土人形(33)、瀬戸・美濃焼陶器碗(34)、肥前磁器碗蓋(35・36)・三島手大鉢(37)の5点について図化した。34は口径11.8cm、器高4.5cm、高台径4.7cmを測る。灰釉の製品で見込みに呉須で樹木文を描いている。35は口径9.6cm、器高2.9cm、つまみ径4.6cmを測る。外面に笹文を描き、口縁内面に四方禰文、見込みに二重線圏線と五弁花のコンニャク



第93図 SK 3 平面・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/3)



第94図 SK24出土遺物（1/3）

印判を施す。36は口径10.3cm、器高3.0cm、つまみ径4.6cmを測る。外面に寿字文を描き、口縁内面に四方禪文、見込みには圏線と寿字文が施される。37は口径50.8cm、器高16.5cm、高台径17cmを測る大型品である。内面及び外面の上半部に鉄釉を施す。さらに体部下半や高台内などには刷毛で鉄漿を塗っている。また、内面には独特の象嵌を施す製品である。これらの遺物の時期は19世紀前半頃と考えられる。

SK34（第84図、図版44）

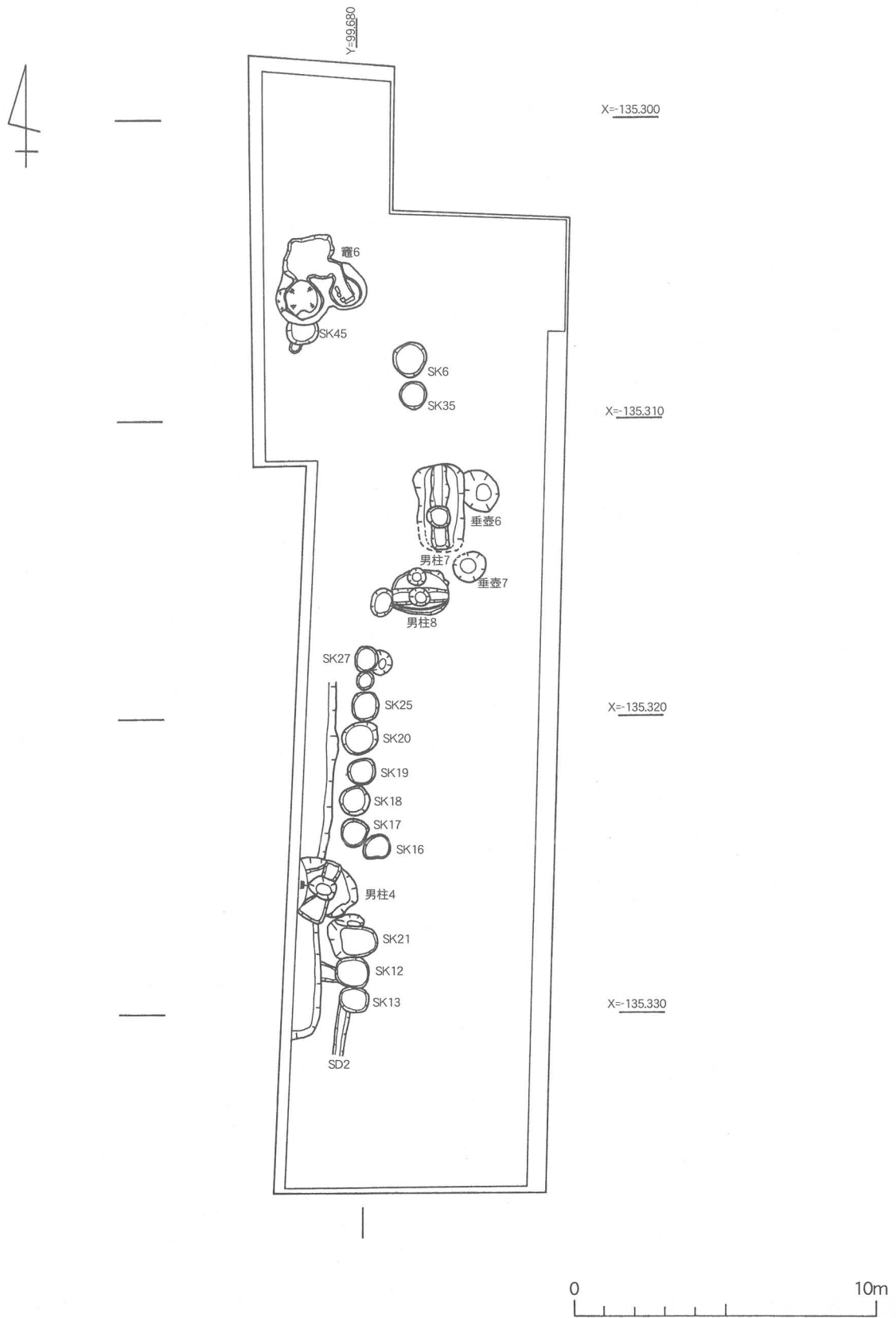
SK34は南北方向に長軸を持つ長方形の土坑である。長軸1.7m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。SK24の南側に検出された土坑である。

第2面上層小結

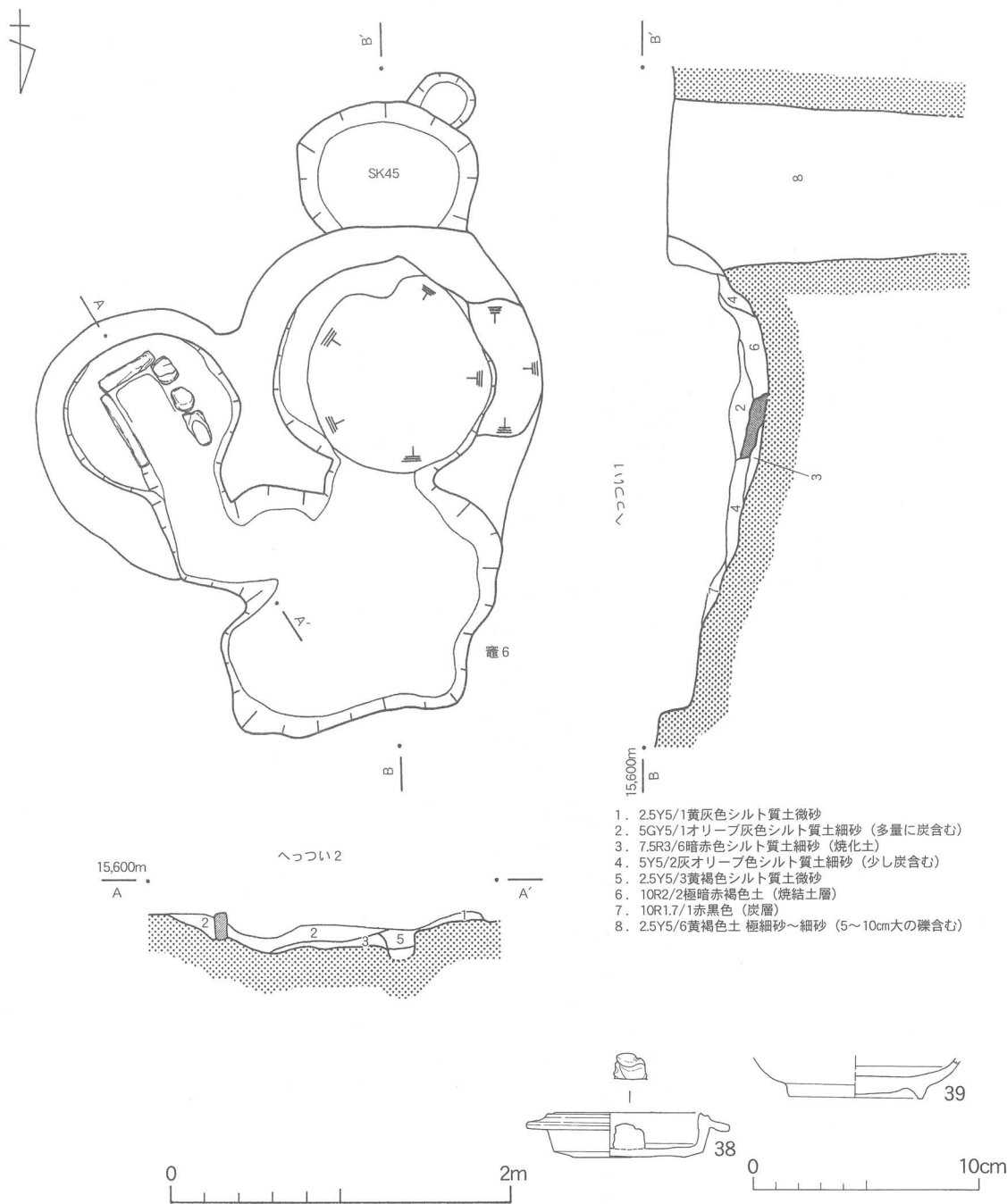
この段階は酒蔵内の施設群が大型化した時期である。時期的には幕末から明治時代にかけてと思われるがこの段階がもっとも生産量が上がった時期と考えられる。

酒蔵の構造から見てゆくと、酒造用の竈は調査区中央北より、搾り場（男柱・垂壺）は南側に集中している。当地区が酒蔵の東半分であることから全体の配置は明かにできないが、これらのことから調査区の北側を除く範囲は酒造に伴う作業場として広く使用されていたことは明らかである。

一方調査区北側は当時の表通りに面した側で店棚や居住のための空間であったと考えられる。竈2はおそらくこれらの生活に関わって据えられた厨房の竈であったと推測される。3連ないし2連の並立する構造でかなり大人数の人々の炊飯を賄ったと推測される。このことはSK3・24などに多量の生活雑器が投棄されたのに対して、調査区南部からはあまり遺物が出土しないことにも一致しており、前後の期間を通して調査区北側が生活の中心であったことを窺わせている。



第95図 第2面下層全体図 (1/200)



第96図 竈6・SK45平面・断面図（1/40）、出土遺物（1/3）

また、この段階からは竈が大型化し壁面に長方形の石材が貼られたり（竈5）、男柱が2基連立（男柱1~3）で据えたり、蔵内部の施設が大型化すると共に高度な技術で構築されていることが指摘できる。

第2面下層（第95図、図版44）

第2面下層は調査地点周辺に酒蔵が建った初期の段階である。その後の遺構の攪乱が激しく遺存状態は良好とはいえないが、竈・男柱・埋桶・井戸などを中心に多数の遺構が検出された。

竈跡

竈 6 (第96図、図版53・62)

この竈は竈2の下層に構築され、竈南端は井戸(SK45)を埋めて構築している。大型のへっつい1と小型のへっつい2で構成される2連の竈である。構築は前庭部を掘り窪めた半地下式構造をとる。へっつい1は直径1.2m、へっつい2は直径0.9mの規模を測る。へっつい1は検出面より30cm前後が残存するが、へっつい2は底部がかろうじて残るのみであった。

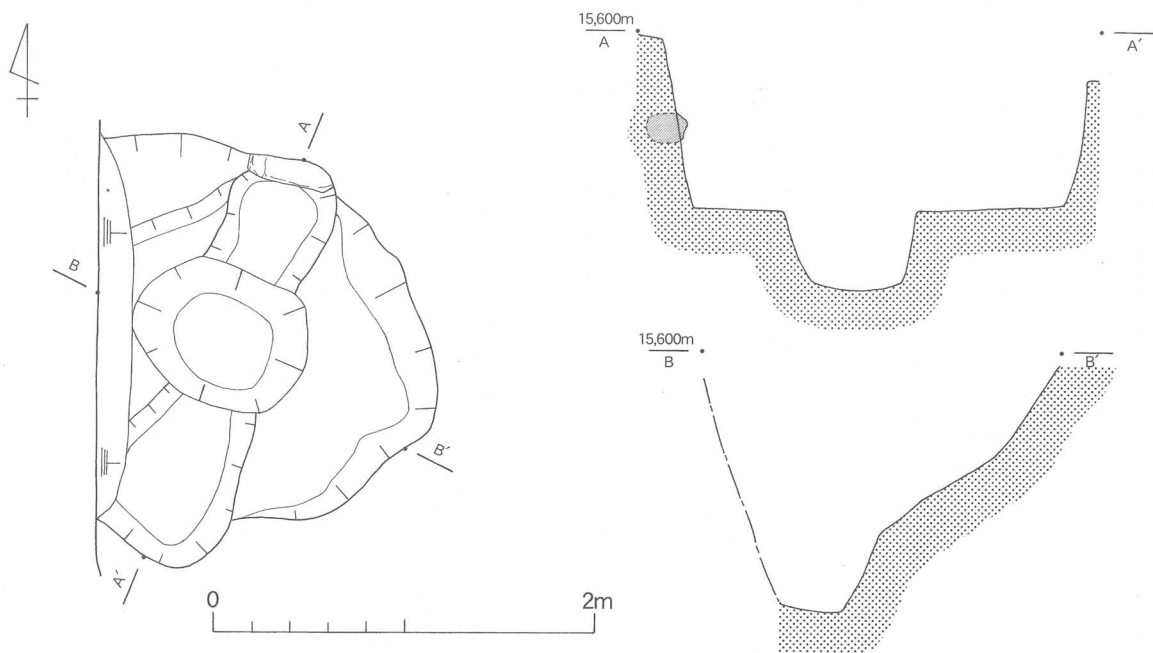
2連とも焚口は北側を向き、へっつい2の炊口がへっつい1のほうにやや寄る構造となるもので、へっつい2の軸方向は東に傾いている。前庭部は幅、奥行きとも1.4m前後で深さはへっつい1の焚口付近が最も深く、検出面より20cm前後(標高15.2m前後)を測る。竈底のレベルはへっつい1が標高15.1m、へっつい2が標高15.3mで2のほうが20cm浅い。時期は出土遺物や検出状況から考えて18世紀後半～19世紀前半より以前であると考えられる。

出土遺物は小片が多く、図化したのは伊賀・信楽系の蓋(38)、1点である。口径9.0cm、器高2.0cmで鉄釉を施し、つまみをもつ個体である。竈6の時期は出土遺物からすると18世紀後半～19世紀前半前後と考えられる。

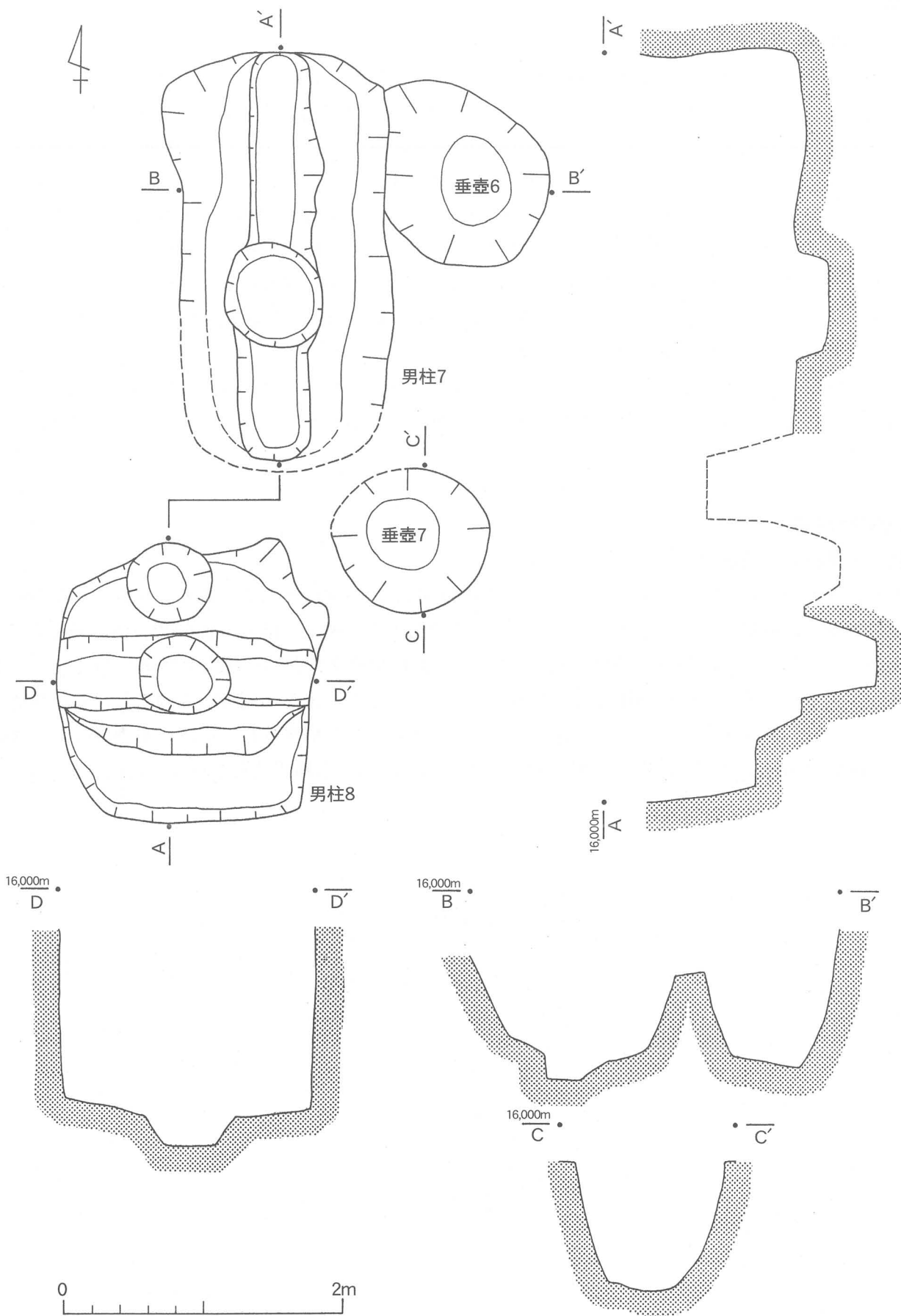
酒造関連遺構

男柱 4 (第97図、図版51)

上層に埋桶SK14・26がある。西側の一部と垂壺はSK21の可能性がある。横木が北東—南西方向に軸を持つ唯一の遺構である。全体の柱掘方は楕円形で最大直径90cm、横木の長さは2.1m前後を測る。検出面からの深さは1.4m前後。男柱の中ではやや小振りな遺構である。検出面は全体的にシルト質の盛土がなされ、埋土もやや粘性を持った土で占められていた。また、周辺は西側にかけて傾斜地形となっており、男柱設置に当たっては客土によって造成した後に構築されていた。本酒蔵の中では最も古い段階の男柱と考えられる。垂壺は明確にできないがSK21が検出状況から見て可能性がある。



第97図 男柱 4 平面・断面図 (1/40)



第98図 男柱7・男柱8・垂壺6・垂壺7平面図、男柱7・男柱8・垂壺6断面図（1/40）

男柱7・垂壺6（第98・99図、図版52・62・63）

調査区北寄り男柱8に接し、竈4の下層から検出された。東側の垂壺6がセットになる。横木を南北に据え、柱が座った場所は一段低く残っていた。垂壺の位置から北側に搾る構造となる。横木の長さは北側に長く、全長2.9m、深さ1.35m（標高14.35m）前後である。内部には柱固定用の石材や柱材は全く残されていなかった。このため、男柱廃棄時にすべて抜き取られたものと考えられる。

垂壺の掘方は平面楕円形で直径1.4m前後を測る。深さは0.95m（標高14.65m）前後である。底部には砂が確認された。埋め戻した土砂の上層には18世紀後半～19世紀代の陶磁器や瓦を大量に含んだ層が認められた。この土砂から出土した遺物より男柱7が廃棄されたのは幕末と推定される。

図化した遺物は土師質焙烙（40）・同壺蓋（41）、瓦質壺（42）、備前系播鉢（43）、肥前系磁器碗（47・48）・同鉄絵碗（44）、同皿（45）・同磁器大皿（46）、砥石（49）の10点がある。

焙烙40は口径26cmを測る。底部のみ型作り成形の個体で口縁部がやや内傾する個体である。41は火消し壺などの蓋である。口径20.2cm、器高2.9cmでロクロナデ仕上げする。火消し壺42は瓦質で底径26.8cmを測る。粘土紐で輪積み成形しロクロナデで仕上げている。内面は不定方向のナデないし上方へのナデ上げによって仕上げている。43は堺ないし明石産の播鉢で、口径40.6cmとやや大振りの作りである。内面にはほぼ隙間無く10本単位の櫛目を施す。体部はやや湾曲しながら立ち上がり、肥厚した口縁部をもつ。口縁部外面には2条の沈線を施し、口縁部上端は凹線状に窪ませている。

44は京焼風の鉄絵碗である。口径9.6cm、器高5.8cm、高台径3.5cmである。外面には花文と思われる文様を施す。45は肥前系の染付皿で、口径12.8cm、器高4cm、高台径4.3cmである。内面には口縁部に雑な二重斜格子文と見込みに二重圏線を描き、蛇の目状に釉を剥ぎとっている。46は肥前系の染付大皿である。口径19.6cm、器高6.3cm、高台径10.3cmを測る。外面に唐草文を描き、内面には草花文、見込みにコンニャク印判による五弁花を描く。高台内には圏線と渦福銘が認められる。47は青磁染付の碗である。口径11.1cm、器高6.2cm、高台径4.3cmを測り、内面に文様を描く。口縁部には二重の圏線を描き、間に斜線による文様を描く。見込みには二重圏線を描いている。48は端反りの染付碗である。口径16cm、器高7.7cm、高台径6.5cmを測る大振りの個体である。外面には蔦草文、内面には口縁部と見込みにそれぞれ一重と二重の圏線を描く。49は粘板岩製の砥石である。上端の一部を欠く個体で幅4.8cm、厚さ0.9cmと小振りの製品である。使用痕跡を顕著に残す個体である。

男柱8・垂壺7（第98図、図版52）

調査区北寄り男柱7に接し、竈4の下層から検出された。東側の垂壺7がセットになる。但し、男柱は近接して据え替えており、北側には柱痕跡だけが確認できた男柱が出土した。この柱の横木は浅い位置に据えられたためか確認できなかった。北側の柱は平面円形で直径0.6m、深さ1.4m（標高14.3m）である。南側の男柱掘方には横木痕跡が残るが全長1.95mと短い。柱は平面円形で直径0.65m、深さは1.9m（標高14.1m）前後である。垂壺は平面楕円形で直径1.05m前後を測る。深さは0.9m（標高14.8m）、底部にはわずかに砂が確認された。

井戸跡

井戸はSK16・35・45の3基が検出できた。いずれも、第2面下層で検出されたがSK35・16に関しては近代まで使用されたと考えられる。ただし、検出された井戸は検出面や切り合いからすると、いずれも江戸期に構築されたと考えられる。このため、第2面下層で報告する。平面円形ないし隅円方形に近い形状で考えられる。

SK35 (第100図、図版54)

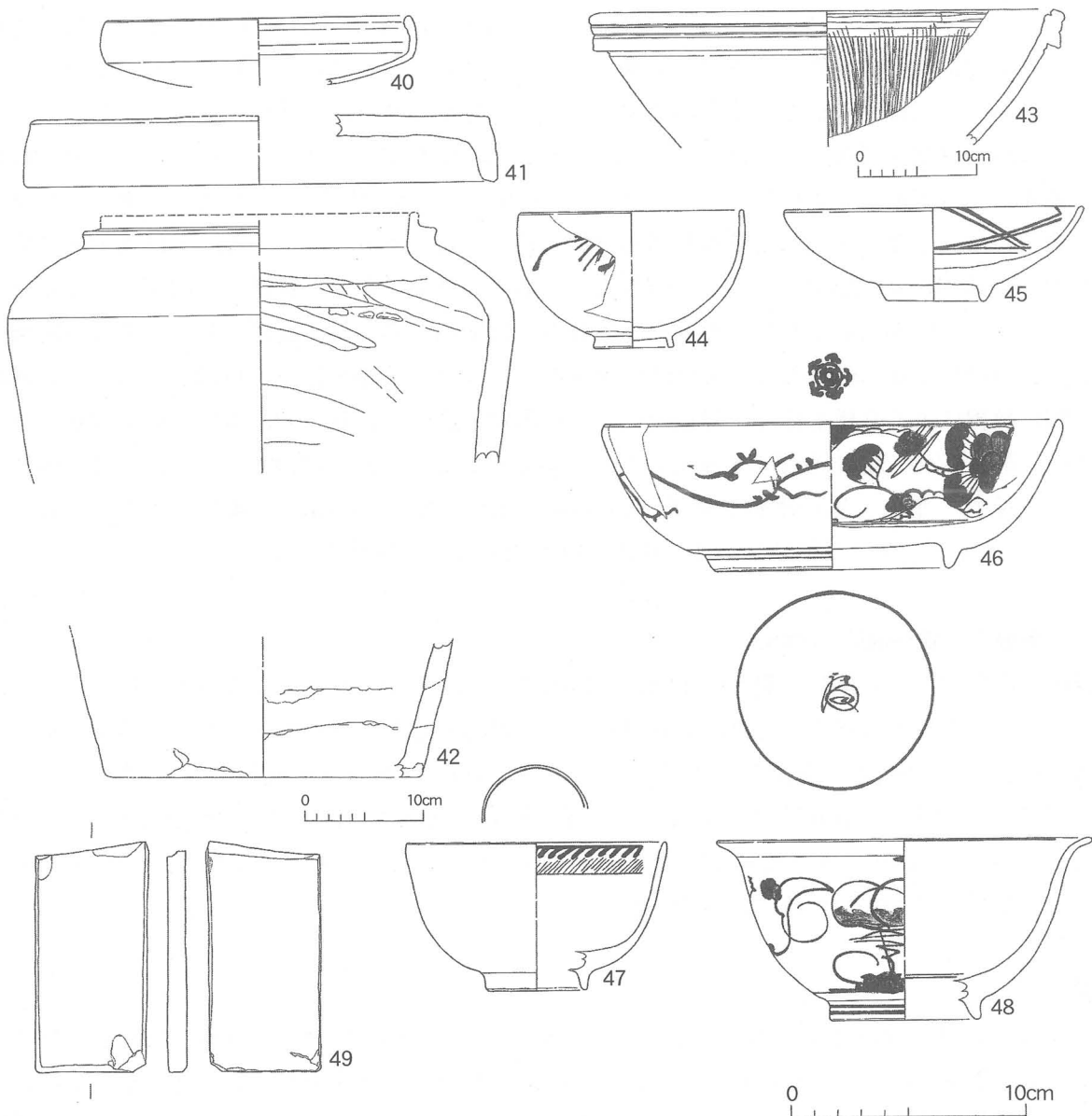
SK35は竈5の東側に位置する。検出面は明らかに江戸期の面から切り込むものであるが明治期以降には土壌化した瓦礫混じりの土砂で覆われていた。直径1m、深さ1.8mまで確認している。

SK16 (第104図、図版55)

SK16は男柱1の西側に検出された。平面円形ないし隅円方形に近い形状で直径1mである。深さ1.4mまで確認した。

SK45 (第96図、図版53・62)

SK45は竈6の下層に検出された。平面円形ないし隅円方形に近い形状で直径1.05mである。深さは検出面から1.5m下まで確認している。検出面は明らかに江戸期の面から切り込んでおり、竈6より古いことから、時期は18世紀中頃と推測される。



第99図 男柱7出土遺物 (1/3・1/6)

埋土からは瓦片多数と青磁碗の底部片 (39) が出土した。39は高台部のみを残す破片で高台径6 cmを測る。

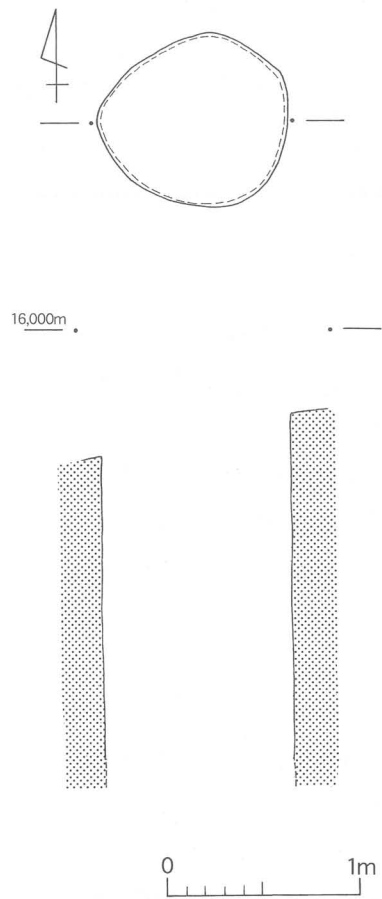
埋桶

SK 6 (第101図・図版54・63)

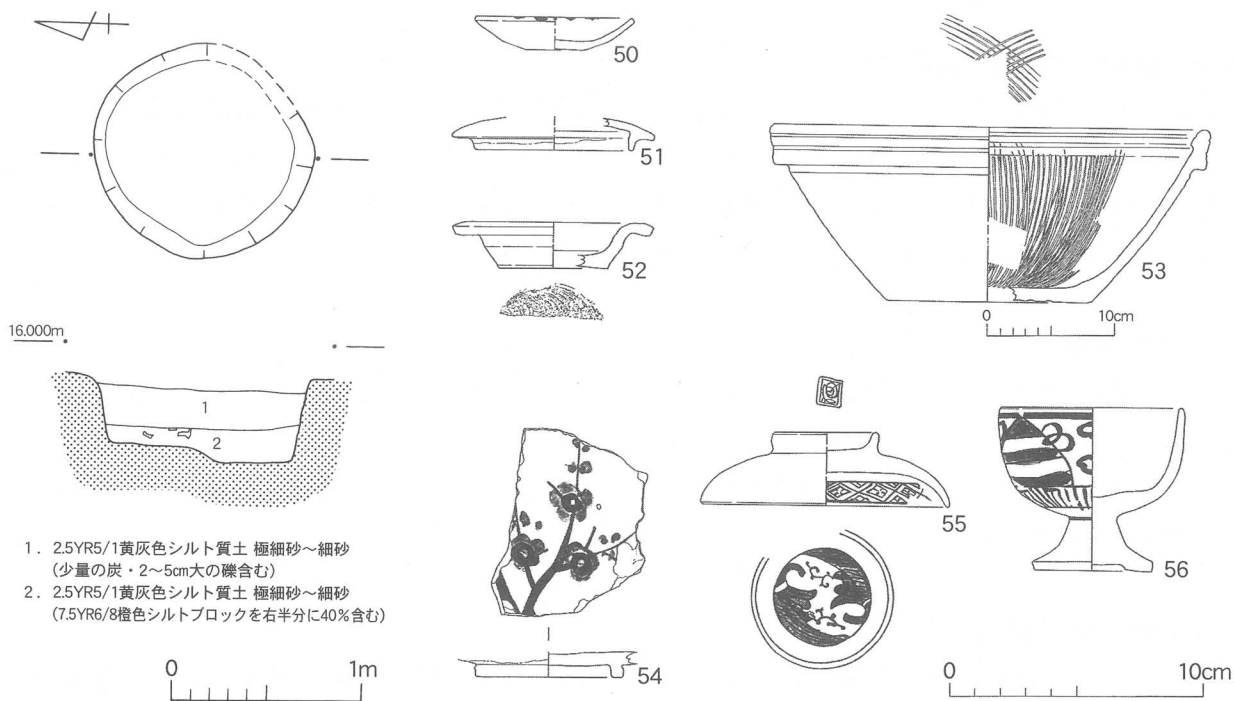
本土坑も埋桶と考えられるがここで別に報告する。平面円形で直径1.1m、深さ0.8mを測る。周囲の攪乱が著しく、側壁や土坑底はやや歪な形状となっている。また、埋め戻す際の瓦や陶磁器の投棄が著しく、埋桶廃棄時にはゴミ穴となったようである。桶の痕跡がまったく残らないことから廃棄時に抜き取られたのではないかと思われる。

ここから出土した遺物は7点を図化した (第101図)。図化した遺物には軟質施釉陶器皿 (50)・蓋 (51)、陶器蓋 (52)・播鉢 (53)、京焼系陶器皿 (54)、肥前系青磁碗蓋 (55)・染付磁器仏飯具 (56) がある。

50は柿釉の灯明皿で口径6.4 cm、器高1.3 cmを測る。51も同じく柿釉の蓋である。口径6.4 cmを測る。52は口径8.1 cm、器高1.9 cm、底径4.4 cmを測る。口縁部を外反させる個体で、底部には糸切り痕跡が観察できる。53は堺産の播鉢で口径35 cm、器高13.9 cm、底径16.4 cmを測る。内面に8本単位の櫛目を隙間なく施し、口縁部は肥厚し外面には凹線、内面には突帯状の隆起を観察できる。また、見込みには格子状に交差させた櫛目を施す。54は底部の破片で高台径5.9 cmを測



第100図 SK35平面・断面図 (1/40)



- 1. 2.5YR5/1黄灰色シルト質土 極細砂～細砂 (少量の炭・2~5cm大の礫含む)
- 2. 2.5YR5/1黄灰色シルト質土 極細砂～細砂 (7.5YR6/8橙色シルトブロックを右半分(に)40%含む)

第101図 SK 6 平面・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/3・1/6)

る。見込みに鉄釉・呉須・白土釉で梅文を描く京焼系製品である。55は口径9.9cm、器高3cm、つまみ径4.3cmを測る個体で内面に四方禰文、見込み二重圏線と丸波文、高台内は二重方形枠と渦福を描く。56は脚付の仏飯具で口径7.3cm、器高6.5cm、底径4.6cmを測る。外面に宝珠文を描いている。

本土坑からはこのように多量の遺物が出土したがこれらは大半が食器や灯明具・祭祀具などの生活雑器である。時期は19世紀後半頃までのものであるが、この段階での生活の一端をうかがい知ることができる。

埋桶

第2期の特に下層段階では多くの埋桶が据えられていた。直径は70～100cm前後で（ただし、掘方直径のものも含む）、検出面からの深さは50～60cm前後の深さを持っているものが多い（ただし、上方が削平されたもので実際はもう少し深い）。掘方は円形ないし楕円形で、桶より大きく掘るものもあれば桶直径とあまり変わらない掘方のもも認められ、ランダムな印象を受けた。掘方の埋土も粘質土や礫混じり土、炭灰混じりの土壌化した土など様々である。また、この遺構は検出状況から確実に男柱1・2・3より古いことがわかっている。

特に、SK3・6・9・12・13・14・26などの埋桶は一列に並んで検出されたもので、男柱の間に構築されている。状況から考えて一時期に据えられたと考えられる。これらの遺構の時期は18世紀後半～19世紀前半頃と考えられる。以下、個別に埋桶遺構について報告する。報告は南側から順に北側に向かって行う。

SK13（第102図、図版54）

埋桶列の南端に位置するもので、切り合いからSK12より新しい。このことから埋桶列は南側から構築された可能性がある。掘方の形状は平面円形で直径0.8～0.9m、深さ0.5mであるが桶は残存せず、内部には瓦や礫などが混じった土砂が充填されていた。

SK12（第102・103図、図版54）

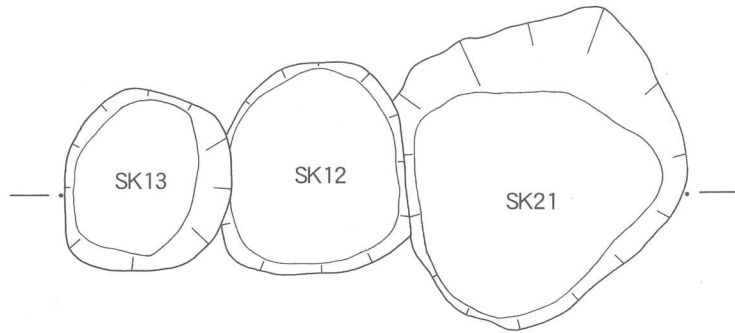
平面円形で掘方の直径1.0～1.1m、深さ0.6mを測る埋桶である。すでに桶の痕跡は無く内部は還元したシルト質の土砂で充填されていた。切り合いからするとSK13に切られるが、これは構築の順序と推測される。SK21は接しているが掘方を共有しないため前後関係は不明である。掘方から銅銭(67)、1点が出土した。銭種は寛永通宝で直径2.3cmを測る。

SK21（第102図）

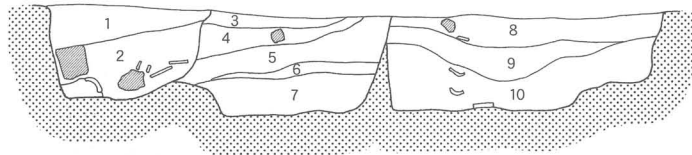
大型の掘方を持つもので、平面形は東西に長軸を持つ楕円形、掘方の直径1.5m前後、深さ0.55mを測る埋桶である。この3基は規模的には大（SK21）・中（SK12）・小（SK13）とセットになるもので一連の遺構の中でも1つのグループを形成している。但し、この土坑は男柱4の垂壺として構築された可能性も残される。

SK17（第104図、図版55）

SK21からやや距離を置いて据えられる。これは男柱4を意識したものと推測される。平面円形で直径0.95m、深さ0.2mを測る埋桶である。桶は残存せず内部は軟弱なシルト質土で充填されていた。南側には井戸SK16が隣接する。



15,800m



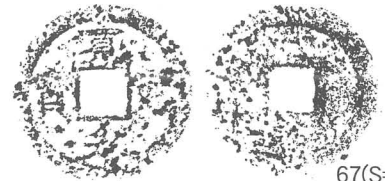
1. 5Y5/1灰色砂質土 中砂～細砂
2. 7.5Y5/1灰色細砂～シルト質土 極細砂～細砂
3. 5Y6/3オリーブ黄色砂質土 中砂～細砂
4. 2.5Y5/3黄褐色砂質土 中砂～細砂
5. N6/0灰色砂質土 中砂～細砂 (礫含む)
6. 7.5YR5/6明褐色シルト質土 極細砂～細砂
7. 10YR6/1灰色シルト質土 極細砂～細砂
8. 10YR5/1暗褐色シルト 極細砂～細砂
9. 7.5YR5/1灰色シルト 極細砂～細砂
10. 7.5YR5/1灰色シルト 極細砂～細砂 (瓦片を多く含む)



第102図 SK12・13・21平面・断面図 (1/40)

SK18 (第104・105図、図版55・64)

平面円形で掘方の直径0.8～1.0m、深さ0.2mを測る。桶底の一部と側板の木質部がわずかに観察されたことから、桶を据えたまま廃棄したことがわかった。桶の規模は直径0.7m前後と推定される。汚れたシルト質土の中から陶磁器などが出土したことから廃棄後ゴミ穴として使用されたと推測される。SK18からは軟質施釉陶器の皿(57)が出土したのみである。柿釉の灯明皿で口径9.9cm、器高2.2cmを測る。



67(S=1/1)

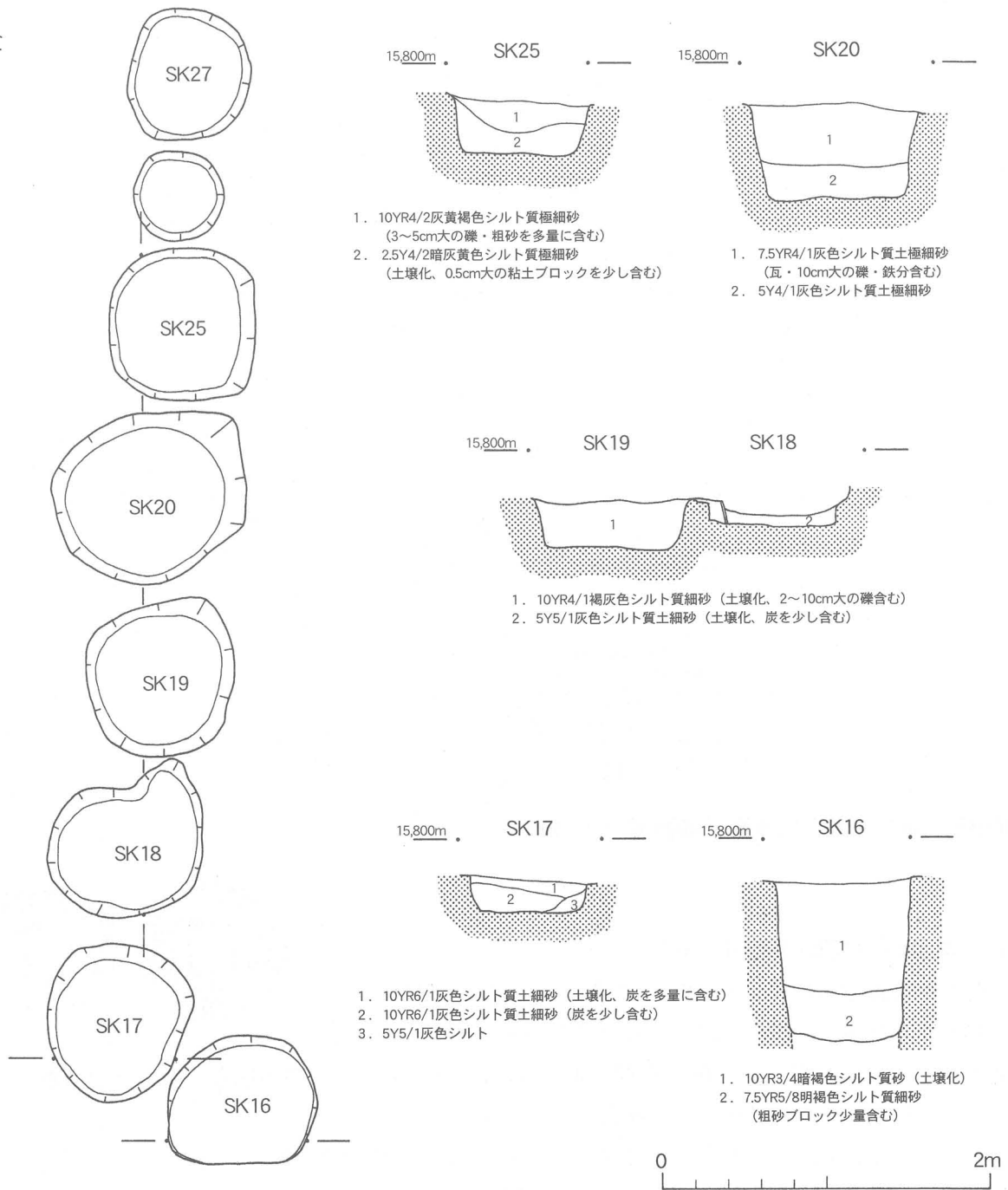
第103図 SK12出土遺物 (1/1)

SK19 (第104・105図、図版56・64)

平面円形で掘方の直径1.0m、深さ0.3mを測る。SK18よりやや大型で深い位置に据えている。汚れたシルト質土で内部を充填していた。

SK19から出土した遺物はあまり多くない。図化したものはミニチュア製品の土瓶(58)・鍋蓋(59)・紅皿(60)の3点のみである。58・59はままごと道具の一部でいずれも小型の製品である。58は高さ2.6cm、幅6.4cm、59は径2.4cm、厚さ0.8cmをそれぞれ測る。いずれも型押し成形で素焼きである。58では内外面に丁寧なナデが観察され、表面に金雲母が付着する。60は口径4.7cm、器高1.6cm、高台径1.6cmを測る。型押し成形の製品で肥前系と考えられる。

4



第104図 SK16~20・25・27平面図、SK16~20・25断面図 (1/40)

SK20 (第104・105図、図版56・64)

平面円形で掘方の直径1.05~1.15m、深さ0.3mを測る。わずかに桶の木質部が観察されたため廃棄時に桶をそのまま残したと考えられるが、残存状況が悪く桶の規模を測るには至らなかった。しかしいずれにしても大型と推測される。SK18と同じくゴミ捨て穴に使用されていた。このため内部からは多数の生活雑器が出土している。

出土した遺物には軟質施釉陶器皿 (61)・土師器皿 (62)・土師質の独楽模造品 (63)、肥前系青磁染

付碗 (64)・同じく碗蓋 (65) の5点がある。

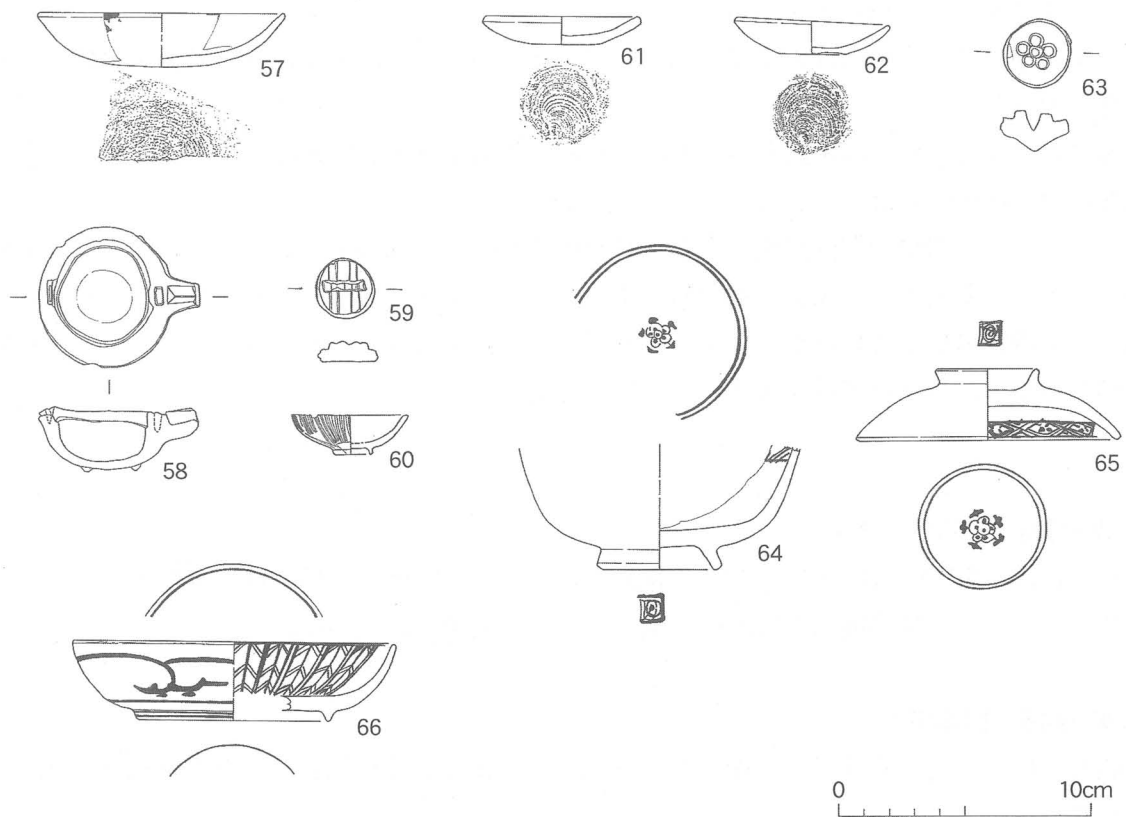
61は口径6.3 cm、器高1.1 cmの灯明皿である。柿釉皿で口縁部に煤痕を残す。底部には糸切り痕跡を残している。62は同じく灯明皿でロクロ成形後底部を糸切りしている。63は独楽のミニチュア製品で直径2.8cm、高さ1.6cmを測る。木目の細かい胎土で上面には赤色土を塗布し、表面に雲母粉の付着が観察される。型押しによって成形する製品で、中心に軸を入れるための穴がある。64は口縁部を欠く個体で高台径5 cmを測る。内面には見込み二重圏線と手描きの五弁花、高台内面には二重方形枠と渦福を描いている。65は口径10.5cm、器高2.9cm、つまみ径4.2cmを測る。内面口縁部に四方禰文、見込みには二重圏線と手描き五弁花、高台内面には二重方形枠と渦福を描いている。

SK25 (第104・105図、図版56・64)

平面円形で直径0.9~0.95m、深さ0.35mを測る。染付磁器皿 (66)、1点が出土した。肥前系の製品で口径13cm、器高3.2cm、高台径7.8cmを測る。口縁部は口錆で、外面に唐草文、内面に矢羽根文を描く。さらに、高台内面に圏線をもつ。

SK27 (第104図、図版44)

平面円形で埋桶列の北端に構築される。規模は直径0.84m、深さ0.3mを測る。但し、南側と東側に前後して埋桶が据えられた痕跡がある。南側のものは小型であるが、埋桶列に並ぶもので直径0.55m、深さ0.2mを測る。



第105図 SK18・19・20・25出土遺物 (1/3)

第2面下層の小結

この段階は酒蔵が建てられた最初の時期の遺構である。蔵の建物構造などは明らかに出来なかったが、18世紀後半～19世紀前半頃の伊丹郷町の酒蔵遺構と考えてよいだろう。ただしこの段階の遺構は上層の遺構に破壊され残存状況は良好ではない。

また、酒蔵関連の遺構も第2面上層のものに比べると小規模である。全体的な配置は男柱などの搾り場が調査区中ほどと南側にそれぞれ検出されたが、主としてこの時期は調査区中央付近に長く搾り場が存在した印象が強い。竈については調査区北側に竈6が1箇所検出された。このほかこの時期の特徴としては埋桶SK13～27が1列に並んで検出されたことである。これらは酒蔵の用水溜めなどの機能が考えられるが、他にあまり類例を見ない。

一方、井戸SK45が埋め立てられた後に竈6が構築される点や、男柱7・8が近接することからこの時期の中でもかなり時間の経過があったことを示している。

埋桶は調査区の中央に南北に通る地形段差に合わせて一直線に並ぶものが認められ、この列に並ぶものはSK12・13・17・18・19・20・25・27がある。これらは掘方を接して並び、おそらく一時期に掘えられたと考えられる。用途は類例などがあまりないため、明確にできなかった。

第3面（第106図、図版57）

伊丹段丘直上からの検出層である。直上に土壌化した第5層・暗灰黄色土が20～15cm前後堆積していた。ただしこの層も上層からの攪乱や影響のため幕末前後の遺物が若干混入している。このように第3面は後世の影響が認められるものの、検出状況からするとおおむね14～17世紀初頭を中心とする遺構が営まれていた。今回検出した遺構に関しては大半がこの時期のものと判断した。出土した遺構には柱穴・土器溜り・土坑などがある。

但し、包含層中には古墳時代の土器も出土しているため、周辺は古くからの遺跡が継続して存在した可能性が大きい。

第3面に該当する遺物には土師器皿・丹波焼播鉢（図版64）・須恵器鉢などの中世遺物や、古墳時代の須恵器杯蓋（図版64）などがある。

また、上層からの遺構の掘削が稠密になされた中でも、中央部分を中心に広い範囲で遺構が検出されていることからすると、本来は中世段階においても広く稠密に遺跡が広がっていたと思われる。また、南側では遺構は検出されなかったが、搾り場の作り替えに伴う攪乱を考慮すると、この範囲にも本来遺構が広がっていた可能性は大きい。

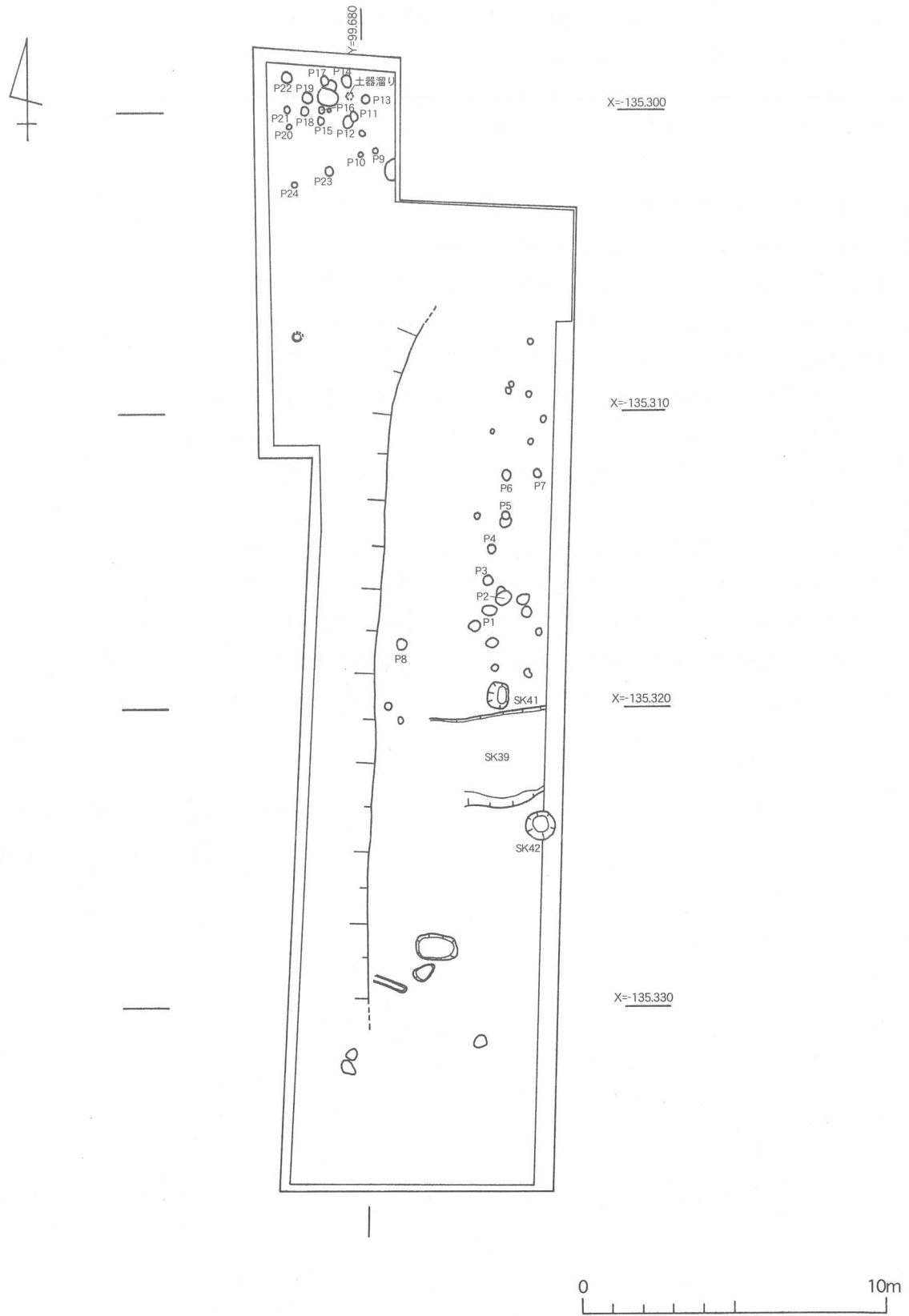
土坑

SK39（第106図、図版57・64）

SK39とSK41の間に検出された窪み状の遺構である。長さ4.0m、幅3.0mほどが検出された。埋土は黄色礫混じりシルトで地山掘削層のやや土壌化した土で充填されていた。

SK41（第106図、図版57）

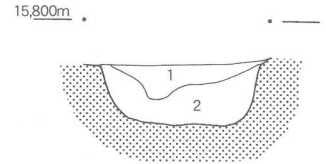
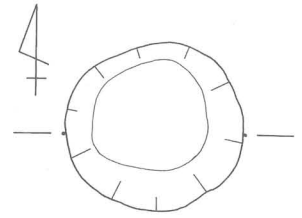
平面隅丸方形の土坑で直径0.8m、深さ0.3mを測る。内部にはやや褐色シルトが充填され、拳大の礫が混入していた。



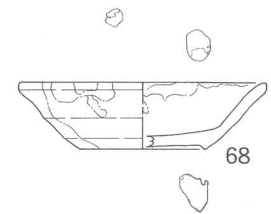
第106図 第3面全体図 (1/200)

SK42 (第107図、図版64)

調査区中ほどの東壁際で検出された土坑である。平面円形で直径0.9m、深さ0.35mを測る。内部からは瀬戸・美濃系陶器の丸皿(68)が出土した。口径9.8cm、器高2.8cm、高台径5cmを測る。内面から口縁部外面にかけて鉄釉が付け掛けされ、見込みにはトチン痕跡2箇所が観察される。時期は16世紀末～17世紀初頭のものだと判断される。



- 1. 7.5YR4/6褐色シルト質土
- 2. 10YR5/3にぶい黄褐色土



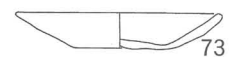
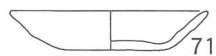
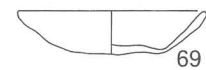
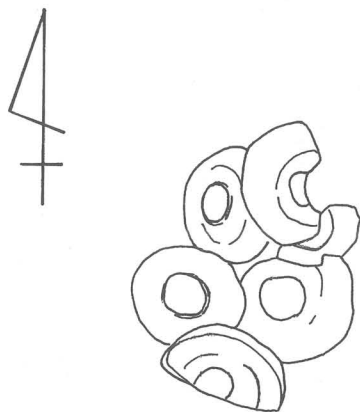
第107図 SK42平面・断面図(1/40)、出土遺物(1/3)

土器溜り (第108図・図版58・64)

調査区北端に土師器皿を裏向けにして重ねた遺構が検出された。重ねた皿は1枚の上に重ねるのではなく、それぞれの端部を少し重ねた状態で、長さ15cmほどの広がりを持って据えられていた。精査しながら取り上げたが周囲に掘方や埋納した製品を確認することはできなかった。

出土した土師器皿は7個体分(69～75)である。技法的にはいずれも同一のものと考えられ一括して据えられる。いずれも小皿でゆがみのある特徴的な製品である。また、各個体とも底部がヘソ状に隆起した、いわゆるヘソ皿である。

法量は口径7.5～8.2cm、器高1.4～1.6cmを測る。手づくね成形で成形後、内面及び口縁部外面をヨコナデ調整で仕上げている。外面体部下半から底部にかけて指頭痕跡を顕著に残している。ただし、口縁端部の仕上げナデはやや雑で省略傾向にある。共伴遺物が無いため詳細な時期を知りえないが、16世紀後半に位置づけできる。



第108図 土器溜り平面図(1/5)、出土遺物(1/3)

柱穴

柱穴群・P1～24（第106・109図、図版58・59）

柱穴は直径30～40cm前後で平面形状は円形ないし楕円形のものが大多数を占める。中央東よりと北端に多数が分布するが、後世の攪乱のために分布の偏りが実際の遺跡を反映しているかどうかについては明確にできなかった。また、これらの柱穴は並びを復原できないので建物に伴うものかどうかは明らかに出来なかったが、根石を据えるもの（P9）がみられ、規模もまとまっていることから、大半が建物の柱を設置した柱穴の可能性が高いと考えられる。

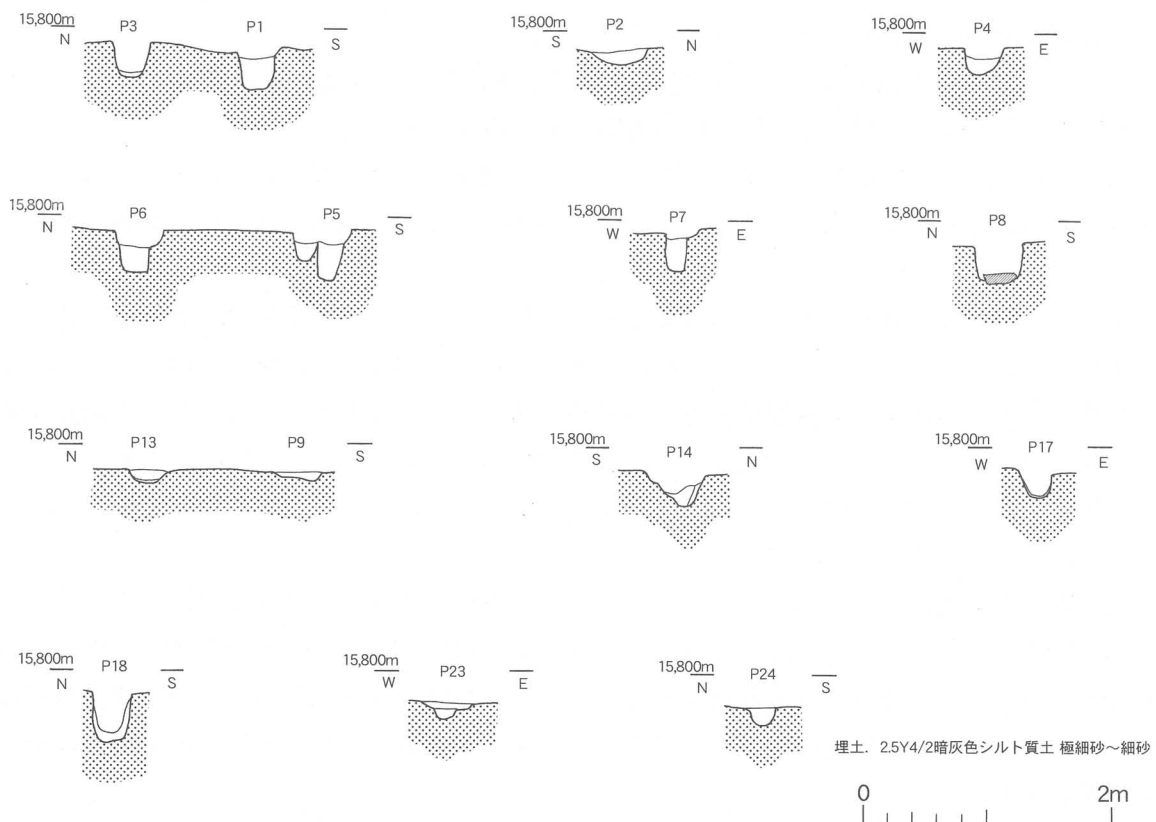
時期は調査区の制約や、江戸期以降の新たな遺構の破壊のため明確にできなかったが、おそらく土器溜りから出土した土師皿前後（16世紀後半）の時期に伴うものと考えられる。

第3面の小結

第3面では小数ではあるが土器溜りや柱穴などの遺構が検出され、14～17世紀初頭の成果を見ることができた。これらの遺構と、地山面の傾斜から推定すると、調査区は西側に向かって大きく傾斜する変換点周辺に位置していることが推定される。これは、大溝筋推定線に位置する谷地形に連続するもので、以上からすると今回の調査は隣接する堀の東側の様相を明らかにしたことになる。

また、この段階の出土遺物としては遺構内から出土した遺物以外では、絵唐津皿（竈2出土）・染付皿・丹波焼播鉢・備前焼無頸壺や羽釜の鍔付タイプの個体、同じく三足釜の脚部などがある。

これらは14世紀代のもの、16世紀代のもの、17世紀初頭前後のものに大別され、調査区周辺が中世



第109図 P1～9・13・14・17・18・23・24 断面図（1/60）

後半から継続して遺跡が営まれたことを明らかにした。

一方、この後の17世紀前半～18世紀にかけての時期（第2面下層以前）については、遺構・遺物が検出されずまったく様相が不明となる。絵図資料などでは前述の通り周辺は畠地となっていたようであるが、このことと今回の成果は符合する。

7. まとめ

ここでは今回の調査成果について概括し、既存の成果との検討を行なう。まず、各時期の変遷について、あらためて整理しておきたい。既述のように、調査区は大きく4段階（第1面、第2面上層、第2面下層、第3面）の変遷が辿れる。

第1面は明治後半期から現代までである。酒造業は昭和初期ころまで操業したようであるが、第2次世界大戦ころには既に廃業していたといわれている。また、酒蔵の建物もこの戦争による戦災によって被災した。この建物に先行して昭和初期には煉瓦竈1が構築されているので、酒蔵の建物もこの段階で建替えが行なわれている。

第2面上層の段階は酒蔵内の施設群が大型化した時期である。时期的には幕末から明治時代にかけてと思われる。竈や絞り場は大型化すると共に、竈には石材を貼りつけたものが登場し、男柱は連立（男柱1～3）の遺構が登場している。酒蔵の構造は酒造用の竈が調査区中央北よりに据えられ、搾り場（男柱・垂壺）は南側に集中している。このため北側を除く範囲は酒造に伴う作業場として広く使用されている。一方、調査区北側は表通りに面し店棚や居住が置かれている。竈2はおそらくこれらの生活に関わって据えられた厨房の竈であったと推測される。3連ないし2連の並立する構造でかなり大人数の人々の炊飯を賄ったと推測される。

第2面下層の段階は酒蔵が建てられた最初の時期の遺構である。蔵の建物構造は明らかに出来なかったが、18世紀後半～19世紀前半頃の伊丹郷町の酒蔵遺構と考えてよい。

全体的な配置としては男柱などの搾り場が主として、調査区中央付近に長く存在した印象が強い。竈は調査区北側に竈6が1箇所検出された。ほかに特徴としては埋桶SK13～27が1列に並んで検出された。

第3面では土器溜り・柱穴・溝などの遺構が検出され、14・16・17世紀初頭の成果をえることができた。また、これらの遺構と、地山面の傾斜から推定すると、調査区は西側に向かって大きく傾斜する地形変換点周辺に位置し、大溝筋推定線の谷地形に連続する。以上からすると今回の調査は隣接する堀の東側の様相を明らかにしたことになり、有岡城の構造を考える上で貴重な成果となった。一方、この後の17世紀前半～18世紀にかけての時期については空白となるが絵図資料などでは畠地となっていたようでこのことと符合する。

次に、文献上の変遷について再度まとめておきたい。調査地点周辺の旧地番は既述のように鳩ノ垣内630番地に該当する。そして、周辺は元禄7年(1694)の『柳沢吉保領伊丹郷町絵図』段階では畠ないし農地であるが、18世紀中頃以降は酒蔵であったことが知られ、天保15年(1844)の『伊丹郷町分間絵図』でも周辺は市街地として描かれている。これらの事実は酒蔵が登場する第2面下層の段階に対応しており調査成果とほぼ符合する。

そのほか、本地点には有岡城の城郭域と城下町域を区画する大溝筋が南・西辺に接する。この点から本地点の中世の様相を知ることは城郭構造の把握にとって重要と考えられる。調査では若干ではあるが中世の遺構も検出され、周辺にこの時代の生活痕跡が検出され、営みのあったことが判明した。

ただ、具体的に城郭構造につながる成果は無く、その点は今後の課題となった。

最後に久納豊蔵邸見取り図（明治期）（第74図）について少し詳しく見ておきたい。これによれば酒蔵は北端から白屋、空き地、竈屋、鞠室、搾り場の順に並ぶ。西側には居宅・木納屋・搾り場が並ぶ。酒蔵の作業場は主として中央から南側で、南側の1画を大きく搾り場が占めている。この時期は第1面となるが囲炉裏の検出から居宅の場所は北西隅で間違いがない。また、木納屋は西側の壁際で検出された燃料貯蔵庫と推定される。残念ながら搾り場は明確にできないが、おそらく南西隅に置かれたと思われる。竈は竈3が木納屋の北側に検出されたがやや位置が符合しない。また、燃料貯蔵庫は戦災まで存続したものであるため場所を移動しながら何世代かの変遷の可能性も残される。このため、図とはやや符合しないとも推測される。しかし、図そのものも概念図的なものであるため正確な実測図とは考えられない可能性も残される。

このほか、洗い場の井戸はSK35が考えられる。ただ、位置は図とは若干異なり、図の位置には井戸が検出されなかったので、やはり図の表現の問題が残される。また、洗い場は燃料貯蔵庫の上層に漆喰を貼った遺構が見つかったことから、実際にはやや南西に位置する。しかし、この周辺には大量の漆喰が表土に含まれていたことからすると、洗い場が何度かの変遷を経ていることも想定される。このように考えると、酒蔵の構造は大まかには久納邸見取り図の配置と大きく変化していないことが推測されそうである。

以上の通り、今回の調査地点は江戸後半期から昭和初期にかけて酒造業を営む酒蔵であった。このような酒蔵は伊丹郷町内には多数存在したが、今回調査を行った事例もこの1例として貴重な成果をもたらせた。特に、男柱などの搾り場遺構と竈については幾世代もの変遷をたどることができ、伊丹郷町の酒造業を考える上で良好な資料といえるだろう。

また、中世段階においても少なくとも周辺は集落遺跡が存在し、有岡城期まで存続したことは確実である。この点に関しては城域と城郭機能を考える上で今後にゆだねなければならない課題が大きい。が、貴重な成果といえるだろう。

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
竈 1	第78図-1 図版60-1	壺	素焼き	口径 12.7 cm 器高 18.2 cm 底径 13.3 cm	内外面口クロナデ	100% 外面底部・肩部に鉄分付着物痕有り 内面煤けている
	第78図-2 図版60-2	受皿	陶器	口径 11.6 cm 器高 2.2 cm 底径 4.8 cm	灰釉 受け部に切り込み1ヶ所有り 外面口縁部より下露胎	伊賀・信楽 100% 内外面煤けている 内外面貫入
	第78図-3 図版60-3	皿	陶器	口径 12.1 cm 器高 2.6 cm 底径 4.2 cm	灰釉 見込み目跡3ヶ所有り 外面口縁部より下露胎	伊賀・信楽 100% 内外面煤けている 内外面貫入
竈 3	第81図-4 図版60-4	徳利	陶器	口径 2.5 cm 器高 16.7 cm 底径 7.6 cm	外面・内面口縁部鉄釉 外面イッチン掛けで「清水福」と「今津」の文字有り 底部露胎	丹波 100% 外面体部下 半二次焼成受けるか
	第81図-5 図版60-5	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶 背文「文」	100% 緑青付着 寛文8年(1668)初鑄
SK 7	第83図-6 図版60-6	ミニチュア製品	素焼き	幅 4.3 cm 厚み 2.3 cm	鈴 手捏ね成形 上端部に孔有り(貫通) 表面に赤色系の着色有り 表面雲母粉付着	50%
	第83図-7 図版60-7	ミニチュア製品	素焼き		箱庭道具(祠か?) 型押し成形 底部孔有り 表面雲母粉付着	45%
	第83図-8 図版60-8	ミニチュア製品	素焼き	最大幅 2.8 cm 厚み 1.6 cm	人形(仏像) 型押し成形 底部孔有り 前面に朱が塗られた痕跡有り 表面雲母粉付着	75%
	第83図-9 図版60-9	ミニチュア製品	素焼き	高さ 3.6 cm 幅 3.5 cm 厚み 1.5 cm	箱庭道具(神社) 型押し成形 底部孔有り 表面雲母粉付着	100%
	第83図-10 図版60-10	ミニチュア製品	素焼き	最大幅 3.1 cm 厚み 2.2 cm	人形(虚無僧) 型押し成形 表面に朱が塗られた痕跡有り 表面雲母粉付着	80%
	第83図-11	碗蓋	白磁	口径 (10.0) cm 器高 2.6 cm つまみ径 (4.2) cm	外面寿字文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線と寿字文 量付露胎	肥前 30%
	第83図-12 図版60-12	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
竈 5	第88図-13 図版60-13	皿	素焼き	口径 (7.2) cm 器高 1.3 cm	ロク口成形 底部糸切り痕有り(右巻き)	25% 口縁部煤付着
	第88図-14 図版60-14	土師皿	素焼き	口径 9.6 cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内外面口縁部ヨコナデ内面ナデ	在地 95% 口縁部煤付着
	第88図-15 図版60-15	皿	陶器	口径 (11.8) cm 器高 2.8 cm 底径 (4.6) cm	灰釉 見込み目跡1ヶ所残存 外面口縁部から下露胎	伊賀・信楽 25% 口縁部から外面煤けている
	第88図-16 図版60-16	土瓶	陶器	口径 10.7 cm 器高 9.4 cm 底径 10.0 cm	鉄釉 脚3ヶ所有り 口縁部・底部周辺露胎	伊賀・信楽 60% 底部煤けている
	第88図-17 図版60-17	播鉢	陶器	口径 (35.8) cm	クシ目一単位8本 外面体部口クロヘラケズリ	堺・明石 10% 二次焼成を受ける
	第88図-18 図版60-18	染付碗	白磁	高台径 (5.2) cm	外面花唐草文 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台内圏線と銘有り 高台量付露胎	肥前 15% 内面貫入
男柱 1	第90図-19 図版61-19	蓋	素焼き	口径 5.1 cm 器高 1.9 cm 底径 3.3 cm	ロク口成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 把手貼り付け	100%
	第90図-20 図版61-20	染付碗	白磁	口径 (11.1) cm 器高 5.8 cm 高台径 4.4 cm	外面草花文 高台内銘有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45% 内外面貫入

第26表 第209次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
男柱1	第90図-21 図版61-21	染付碗	白磁	口径 (11.6) cm	朝顔形 外面草花文	肥前 20%
	第90図-22 図版61-22	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
	第90図-23 図版61-23	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	95% 緑青付着
	第90図-24 図版61-24	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
男柱2	第90図-25 図版61-25	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
男柱5埋土	第91図-26 図版61-26	火入れか	陶器	口径 (9.6) cm	内外面口縁部灰釉・外面体部上半鉄釉を掛け分け 外面体部下半・内面口縁部より下露胎	丹波か 10%
男柱5	第91図-27 図版61-27	染付皿	白磁	口径 (13.4) cm 器高 4.1 cm 高台径 (5.2) cm	内面二重斜格子文 見込み二重圏線と蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 重ね焼き痕有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 25%
SK3	第93図-28 図版61-28	皿	軟質施 釉陶器	口径 6.7 cm 器高 1.5 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り(右巻き) 外 面口縁部より下露胎	40% 内面・口縁部煤け ている
	第93図-29 図版61-29	染付碗	白磁	口径 (13.0) cm 器高 5.2 cm 高台径 5.0 cm	外面折れ松葉文 内面口縁部文様有り 見込み蛇の 目釉剥ぎ、二重圏線とコンニャク印判五弁花 アル ミナ砂塗布 量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 口縁若干端 反り気味 見込み重ね焼 き痕有り
	第93図-30 図版61-30	染付碗	白磁	口径 (11.4) cm 器高 6.0 cm 高台径 5.2 cm	口縁端反り 外面人物文と漢詩 高台内二重圏線と 銘有り 高台量付露胎	肥前 40%
	第93図-31 図版61-31	染付碗	白磁	口径 9.0 cm 器高 5.8 cm 高台径 3.6 cm	外面水草と蝶文 内面口縁部四方禪文 見込み二重 圏線と崩れたコンニャク印判五弁花か 高台量付露 胎	肥前 98%
	第93図-32 図版61-32	染付碗	青磁	口径 (11.2) cm 器高 6.6 cm 高台径 (5.0) cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 内面口縁部四方 禪文 見込み二重圏線とコンニャク印判五弁花 高 台内二重方形枠の渦福	肥前 30% 高台量付露 胎 離れ砂付着
SK24	第94図-33 図版62-33	ミニチュア製品	素焼き	高さ 6.2 cm 厚み 2.1 cm	人形(天神) 型押し成形 底部孔有り 表面雲母粉 付着	95%
	第94図-34 図版62-34	梅文皿	陶器	口径 (11.8) cm 器高 4.5 cm 高台径 4.7 cm	灰釉 見込みに呉須で樹木文を描く 高台周辺露胎	瀬戸・美濃 70% 内外 面貫入する
	第94図-35 図版62-35	碗蓋	白磁	口径 (9.6) cm 器高 2.9 cm つまみ径 4.0 cm	外面笹文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と コンニャク印判五弁花 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 55%
	第94図-36 図版62-36	碗蓋	白磁	口径 10.3 cm 器高 3.0 cm つまみ径 4.6 cm	外面寿字文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線 と寿字文 高台量付露胎	肥前 80%
	第94図-37 図版62-37	大鉢	陶器	口径 (50.8) cm 器高 16.5 cm 高台径 (17.0) cm	三島手 外面体部上半・内面鉄釉 外面体部下半・ 高台内刷毛で鉄釉を施す 内面象嵌を施す 見込み 砂目2ヶ所残存 量付露胎	唐津 40%
竈6	第96図-38 図版62-38	蓋	陶器	口径 (9.0) cm 器高 2.0 cm 底径 5.0 cm	鉄釉 つまみ1ヶ所有り 底部に重ね焼き痕有り 外面口縁部より下露胎	伊賀・信楽 45%
SK45	第96図-39 図版62-39	皿	青磁	高台径 (6.0) cm	青磁釉 見込み目跡2ヶ所残存 高台量付露胎 高 台量付周辺に離れ砂の代わりに繊維状の物が付着し ている	肥前か 20% 内外面貫 入する
男柱7	第99図-40 図版62-40	焙烙	素焼き	口径 (26.0) cm	底部外型成形 外面口縁部・内面ヨコナデ	10% 底部雲母粉付着

第27表 第209次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
男柱 7	第99図-41 図版62-41	蓋	素焼き	口 径 (20.2) cm 器 高 2.9 cm	内外面口クロナデ 表面雲母粉付着	在地 30% 外面天井部分に鉄分付着物の痕跡有り
	第99図-42 図版62-42	壺	瓦質	底 径 (26.8) cm	粘土紐巻き上げ成形 外面丁寧なナデ 口縁部ヨコナデ 内面強い指頭圧痕	25%
	第99図-43 図版62-43	播鉢	陶器	口 径 (40.6) cm	クシ目一単位10本 外面口クロヘラケズリ	堺・明石 20%
	第99図-44 図版63-44	鉄絵碗	陶器	口 径 (9.6) cm 器 高 5.8 cm 高台径 3.5 cm	外面文様有り 高台周辺露胎	肥前 45%
	第99図-45 図版63-45	染付皿	白磁	口 径 12.8 cm 器 高 4.0 cm 高台径 4.3 cm	内面二重斜格子文 見込み二重圏線と蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 重ね焼き痕有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 95%
	第99図-46 図版63-46	染付大皿	白磁	口 径 (19.6) cm 器 高 6.3 cm 高台径 10.3 cm	外面唐草文 内面草花文 見込みコンニャク印判五弁花 高台内圏線と渦福 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 65%
	第99図-47 図版63-47	染付碗	青磁	口 径 (11.1) cm 器 高 6.2 cm 高台径 (4.3) cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 内面口縁部文様有り 見込み二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 45%
	第99図-48 図版63-48	染付大碗	白磁	口 径 (16.0) cm 器 高 7.7 cm 高台径 (6.5) cm	口縁端反り 外面蔦草文 内面口縁部圏線有り 見込み二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 40%
	第99図-49 図版63-49	砥石	石	短 辺 4.8 cm 厚 み 0.9 cm		粘板岩 80%
	SK 6	第101図-50 図版63-50	皿	軟質施釉陶器	口 径 (6.4) cm 器 高 1.3 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り(右巻き)
第101図-51 図版63-51		蓋	軟質施釉陶器	口 径 (6.4) cm	柿釉 ロクロ成形 口縁部露胎 内面天井部分に重ね焼き痕有り	20%
第101図-52 図版63-52		蓋	陶器	口 径 (8.1) cm 器 高 1.9 cm 底 径 4.4 cm	底部糸切り痕有り(右巻き)	35% 内面に自然釉掛かる
第101図-53 図版63-53		播鉢	陶器	口 径 (35.0) cm 器 高 13.9 cm 底 径 (16.4) cm	クシ目一単位8本 外面体部口クロヘラケズリ	堺 30%
第101図-54 図版63-54		色絵皿	陶器	高台径 5.9 cm	見込み鉄釉・呉須・白泥釉で梅文を描く 見込み目跡2ヶ所残存 高台周辺露胎	京焼系 40%
第101図-55 図版63-55		碗蓋	青磁	口 径 (9.9) cm 器 高 3.0 cm つまみ径 4.3 cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 内面口縁部四方襷文 見込み二重圏線と丸波文 高台内二重方形枠の渦福 量付露胎	肥前 70% 高台量付離れ砂付着 内外面貫入する
第101図-56 図版63-56		仏飯具	白磁	口 径 7.3 cm 器 高 6.5 cm 高台径 4.6 cm	外面宝珠文 蛇の目凹型高台 高台量付アルミナ砂塗布	肥前 80%
SK12	第103図-67	銭	銅	口 径 2.3 cm 厚 み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
SK18	第105図-57 図版64-57	皿	軟質施釉陶器	口 径 (9.9) cm 器 高 2.2 cm	柿釉 ロクロ成形 底部糸切り痕有り	15% 口縁部煤付着
SK19	第105図-58 図版64-58	ミニチュア製品	素焼き	高 さ 2.6 cm 幅 6.4 cm	ままごと道具(土瓶) 型押し成形 脚3ヵ所うち2ヶ所残存 内外面丁寧なナデ 表面雲母粉付着	95%
	第105図-59 図版64-59	ミニチュア製品	素焼き	径 2.4 cm 厚 み 0.8 cm	ままごと道具(銅蓋) 型押し成形 表面雲母粉付着	100%

第28表 第209次調査遺物観察表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
SK19	第105図-60 図版64-60	紅皿	白磁	口径 4.7 cm 器高 1.6 cm 高台径 1.6 cm	型押し成形 高台周辺露胎	肥前 98%
SK20	第105図-61 図版64-61	皿	軟質施釉陶器	口径 6.3 cm 器高 1.1 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り(右巻き)	95% 口縁部煤けている
	第105図-62 図版64-62	土師皿	素焼き	口径 6.2 cm 器高 1.4 cm	ロク口成形 底部糸切り痕有り(右巻き)	95% 内外面若干煤けている
	第105図-63 図版64-63	ミニチュア製品	素焼き	径 2.8 cm 高さ 1.6 cm	独楽(梅) 型押し成形 中心に孔有り(貫通せず) 上面に赤色の着色の痕跡有り 表面雲母粉付着	100%
	第105図-64 図版64-64	染付碗	青磁	高台径 5.0 cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁 内面口縁部文様有り 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台内二重方形枠の渦福 畳付露胎	肥前 55% 高台畳付離れ砂付着 内外面貫入する
	第105図-65 図版64-65	染付碗蓋	青磁	口径 10.5 cm 器高 2.9 cm つまみ径 4.2 cm	外面青磁釉 内面・高台内白磁釉 内面口縁部四方 襷文 見込み二重圏線と手描き五弁花 高台内二重方形枠の渦福 畳付露胎	肥前 80%
SK25	第105図-66 図版64-66	染付皿	白磁	口径 (13.0) cm 器高 3.2 cm 高台径 7.8 cm	口縁口錆 外面唐草文 内面矢羽文 高台内圏線有り 高台畳付露胎	肥前 35%
SK42	第107図-68 図版64-68	皿	陶器	口径 (9.8) cm 器高 2.7 cm 高台径 5.0 cm	丸皿 鉄釉 見込トチン痕2ヶ所残存 削り込み高台 高台畳付トチン痕?1ヶ所残存	瀬戸・美濃 20%
土器溜り	第108図-69 図版64-69	土師皿	素焼き	口径 7.5 cm 器高 1.8 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ	在地 100%
	第108図-70 図版64-70	土師皿	素焼き	口径 8.2 cm 器高 1.4 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部強いヨコナデ 外面体部ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ	在地 100%
	第108図-71 図版64-71	土師皿	素焼き	口径 7.8 cm 器高 1.6 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ	在地 100%
	第108図-72 図版64-72	土師皿	素焼き	口径 7.9 cm 器高 1.4 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ	在地 100%
	第108図-73 図版64-73	土師皿	素焼き	口径 8.2 cm 器高 1.5 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ	在地 100%
	第108図-74 図版64-74	土師皿	素焼き	口径 8.1 cm 器高 1.5 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナデ(指頭圧痕残す) 内面ヨコナデ	在地 100%
	第108図-75 図版64-75	土師皿	素焼き	口径 7.5 cm 器高 1.6 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面ナデ 内面ヨコナデ	在地 100%
SK39	図版64-76	播鉢	陶器		摺り目へラ描き 外面口縁部強いヨコナデ 内外面ロクロナデ	丹波 2%
	図版64-77	壺	陶器	口径 (23.2) cm	内外面ロクロナデ	備前 2% 外面に自然釉掛かる
竈2	図版64-78	皿	陶器	高台径 4.7 cm	灰釉 見込み砂目3ヶ所所有り 高台周辺露胎 高台畳付砂目3ヶ所所有り	唐津 45% 内面に貫入する
	図版64-79	鉄絵皿	陶器	高台径 (6.0) cm	灰釉 内面文様有り 見込み砂目1ヶ所残存 高台畳付砂目1ヶ所残存	唐津 5%
東側側溝南端	図版64-80	三足釜	瓦質		外面丁寧なナデ	

第29表 第209次調査遺物観察表(4)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
調査区 南西隅	図版64-81	杯蓋	須恵器		外面口クロナデ 外面体部沈線2条めぐる 外面体 部下位に波状文が施される	2%
不明	図版64-82	羽釜	素焼き		外面口縁部に強いヨコナデ 口縁端部に面をもつ体 部内面ヨコハケを施す	2%

第30表 第209次調査遺物観察表（5）

第3章 結語

この報告書は、阪神・淡路大震災復興事業に伴う発掘調査の成果をまとめたもので、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の2箇所の発掘調査成果を収載している。調査内容の詳細については本文をご覧ください。また、本文中にあまり触れられていない点について若干補足しておきたい。

町の成り立ち

江戸時代の伊丹郷町は、伊丹村、北少路村など15の村が家続きになって在郷町を形成していたが、その中心は伊丹村である。伊丹村は、有岡城当時からの町場で、有岡城廃城の後も町の中心として発展していった。伊丹村には文禄年間(1592～96)、既に藁屋町(綿屋町)・柴屋町(泉町)・魚屋町・材木町など15町が成立していたが、町の発展に伴い、寛文年間(1661～73)に北之口町・鍛冶屋町の2町、元禄年間(1689～1702)に湊町・大手町・堺町・住吉町・常磐町・天王町・扇子町7町、さらに正徳年間(1711～16)に橘町・宮崎町が、享保年間(1716～36)に戎町が加わって、27町の町場が完成した。そうして廃城後、空地と化していた旧侍町にも再び町場が広がっていった。

今回の2箇所の調査地点をみると、第192次調査地点は藁屋町(のち綿屋町)に該当し、伊丹郷町でもっとも早く成立した町の一つであり、有岡城当時からの町場(城下町)と考えられる。一方、第209次調査地点の位置する境町は遅れて元禄年間の成立である。調査地点西側～南側にかけて流れる水路(大溝)は、有岡城当時の侍町と町場の境にあった堀跡と推測されるもので、今回の調査地点がその内側に位置することから有岡城当時は侍町であったと考えられる。

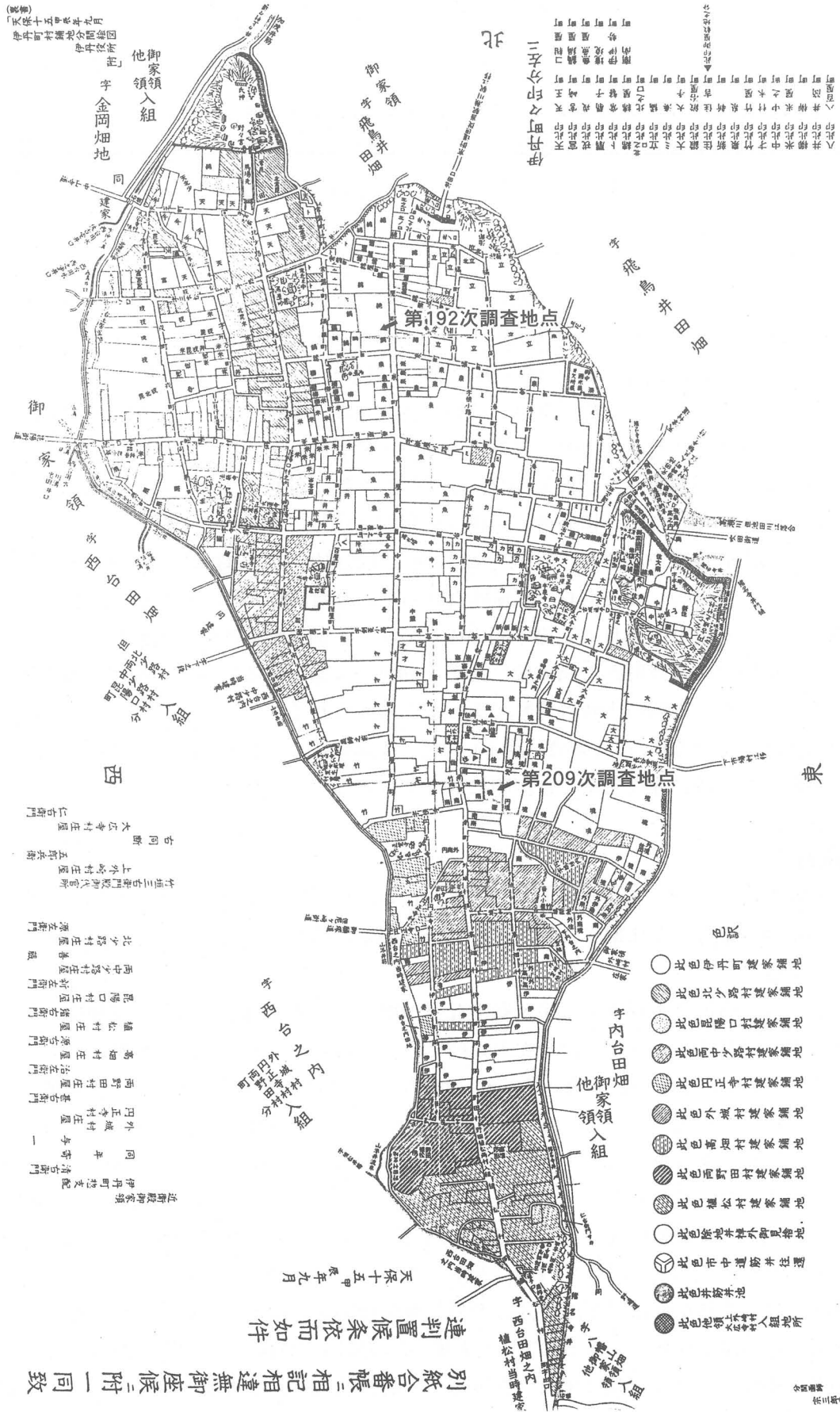
昨年度から実施している第276次調査(註1)では、大溝の下から幅6m、深さ3mの堀跡が発見され、大溝と堀跡が同位置に存在することが明になっている。

第192次調査

今回の発掘調査によれば、元禄伊丹大火(元年、12年、15年)の焼土層、江戸後期の大型の酒造用竈、幕末期の鋳物の型などが発掘され、江戸前期から幕末に至るこの場所の土地利用の変遷をある程度辿ることができた。

第2遺構面では、火災による焼土・炭・壁土などの塵芥を埋めた焼土土坑が7基検出された。出土遺物の年代から元禄時代に発生した伊丹大火の跡と考えられる。この大火は、郷町内に大きな被害を与え、その結果、元禄15年の大火の後、町火消しが常備されるようになった(註2)。当地点に被害をもたらしたと想定される大火は、12年と15年である。12年の大火は郷町の北端部、天王町より出火し郷町の中心部「札之辻」まで飛火して、郷町の南東方向にある下市場村まで焼け広がり、被災家屋は「寺院六ヶ寺、酒家十六軒其外数不知」と記録(註3)されている。また、15年の大火では、郷町内中少路村より出火し北之口まで焼け抜け、竈数439軒(註4)という甚大な被害を与えている。当地点の位置は両大火の延焼ルート上に位置していることからどちらの火災の可能性もある。

第1遺構面では、2基が並んだ半地下式の大型の竈が検出された。この竈は、伊丹郷町の酒蔵で使用される蒸米専用の竈と同形式であるので、大火後、この敷地が酒蔵として利用された可能性が高い。『天保15年伊丹郷町分間絵図』(第110図)をみると、調査地点は、広大な1筆の土地として描かれている。伊丹の酒蔵は、本町通りに面して広大な敷地を有する場合が多く、絵図に描かれた当地点の敷地はそれに相応しいものである。



第110図 『天保15年伊丹郷町分間絵図』解説図

ところが、この場所で鋳物製作を窺わせる遺物が発掘された。炉跡は発見されていないが、第1遺構面のS X1001から鋳型と炉壁の破片が多数出土している。鋳型から製品を特定できるものは、農具の犁先など僅かであるが、文字が刻まれた鋳型も多数含まれ、その中で、犁先(第8図-1)には「天保カ・・・卯・」の年号が刻まれている。「保」字は、上部のみであるが天保と読んで差し支えない。天保は15年(1830~1844)続き、15年12月には改元されて弘化となる。天保年間には卯年が2度あり、天保2年と14年である。したがって、この鋳型はその何れかの年に作られたことになる。そうであれば、『天保15年伊丹郷町分間絵図』が描かれた当時、少なくとも広大な敷地の一画では鋳物業が営まれたことになる。

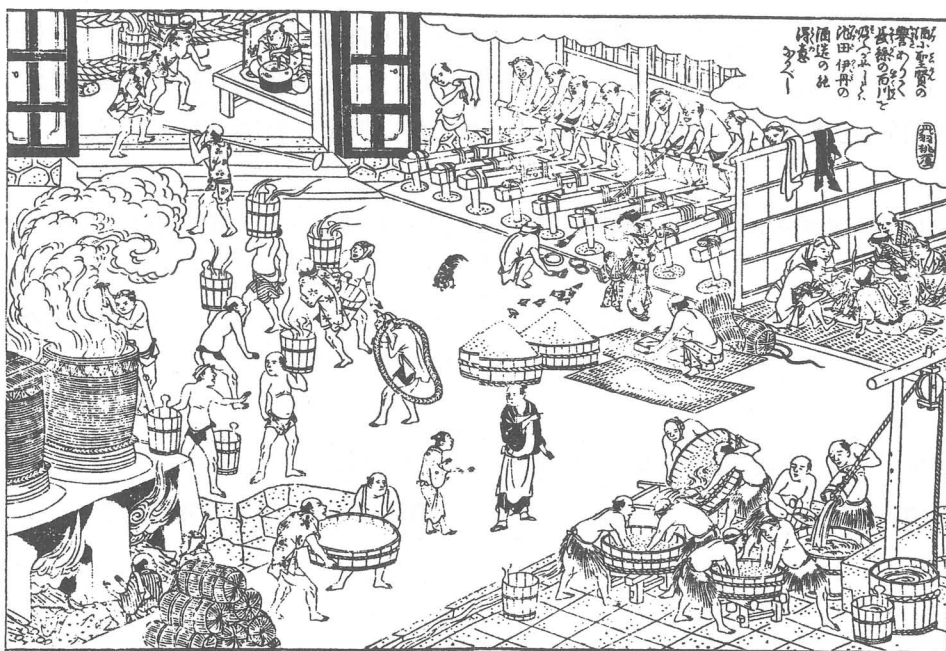
以上を整理すると、調査地点では18世紀後半から19世紀初頭にかけては酒造業、その後に鋳物業という土地利用の変遷になる。

第209次調査

この調査では、伊丹城期・有岡城期の遺構や遺物も若干出土したが、主な遺構は江戸後期以降の酒蔵跡である。酒蔵の内部構造は、複雑な酒造工程に対応してそれぞれの建物と施設が並ぶ。主な酒造工程と作業場の関係を列挙すると、精米工程は「白屋」、洗米工程は「洗い場」、蒸米工程は「釜屋」、麴仕込み工程は「麴室」、仕込み工程は「甑場」、醪仕込み工程は「大蔵」、搾り工程は「槽場」である。

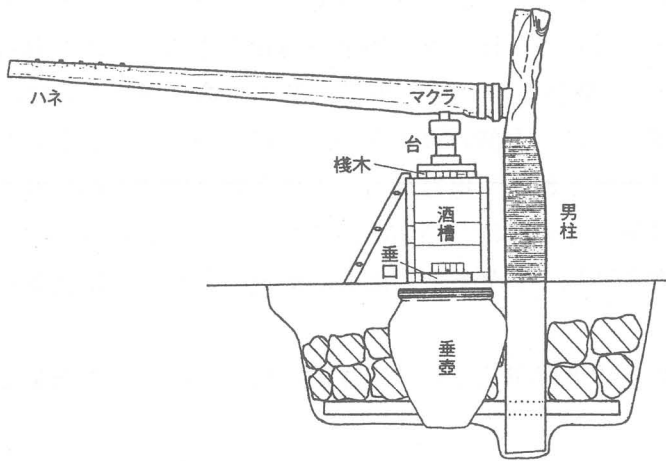
今回の調査で発見された酒造遺構は、蒸米工程で使用する竈跡と搾り工程で使用する槽場の男柱と垂壺の跡である。酒造用の竈は、江戸時代の伊丹の酒蔵内部を描いた『攝津名所圖會』(第111図)のように土間より下に竈と焚口のある半地下式が特徴で、多くの場合大小2基の竈が連なる(2基連基型)。今回見つかった竈3~竈6がこれに該当する。江戸時代を通じて基本的な構造に変化はないが、次第に大型化する傾向があり、明治時代以降にはレンガを用いるようになる。米を洗い水漬けする洗い場は釜屋に隣接することから、竈付近から見つかった井戸(S K 6・35・45)は洗い場の井戸と考えられる。

酒を搾る槽場には、木製の槽(ふね)と男柱、搾った酒を一時的に溜める垂壺があるが、発掘調査



第111図 『攝津名所圖會』 卷6(抜粋)

で確認されるのは男柱と垂壺の埋め込み穴(掘り方)である。重要文化財「旧岡田家住宅・酒蔵」の発掘調査(註4)では、男柱が土間より下の部分が残った男柱が発見された。それを模式図にしたものが第112図である。男柱の下部に横木(貫)を通し、その上を大きな石で抑えるという構造がよくわかる。今回発見された男柱(男柱1~8)と垂



第112図 男柱遺構復元図

この酒蔵には、明治19年段階の酒蔵の絵図面が1枚残されている(第74図)。絵図面には酒蔵の見取図の脇に「六百三拾番地 久納豊蔵 建物五棟」と書かれている。今回の調査範囲は、この蔵の東側、「白家」・「麴室」とその奥にある「酒造場(大蔵)」の東側に該当するが、「白屋」の西側にある建物(蔵の入口がある建物。店舗を兼ねた居宅か)の一部も含まれていると考えられる。見取図の中央に位置する「洗場」は、米を洗い水漬けする場所で、遺構としては井戸がある。今回の調査では明治19年段階の井戸は発掘されていないので、調査範囲に洗い場は含まれていないと考えられる。不思議なことにこの見取図に「釜屋」が描かれていない。通常「洗い場」に隣接するはずである。今回の調査で検出した竈3は主要部分にレンガを用いており、近代の竈の様相を呈しているが、絵図が描かれた明治19年には存在していなかったということになる。

この蔵の所有者豊蔵は明治19年が初見であるが、東側の623番地にも味醂醸造蔵を所有している(註5)。豊蔵の蔵は、その後大正年間に鹿島為次郎に譲渡され、昭和10年には鹿島合名会社所有蔵となり酒造を続けるが、戦時酒造統制の必要から昭和18年には転用・廃止蔵に指定され廃業している。

この蔵の所有者豊蔵は明治19年が初見であるが、東側の623番地にも味醂醸造蔵を所有している(註5)。豊蔵の蔵は、その後大正年間に鹿島為次郎に譲渡され、昭和10年には鹿島合名会社所有蔵となり酒造を続けるが、戦時酒造統制の必要から昭和18年には転用・廃止蔵に指定され廃業している。

- 註1 第276次調査では、有岡城の堀が埋まった17世紀中頃、堀と全く同位置に石造りの大溝を設けていることがわかった。
- 註2 石川道子「在郷町の火消しの存在形態-伊丹郷町における消防体制と火消しの位置-」(『歴史と神戸』178号)1991
- 註3 古野将盈「有岡年代秘記」(『有岡庄年代秘記』所収)伊丹市史第4巻 伊丹市 1968
- 註4 註3と同じ
- 註5 「重要文化財 旧岡田家住宅保存修理工事報告書(災害復旧)」伊丹市 1999
- 註6 「伊丹市史第3巻」、「酒造組合史」、のほか、全般にわたって市立博物館和島館長よりご教授を得た。

図版1



1. 第1遺構面全景（西より）



2. SX1001（西より）

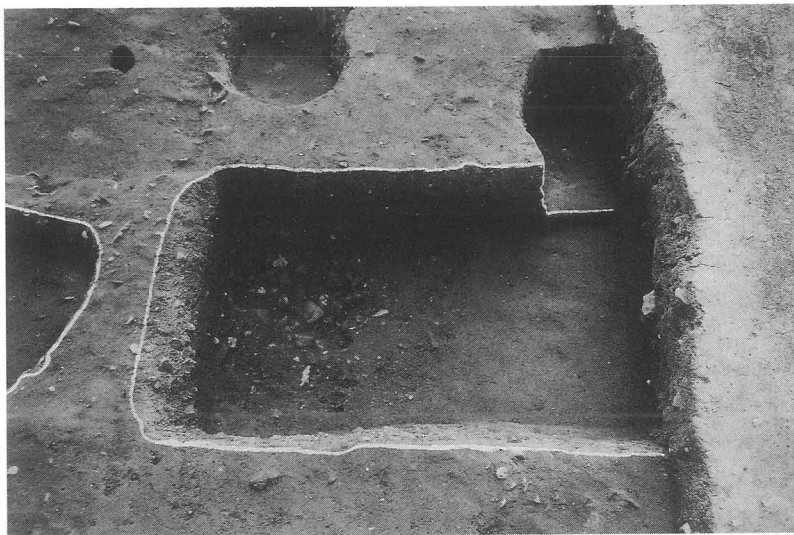


3. SE3001（西より）

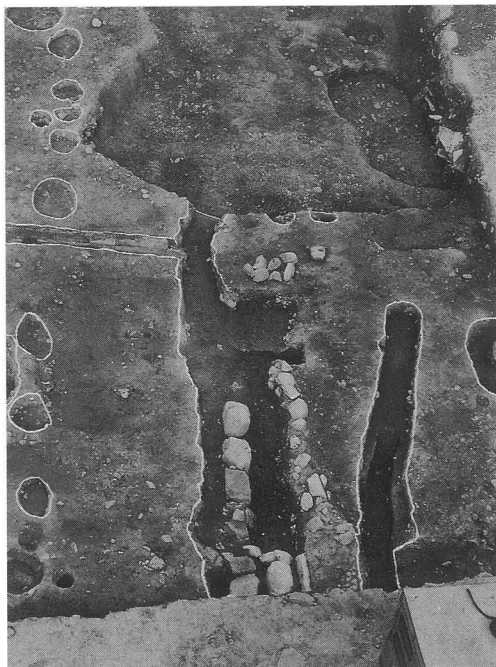
図版2



1. SD1001 (東より)



2. SD2001 (北より)



3. SD2003 (西より)

図版3



1. SX3006・3007 (南より)

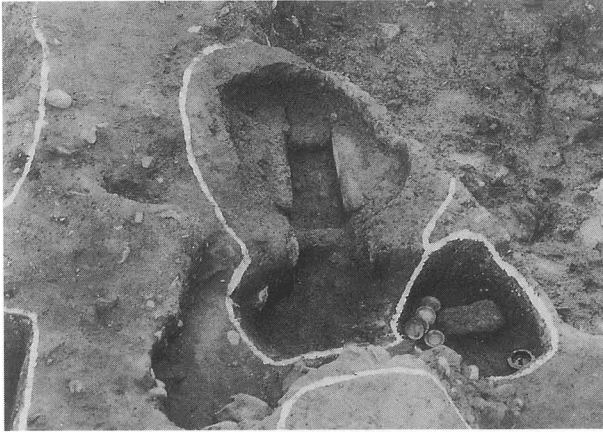


2. SX3006 (東より)



3. SX3007 (東より)

図版4



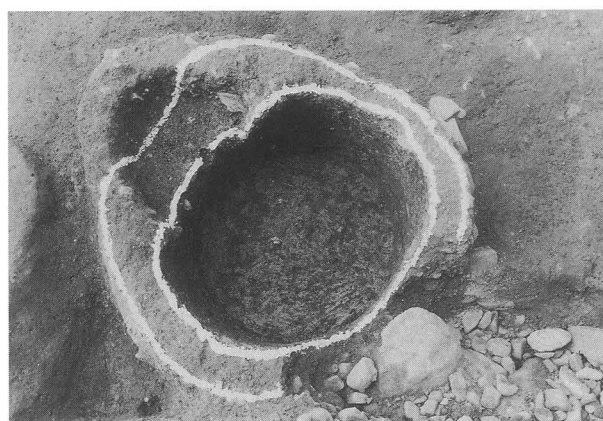
1. SK2023・SP2021（西より）



2. SP2021遺物出土状況（東より）



3. SK2011遺物出土状況（北より）



4. SK3007（南より）

図版5



1. SK1005 (東より)



2. SK1005遺物出土状況 (東より)

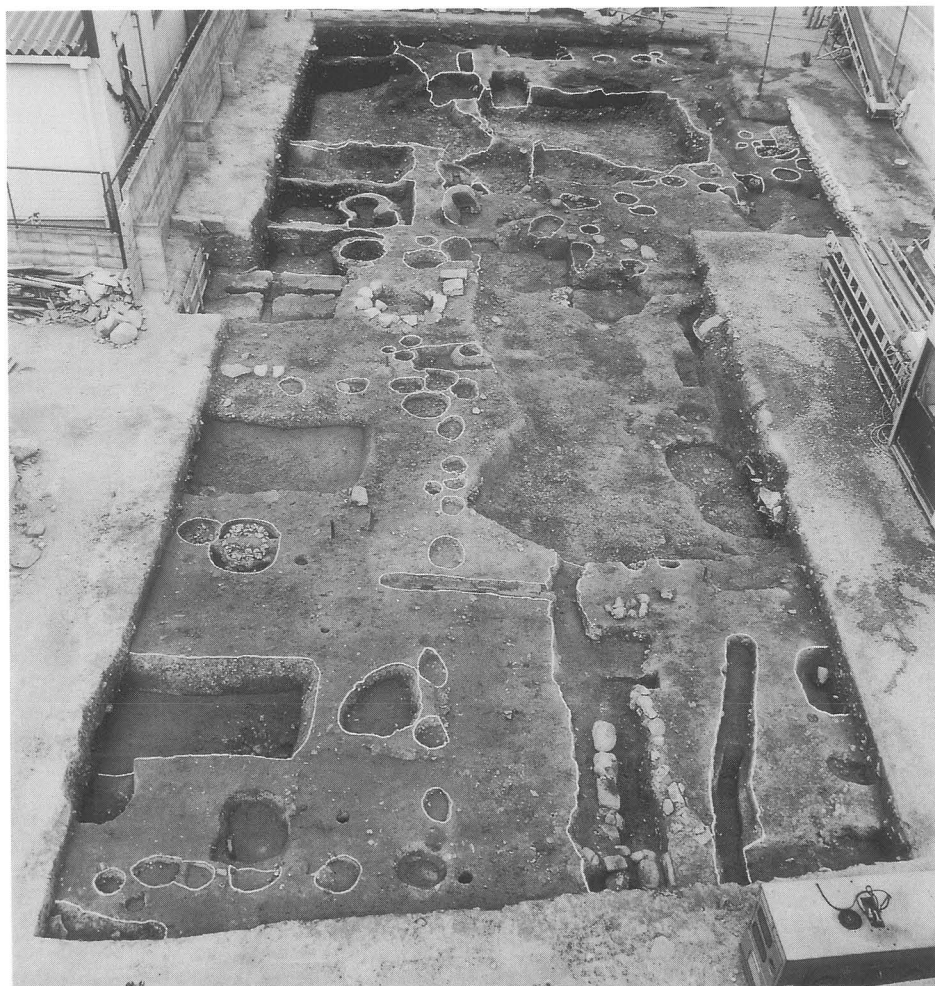


3. SK2005・2006 (南より)



4. SP2017・2018・2019 (北より)

図版6

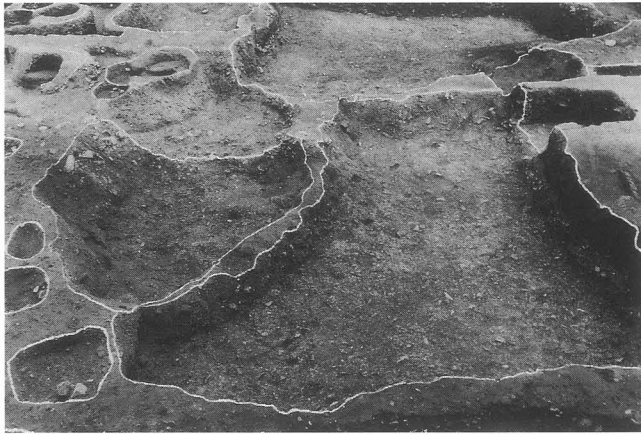


1. 第2遺構面全景（西より）



2. SX2001~2008（焼土土坑群）全景（西より）

図版7



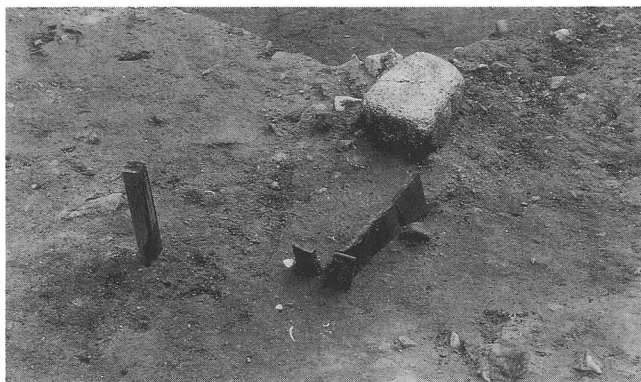
1. SX2001・2002 (南より)



2. SX2003・2004 (南より)

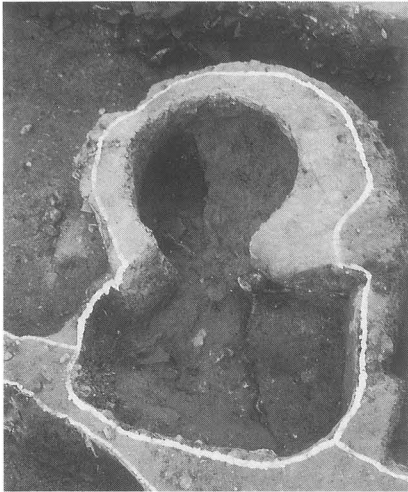


3. SX2005~2007 (南より)

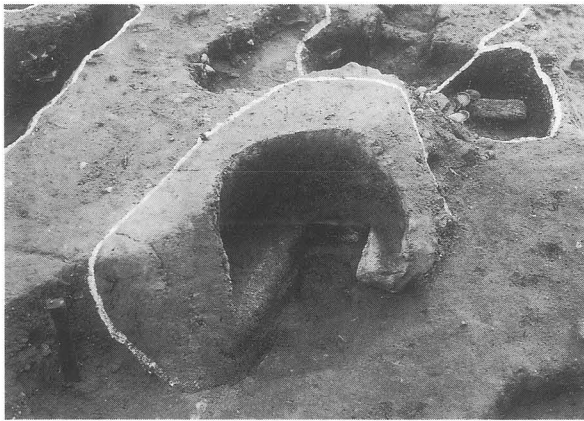


4. SX2009平瓦検出状況 (北より)

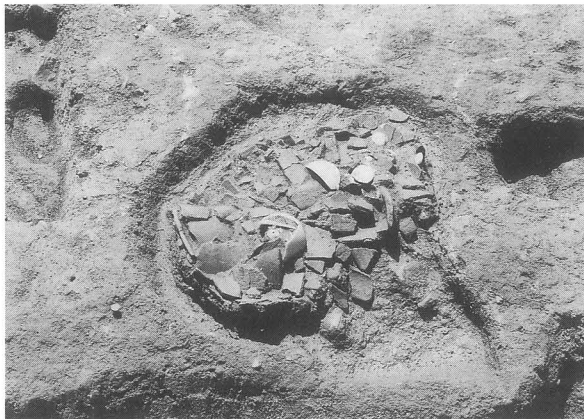
図版8



1. SK2021 (西より)



2. SK2024 (北より)

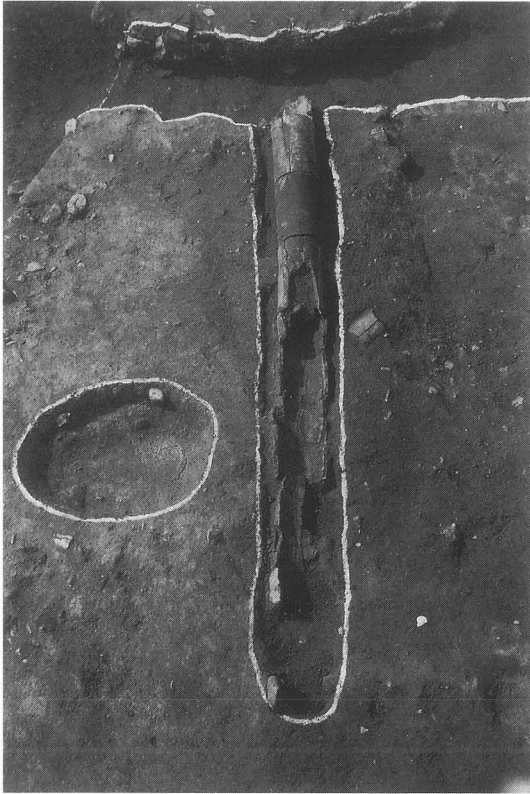


3. SK2016 (東より)



4. SK5032 (南より)

図版9



1. SD2004 (北より)



2. SB2001 (西より)

図版10



1. 第3遺構面全景（西より）



2. SX7001・7002（西より）

図版11



1. SX3001~3003 (西より)

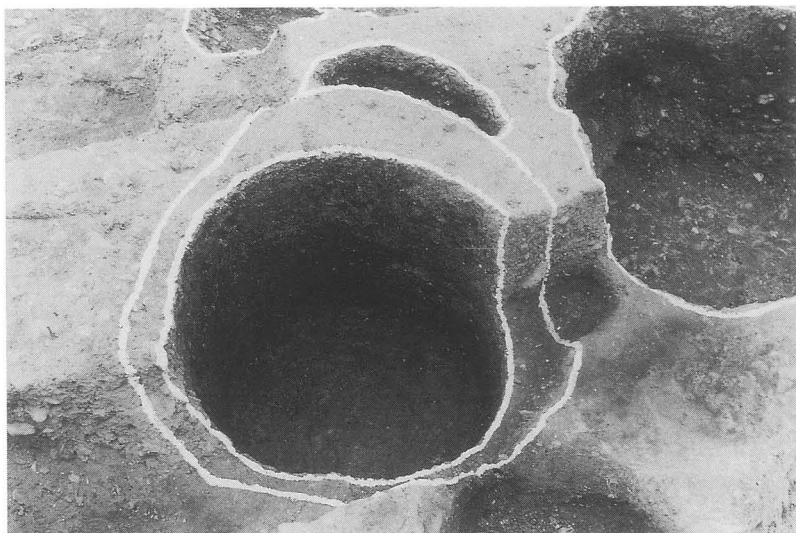


2. SX3001・3002 (西より)

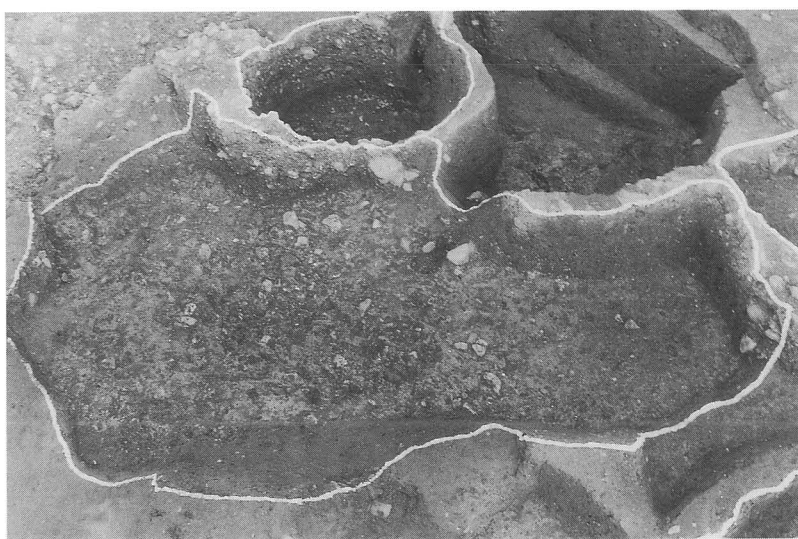


3. SX3003 (西より)

図版12



1. SK3016 (南より)



2. SX3005 (西より)



3. SP3001 (南より)

図版13

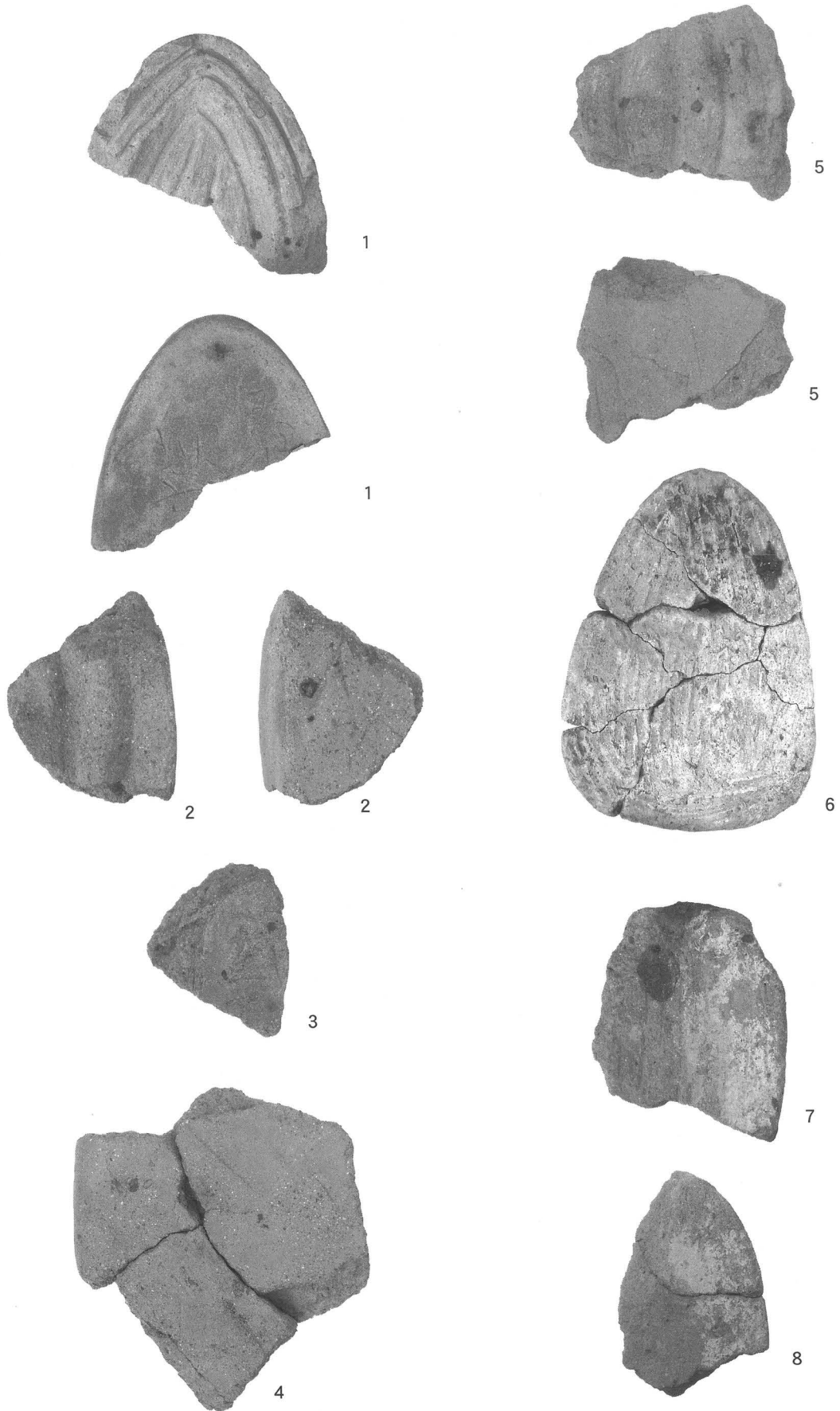


1. 第4遺構面全景（西より）



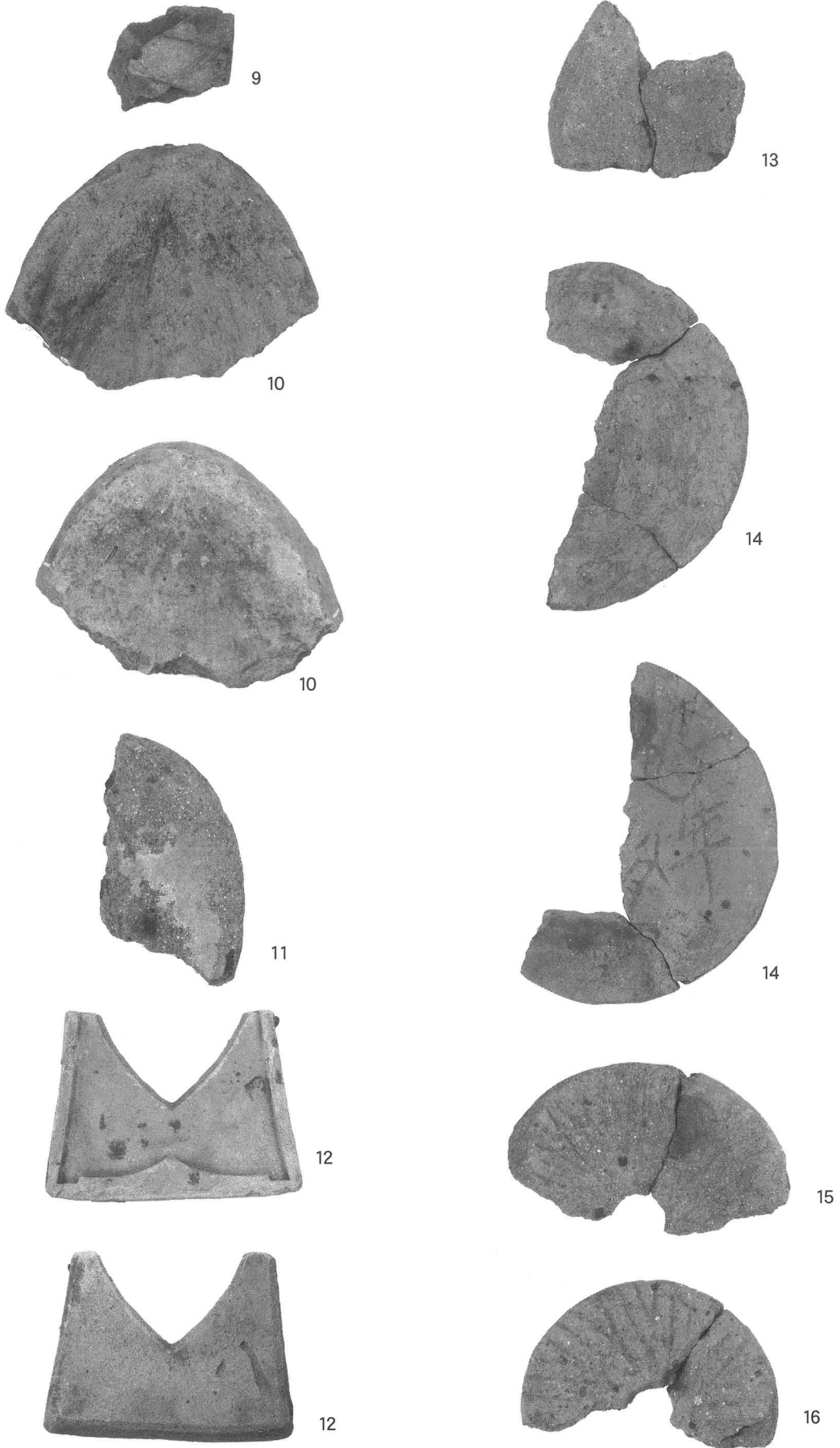
2. 第5遺構面全景（西より）

図版14



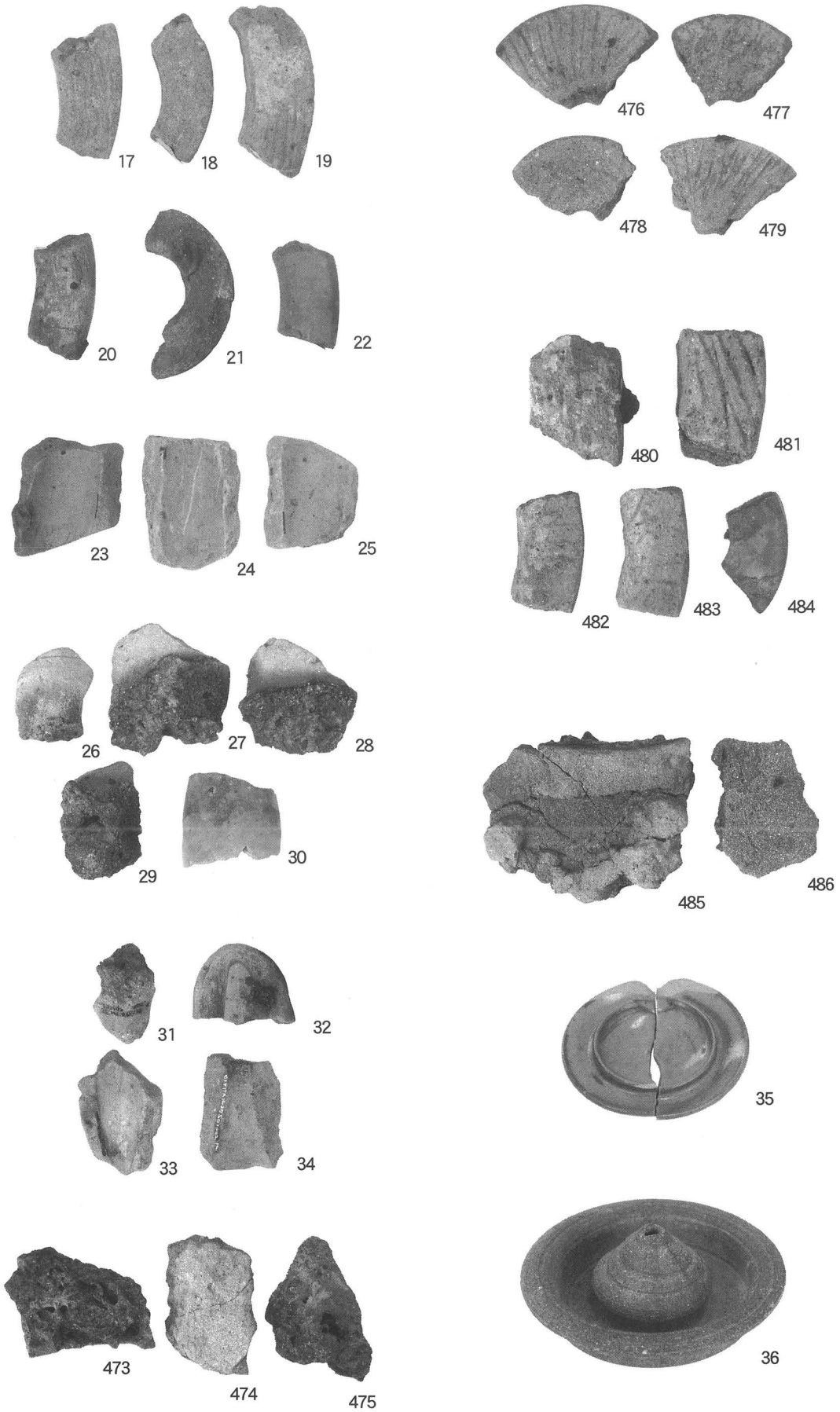
出土遺物 (1) SX1001 (1~8)

図版15



出土遺物(2) SX1001(9~16)

図版16



出土遺物 (3) SX1001 (17~36・473~486)

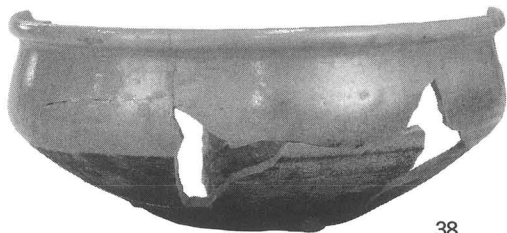
図版17



37



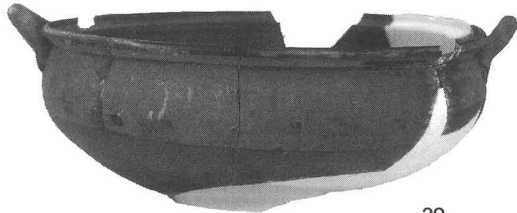
43



38



44



39



45



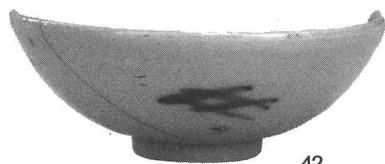
46



40



47

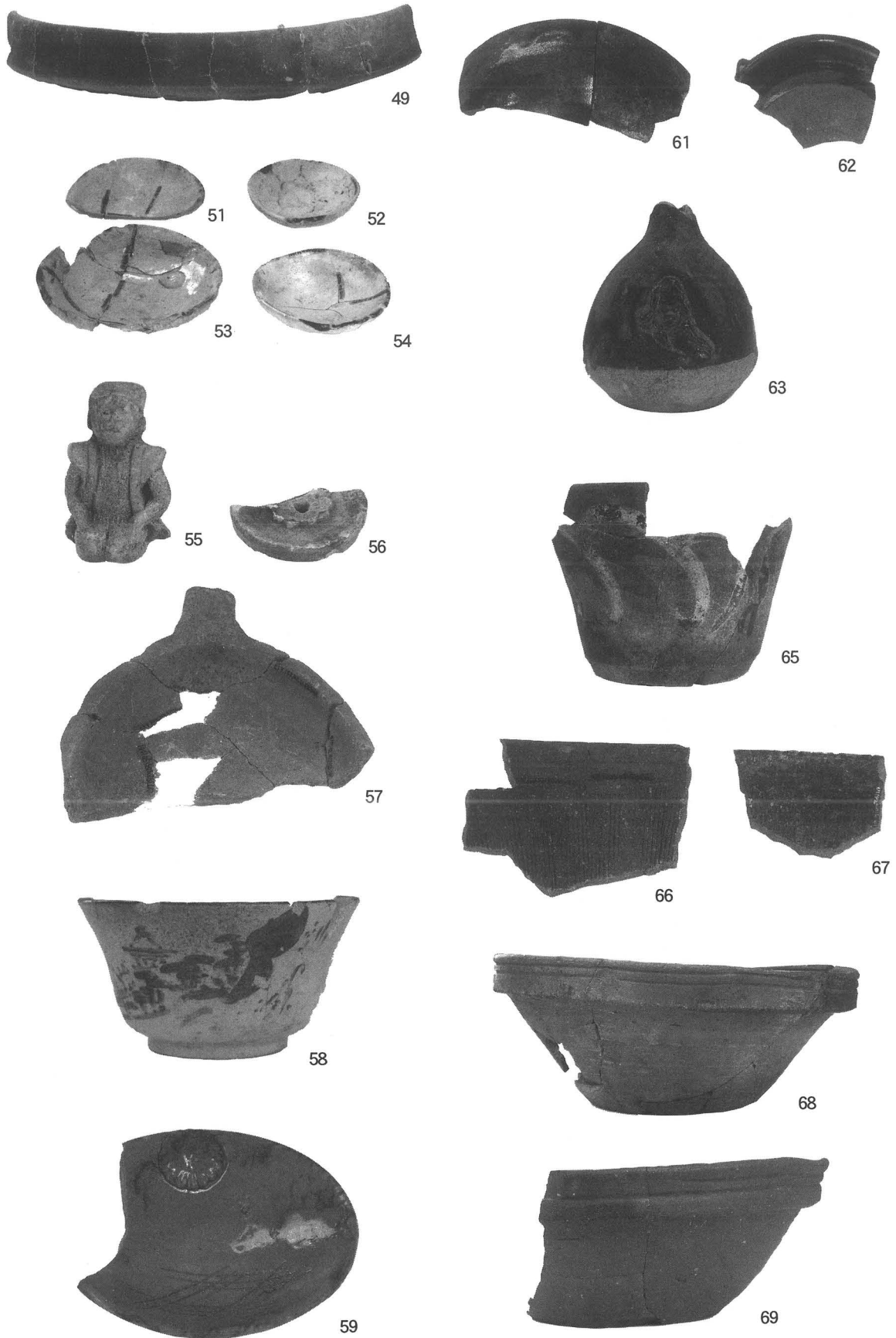


42



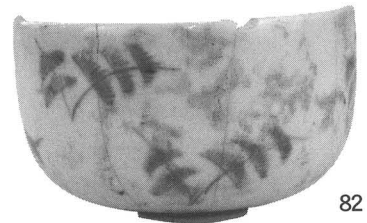
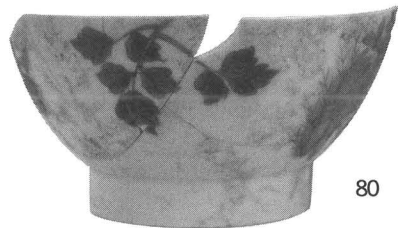
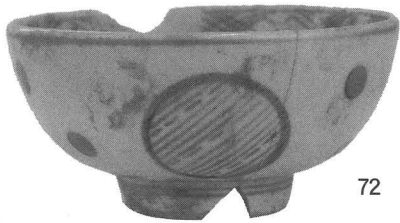
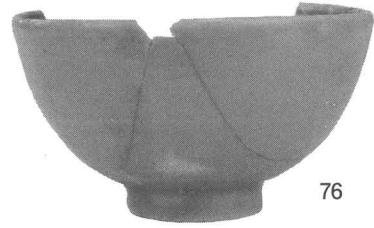
48

図版18



出土遺物 (5) SD1001 (49・51~59・61~63・65~69)

図版19



図版20



84



85



86



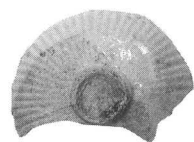
87



89



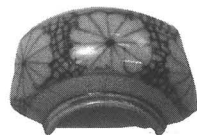
90



91



92



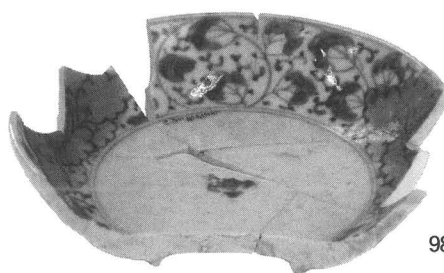
93



94



97



98

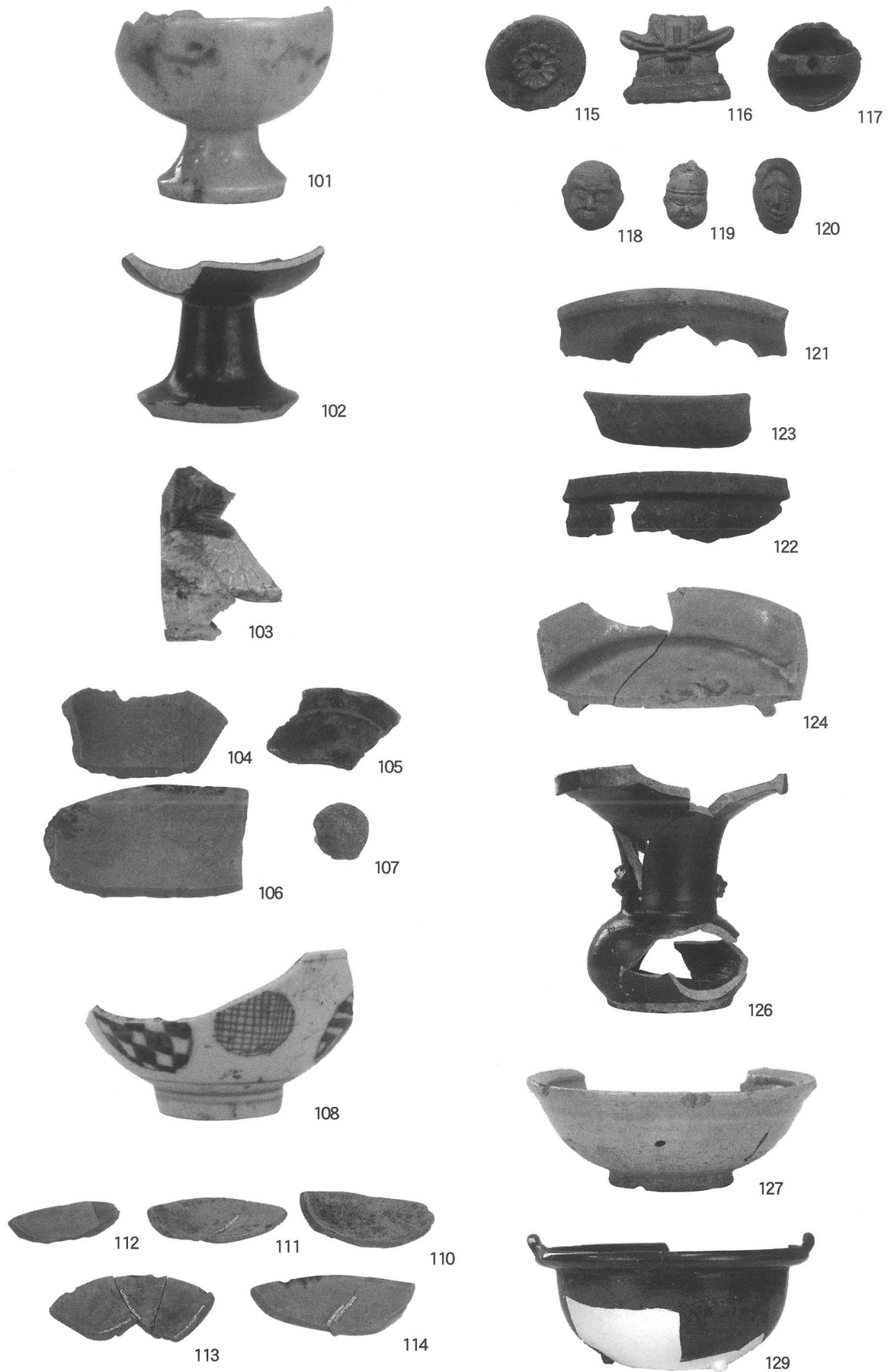


99



100

図版21



出土遺物 (8) SD1001 (101~103) SD1002 (104~108)
SD2001 (110~124・126・127・129)

図版22



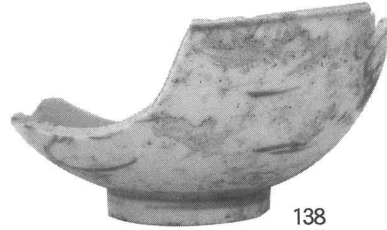
130



137



131



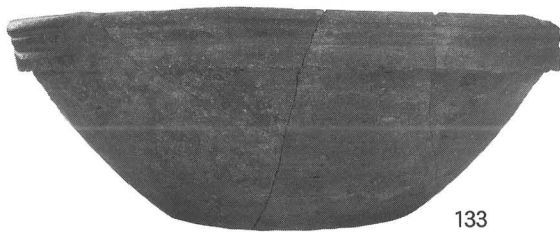
138



132



139



133



140



135



141

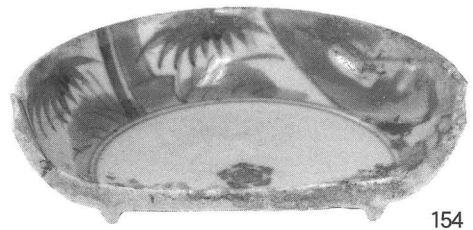
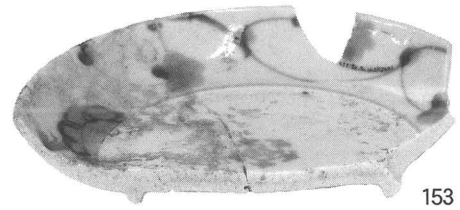
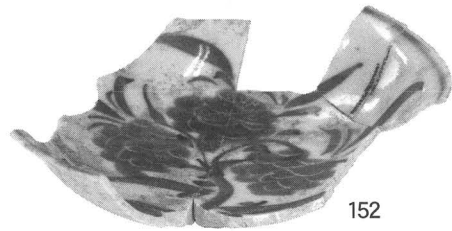
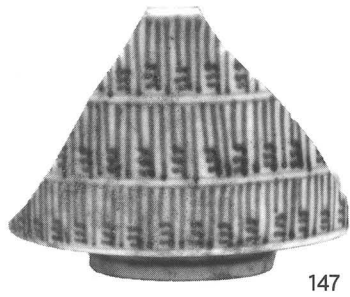
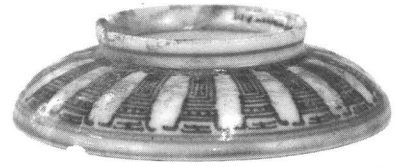
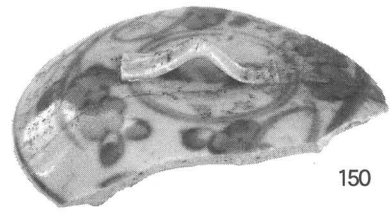
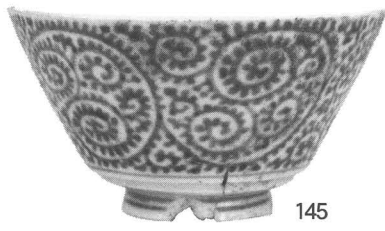


136



142

図版23



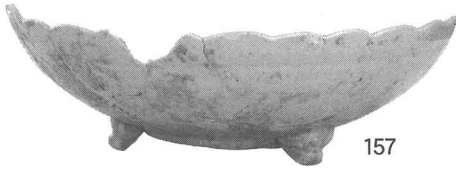
図版24



156



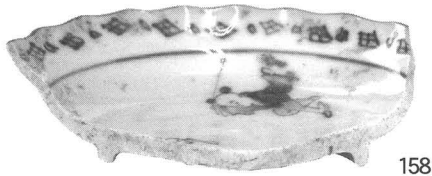
163



157



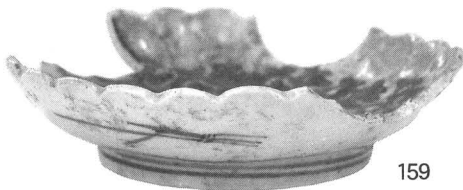
164



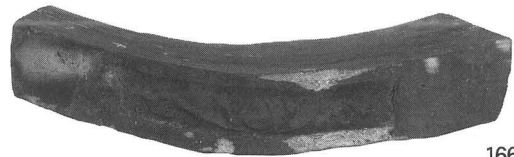
158



165



159



166



160



167

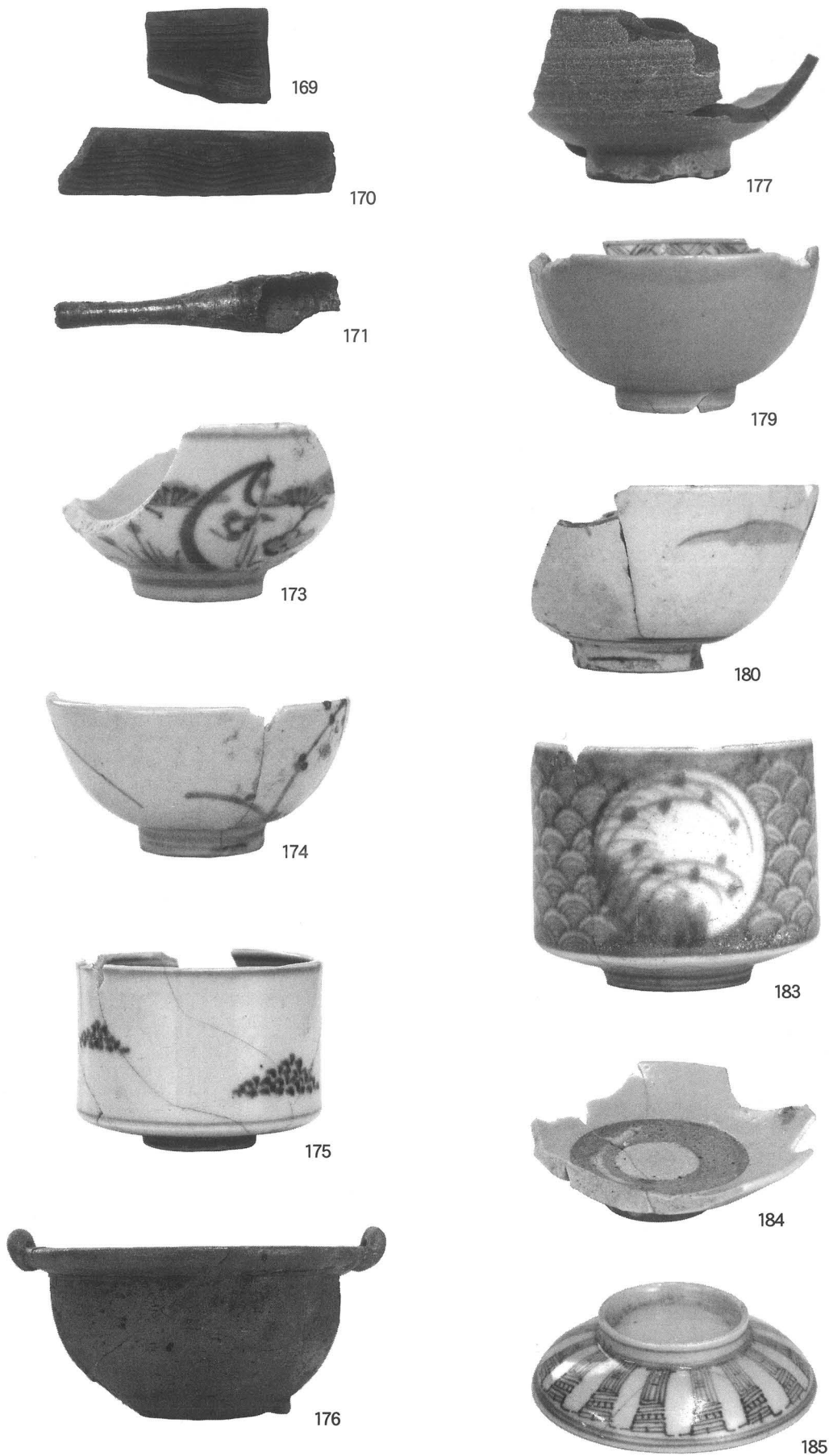


161



168

図版25

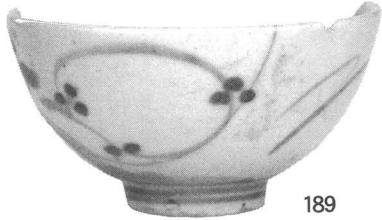


出土遺物 (12) SD2001 (169~171) SD2003 (173~175)
SX3006 (176・177・179・180・183~185)

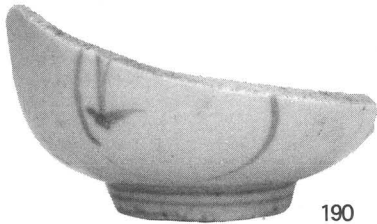
図版26



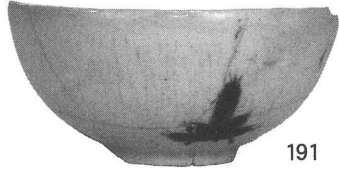
187



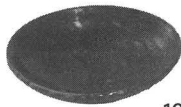
189



190



191



193



194



195



196



197



198



199



200



201



204



204

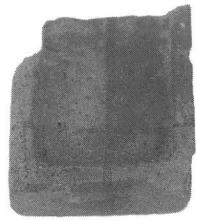


205

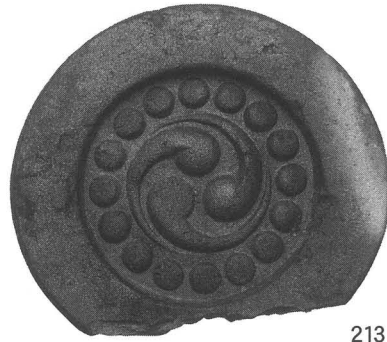


205

図版27



206



213



207



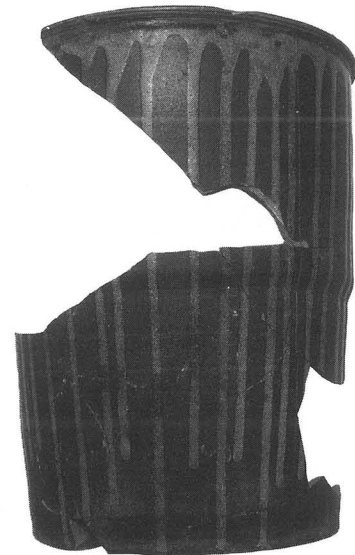
214



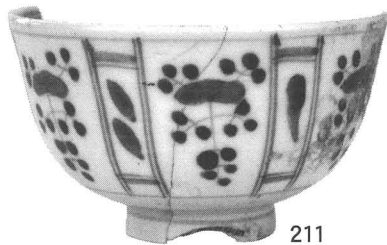
208



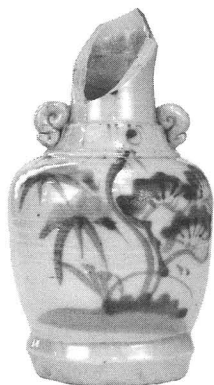
209



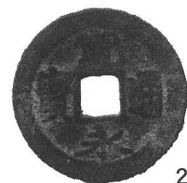
215



211

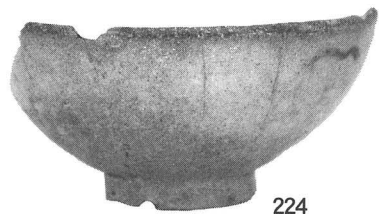
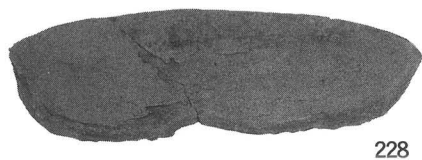
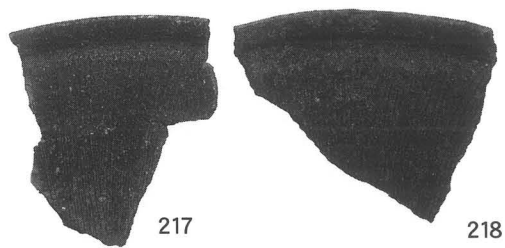


212

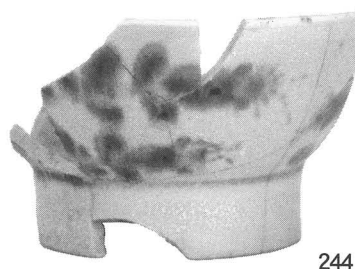
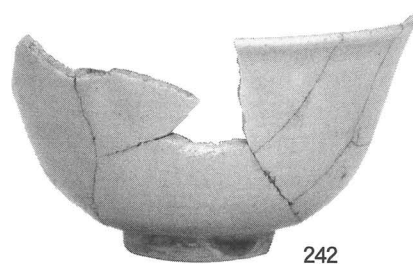
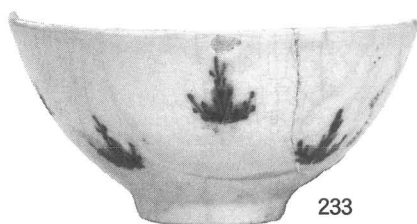
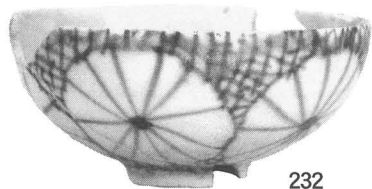


216

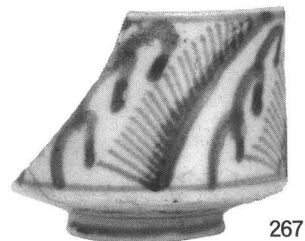
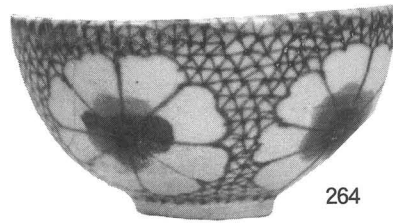
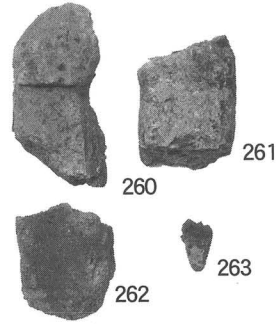
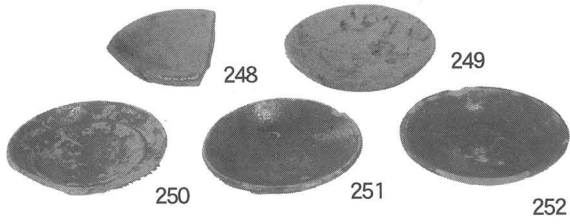
図版28



図版29



図版30

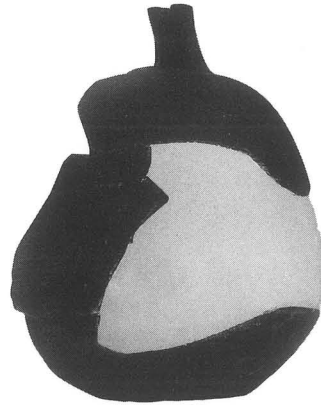


出土遺物 (17) SK2007 (248~252・254・256~259) SK5060 (260~263) SK5053 (264・265)
SK5061 (266) SP2017 (267)

図版31



269



277



270



278



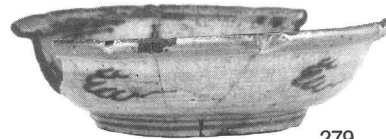
268



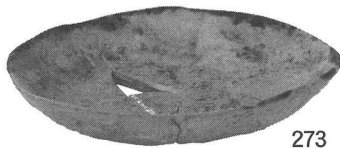
271



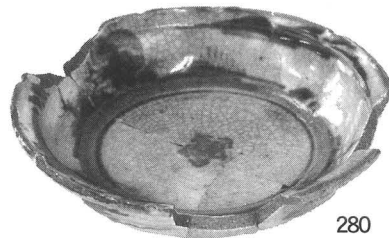
272



279



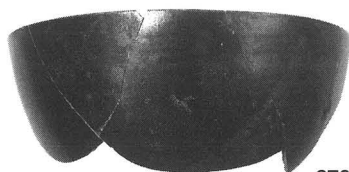
273



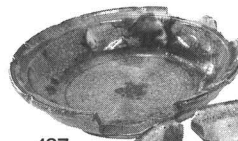
280



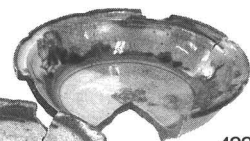
275



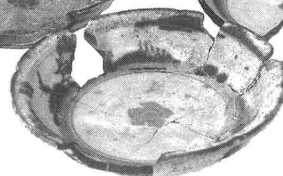
276



487



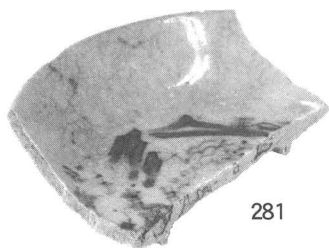
488



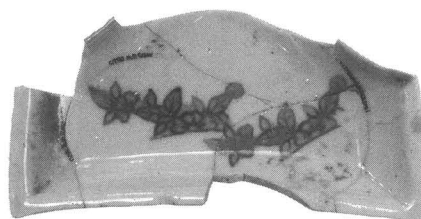
489

出土遺物 (18) 第1遺構面掘削時 (268~272) SX2001 (273・275~280・487~489)

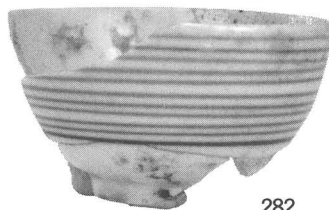
図版32



281



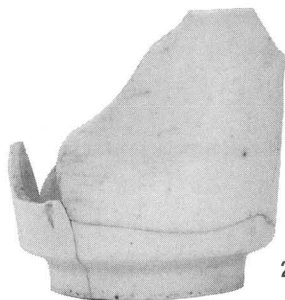
287



282



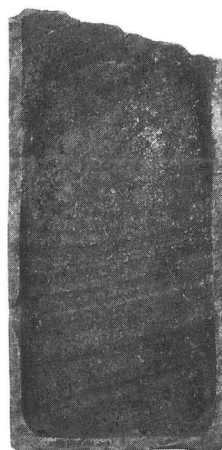
288



283



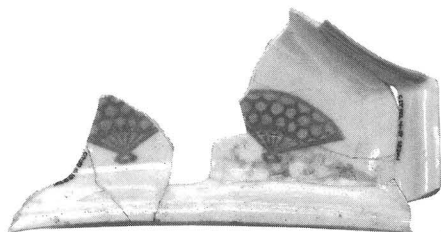
284



290



285



286



291

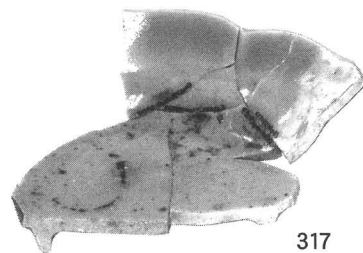
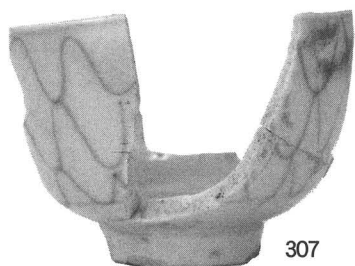
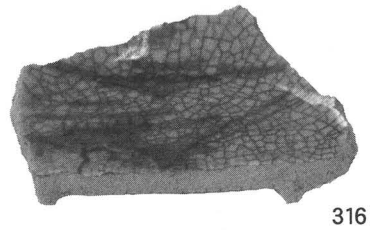
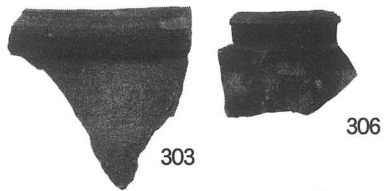
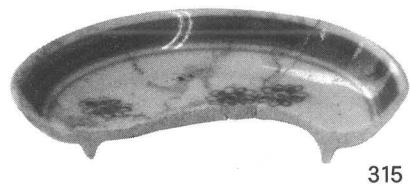
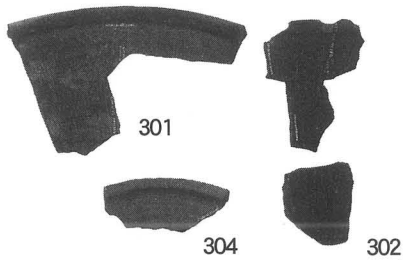
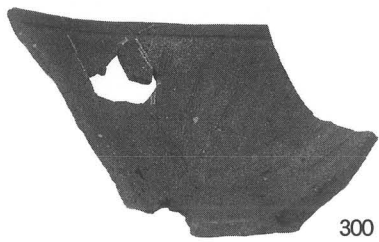
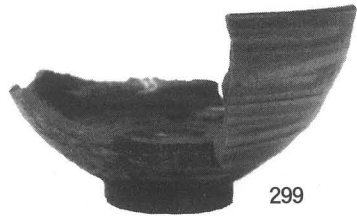
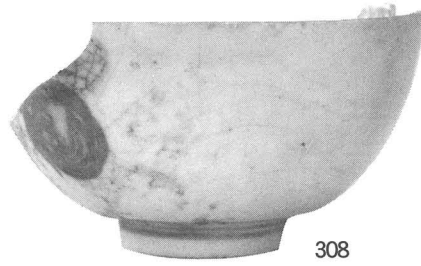
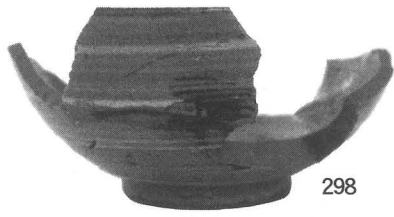


292

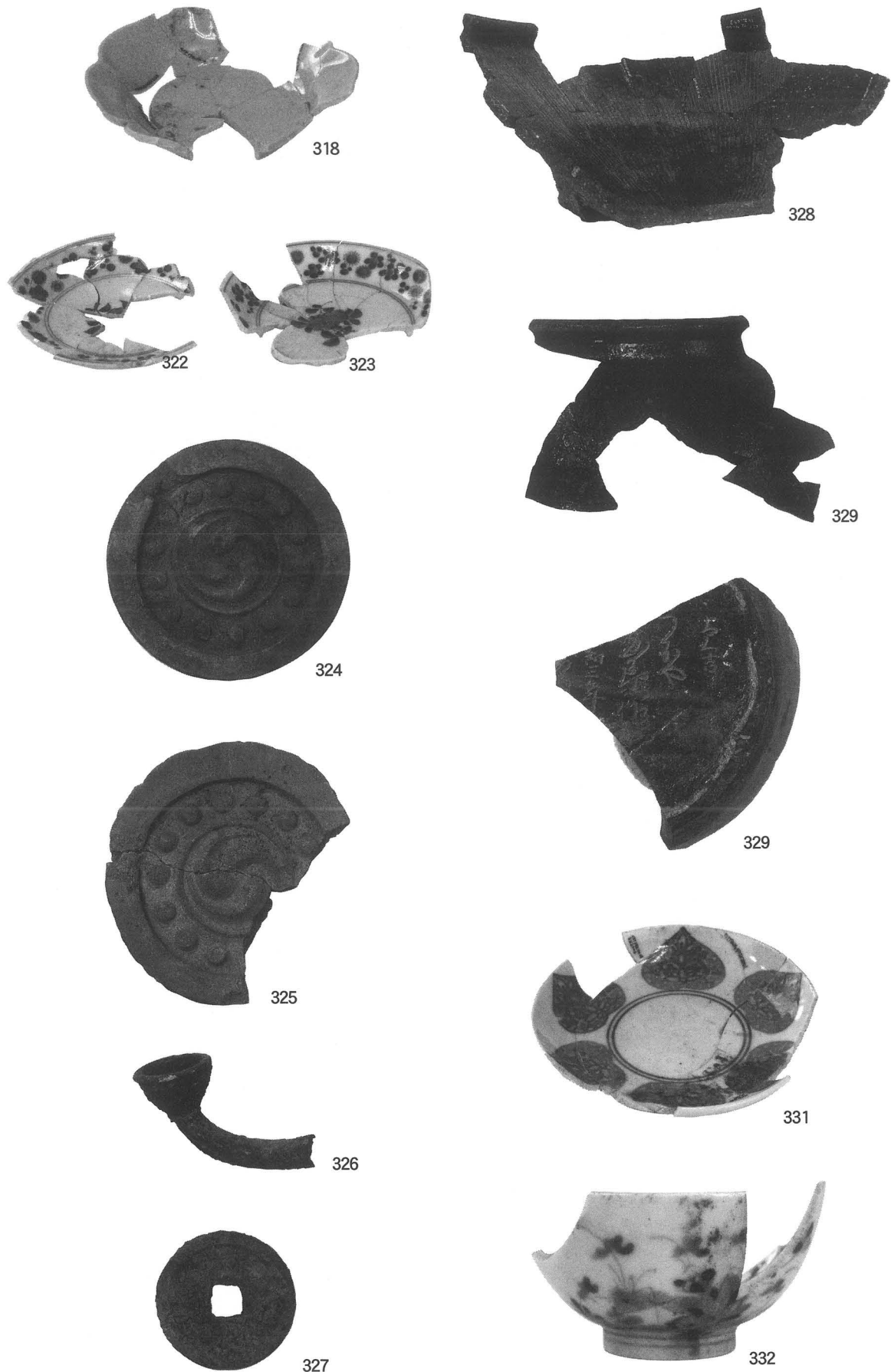


293

図版33

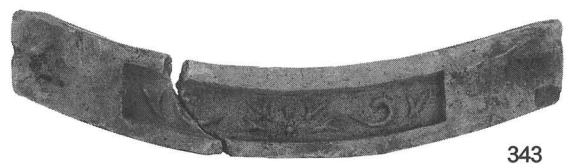
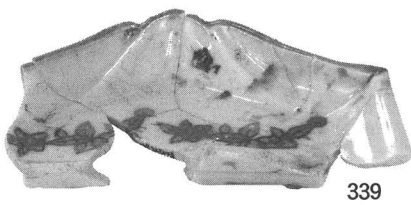
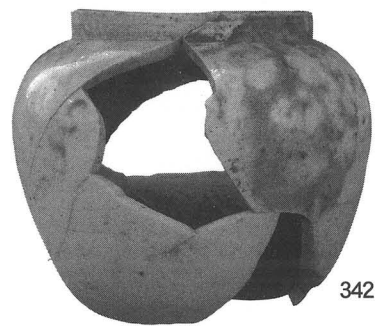
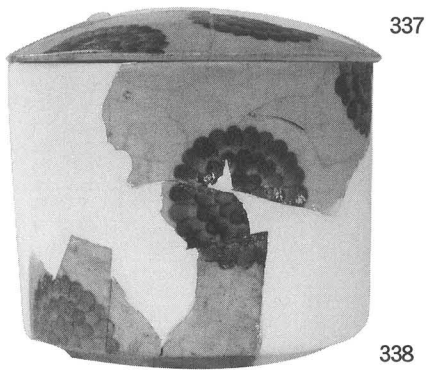
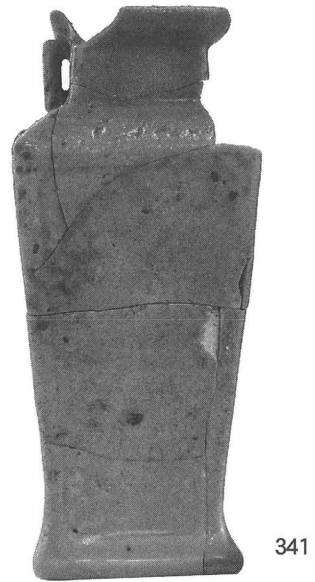
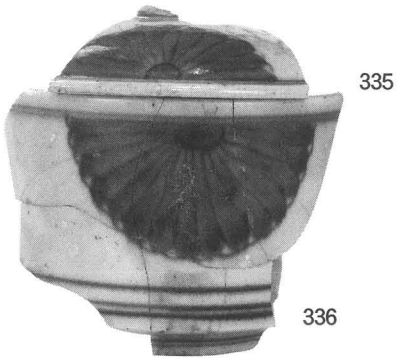
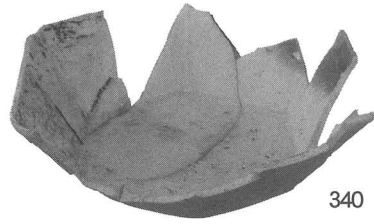
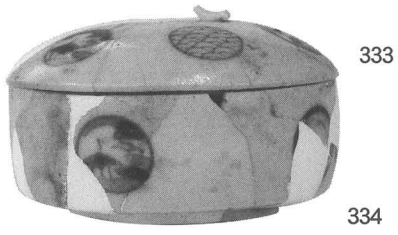


図版34

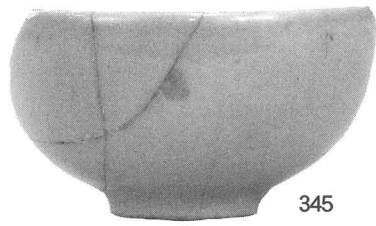


出土遺物 (21) SX2003 (318・322・323~327)
SX2001・2003接合資料 (328・329・331・332)

図版35



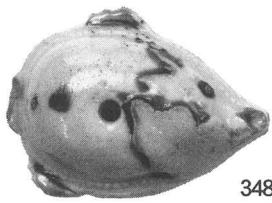
図版36



345



347



348



350



351



352



353



354



355

図版37



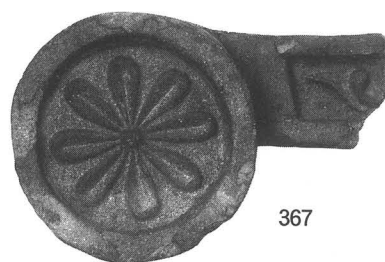
356



366



357



367



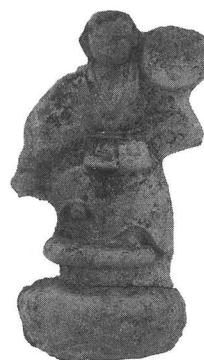
361



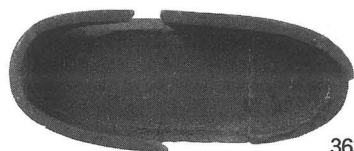
368



362



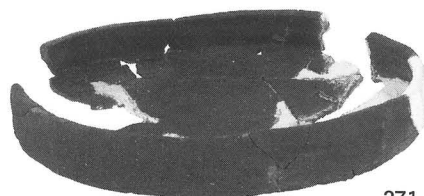
370



363



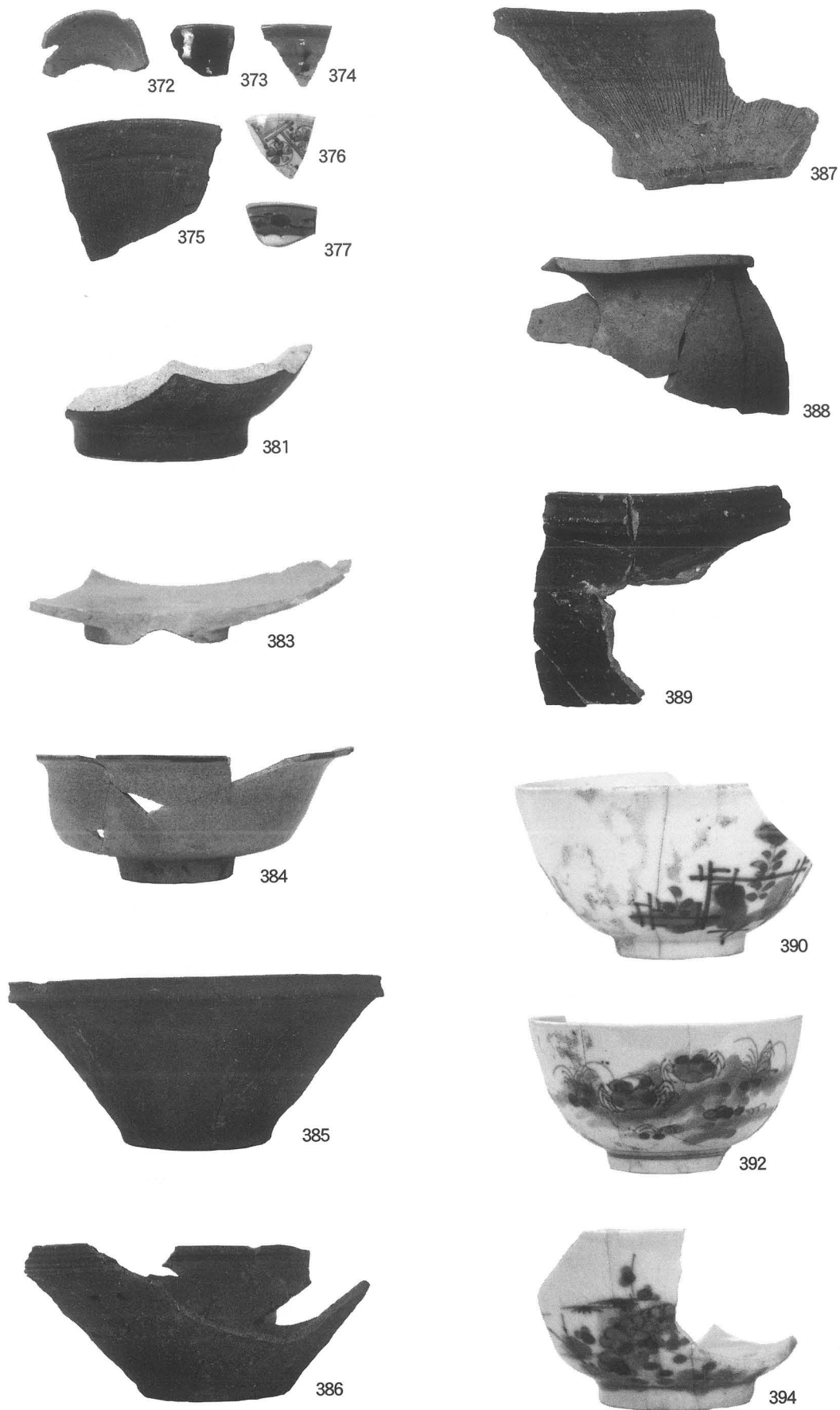
365



371

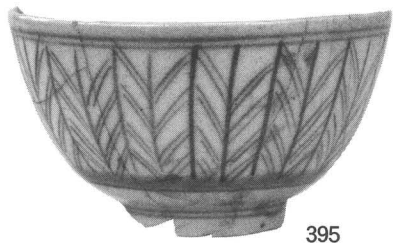
出土遺物 (24) SX2006 (356・357・361・362) SX2007 (363・365~368)
SK2021 (370) SK2016 (371)

図版38

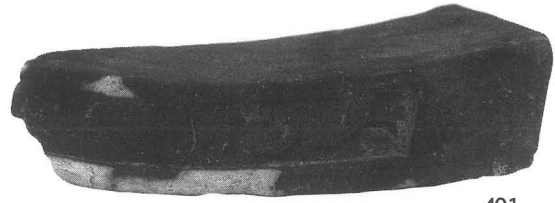


出土遺物 (25) SX2009 (372~377) SK5009 (381・383~390・392・394)

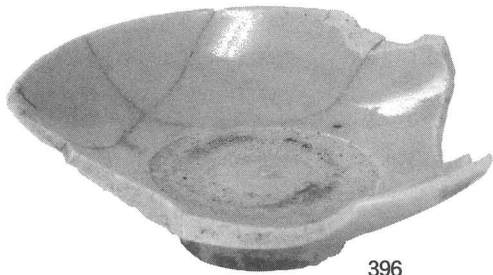
図版39



395



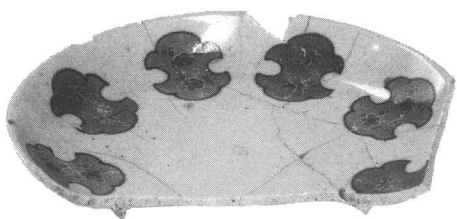
401



396



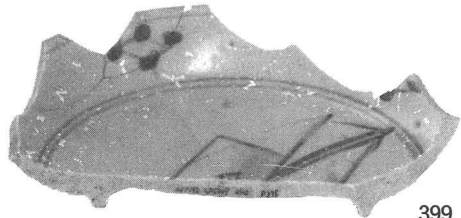
402



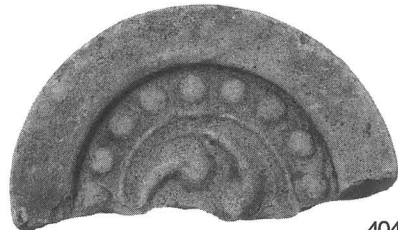
398



403



399



404

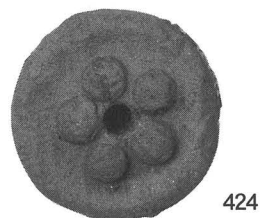
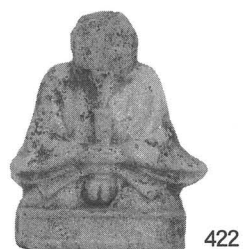
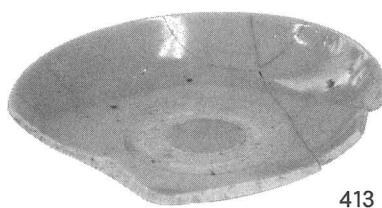
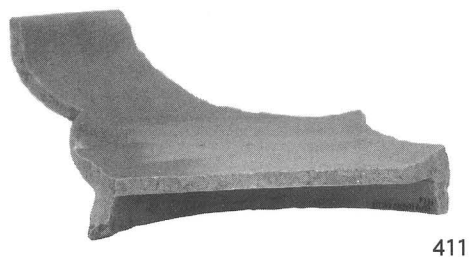
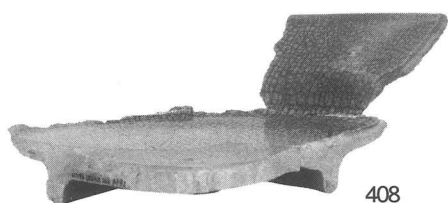
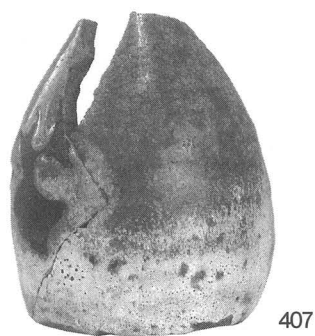


400



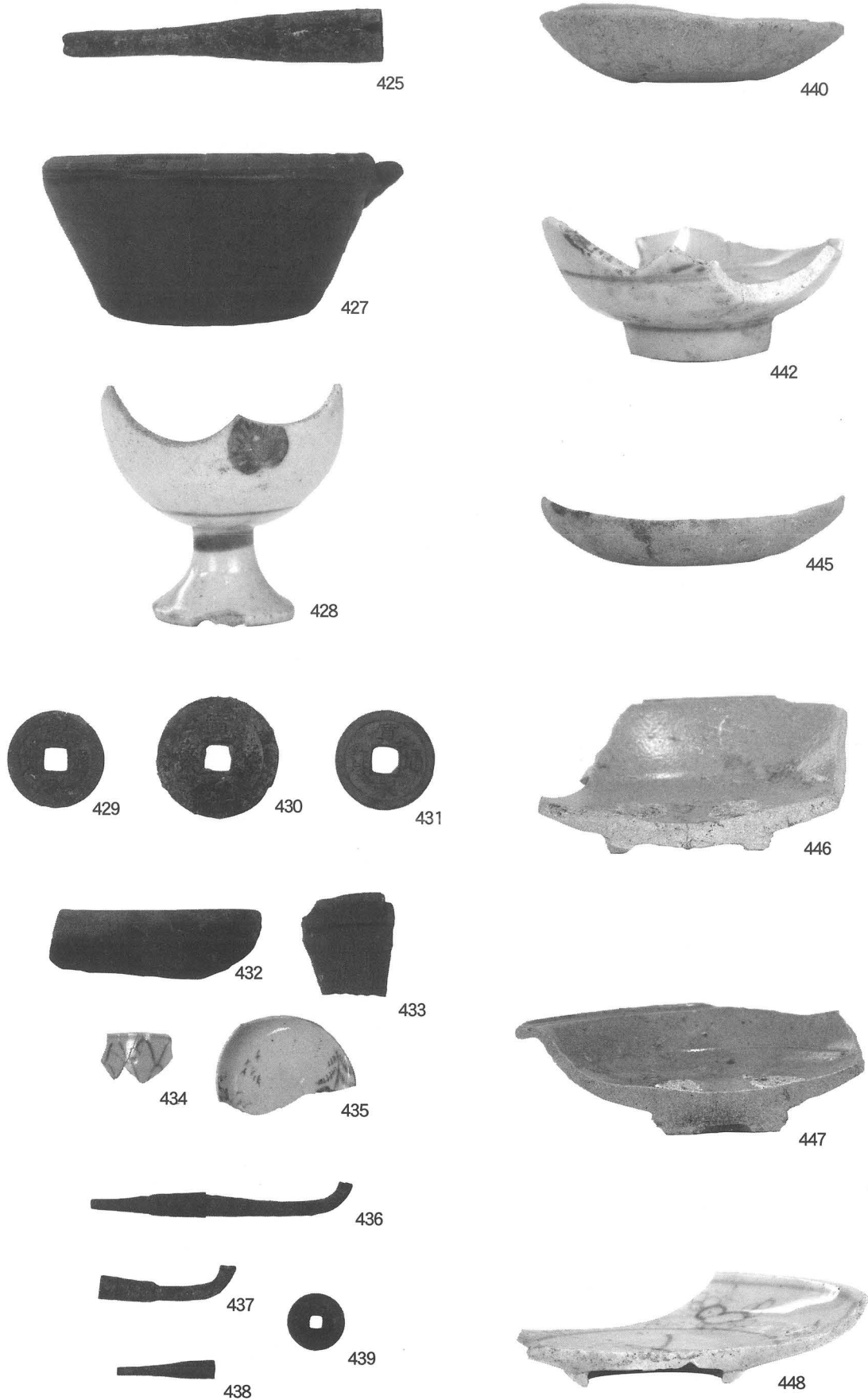
405

図版40



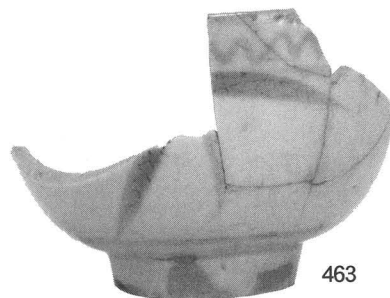
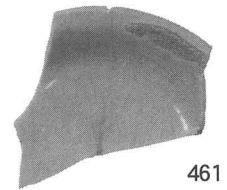
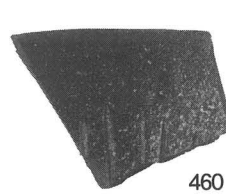
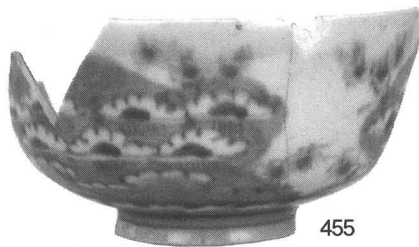
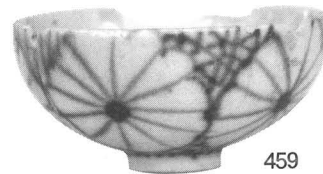
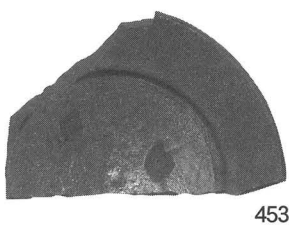
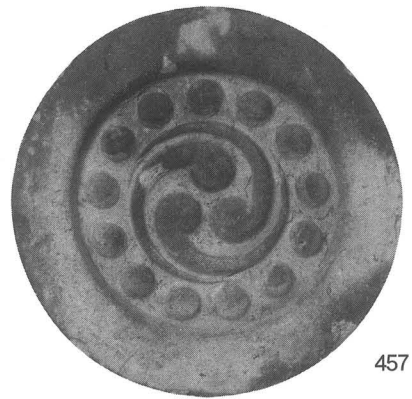
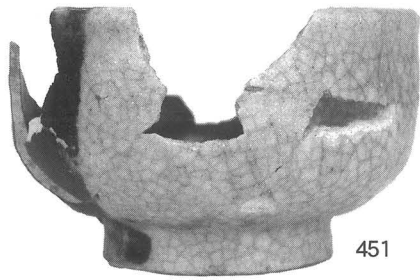
出土遺物 (27) SK5012 (407~409) SK5021 (411・413) SK5032 (415・418)
第2遺構面掘削時 (419~422) 第2遺構面 (424)

図版41



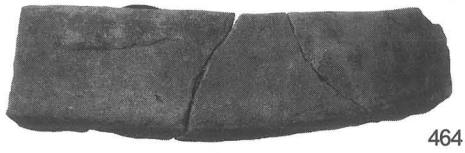
出土遺物 (28) 第2遺構面 (425・427~431) SX3003 (432~439)
SX3005 (440・442) SK3009 (445~448)

図版42

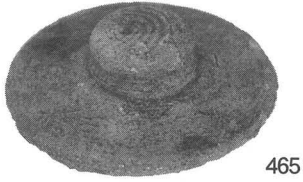


出土遺物 (29) 第3遺構面掘削時 (451~457) 第3遺構面 (458・459)
SD5002 (460・461) SK5001 (463)

図版43



464



465



466



467



468



469



470

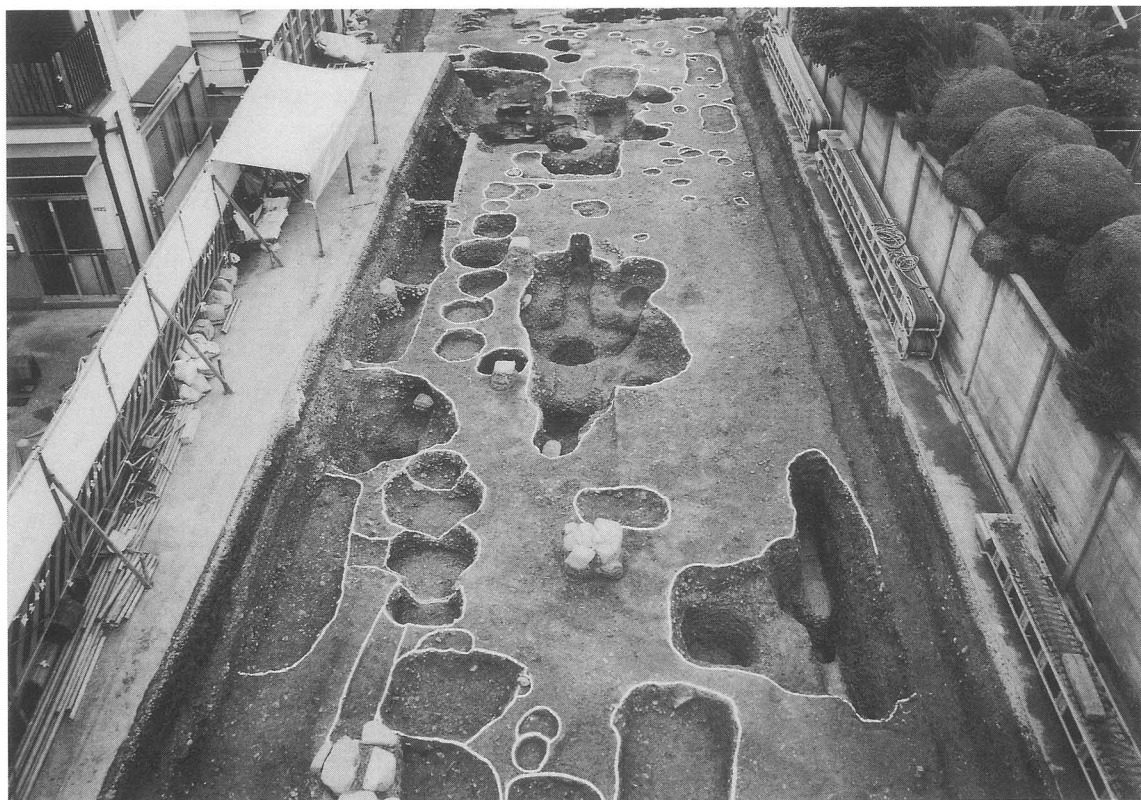


471

図版44



1. 第1・2面全景（北より）



2. 第1・2面南側（南より）

図版45



1. 竈1全景（南より）

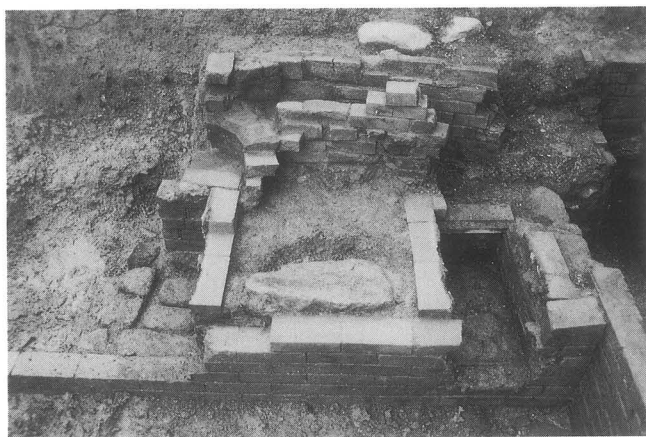


2. 竈1 へっつい3（南より）



3. 竈1 へっつい3解体時（南より）

図版46



1. 竈1 ヘっつい1・2解体時（南より）



2. 竈1 煙道（南東より）



3. 竈1 煙道細部（南より）



4. 竈1 煙道細部（北より）

図版47



1. 竈3 (南より)



2. 竈3 細部 (南東より)



3. 竈3 煙道部灰層堆積状況

図版48



1. SK 4・5 (東より)

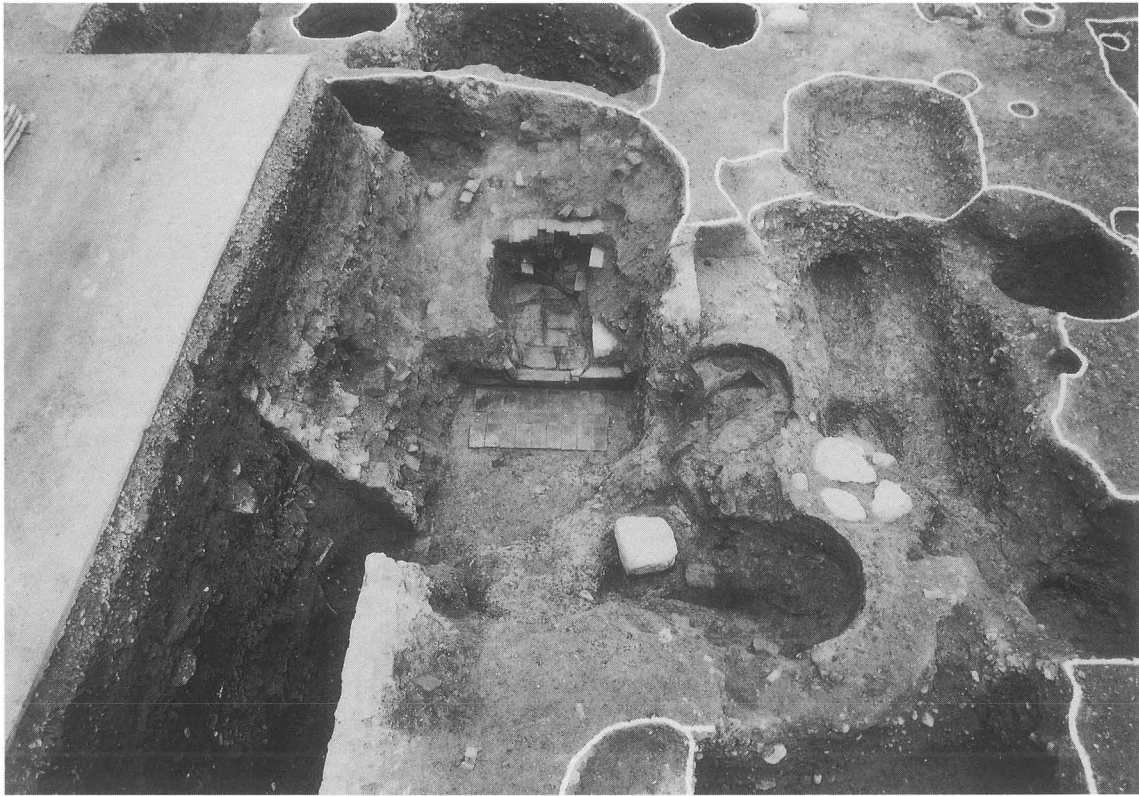


2. 竈2全景 (北より)



3. 竈2 へっつい1 (南より)

図版49



1. 竈3・4全景（南より）

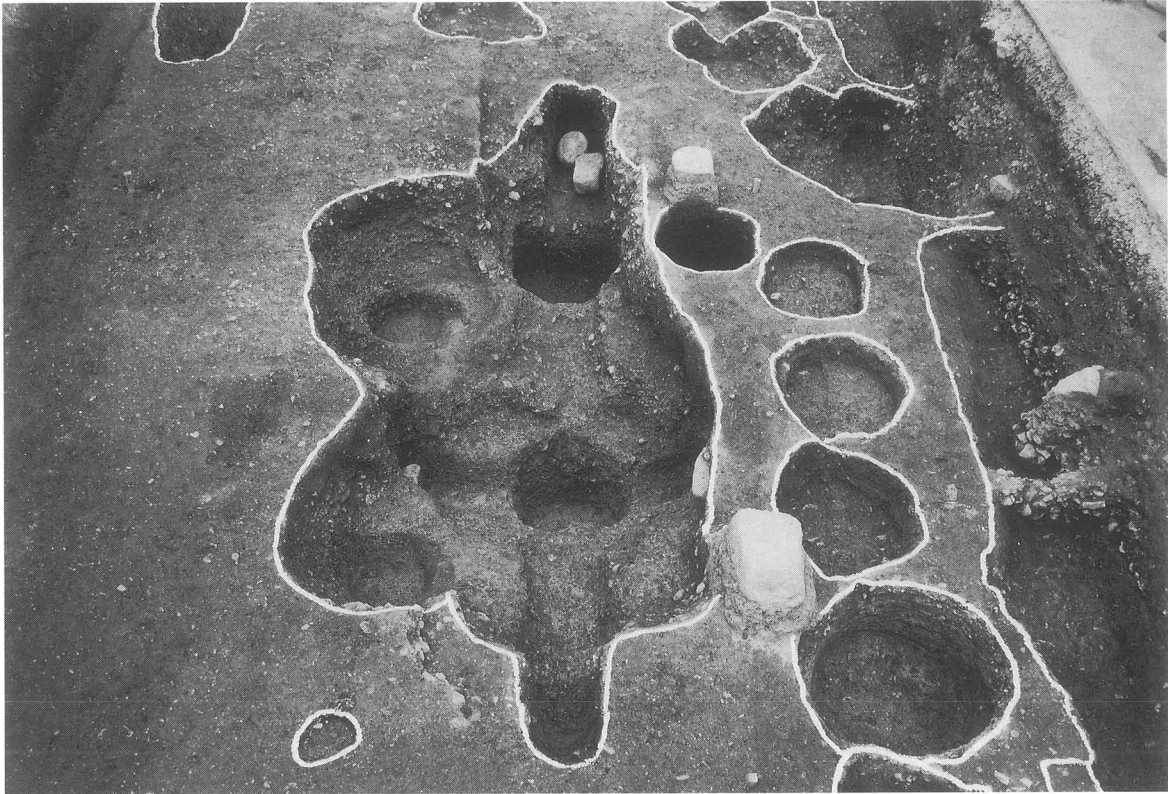


2. 竈4（西より）



3. 竈5（東より）

図版50



1. 男柱 1～3 全景（北より）



2. 垂壺 1（南より）

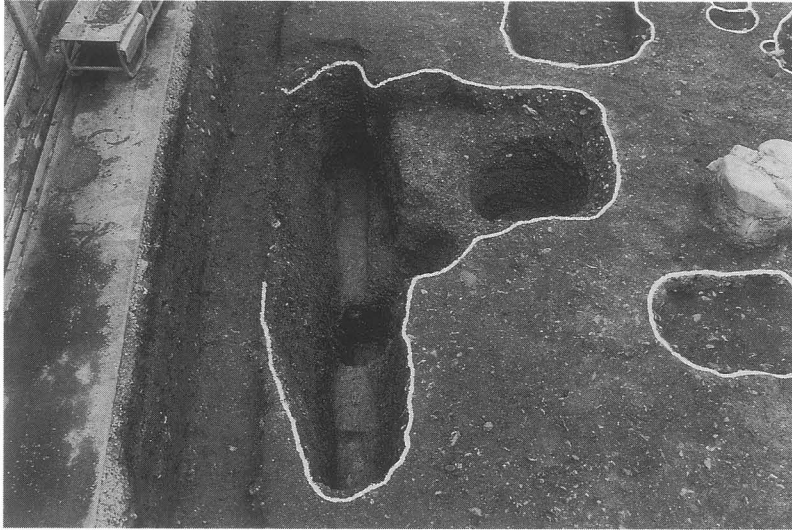


4. 垂壺 3（西より）

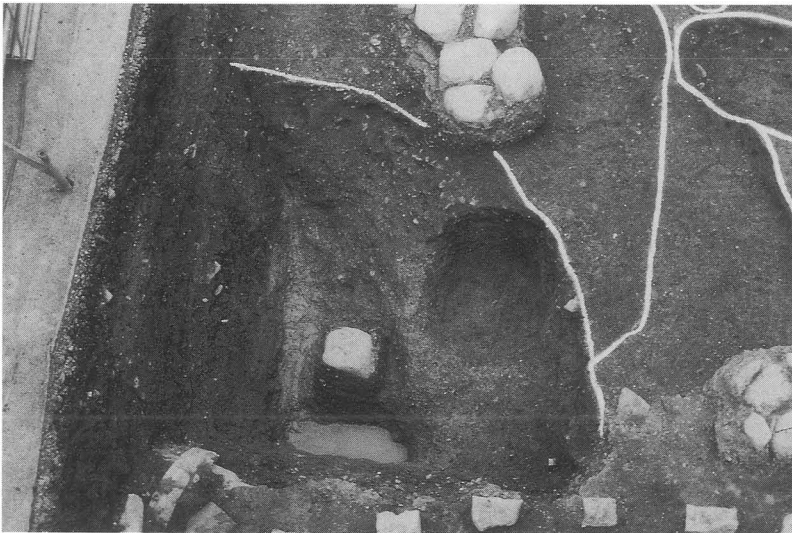


3. 垂壺 2（南より）

図版51



1. 男柱5 (北より)



2. 男柱6 (南より)



3. 男柱4 (西より)

図版54



1. SK35 (東より)

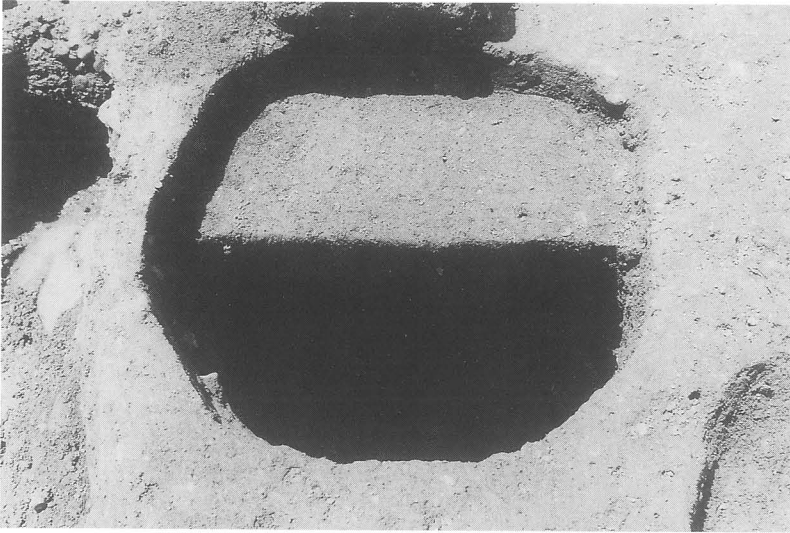


2. SK6 断面 (西より)



3. SK12・13断面 (東より)

図版55



1. SK16断面（北より）



2. SK17断面（北より）



3. SK18（東より）

図版56



1. SK19断面（東より）



2. SK20断面（東より）

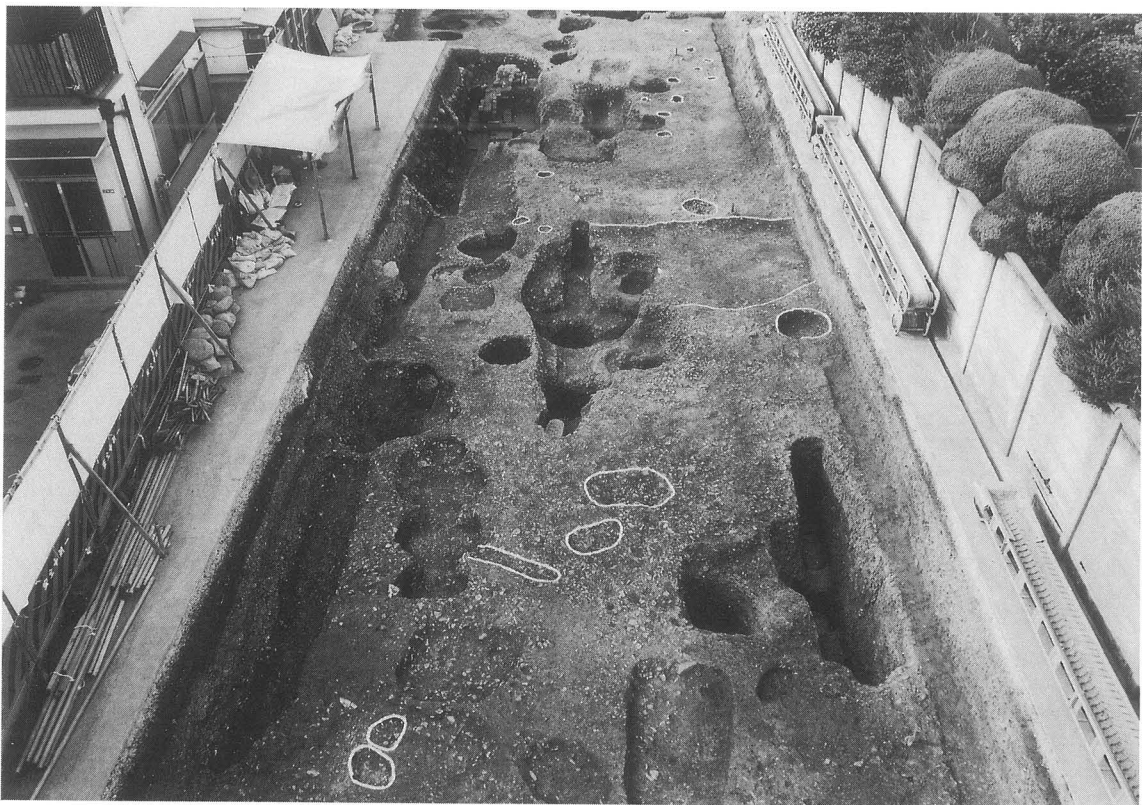


3. SK25断面（東より）

図版57



1. 第3面全景（北より）



2. 第3面南側（南より）

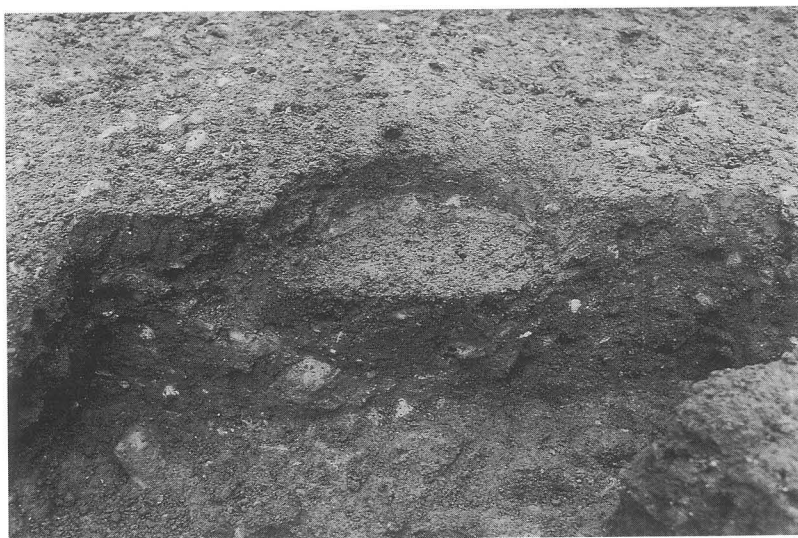
図版58



1. 土器溜り（北より）



2. P1断面（西より）



3. P4断面（東より）

図版59



1. P5断面（東より）



2. P6断面（東より）



3. P18断面（東より）

図版60



1



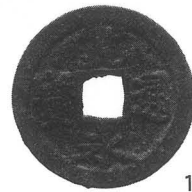
6

7

9

8

10



12



2



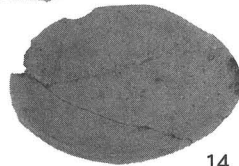
15



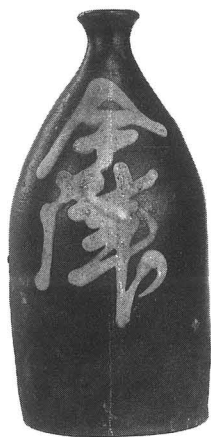
13



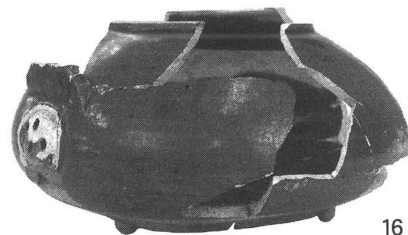
3



14



4



16



17



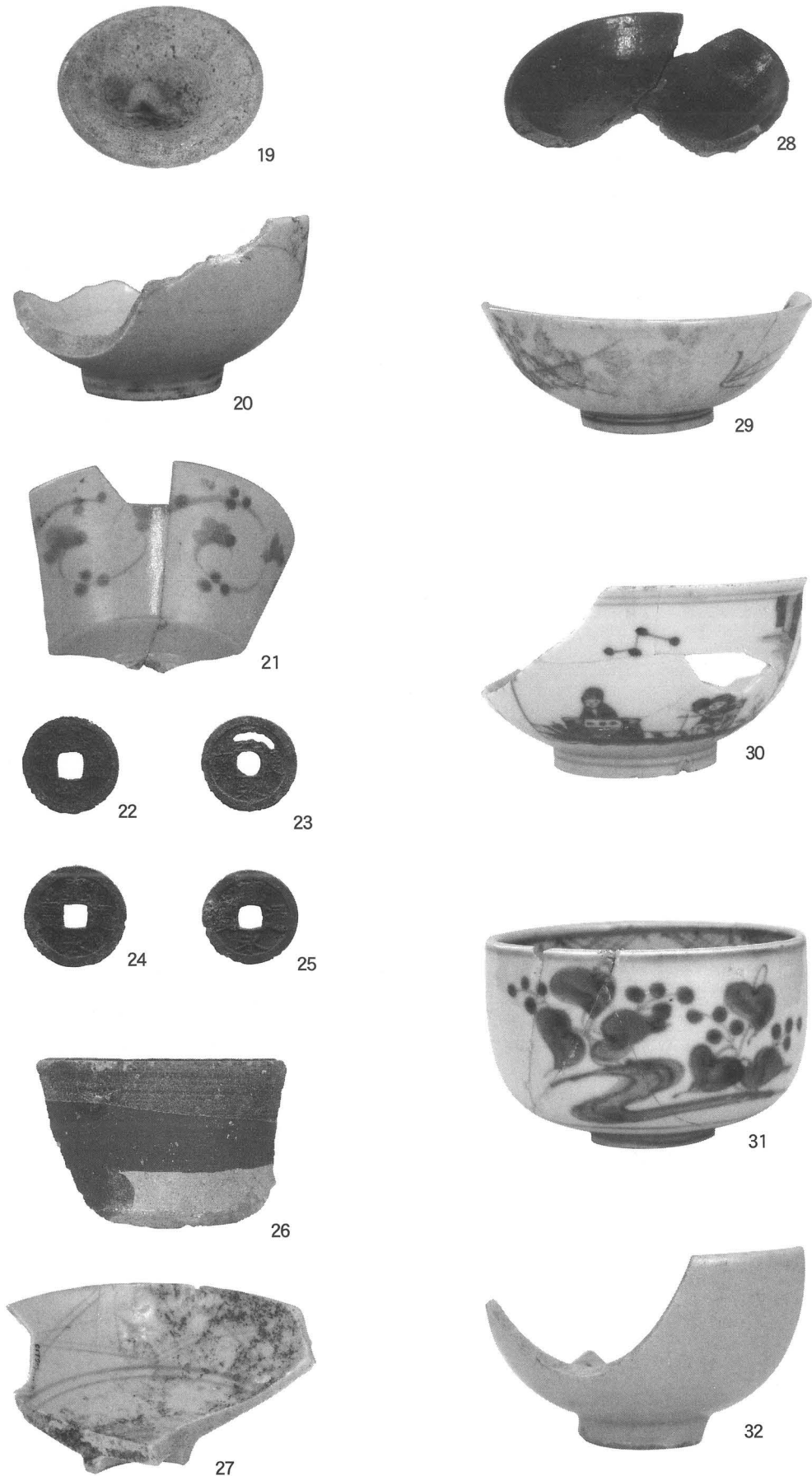
5



18

出土遺物 (1) 竈1 (1~3) 竈3 (4・5) SK7 (6~10・12) 竈5 (13~18)

図版61

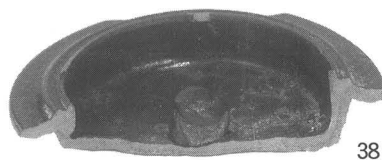


出土遺物 (2) 男柱 1 (19~24) 男柱 2 (25) 男柱 5 (26・27) SK 3 (28~32)

図版62



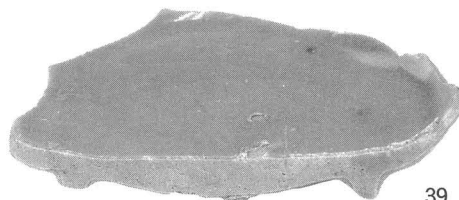
33



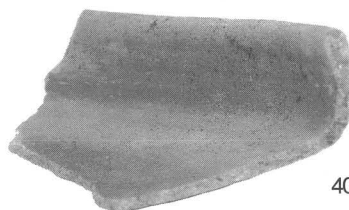
38



34



39



40



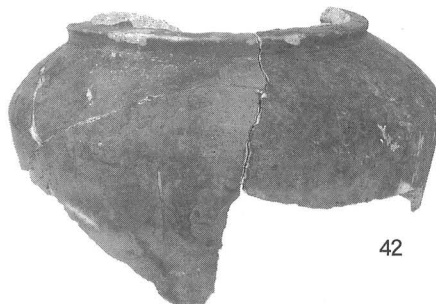
35



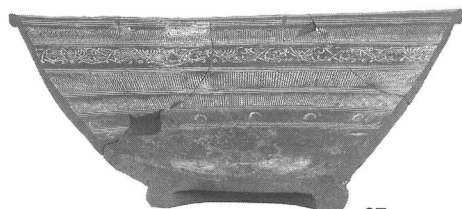
41



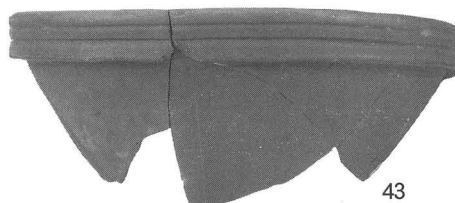
36



42



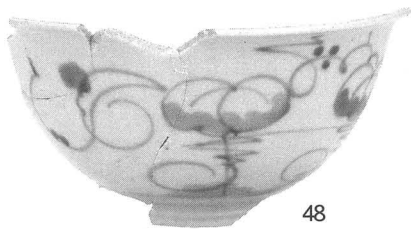
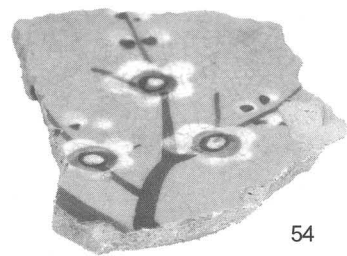
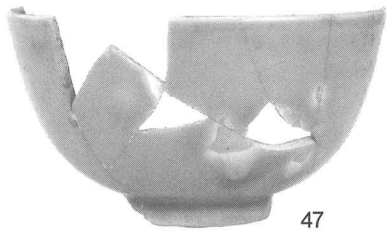
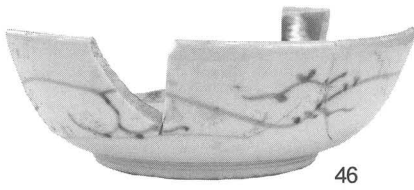
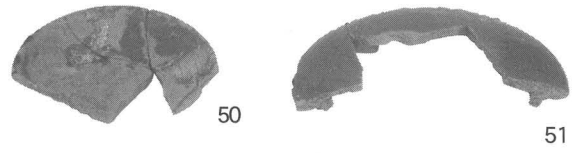
37



43

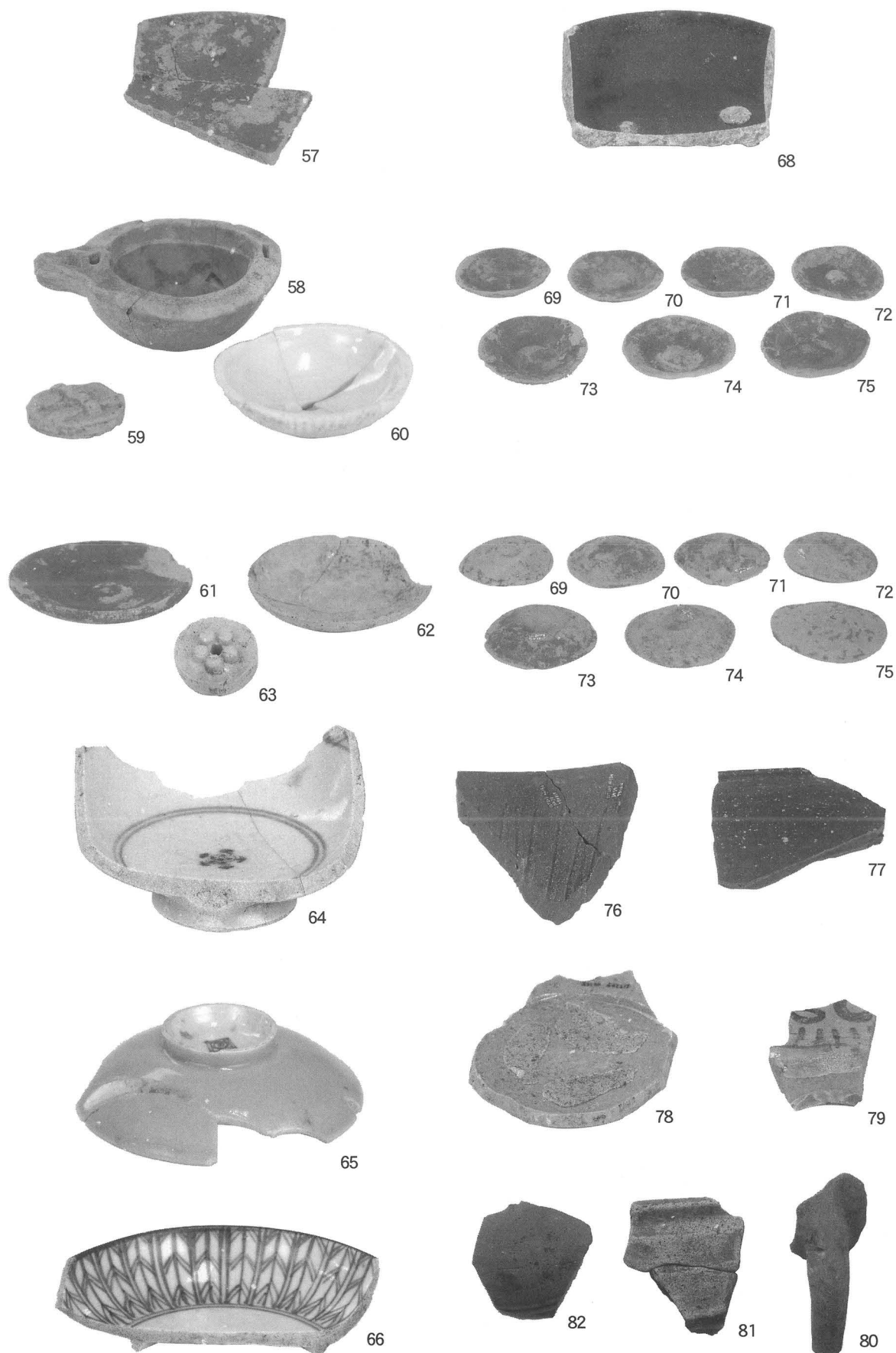
出土遺物 (3) SK24 (33~37) 竈 6 (38) SK45 (39) 男柱 7 (40~43)

図版63



出土遺物（4） 男柱7（44～49） SK6（50～56）

図版64



出土遺物 (5) SK18 (57) SK19 (58~60) SK20 (61~65) SK25 (66) SK42 (68)
土器溜り (69~75) SK39 (76・77) 竈2 (78・79) 東側側溝南端 (80)
調査区南西隅 (81) 不明 (82)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いたみしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第29集							
副書名	震災復旧・復興事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	小長谷正治							
編集機関	伊丹市教育委員会							
所在地	兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地							
発行年月日	2004年3月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ありおかしょうあと 有岡城跡・ いたみごうちょういせき 伊丹郷町遺跡 第192次調査	伊丹市宮ノ前2丁目 210-3,4,9	28207	61	36° 46' 47"	135° 25' 12"	19970626 ～ 19970925	265㎡	共同住宅建設
有岡城跡・ 伊丹郷町遺跡 第209次調査	伊丹市伊丹3丁目 630-2	"	"	34° 46' 31"	135° 25' 20"	19980430 ～ 19980630	326㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
有岡城跡・ 伊丹郷町遺跡 第192次調査	酒蔵・町家	近世		鑄造関連遺構・竈・礎石 焼土処理土坑・溝・土坑		土師器・鋳型・瓦・ 羽口・陶磁器 75箱		
有岡城跡・ 伊丹郷町遺跡 第209次調査	酒蔵・町家	近世		竈・酒造遺構・井戸・埋桶 土器溜り・土坑・柱穴		土師器・陶磁器 24箱		

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第29集
伊丹市埋蔵文化財調査報告書
震災復旧・復興事業に伴う発掘調査
2004年3月

発 行 伊 丹 市 教 育 委 員 会
兵庫県伊丹市千僧1丁目1
TEL 072-783-1234
印 刷 アイシー印刷株式会社

